
とある異世界の錬金術師（アルケミスト）

hayate

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある異世界の錬金術師^{アルケミスト}

【Nコード】

N9551K

【作者名】

hayate

【あらすじ】

普通の中学生「だった」桜咲錬夜は、神様に殺され、さらには自らの保身を理由に、異世界『とある魔術の禁書目録』の世界に飛ばされてしまった！さらには錬金術まで使えるようになって、おまけにある中学校へ編入することに。錬夜は果たして、平穩無事に生きていけるのだろうか？^編『吸血殺し』。総合評価200pt突破！喜ばしいかぎりです！この作品は、『とある異世界の武具操者』のリンク作でもあるので、そちらも楽しんでいただけたら、幸いです。

主人公設定（前書き）

錬夜の設定です。

主人公設定

名前 桜咲錬夜さくらさきれんや

年齢 十三歳

容姿 身長は164センチ。短髪黒髪。顔は上の下くらい。若干目つきが悪い。

所属 柵川中学一年、風紀委員第一七七支部

性格 さりげに熱いところがある。友達思い。本人は望まないのにツッコミに回ることが多数。基本的にタメ口だが、年上には敬意を持って接する。しかし、許可を貰えば容赦なくタメ口になり、慣れたりするとボロも出る。テンションが上がったりテンパったりすると誰相手でもタメ口になる

好きなもの 友達。料理。

嫌いなもの 平穩を壊すヤツ（だが最近は結構自分から荒事に首をつつこんでいる）。友達を傷つけるヤツ。

能力名 『疑似創造（ディフェクトメイカー）』。レベル4判定。本当は神から授かった錬金術だが、表向きはこういう超能力だと思われている。木や鉄などの触れられるものから、風や光といった触れられないものまでを自由に変化させられると、効果範囲はかなり広い。が、難点があり、質量や使用回数などによって疲労していく。

備考 マイシャルアーツ 総合格闘技経験者……と本人が思っているだけで、実はただ

の格闘術。錬夜に戦い方を教えた師匠曰く、「だってそっちの方がなんかカッコイイじゃん？」らしい。前の世界では本人自体は平均的な中学生だったが、その人生は様々な波乱があり、それは七割がた周囲の人間のせいだと思われる。禁書世界でも様々な事件に巻き込まれるあたり、根っからのトラブル体質なのかもしれない

*

えー、以上が錬夜の基本設定です。ただ、あくまで基本であり、初期でもあるので、どんどん変わっていくこともあるかもしれませんが。その時は、笑って許してください。

能力図鑑（前書き）

今まで本作品で出てきた能力に加え、オリキャラ紹介で出てきた能力を載せていきます。わかりにくかったり、疑問があれば、ご指摘ください。あと、初めて読む人は先の話を読んでから読むことを推奨します

能力図鑑

- ・ 『ディフェクトメイカー疑似創造』

効果 両手を合わせ、物質（触れられる触れないを問わず）に押し当てることで、自分の望む形態に変化させることができる。使用に比例して体力消費

使用者 桜咲錬夜

- ・ 『バイロキネシス発火能力』

効果 炎を生みだす能力。分子運動を高めて発火していると思われる。バイロキネシスト使用者は発火能力者と呼ばれ、派生系としてファイアスロアー火炎放射腕の延長線上に炎をばら撒く能力もある

使用者 不良のリーダー

- ・ 『テレポート空間移動』

効果 十一次元での特殊計算によって、三次元空間を無視した物体転移が可能。使用できる能力者は少なく、レベルも高い。他には、対象とする物体を、転移先で重なった物質を押しつけて送ることが可能。派生系として、ムーフポイント座標移動やキルポイント死角移動といったものがある

使用者 白井黒子、木山春生

- ・ 『レールガン超電磁砲』

効果 レベル5の一つにも数えられるエレクトロマスター電撃使い系最強の能力。または、使用者の通り名を指す。ゲーセンのコインを音速の三倍で撃ちだすことで、莫大な威力の砲弾とする。射程は五十メートル、出力は十億ボルトに上る

使用者 御坂美琴

・ 『メタルワーカー金属細工』

効果 金属のみを対象とした形状変化能力。サイズや、より細かいディテールを求めるには、対応のレベルが必要。手で触れて変えるものや、離れた所から変えるものなど、いくつか種類が確認されている

使用者 不明

・ 『エレクトロマスター電撃使い』

効果 電気を操る能力の総称。電気以外にも、電磁波、磁力、ローレンツ力なども操れる模様

使用者 御坂美琴

・ 『イマジンブレイカー幻想殺し』

効果 超能力・魔術問わず、触れただけで打ち消す能力。ただし、効果範囲は右手首から上のみだったり、消しきれない異能もある。インデックス曰く、この右手が空気に触れている限り、バンバン幸運を消し去っているらしい

使用者 上条当麻

・ 『イノケンティウス
魔女狩りの王』

効果 三千度の炎によって構成された炎の巨人。ルーンが刻まれたカードを配置することで、その範囲内なら（カードを潰されない限り）不死身

使用者 ステイル・マグヌス

・ 『クレアポイアンス
透視能力』

効果 その名のとおり、障害物の先にあるものを視認したり、遠距離の景色をみることが出来る

使用者 固法美偉

・ 『トリックアート
偏光能力』

効果 光を捻じ曲げ、誤った位置に像を結ばせる能力。第十二話では名前が言われずに終わった

使用者 第十二話登場のスキルアウト、木山春生、桜咲鍊夜（？）

・ 『テレキネシス
念動能力』

効果 遠くにあるものを動かすことができる。これ自体は学園都市に数多く存在する能力だが、これが基本になっている能力は多岐にわたる

使用者 木山春生、不和良助

・ 『エアロシューター
風力使い』

効果 空気を操作する能力。突風などに使用される。これによく似た能力として、空力使いエアロハンドが挙げられる

使用者 木山春生、桜咲錬夜（？）、婚后光子

・ 『アクアマスター
水力使い』

効果 水に関する能力の全般。水流操作ハイドロハンドや水蒸気を集めたり、水分子そのものに干渉する能力者もいる

使用者 木山春生、泡浮万彬、湾内絹保、桜咲錬夜（？）

・ 『シンクロトロン
量子変速』

効果 アルミを基点にして、重力子の数ではなく速度を加速させ、爆弾に作り変える。ただしここまで強力なものにできるのは学園都市でも一人のみ（幻想御手使用の疑いアリ）

使用者 介旅初矢、木山春生

・ 『ゴールキーパー
守護神』

効果 能力ではなく、通り名であり技能。学園都市のハッカーたちの中で伝説となっているハッカー。その技能をフルに使った防御壁バンクは、書庫すらも超える。学園都市二大ハッカーの内の『守りのハッカー』

使用者 初春飾利

・ 『ブレデター捕食者』

効果 能力ではなく、通り名であり技能。学園都市のハッカーたち
の間で伝説となつているハッカー（正確にはクラッカー）。セキユ
リティーをすり抜けるのではなく、喰い破るように荒々しくシステ
ムを破壊するのが特徴。学園都市二大ハッカーの内の『攻めのハッ
カー』。ちなみに、『守護神』との直接対決は過去に一度だけあつた
使用者 不明

・ 『ヴァイジョンリーダー未来視界』

効果 自分が親しくしている人間の未来を見ることが出来る。能力
のレベル次第では、対象や時間を決めることができる。ヴァイジョン能力と
しては珍しい、他人の未来を見るタイプ
使用者 一善正人

・ 『ヴァイビジョン予知能力』

効果 未来を見ることが出来る能力
使用者 一善正人

・ 『ディーブブラッド吸血殺し』

効果 伝説とも呼ばれる吸血鬼を誘い、自らの血を吸わせることで

死にいたらしめる。その体からは、吸血鬼のみが反応する甘い香りがするらしい。副作用として、血の流れに詳しくなる

使用者 姫神秋沙

・『グレゴリオの聖歌隊』

効果 ローマ正教の大魔術。三三三三人の修道士とバチカンにある聖堂を用い、対象の上空から紅い槍を落とし、破壊する。三沢塾ではその偽物である、偽・グレゴリオ・レブリカ聖歌隊が発動された

使用者 ローマ正教十三騎士団、三沢塾生徒

・『世界移動』 & 『能力付与』

効果 異世界へと渡らせることができる力と、その対象者に異能を授ける力

使用者 神

・『円周率暗唱』

効果 円周率を延々と暗唱していく

使用者 天流美代

・『長時間説教』

効果 生徒が意識を失いかけるほどの長時間かつ威圧的な説教

使用者 刑部厳楽

・ 『ヘルチャンプ 閻魔大王』のざんじ残滓』

効果 かつての性格が一瞬蘇り、周囲を激しく威圧する
使用者 柵川中学校長

・ 『ウェポンユザー 武具操者』

効果 武器であるならば、触れただけで瞬時に使い方がわかるようになる。加えて、能力発動中は大幅な身体能力アップが望める
使用者 御厨空音

・ 『アップバーギア 身体向上』

効果 能力自体は単純な、筋肉や血管や臓器や骨や脳や五感など全体的な身体の出力量アップ。割とポピュラーな能力で、学園都市内にも多数いる。が、ほとんどは一部分に限定され、身体機能すべての向上ができるものはごく稀
使用者 鬼狩元狼

・ 『テクニカルボイス 操作音声』

効果 自らの声を好きなように発声できる。増幅させたり、拡散させたり、特定の相手だけに聞こえるようにしたり、様々な使用方法がある。盛夏祭の演劇練習ではかなり活用されていた
使用者 言祝初音

・『マルドゥックの炎の剣』

効果 バビロニア神話に登場するマルドゥック（マルドゥークやマルドゥクとも）が持っていたとされる剣。正式な名称はリットウ。エデンを守るために使われた「ラハット・ハヘレヴ・ハミトウハペヘット」の原型ともされる（サイト・幻想世界神話辞典より抜粋）
使用者 彩葉伊織

能力図鑑（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしております

プロローグ（前書き）

というわけで、初めまして、h a y t eです。

今回はとある科学の超電磁砲の二次創作となっています。もしよかつたら、見てやってください。

それと、もう一つ、禁書目録の方も作ろうかなーと考えているので、そちらが出たら、見てみてください。

プロローグ

「お前、ちょっと異世界行ってこい」

「うるせー、殺すぞテメエ」

白い白い、変な空間の中で。

俺は目の前にいる、金髪で耳にピアスを付けおまけにタバコをふかしてる不良然とした男に、そう言った。

あゝ、そんなこと言われてもいきなりすぎだよな。すまん。

まず、俺の名前は、桜咲錬夜（さくらざきれんや）。いたって普通の中学生だ。

で、目の前で調子くれてんのは、自称神様。なんかこう、全世界の神職者に謝って欲しい格好をしている。

そんで、何でそんなやつが俺の目の前にいるのかといえは

「だから、何度も言ってるだろうが。俺の手違いでブツ殺しちまったんだから、違う世界に生き返らせてやるって。何が不満だ？」

「俺も何度も言ってるぞ。『ふざけんな、テメエの手違いなら俺を生き返らせろ、元の世界に』ってな。異世界なんてごめんだね」

まあ、こういうことだ。

俺が学校から帰っているときなりトラックがつつこんできて、俺を綺麗に跳ね飛ばした。で、気付いたらここにいて、神様（自称）に異世界に転生させてやると言われた。

冗談じゃない。なぜこいつに勝手に殺された上に、異世界なんぞに行かなきゃならんのか。そういうのは、もっと相應しいヤツがいるだろう？

なんてことをごちゃごちゃ言いあつてたら、

「あゝもう面倒くせえ！　いいか、良く聴け！　神の手違いで殺された人間は、原則元の世界に復活させるのが決まりだ。だが、そうすると、そういう記録が残っちまうんだよ！」

「その何が問題だ？　原則がそうなら、問題ないだろ？」

「いや、大アリなんだよ。もし記録が残ると、それが親父にバレる」

「つか、親いんのかよ。まあ、それはともかく、バレたらどうなるんだ？　俺が消されるとか？」

もしそうなら、確かにマズい。せつかく生き返ってもすぐに消されちゃ意味が

「いや。もし親父にバレたら　俺が怒られる」

「知るか、んなこと!?!？」

保身の為かよ!？

「というわけだから、今からお前を異世界に飛ばす。なあに、心配すんな。前よりも面白い世界だから」

俺は眩き、ベッドから降りる。両隣から何か聞こえてくるので、どうやらマンションやアパートの類らしい。

どうしたもんかと頭をかいていると、部屋にあった机に、一枚の手紙を発見した。

「なんだこりゃ？」

俺がその手紙を開くと、

『よお、錬夜。まずはおはようつてところか？ まあ、解つてるとは思うが、神だ。で、早速なんだが説明するぞ。』

お前が今いるのは、さっきもいったように異世界だ。だが、安心しろ。ベースは一緒だ。日本だし。ともかく、お前にはそこで第二の人生（つつても年は戻らんが）を過ごしてもらおう。ああ、その部屋はお前だけの部屋だから。家具も揃えておいた。ついでに、預金は一億ぐらい入れた（笑）。そんでお前が通う学校だが、もうすぐ電話がかかるようにしたから、それを待ってる。

で、最後に別れ際に言った、能力の説明だ。ずばり、《鋼の錬金術師》にでてくる錬金術だ。両手合わせて、イメージしながら物質に当てたら、練成できる。しっかり練習しろよ。

ん〜、こんなもんだな。じゃあ、がんばって生きろよ』

「……………」

言葉も無かった。なんかもう、ツッコミ所がありすぎて。

そつやって、しばし啞然としてると、

P r r r r

室内にある電話が鳴った。

「……もしもし」

「あつ。桜咲錬夜くんですか？」

「そつすけど」

「私、柵川中学校の教師で、天流美代（あまながれみよ）と申します」

天流さんの話を聞くと、どうやら俺は、その柵川中学とやらに編入することになっているらしい。

それを聞いた俺は、もう覚悟を決めて、この世界でやっていくことにした。

天流さんに、明日学校へ来るように言われ、通話は切れた。

「明日来いっつっても、制服とか、場所とか問題がないのか」

俺が机の隣に目を向けると、制服がハンガーで壁に吊ってあった。さらには、ポケットから見えるように紙が入っていて、それを開くと、柵川中学までの道のりが書いてあった。

「いたれりつくせりだな、オイ」

まあ、あいつのせいだから当然っちゃ当然だけど。

「さて……しゃーねえ。ここで生きてみつか。文句言っても始まらねえしな」

俺は一つため息をついて、そう決意した。

それにしても……、

「柵川中学って、な〜んか聞いたような……」

プロローグ（後書き）

感想待っています。

第一話 錬金術VS超能力(前書き)

はい、第一話目です。

これから先、不定期更新になると思いますが、がんばっていきま
す。

第一話 錬金術VS超能力

「とりあえずは、買い物かな」

天流さんとの電話を終えたあと、俺は家に何かあるのかを確認してみた。すると、生活用品は確かに問題なかったが、食料と勉強道具がないことがわかった。

それぐらい用意しといてくれたらよかったのに、なんて愚痴りながら家を出る。扉を開けた瞬間、太陽がやけに眩しかった。カレンダーで知ったが、もう夏が近いようだ。

「ふう。金を下ろすには……コンビニ行くか」

照りつける陽光に耐えつつ外に出ると、一気に体感温度が上がった。

「うへえ、熱っちー」

とは言っても、そんなことで温度が下がるわけではない。むしろ、上がった気さえする。

まあ、仕方ない。面倒だが行くか

「……って、コンビニってどこだ？」

しょっぱなからつまづく俺だった。

* * *

「……やつと金下ろせた」

俺は一軒のコンビニから出て、そう呟いた。

十三人。

実にそれだけの人数に、俺はコンビニの場所を聞いた。これは俺がバカだからというわけではなく、単純にどいつもこいつも固有名詞を使って説明してきたからだ。

「の隣とか、x xの正面とか言われてもわかんねーよ。こつちや、ついさつき異世界ちに来たばっかなんだぞ」

誰にともなく文句を言う。本当はあの神野朗に言いたかったが、いないんじゃないからな。

それにしても。

「なんでこの街、こんなに学生が多いんだ？」

ちよつと周りを見回せば、見渡す限り学生の姿が。いくらなんでも多すぎないか？ コンビニの中にいた客も、全員学生だったし。

翌日、俺は知ることになる。ここが、学生の為に造られた都市だということ。

「ま、いつか。とにかく金は下ろせたし、勉強道具も買えたし。後はスーパー探して食材の方を」

と、その時、

「やめてください!」

「あん?」

何事かと目をやると、ロングの黒髪をした中学生ぐらいの女の子が、数人のチャラチャラした数人の男に、強引なナンパを受けていた。

はぁ。ああいうのはどこの世界にもいるんだなぁ……。俺の足は自然に現場へと向き、おまけに口は勝手に言葉を紡いでいた。

「おい、ナンパ野郎。その娘、嫌がつてんじゃねえか。手え、放せ」

「なんだ、お前? ジャッジメント 風紀委員か?」

ジャッジメント 風紀委員? なんだそりゃ?

「よくわからんが、そんなんじゃねえよ」

「じゃあ、何か? 正義の味方気取りですか、オイ?」

「それも違う。ただの自己満足だ。お前らみてえなのを見て見ぬふりすんのは、俺の性に合わないんだよ」

俺がそう言うと、連中の一人(多分リーダー格だろう)が薄笑い

を浮かべながら、

「そんなじゃあ、お前が俺らの相手するか？ その路地裏でデート
といこうじゃねえか」

「……………」

ま、そうなるよな。この状況なら。

六人か。

「ああ、いいぜ。メンドクせえけど、相手になってやる」

んで。俺達は路地裏で喧嘩することになった。

あ、そうだ。

「お前もう逃げていいぞ。後、俺がやつとくから」

「え…………？」

事態についていけず、呆然としていた女の子に、そう言ってやる。
付いて来られてもしかたねえし、せつかくなんだから逃げてもらおう。

「で、でも、それじゃあなたが……………」

「いっていいって。んじゃな」

「あ、ちょ……………！」

なおも引き止める彼女をあえて無視する。

ちょっとそっけない気もするが、これが一番いいんだからな。
そんなことを思いつつ、俺は裏路地へと足を踏み入れていった。

* * *

SIDE 佐天涙子

「どっしょ……」

あたしは助けしてくれた男の子を止められずに、立ち尽くしていた。
今すぐ追いかけないとという気持ちと、仕方ないんだという気持ち
が混ざっている。

だってあたしは、無能力者（レベル0）だ。もしあのまま絡ま
れたら、きっと何もできなかったし、今だって助けに行っても邪魔
になるだけ

「 違う！ 助けに行けなくても、助けを呼ぶことなら出来る！」

無能力者だって、何も出来ないわけじゃない。少ないけど、でき
ることはあるんだ。

あたしはそう思い、とある人に電話をかけた。

P r r r P r r r P r r r

ガチャ

『はい。なんですか、佐天さん？』

その娘はスリーコールの後、ちゃんと出てくれた。

私は焦る気持ちを隠そうともせず

「お願い初春！ あの男の子を助けてあげて！」

* * *

S I D E 錬夜

さあーで、鬨るかね。

現在、俺の前には不良が六人。対してこちらは俺一人。圧倒的に不利だ。

だが、女の子の前で格好つけた以上、男としては退けねえよな。

「そんじゃあ、さっそくだが行くぜ？ お前ら、やれ」

例のリーダーっぽい奴の号令で、奴以外の不良が俺に向かってくる。

向こうは俺をあっさり倒せると思っているのか、ひどく余裕の態度で殴りかかってきた。

俺を舐めすぎだ。

「よつとー！」

「ぐあっ！？」

俺は突っ込んできた一人の拳をかわし、代わりに鼻の頭にストリートを叩き込んだ。拳から、骨と骨がぶつかる感触が伝わる。

あー、ちきしょう。相変わらず嫌な気持ちになる感触だ。

「な、なんだこいつ!? 強えぞ!?!」

「……………」

俺が打ち負かしたのがよっぽど意外だったのか、連中が色めきたった。

マイシャルアーツ
総合格闘技。

俺は前の世界でソイツを少しやっていた。そこらの不良には負けないうらいに。

ただし、それは一対一の場合。さすがに六人全員にかかられたら、ちよっときびしい。勝てるだろうが。

それを悟らせないために、わざと一人目は全力でブン殴ったのだ。そして俺の狙い通り、ヤツらは尻込みしている。これはいけるかと思っただが

「情けねえなあ、お前ら……。どれ。俺が相手してやるか」

「次はテメエが相手か」

進み出てきたのは、リーダー野朗。今を見てまったく焦らないってことは、勝てると思ったのだろうか?

……………どちらにせよ。

「先手必勝!」

俺は走って、一気に男との距離をつめる。

が、周りの連中はおるか、本人すら余裕の態度を崩さない。俺がそれをいぶかしんでいると、

「ニイ」

「？」

男が突如、口端を歪めた。

その刹那。

ポオウツ！

男の掌から炎が生まれ、それが俺にぶちあた

「……ってたまるかあああああああ！」

間一髪のところ、それを避ける。なんとか服の裾が焦げる程度で済んだ。

……いや、それよりも。

「……テメエ、そいつはどういう理屈だ？」

「ハッ。決まってるだろう？ 俺は『バイロキネシスト発火能力者』だ。それも、強能力（レベル3）のな」

あゝクソツ！ なんなんださつきから！ 風紀委員とか発火能力者とか強能力とか！

さっぱり解らない単語に戸惑いながらも、一つだけハッキリ解ったことがある。

コイツは強いということだ。

「……………」

「どうした？ 怖気づいたか？」

男の言葉は、なかなか当たっていた。正直、手から炎を出す人間とか怖いに決まってる。

「ま、どっちにしろこれで終わりじゃねー。 どんどん行くぞ、オラァ！」

「 ツ！？」

男は今度は両手に炎を生み出して、それを野球ボールかなにかのようにバンバン投げてきた。

畜生！ ビビる時間もねえのかよ！

俺はなんとかそれをかわすも、ここは狭い路地裏。そうそう何度もかわすなんてできるわけではない。

つまり

「やっべ……………！」

身動きを取れなくなった俺に、今度こそ火球が襲ってきた

* * *

S I D E 不良のリーダー

「……………決まったか」

俺は勝利を確信してそう呟いた。

今のタイミングで俺の火球をかわすことは、不可能だろう。そして、たとえガードしても、ただではすまないはずだ。

「お前ら、引き上げるぞ」

言いながら、振り返り路地裏を出ようとする。

が、俺の手下どもが付いてきていないことに気が付いた。それを不思議がってもう一度振り向くと、そこには、

「……は？」

いつの間にか、一枚のコンクリートの壁が出来ていた。

「お、おい！　なんだありゃあ！　さっきまであんなもん」

俺がああ壁の正体を手下に聞こうとした、その時。

壁の向こうから、声が響いた。

「いやー忘れてた。そーいや俺も、『普通の人間』じゃなかったんだ」

その声は、聞き覚えがある。なんたって、ついさっき俺が燃やした『はずの』男の声だったからだ。

そしてその声の主は、壁からその姿を現した。

「ほんじゃあ、続き闘るぞ。今度は 俺からな？」

* * *

SIDE 白井黒子

「なんですの、これ……」

わたくしは初春に連絡を受け、暴力騒ぎがあったとされる場所に向かいましたの。

そこには佐天涙子さんという方がいて、事情を聞くと、どうやら彼女が被害者で、その彼女を助けるために一人の殿方が、すぐ傍の路地裏スキルアウトで不良数名と戦っているのだということです。

ですから、わたくしはその現場に向かったわけですが……、

「どこのどなたがやったんのですの？」

路地裏は、一目でわかるほど無残な状態でした。

ところどころに焦げ跡が付いているのは、おそらく発火能力者の仕業でしょう。それはまあ、問題ないとして。

わたくしが唖然としたのは、路地裏の壁や地面がさまざまに形を変え、まるで出来の悪いオブジェのようになっていたことですの。なんていうか、そう、『造り替えた』という印象を受けますの。

「……佐天さんを助けた殿方……どんな能力者なんですの？」

わたくしは、まだ見ぬ能力者の姿を思い浮かべながら、そう呟きました。

* * *

S I D E 錬夜

「……………」

月明かりが照らす夜道を俺はゆっくりと歩きながら、家路についていた。

考えているのは、少し前の出来事。

『お前一体何者だ!?!』

『俺か? 俺は 錬金術師だ』

俺は火球が迫ったあの時、とっさに両手を合わせ、その後地面に掌を押し付けた。

すると一瞬で俺の前にコンクリートの壁が現れ、俺を守った。

それから先は、簡単。一度使って慣れることができた錬金術を使って、連中を追っ払うことができた。

けど…………、

「…………あれが、神の言ってた錬金術か」

俺の心にあるのは、爽快感などではなかった。確かに錬金術というのは、思ったよりずっと凄かった。

しかし、あの物質を造り替える感覚。あれがどうも、

「気に入らねえんだよな……」

そんなことを思いながら、俺は家につき、ベッドに転がる。

まあ、いつかはこんなことも思わなくなるだろう、と結論つけて

転生一日目が終わった。

第二話 再会は柵川中学校（前書き）

今回は、大園先生を含め、三人の教師が登場しました。

ただ、これからまた出るかは未定です（笑）

第二話 再会は柵川中学校

七月十日。

再会とは、案外身近に転がっているのかもしれない。
そんなことを俺が思うのには、当然理由があるわけで。

「あ、あなた（お、お前）は！？ 昨日の！」「

朝っぱらからこんなことを叫ぶのにも、当然理由があるわけで。

* * *

一時間半前。

「ああ、夢じゃねえんだな……」

俺は寝ぼけ眼をこすりながら、そうぼやいた。

目が覚めたらもしかしたら元の世界に戻ってるのかなー、なんて
思ったりしたよ。

自室のベッドで目覚めて、オフクロが作る飯食って、学校行って
ダチとくっっちゃべって。

そんな感傷にひたっても、しょうがないんだけどさ。

「………それでもやっぱ、思っちまうよな」

眩きは俺しかない部屋に虚しく響いて、余計に哀愁を誘う。
ま、いつまでもそうしていたってしかたない。
俺は気持ちを切り替え、朝飯を作ろうとして

「……………あ。買い物すんの忘れた」

情けねえなあ、オイ。

「……………ガツコ行くか」

「おいちよつとW A I T（待て）。飯は？ ねえちよつと！」なんて自己主張する腹を撫でながら、柵川中学の制服を着る。とは言っても、前の学校でも制服なんて普通に着てたんだ。今更なんの感慨も湧かない。

なにはともあれ、靴を履き、ドアを開けて外に出る。相も変わらずサンサンと輝く太陽が、俺の気持ちとは対照的で羨ましかった。そして昨日発見した地図を頼りに、目的地へと歩き出す。

そして、四十分後。

「やっと着いた。ここが……………柵川中学校か……………」

俺は、こう言っちゃなんだが、平均的な造りをした学校の前で、そう呟いた。

数秒間立ち尽くし、少し考える。

はあ。なんつーか、転校生の気分だな。あれってこんな感じだったのか。

「ま、いつか。いつまでもここに突っ立っててもあちーだけだし、行くとしますかね」

一つ頷き、校内へと足を踏み入れる。
その瞬間。

「コラ貴様！ 堂々と遅刻とはいい度胸だな！」

「……え？」

なんか、突然野太い声を浴びせられた。

何事かと首を曲げると、そこにはガツシリした体格で、頭を角刈りにして、おまけにジャージ姿のいかにも体育教師といった男が立っていた。

あゝなるほど。この人、俺のことを遅刻した生徒だと思っているわけか。

俺はそう思って、冷静に対処を始めた。

「この先生つか？ 俺、今日転校してきた桜咲錬夜です」

「まったく、最近の生徒は！ 平気で遅刻しおって！」

話、聞けよ。

「ですから、俺は転校生で」

「いいから来い！ たっぷり指導してやる！」

「だから話を聞けつつってんだろ！？ いや言っではないけども！」

抗議もむなしく、俺は首根っこを掴まれ、問答無用で引きずられていった。

* * *

SIDE 佐天涙子

「うっいゝはるゝ。暇ゝ」

「どんだけダレてるんですか、佐天さん……」

だって、本当に暇なんだもん。

あたしが今いるのは、学校の教室。もちろん、あたしのクラスだ。で、前の席にいて私に苦笑を浮かべてるのは、親友の初春飾利。頭に乗つけた花がとつても特徴的だ。

「だいたい、まだ朝のHRすら終わってないんですよ？ だらけるにはまだ早いです」

「そんなこと言ってもさー。暇なものは暇なんだから、しょうがないじゃん。あーあ、なんか面白いことないかな」

「面白いこと、ですか……」

初春は人差し指を口元にやり、何かを考え始める。そして数秒後、

「あつ。そういえば、今日転校生が来るそうですよ？」

「転校生？ こんな時期に？」

もうすぐ、学校は夏休みに入る。そんなタイミングで転校なんて、何か事情でもあるのだろうか？

……一瞬。昨日の男の子のことが、思い出された。
その転校生がもし彼だったら、なんて考えてしまつて

「……そんなわけないか。それじゃ漫画じゃん」

あたしは首を振つて、その考えを打ち消した。

「どうしたんですか？」と聞いてくる初春に、なんでもないと返して、窓から空を見上げる。

結局、彼はどうなつたんだろうか？ シャッジメント 風紀委員の白井さんの話では、能力者同士の戦闘痕があつたつて話だけど、無事なんだろうか？
なんてことを考えていたら、教室に担任である大園先生が入つてきた。

「みんな。HRを始めるから、席についてくれ」

先生の号令で、思い思いに話していたみんなが席につく。それを認めると、先生は出欠を取り始めた。

が、それも数分のことで、それが終わると次は行事連絡。

「えー、知ってる人もいるかも知れませんが、今日このクラスに新しい仲間が来ます。みんな、仲良くしてあげてください」

小学校かとおつこみたくなつたけど、もちろん言つたりはしない。

「じゃあ、桜咲君。入ってきて」

「うーっす」

いつの間にか近くまで来ていたその女性は、なんつーか、綺麗な人だった。

栗色のロングヘアを腰まで伸ばし、タイトな格好をしていて、目元には銀の眼鏡が光っている。どこの秘書のような、理知的な女性だ。

……つか、待て。今、天流先生つつたか？

「えっと……昨日電話くれたのは、あなたですか？」

「ということは、貴方が桜咲君ですね。改めて自己紹介させていただきます。柵川中学校、数学教師の天流美代です」

天流さん いや、天流先生は、俺に軽くお辞儀した。

俺がそれに返礼を返していると、

「天流先生。私にも、事情を聞いてよろしいですか？」

ゴリラ（比喻）が話しかけてきた。

先生は律儀にもゴリラ（あくまで比喻）に向き直って、

「彼が、昨日の職員会議で話があった、転校生の桜咲錬夜君です」

「あーダメですよ、先生。この野郎さつきからそう言ってるのに、全然信じて」

「なるほど、そうでしたか。それならそうと早く言えば、俺も何も言わなかったのに」

「ブツ飛ばすぞ、お前!？」

なんだこの差別は。

「……では、桜咲君。行きましようか」

そしてあんたもスルーか、先生。

「……わかりましたよ」

納得いかないことは多々あるが、とりあえずそれは抑えて、先生について行く。

その後あったことは、大したことじゃない。普通に校長に挨拶して、天流先生に説明を受けて、担任となる先生　大園先生というらしい　を紹介された。

で、今はその大園先生と一緒に、クラスまでの道のりを歩いていた。

「桜咲君は、『外』から転校してきたんだよね？」

その道すがら、先生がこんなことを聞いてきた。

彼は、好青年といった感じの若い先生だ。なんか、どこの学校にも一人はいる好感を持てる先生だな。ラッキー。

まあ、それは置いといて、『外』ってなんだ？

「あー……そうっす」

全く意味が解らなかったが、下手なことと言って怪しまれるのも面倒だ。

んで、先生はそれに、「初めはちょっと戸惑うかもしれないけど、そのうち慣れるよ」と返した。……何に慣れるんだ？

「　　つと。着いたよ」

そんな話をしている間に、教室についたらしい。まあ、外見が普通だったから、教室も普通のものだった。

先生は少し待ってるように指示を出し、一人教室に入る。どうやら、HRをやつて、定番の「みんな、転校生が来たぞ〜」「先生、それ、男!? それとも女!?」「やだあ、カッコいい人だったらどうしよう〜」みたいな感じのことをやるんだらうな。

『えー、知ってる人もいるかも知れませんが、今日このクラスに新しい仲間が来ます。みんな、仲良くしてあげてください』

いや、そんな小学校みたいなこと言われても。

『じゃあ、桜咲君。入ってきて』

扉の向こうから聞こえる、先生の指示。

うっし!　ここは固くならず、フレンドリーな感じで、軽く行ってみよう。

俺は密かにそう決意して、扉に手をかける。そしてそれを引っ張りつつ、

「ういーっす」

しまった!?!　これじゃ、ただのやる気がない奴じゃねえか!?!　一瞬焦ったが、怪訝な視線とかは感じない。まあ、それならそれでいいか、なんて思った次の瞬間

「ああああああああっ!」

突如、穏やかな雰囲気をぶち壊す大声が上がった。
んだよ、うるせえなあ……。

どこのどいつだと、視線を巡らせると、そこには見覚えのある女の子が……ん？

「お、お前（あ、あなた）は！？ 昨日の！」

俺と同時に叫んだのは、昨日助けた女の子だった。

おいおい、じゃあもしかして、彼女の学校の彼女のクラスに転校したってか？

こんなシチュエーション、友達のギャルゲーで見たなあと思っ
いたら、

「あれ？ 桜咲君と佐天さんは知り合いなのかい？」

「あ、あー……そんなもんかな？」

「じゃあ、丁度よかった。佐天さんの隣が空いてるから、桜咲君はそこに座ってくれないかい？」

「え？？」

おいおい、爽やか笑顔で言ってるじゃねえよ。察しろよ。

と言いたかったが、ざっと見回してほかに空席はない。まさか、誰かと代わってもらおうわけにもいかねえし。

……しゃーない。

俺は渋々ながら、彼女の隣の席に座る。
で。

「……よ、よお」

「……うん」

「……」

「……」

なんつーか、気まずかった。

第二話 再会は柵川中学校（後書き）

感想、待ってます

第三話 学園都市（前書き）

第三話にして、ようやく錬夜がとある事実気付きました。ちょっと鈍すぎですかね（汗）

今回少し戦闘シーン（なのかな？）が入るので、悪いと思ったらご指摘ください。

第三話 学園都市

HRは無事終わり、一時間目までの休み時間。

俺は、佐天涙子とその親友である初春飾利と話していた。

「昨日はありがとね」

「気にすんな。俺が勝手にやったことだしな」

当然というか、話題は昨日の喧嘩騒ぎのこと。俺としては、この話題は初春が入ってこれないんじゃないかと思ったんだが、そうでもないらしい。

というのも、俺を助けるつもりで電話をかけた相手が、初春だったからだ。

「びつくりしちゃいましたよ。佐天さん、いきなり『お願い初春！あの男の子を助けてあげて！』なんて涙声で言ってくるんですから」

「う、初春っ！ そんなこと言わなくていいの！」

へえ、涙声ねえ……。

俺は少し想像してみる。目を潤ませ、涙声で必死に懇願する佐天。

……心にズギョンと来た。

「あれ？ どうしたんですか、桜咲さん？」

「……なんでもねえ」

さすがに言えねー。

「そういえばさ、桜咲は『外』から来たんだよね？」

俺が少し恥ずかしくなつて頭をかいていると、佐天がそんなことを言ってきた。

はあ。また、『外』とやらか。さてどうするか。大園先生ん時みたいに適当に流すか、それともなにか聞きだしてみるか……。

……聞き出してみるか。

「まあ、そうだが……このこと『外』ってそんなに違うのか？」

「……………」

やべ、ミスったか？

俺が尋ねると、二人して顔を見合わせた。そしてその数秒後

「「あははははっ！」「」

これまた二人して笑い始めた。

……いや、なんで？

「んだよ、お前ら。そこまで笑うか？」

「だ、だって……ねえ、初春？」

「は、はい、佐天さん」

やばいな、本格的に何かミスったのかもしれない。

俺はすぐにフォロワーを入れようとしたのだが、それよりも早く、佐天が話し始めた。

「東京都の三分の一の面積、そしてそこに住む二三〇万人の八割が学生、科学技術は『外』の数十年前先を行っていて、極めつけは方程式の確立された『超能力』！こんな街が他にあると思う？この

」

そこで佐天は一つ、息を吐く。そして

「『学園都市』以外にさ」

薄く笑いながら、確かにそう言った。

そして、それを聞いていた俺はと言えば……、

「……………」

「桜咲さん？」

「どしたの、桜咲？」

無言を貫いていた。

だがそれも数秒のこと。やがて搾り出すように、

「……………」

「お？」

「思い出したあああああああああああああああ……！」

『(ビクッ!)』

俺の大声に、教室中の視線が集まる。あーなるほど。今朝の佐天はこんな気持ちだったんだな。

って、そんななんどうでもいーんだよ!

「あつ! ちょっと桜咲どこ行くの!?! もう一時間目始まるよ!」
「?」

「悪い、急用だ!」

慌てて引き止める佐天に謝りを入れ、俺は教室を飛び出した。

* * *

S I D E 初春飾利

「どうしたんでしょうねえ?」

「さあ?」

桜咲さんが走り去った扉を見ながら、私と佐天さんは咳きました。ホントに一体どうしたんでしょう? なんて思っていると、

『うおっ!?! お前転校生の桜咲だな! どこへ行く!?!』

『すみません先生! 俺のクラスこれから課外授業で外なんです!』

『お前のクラスは、今から私の科学だバカ者!』

そんな声が廊下から響いてきました。

「はぁー初日からサボりとは、やるねえ桜咲」

「佐天さん……そこは関心するところじゃないですよ」

まあ、私も風紀委員なのに止められなかったから、強くは言えませんが。

P r r r r !

と、いきなり緊急回線で私の携帯が鳴り始めました。これはつまり

「はい、初春です!」

『初春、第七学区の公園で、不良集団スキルアウトが大きな喧嘩を始めていますの。すぐに応援に向かいなさい! 私もすぐに向かいますの!』

「わかりました!」

私は通話を切り、バックの中から風紀委員の腕章を取り出し、それを腕につけました。

佐天さんがそれを見て、「がんばって」と心配そうな顔で言ってきました。

私はそれに頷きで答え、教室を飛び出しました

……その途中。

『初春！？ お前もサボる気か！？』

『違います！』

そんなことがありました。

* * *

SIDE 鍊夜

「あー畜生っ！ なんで今まで思い出さなかったんだ！」

俺は学校を飛び出して、適当に街中を走り回っていた。

学生が八割を占める街だけあって、人影はほとんどない。ただ、その代わりに異常おかなものがあった。

ドラム缶のような自動掃除機が、何台かうつろっていたのだ。おそらく、これも最先端技術というやつなのだろう。

いや、そんなことはどうでもよくて。

「クソ！ 『そつだ』とわかって見れば、はっきりわかるなオイ！」

こんな叫び、誰が聞いても意味が解らないだろう。

だが、他ならぬ俺はわかる。この世界は

「冗談じゃねえぞ、あの神野朗……！ 俺を『インデックス禁書目録』の世界に飛ばしやがったな……！」

そう、今やっとわかった。この世界は、『とある魔術の禁書目録』という本の中の世界なんだ。

俺は前の世界で、友達の一人に好きなやつがいたから、少しだけ知っている。この世界が魔術と超能力が存在する世界だということ。

それに、そうなら今までの疑問も全部吹っ飛ぶ。なぜ柵川中学という名に聞き覚えがあったか、なぜ昨日の不良は手から炎なんて出せたのか、『風紀委員』やら『発火能力者』やら『外』とは一体なんなのか、全部解ってしまった。

と、同時に、

「あ〜どうすっかな。この世界って結構面倒くさいことになるんだよな……」

詳しくは知らないが、この学園都市はさまざまな事件に巻き込まれるらしい。もしもそれにニアミスでもしたら……、

「……最悪死ぬかも」

「冗談じゃない！　なんで二度目の人生でまで早死にしなきゃならねえんだ！　断固抗議する！

……つっても、

「誰に抗議できるわけでもねえしな……」

そう思うと、必死に動いていた足も遅くなる。やがて、とぼとぼとした歩みになるくらいに。

まあ、筋としては神に言うべきだろうが、今いねえし。

当てようのない怒りを、さてどうするべきかと考えていたら

「……ああ、学園都市って喧嘩のレベルもダンチだな」

俺は目の前で展開されている光景に、そう感想を漏らした。

いつのまにか、どこぞの公園に来ていたらしく、そこでは数十人の学生や不良が戦闘を繰り広げていた。たぶん、制服の連中は風紀委員なんだろう。腕章つけてるし。

まあ、そんなことはどうでもよくて。

問題は、俺の眼前で飛び回っている、『電撃』や『炎』や『鉄筋コンクリート』で。

「……この映像撮ってテレビ局に売ったらどうなるんだろ」

なんて、くだらないことを考えたりした。

「……帰ろ」

超能力者^{へんじょ}同士のトンデモバトルなんて見てもしょうがねえしな。つか、危ねえ。

そんなわけで、俺がもと来た道を引き返そうとした、その刹那

「きゃああっ！」

聞き覚えのある声が、やけに大きく聞こえた。

なんであいつがとか、風紀委員だったのかとか、思ったことは沢山あるが。

俺の身体は、気付けば知らないうちに動きだしていた

* * *

SIDE 初春飾利

私はその公園に着くと、そこはもう戦場でした。

先輩や同輩の仲間が、数多くのスキルアウトたちと抗争を始めていたのです。

どうやら、能力者も何名かいるらしく、かなり大規模な戦闘になっていました。

「初春！ なにをばけつとしてますの！」

「し、白井さん……」

私はその壮絶さに息を呑んでいると、同僚の白井黒子さんが叱咤を飛ばしてきました。

赤いリボンで結んだツータールや常盤台の制服は、怪我が元の血で汚れていました。

「もうじき警備員アンチスキルが来ます！ それまであなたは無能力者を相手していなさい！」

「は、はい！」

白井さんの声に、やっと我に返りました。

私は不良集団スキルアウトの一人に走りこみ、関節を取って、行動を封じました。

と同時に、そこで油断してしまいました。

これは集団戦なのに、たった一人を押さえつけただけで、安心してしまいました。

だから、

「余所見してんじゃねえぞおおおおおおお！」

「えっ」

気付いて振り向けば、そこには鉄パイプを振りかぶった一人の男が。

あれが振り下ろされるのはどこ？

決まってる。私だ。

「しまっ」

かわすには、致命的なくらい気付くのが遅すぎた。
ただ、私に出来たのは

「きゃああっ！」

そう叫ぶことだけだった。

* * *

SIDE 白井黒子

初春の悲鳴は、わたくしも気付きました。

しかし、いくら『テレポーター空間移動能力者』といえども、あのタイミングでは、間に合いません。

だからわたくしは、目を見開いてその光景を見ていることしかできませんでした。

そう。

「なんですよ、あれ……」

初春が殴られた光景

『ではなく』。

初春を殴ろうとした男が、突如地面から生えた石柱に吹き飛ばされた光景を。

「……はっ。う、初春！」

数瞬、思考が止まってしまいましたテレポートが、すぐに気を取り直して、わたくしは初春の元へと空間移動で飛びました。

「大丈夫ですよ、初春！」

「…………」

わたくしが呼びかけても、初春はこちらを向きません。ただ、彼女はあな点を見つめていて。

「………？」

わたくしがその視線を追うと、そこには黒髪をした殿方が、屈んで右手を地面についていました。

もしかして……あの方が『今の』を？

「あの」

彼に声をかけようとしたら、

「テメエらあああああああああああああああああ！」

唐突に、彼は叫び声を上げました。

その声にこの場にいた全員が動きを止め、彼に注目しました。

彼はその視線を一身に受け、

「ざけてんじゃねえぞ、コラ！ お前らがどんな事情で暴れてるのかしらねえけどなあ……人のクラスメート傷付けようとしてんじゃねえ！ そんなに誰かをぶん殴りてえなら、俺にかかってきやがれ！ 一人残らずブチのめしてやらあ！」

* * *

S I D E 錬夜

「……………」

「……………」

月夜が照らす、学園都市。

その中を、俺と初春は二人で歩いていた。

あの後。

俺が不良どもに思いつき喧嘩を売ったその後、丁度タイミン
グアンチスキル警備員がやって
よく（いや悪いのか？ どっちだ？）警察
きた。

で、あとは風紀委員と警備員が協力して、不良たちを一斉検挙で、事件は解決したというわけだ。

ただ、それで解散とはならない。俺は風紀委員でもなくせに首をつっこんじまったもんだから、長々と事情聴取させられた。

で、俺が早く帰りにえなあ、とぼやくと、

『……なら、条件付なら返してやるじゃん』

俺の事情聴取を担当した、警備員の黄泉川よみかわ愛穂あいほさんがそんなことを言ってきた。

俺がその条件は、と尋ねると、初春を家まで送れということだった。まあ、ただ口実を作ってくれただけだろうけどな。

『しつかりやるじゃん、色男』

そう言って送り出した黄泉川さんの顔はムカついたことを追記しておく。

「……ありがとうございます、桜咲さん。佐天さんだけじゃなく、私まで助けられちゃいましたね」

「あ……偶然だよ。偶々通りがかっただけだから、な」

「それでもありがとうございます」

そう言って初春は、頭の花のように微笑んだ。

それを見ると、まあこんな世界に来たのも悪くはなかったかな、なんて思っから不思議だ。

「あ、私の家ここです」

「ん、そっか。じゃあ、またな」

「はい、また明日」

マンション（といっても学生寮だが）の前で、初春と別れる。

俺はそのまま今度は自宅へと足を向けながら、こんなことを考えていた。

彼女を助けられてよかった、と。

第三話 学園都市（後書き）

初春は本来戦闘キャラではないのですが、それをすっかり忘れて戦わせてしまいました。修正するのはちよつと大変なので、「固法先輩に近接格闘術（関節技）を習った」という裏設定をつけさせてもらいます。勝手なことですが、ご容赦ください。この設定いづれ使うことになるので。

次回はいよいよ、とある科学の超電磁砲の第一話に入ります！

第四話 常盤台中学のエース(前書き)

錬夜君、ちよつとキャラ変わってきましたかね？

第四話 常盤台中学のEース

七月十六日。

俺がこの世界に来て、一週間が経った。
さすがにそれだけ経つと、この世界 『学園都市』にも慣れてくる。

超能力やらなんやらいろいろなるなことに、な。

「なに黄昏てんの、錬夜？」

「錬夜君って時々そんな感じになりますよね」

「うっせー」

……これも慣れたうちに入るのだろうか？
俺たちは、この一週間で名前呼び合うくらいは親しくなった。
まあ、親しくなったというのは、言い換えれば遠慮が無くなった
ということだ。

「そんなんじゃないや幸せだって逃げちゃうよー？」

涙子が俺の頭をバシバシ叩きながら、そんなことを言うてくる。
はあ。なんつーか……、

「あの日のしおらしいオメーはどこ行ったんだよ……」

「それは感謝してるけど、友達に遠慮なんてしない主義なの」

「あーそうかい」

俺たちがそんなやりとりをしていると、飾利が時計を見ながら呟いた。

「そろそろ帰りませんか？ もう三十分ぐらい残ってますし」

「ん、そうだな」

この会話で分かると思うが、現在は学校が終わって放課後だ。と言っても、夏休みが近いから授業も無く、まだ昼時なんだけどな。

それはともかく、まあ、飾利の提案は妥当だろう。いつまでも教室でくつちゃべってても仕方ねえし、なにより

「飾利の体調も気になるしな」

「あはは……。大丈夫ですよ、このくらい」

そういう飾利の口には、でかいマスクがかかっていた。実は、数日前から風邪にかかっているらしい。

というわけで、飾利の体調を考えて、下校することになったわけだが、

「あつ！ 初春と鍊夜、先に帰ってて！ 委員会あるの忘れてた！」

「おいおい、三十分の遅刻かよ。怒られんぞ、顧問は刑部先生だし」

「わかってる！ だから急いでるんじゃない。あゝやばいやばい！」

慌てて荷物を整理し、教室を飛び出す涙子。
俺たちはそんなあいつを見送って……、

「んじゃあ、二人で帰つか？」

「えっ！？ あ、ハイ！」

* * *

SIDE 初春飾利

うっ、緊張します……。

私は今、鍊夜君と二人で、下校中です。佐天さんを交えて三人で帰ったことはあるけど、二人で帰るのは初めてです。

こうしていると、あの夜のことを思い出します……。

『……ありがとうございます、桜咲さん。佐天さんだけじゃなく、私まで助けられちゃいましたね』

『あ……偶然だよ。偶々通りがかっただけだから、な』

『それでもありがとうございます』

私はあの時、ちゃんと笑えていたでしょうか？ 顔が赤くなっ
てなかったでしょうか？

それは気になるけど、もちろん本人に訊いたりできません。

それでもやっぱり気になって、訊けもしないくせに彼の顔に目を

向けて

錬夜君と目があつた。

「な、ななななんですか!？」

「んあ? いや、熱大丈夫かなーって」

「大丈夫ですっ!」

「ならいいけど……」

彼はキョトンとした顔で、首を傾げています。

自分でもちよつとうるたえすぎたかな、と思ったので何かフオロ
ーしようと辺りを見回して、

「あ! 白井さんに御坂さん!」

私の同僚と常盤台のお嬢様を発見しました。

* * *

S I D E 錬夜

隣を歩いていた飾利が、いきなり声を上げた。

それに、少し離れたクレープ屋でじゃれあつてた二人の女の子が
反応した。

一人は、茶髪を肩まで伸ばした、胸が残念な娘_こ。

もう一人は、赤いリボンで腰まで伸ばした茶髪をツータールにした、胸が非常に残念な娘^こ。

どちらも、確か名門とか言われる常盤台中学の制服を着ていた。

「あら？ 初春じゃありませんの。どうしたんですの、そのマスク」

「風邪つぴきなもんでして」

まず口を開いたのは、ツータールの娘だった。腕に腕章がついてるから、どうやら風紀委員らしい。つか、なんか見覚えあるな。

「あらまあ。女は顔が命ですよ」

「……そうですね」

まあ、頬を引っ張られて変顔になってるやつに言われたかねえわな。

それで、その引っ張っている張本人の短髪は、

「えっと初春飾利さんだっけ？ 黒子と同じ風紀委員の」

「は、はいっ。覚えていてくださっただんですね」

ふーん、なんか飾利嬉しそうだな。そういや涙子が、飾利はお嬢様に憧れてるとか言ってたが、それでか？

そんなことを考えていると、

「ところで初春……そちらの殿方は？」

「あ、それ私も気になった。アンタ誰よ？」

「えっと、彼は一週間前に転校してきたクラスメートの桜咲錬夜君です。で、こっちが同僚の白井黒子さん、こっちが常盤台中学の『レールガン超電磁砲』の御坂美琴さんです」

なるほど、ツインタールが白井で、短髪が御坂か。よし、覚えた。それにしても、『超電磁砲』ってことは、学園都市の第三位ってこいつのことか。

と、白井が両手をパチンと叩いて、

「桜咲さん……って、もしかして一週間ほど前にあつた乱闘騒ぎにつっこんできた殿方ですか?」

「あ? あ、思い出した。アンタ、あの時いた風紀委員か」

そついや、いたなあコイツ。

で、このことを知ってるのは、俺と飾利と白井だけなわけで、

「ねえ、黒子。何の話?」

「この前お話ししたでしょう、お姉さま。この前公園であつた戦闘に勝手に乱入した殿方がいると」

「あー、その……スマン」

確かに、部外者の俺が突っ込んだのはまずかつたな。

「へえ、アンタが……。ちょっとアンタ、私と勝負しない?」

「はあ?」

いきなり何言い出すんだ、御坂（いちおう先輩をつけるべきか？）は？

「やだよ面倒くせー。何で俺が学園都市が誇る、七人しかいない『超能力者（レベル5）』と闘りあわなきゃいけないんだ」

「何？ アンタ男のくせに逃げるの？」

「あーあーそれでいいよ」

向こうがサバサバした正確のためか、自然とタメ口になってしま
う。

んで、安い挑発を軽く受け流してやると、逆に御坂が不機嫌そう
になった。なんでお前がキレてんだよ。

なんかあんまりお嬢っぽくねえ奴だなあーと、多少呆れていたら、

「あの、みなさん。あそこの銀行、なんで昼間から防犯シャッター
閉めてるんですかね？」

「そりやお前、あれだろ。ああいうのは大抵銀行強盗とか」

……………銀行強盗？

ドガアアン！

『！』

いきなり、近くにあった銀行のシャッターが内側から爆発した。
次いで、中から出てきたのは、顔半分を布で覆った三人の男。

……マジで強盗かよ。

「初春。怪我人の有無を確認しなさい。お姉様と桜咲さんはここに」
さすがは風紀委員というか、白井の判断は迅速だった。

俺たちにすばやく指示を出し 御坂は「えー」と渋っていたが。
お前は暴りたい子か 風紀委員として強盗犯たちに接近する。

……うーん、なんだろうな。あの強盗犯、どっかで見たような？
「さて、どうするか……」

白井が強盗犯の一人を投げ飛ばすのを見ながら、軽くぼやく。
女の子に闘わせるってのは男としては情けないかなあ、とか思っ
ていると、

『なかなかやるじゃねえか、お嬢ちゃん……だが、俺だってな』

『……パイロキネシスト発火能力者』

突如、男の掌から炎が生まれた。
……… ちょっと待て。

「あの野郎は……！」

* * *

SIDE 白井黒子

まあ、なんのことは分かりませんが、とにかく強盗犯は桜咲さんを見て、ビビっているようでした。

* * *

SIDE 鍊夜

俺がこいつにキレてるのは理由がある。こいつが転生日に涙子に絡んでいた、あのナンパ野郎だったからだ。

あの時ならいざしらず、今の涙子は俺の友達だ。それを泣かせたこいつは、一度ブン殴りたいと思っていた。

「ゆ、許してくれ！俺はもうあんたには逆らわな」

「やかましいつ！」

パンツ バシイ！

俺は最後まで台詞を待たず、地面から手の形をした石柱を練成する。

そしてそれで、

「オラ！」

「ぎゃあああああああああああああ！？」

思いつきり男を叩き潰した。

ぶっ、すっきりした。

「……やりすぎですの」

「細かいことは気にするな」

呆れ顔でこっちを見る白井にも、一応フォローを入れておく。

と、

「黒子おおおっ！」

離れたところに立ち尽くしていた御坂が、大声で叫んだ。
って、なんであいつあんなにキレてんだ？

「これは私が個人的にケンカを売られたって事だから、手え出して
もいいわよね？」

「は？ 何を言っていますのお姉様？」

御坂は白井の言葉を無視し、ポケットを漁る。
そして取り出したの是一片のコイン。

「……ってお姉様、それは……！」

白井が叫ぶも、やはり無視。

御坂はコインを空中に投げ、それをキャッチして構える。

そして。

「アンタがぶつかったせいでクレープが服についたでしょうがああ
あああああああああああ！」

魂の叫びと共に、それを放った。

ドゴオオオオンッ！

コインは黄色い閃光と化し、おそらく強盗犯が乗っている車を吹き飛ばし、それだけでは飽き足らずコンクリートの地面を抉った。

……服汚しただけで、あそこまで普通やるか？

「あーあれが『超電磁砲』ってわけか……」

「ば、化け物……」

まだ意識があったのか、俺が潰した男がそう言った。

……同感だよ、畜生。

* * *

かくして、事件は幕を閉じた。

男達は当然、全員逮捕。ちなみに、御坂に吹き飛ばされた奴は軽症だったらしい。多分、手加減はしたんだろう。

そして、犯人を護送する時、

「あなた、わたくし達のことを化け物呼ばわりしましたわね」

「？」

白井が発火能力者の男に、話しかけた。

「あなたから見たら、わたくし達は化け物に見えるかもしれませんが。しかし、わたくし達は最初からこうだったわけではありませんのよ。……もつとも、自棄になって周りに当り散らす負け犬さんには、一生わからないかもしれませんけど」

「……くっ……!」

「まあ、」

「?」

「もし、まだ悔しいと思える心が残っているなら、いつかわたくし達を見返してごらんなさいな」

「……………」

……へえ。

「なんだ。案外いいこと言っじゃねえか」

白井の意外な一面を見た気がして、俺は少し微笑んだ。
まあ、なにはともあれ、

「これにて、一件落着だな」

* * *

とはならなかったわけで。

「コラあ！ 待ちなさい、桜咲！ 私と勝負しなさい！」

「ふざけんな、バカ！ なんでそうなる！？」

「アンタ、さっき能力使ってたでしょ！ あれなかなか面白そうだったから戦ってみたいのよ！」

「理不尽だあああああああああああああああ！」

俺は学園都市の第三位に、一晩中追いかけられた。

第五話 大能力者（レベル4）の空間移動能力者（テレポーター）（前書き）

今回は、後半結構バトルになってます。ただ、描写に自信がありませんので、ご容赦ください。

第五話 大能力者（レベル4）の空間移動能力者（テレポーター）

「さあ、錬夜さん！ どこからでもドンとこい、ですのー！」

「……………」

「錬夜君、がんばってください！」

「錬夜！ 白井さんに怪我させちゃダメだかんね！」

俺は今、猛暑の中、とある河川敷で黒子と相對していた。周りには、ギャラリー 涙子と飾利という観客。

……………なんでこうなっただんだけ？

* * *

七月十七日。

「……………なんの用だ？」

「決闘、ですの」

うだるような暑さに速やかに白旗を上げた俺は、自室（クーラー作動中）でくつろいでいた。

そこに響く、チャイム音。どうやら来客らしい。

そしてそれに一つ返事を返し、ドアを開けると、

『どうもですの』

胸無しツールテール風紀委員　つまりは白井が立っていた。
と、ここでさっきの台詞に戻るわけだ。

「……すまん。もう一度言ってくれねえか？」

「だから、決闘だと申してますのに」

……どうやら、聞き間違いではないらしい。残念なことに。

「……なんで？」

「あなた、昨日お姉様からお逃げになっただでしょう？　だからお姉様、『あいつの力が見てみたい』とばかり言ってるんですの。よほど、腹に据えかねたのでしょうね」

「それとこれとなんの関係がある？」

「ですから。わたくしがあなたと闘って、お姉様が闘つに値しないと証明したいんですの」

なんだこの言い分。こいつは、人の迷惑というものを考えないんだろうか。

……っーか、

「そもそもお前、なんで俺ん家知ってんだよ」

「わたくしは風紀委員ですよ？　ちょこちょこつと調べれば、学生の住所などすぐに割り出せます」

誇らしげに（無い）胸を張る白井。

こいつに職権乱用という言葉を、教えてやりてえ。

まあ、とにかく事情は分かった。なら俺がすることは一つだな。

「……白井」

「なんですの？」

「 帰れ 」

ガチャンツ

返事も聞かずに扉を閉める。

まったく冗談じゃない。何が悲しくてこんな炎天下で、喧嘩（白井に言わせれば決闘だが）なんぞやらなきゃ悪いんだ。

そう思いたため息をつきつつ、後ろを振り返ると

白井黒子が立っていた。

「うおおおおおおあああああああああ！？」

正直に言おう。本気でビビった。

「何大声だしてるんですの……。わたくしは『空間移動能力者』テレポーターですのよ？ まったくこんなことで驚くなんて、情けな

「まず不法侵入を謝れよ！」

何ナチュラルに罵倒してんだコイツ！

「む……。まあ、確かにそこは謝りますわ。土足で上がってしまいましたし」

「常盤台中学生の台詞とは思えねえな……」

とか言いつつ、白井は靴を脱ごうとしない。

……こいつ、マジでいつペンブン殴ってやるうか？
さすがにムカついてきたので、拳を握ってそれに堪えていると、

「ちよつと失礼」

「あ？」

白井が俺の手を握ってきた……ってまさか！？

「おいテメ」

ヒュン

俺の抗議は、十分の一も言えずに、消えていった。

* * *

SIDE 佐天涙子

「楽しみだね〜初春」

「はあ……、いいんですかねこんなことして？」

私と初春は今、とある河川敷にいる。

というのも、白井さんに『審判』をお願いされたからだ。

『わたくしが言っただけでは、お姉様は信じないかもしれませんが、だから、初春と佐天さんには、いわゆる証人になってもらいたいですの』

とは、白井さんの弁。

「いいんじゃないの？ あたし、なんだかんだで鍊夜の能力ちからってまだ見たこと無いんだよね」

「そうなんですか？ 鍊夜君の能力って結構面白いですよ。能力としてはスタンダードな形状変化ではあるんですけど、対象が限定されてないのって結構珍しいんですね。金属メタル細工ワーカとかは単純に金属だけに影響するんですけど、彼の場合は木材とかコンクリートとかにも適用するそうです」

「へー……」

やっぱ、あいつも能力者なんだなあ……。

知らず知らずのうちに、あたしは視線を落としていた。

あたしは無能力者だ。静脈にエスペリン打って、電極貼り付けて、イヤホンでリズム刻んで。それでもスプーン一つ曲げられない、『落ちこぼれ』だ。

だからやっぱり

「……ちよっとつらい、かな」

「え？ 何か言いましたか、佐天さん？」

「あ、ううんっ。なんでもない！」

本当になんでも。

「？ あ。来たみたいですよ」

そう言っって初春が指差した方には、白井さんに手を掴まれてる錬夜がいた。

* * *

SIDE 錬夜

テレポートしたのが少し空中だったのか、俺の身体は地面に落ちた。

その際、素足が思いっきり砂粒を踏みまくった。

「イデデデデッ！？」

「なんですの、大げさな」

「いやコレ、マジで痛いぞ！？」

慌てて足を擦りながら叫ぶ。さすがにこのままじゃ痛すぎるので、そこらに生えてた草を使って、草履もどきを練成した。

と、

「おーい！ 鍊夜〜！」

「んあ？ 涙子？」

こちらに向かって涙子が走ってくる。その隣には、なぜか飾利。なんでこいつらがここに？

「審判をお願いしましたの」

「審判だあ？」

「はい。きちんと、白黒つけるために」

白井黒子なだけに？

とは言ってみたかったが、ヒンシユクを買いそうなのでやめた。

「別にいいけど、随分凝ってるじゃねえか」

「当たり前ですの。わたくしは何でも手を抜いたりしません」

「そりゃいい心がけだな。俺に迷惑がかからなかったら、拍手してやるくらい」

遠い目をしながら、呟く。

なんだかなあ……、美琴（昨日、おいかけっことが終わった後、名前がいいと言われた。正直、まったく割りにあってない。さらについでに言えば、俺も名前がいいことにした）といい、白井といい、お嬢様って案外こんなのばっかなのか？

……まあ、いい。

「そんなじゃあ、さっさと鬭ろつぜ、白井。俺は早く帰りてえ」

「言われなくてもそのつもりですの。ああ、それから言い忘れてましたけど、わたくしのことは黒子で構いませんわ。お姉様のことも不本意ながら名前で呼んでるようですし」

「へいへい。そんなら俺も名前でもいいぞ」

俺がそう言つと、白井 黒子は俺から少し距離を取った。
そして……、

「さあ、錬夜さん！ どこからでもドンとこい、ですの！」

* * *

「さて、どうすつか……」

一応やる気があるように見せるため、構えだけは取ってみる。
が、実際は危害を加えるつもりはない。向こうからぶっかけてきたとは言え、さすがに女は殴れん。

でもなあ……、

「そもそも言つて」

と、そこまで言つたところで、

黒子がいきなり視界から消えた。

「らんねえよな！」

一瞬後に背後に生まれる気配。次いで、わずかな敵意。振り返ることはせず、足に力を込め、一気に前へと飛ぶ。

フォンツッ！

風切り音に今度は振り返ると、丁度黒子が回し蹴りを放っているのが見えた。

……ついでに、妙に大人っぽい下着も見えた。

「危ねえな……。モロに当たったら、結構痛そうだったぞ」

「あら。きつちり避けたではありませんか。どうやって分かったんですの？」

「一つ目は気配。まあ、これはなんとなくだけだな。二つ目は、単に判断した。レポートでの接近戦は二種類ある。一つは背後に移動か、もう一つは上空に移動か。どちらにせよ、死角への空間移動が基本だ。なら後は簡単。それらを全部加味した上で、最適の方法は『前方への回避』ってわけだ」

「へえ。なかなかいい戦闘センスしてますよね」

学校の図書館にあった本の受け売りだがな。

「なら、わたくしももっと本気で行かせてもらいますの」

黒子は、左手を太ももに持っていった。そして次に手を上げたときには、そこには数本の金属矢^{ダイツ}が。その意味を頭が理解するよりも早く

金属矢が俺の草履を地面に縫いつけた。

「う……お……！」

マズツ……これじゃ身動きがとれねえ！ 追撃がかかせない！
そうと理解した俺は動くのを諦め、すぐさま両手を合わせ、地面に押し付ける。

バシイ！

少し遅れて、黒子の足元から土の突起が盛り上がる。
が、それもあっさりとレポートでかわされた。しかし、これで時間ができる。この隙に足を無理やり上げ、草履を地面から引き離した。これで自由に動ける。

しっかし……、

「……強えな」

これは、俺の正直な気持ちだ。レポートというのは、本当に反則くさい能力だ。さっきの金属矢だって、黒子が草履ではなく心臓を狙っていたら、俺はあっさり死んでいた。まあ、そんなことはないだろうが。

こいつは、レベル5を相手取っても勝てるかもしれねえ。

「あークソ。こりゃ、俺もマジでやらないとやべえかもな」

「どつぞつ自由に。わたくしも、全力でいかせてもらってますわ」
やけに余裕そうな、黒子の顔。

まあ、そりゃそうかもな。俺の能力とあいつの能力じゃ、相性が悪い。

……と、思うだろ？

「……なんですよ、その笑みは？ 言っておきますけど、ただの形状変化ではわたくしには勝てませんわよ？」

「ああ…… 『ただの形状変化』 なら、な」

「……？」

わずかに黒子が眉を寄せる。俺の真意をはかっているのだろう。そう。今言ったとおり、俺の能力はただの形状変化なんかじゃない。どころか、正確に言えば形状変化ですらない。俺の能力の本質は…… もっと別のところにある。

「ま、それはともかく、だ。こつから先は」

俺は、両手を軽く合わせ

「本気でいかせてもらつぜ？」

第五話 大能力者（レベル4）の空間移動能力者（テレポーター）（後書き）

次回、黒子とのバトルが決着です。

さらに、錬夜が……？

第六話 勝利とそれから（前書き）

第六話、「勝利とそれから」です。

題名からなんとなく内容が察しがつくかもしれませんが、楽しんでください！

第六話 勝利とそれから

七月十四日。

『……そう、なのか?』

『ああ。それが君の本当の力だ。 まったく、デタラメだね。君、本当はレベル5?』

『いや、知らねえ。 システムスキャン 身体検査したのは、まだやってねえからな』

『ふうん。まあ、いいや。とにかく、これで私の修行は終わりだね』

『なんだよ、もう行くのかよ?』

『うん、まあね。私にもスケジュールってものがあるし』

『………そっか』

『そんな悲しそうな顔をするなよ。君と私は、会って三日の関係だろっ?』

『そりゃそうだけども………』

『ふふっ。まあ、憎からず思ってくれるなら、私としては僥倖かな? とは言え、私も歩みを止めるわけにはいかないんだ。私の目的の為に、ね』

『例の能力者探しか?』

『そう。いるかどうかもわからないけどね』

『……分かった。じゃあ、またいつか会おうな、伊 師匠!』

* * *

SIDE 白井黒子

七月十七日。

「……それで、何が変わりましたの?」

目の前の錬夜さんは、掌を合わせて薄く笑っているばかり。本気を見せるとおっしゃってましたけど、どこも変わったようには、見えませんの。

「いや、めちゃくちゃ変わったぜ。多分これ、一番お前向きの戦い方だと思う」

「だったら、早く見せてくださいですの。どんな策があるうと、倒すだけですの」

「別に俺から向かってもいいけど……お前が俺に仕掛けた方が、ビックリすると思うぜ」

ビックリ? どういうことですか?

疑問はつきませんでしたけど、そういうことなら !

「後悔しても遅いですよ!」

ヒュンッ!

挑発に乗って、鍊夜さんの背後に飛ぶ。それから再び蹴りを入れようとして

「え?」

何もせずに地面に降り立つ。

わたくしは、彼の背後に回るように飛んだはずですけど、どういうわけか、そこに彼はいませんでしたの。

どころか、

「どうした? そんなに『後ろ』に飛んで」

「……何をしましたの」

気付けば、彼は数メートル前方に立っていました。

いえ、この表現は適切ではないでしょう。恐らく、わたくしが彼の『数メートル後ろに』飛んだのです。

でも、なぜ? 座標指定が間違っなんて、ありえませんか。

「ま、もったいぶつてもしやーねえし、答えを教えてやるよ」

「答え?」

やはり、彼が何かをしたようですな。

鍊夜さんは、一つ唇をゆがめて、

「簡単な話だ。周囲の『光』を練成^{いじ}つて、屈折率を変更させたんだ。もつとも、俺の周りだけだから、動き回ったら意味がねえんだが」

「っな！？ 光さえ、あなたの能力の素材^{マテリアル}になるということですか！？」

「そんなの、形状変化どころの話ではありませんわ！ まさか、そんな眼に見えないものにも干渉するなんて……」。

「ああ、俺もつい最近知ったんだがな。まあ俺だって、今日まで遊んでたわけじゃねえってこった」

自分がしていることの大きさに気付かずに、彼はからからと笑う。
やはり思った通り、彼は

「……逸材、ですわね」

わたくしはぞくぞくとした感覚を感じながら、呟く。

そう。わたくしの本当の目的は、お姉様の敵討ち（負けてませんけど）などではなく、彼の力を測るためですの。

そして、彼には風紀委員^{ジャッジメント}に入ってもらうつもりですの！

もちろん、わたくしの相棒^{パートナー}は初春ですけど、彼女を戦闘に引つ張り出すのは（まあ、多少は強くなったとはいえ）、いささか心もとない。ですから、戦闘面での相棒^{パートナー}が欲しかったんですの。

ま、もつともまだそんなことは言いませんけど。

「……これで勝ったつもりですか？ たしかにわたくしの攻撃は当然に早いかもしれませんが、それはあなたも同じこと。まだ、詰^{チエックメイト}みには早いですわよ？」

「そうでもねえ

王手チェックぐらいはかかっている」

その瞬間。

ゾクッ！

背筋を悪寒が駆け抜けた。

その正体は、背後から浴びせられる殺気（と呼ぶには敵意がありませんが）。

おそらくは、後ろに錬夜さんの本体がいるのでしよう。実体からあそこまで離れたところに虚像を作り出すとは、いささかやりすぎな気がします。

とはいえ、確かにこれは王手ですわね。いえ、もはや詰みかもしれません。

「なるほど。もし仮にこの場からレポートすれば、あなたは容赦なく、レポート後を叩くと？」

「ああ。それで、お前が俺の手の届かないところに飛んだ場合は、敗走と見なすからな。とっとと帰らしてもらおう」

「……………」

建物の中ならともかく、こんな開けた場所なら、かなり遠くまで飛ぶ必要がありますからね。そうなれば、わたくしも手が出せませんし。

なにより、彼はわざと殺気を出してわたくしに気付かせた。それはつまり、本当の勝負なら、わたくしが負けていたことを意味しますの。

……しかたないですわね。

「わかりました わたくしの負けです」

* * *

SIDE 初春飾利

「わかりました わたくしの負けです」

その言葉を聞いた瞬間、私はとても驚きました。

なぜなら、白井さんの強さを私は知っていたからです。

風紀委員の中でもトップクラスの実力を持つ彼女は、戦闘において負けることなんて、ほとんどありませんでした。さらに、決して諦めることはしませんでした。

だから、たとえ模擬戦とはいえ白井さんが自ら負けを認めたのが、衝撃だったんです。

「いやーすごいね、錬夜。勝っちゃったよ」

「はい。すごいです……」

半ば呆然としながら、佐天さんにそう返す。
すると、

「初春。佐天さん。本日はわたくしのわがままに付き合ってくれて、ありがとうございました」

「気にしなくていいですよ。あたしも、いいもの見れたし。ねえ、初春？」

「は、はい!」

「? どうしたんですの、初春? そんなに焦って?」

「いえ、その……」

落ち込んでないんですか?

思わず喉元まででかかった言葉を飲み込む。

だって、白井さんにそんな様子はなく、むしろ嬉しそうな顔をしていたんですから。

「『その』? その、の続きはなんですか?」

「あ、本当になんでもないんですっ」

なおも食い下がる白井さんをいなしていると、

「あれ? 錬夜、どこいくの!」

振り返ると、錬夜君が帰ろうとしていました。

* * *

SIDE 錬夜

はあ。やっと終わった。

黒子の敗北宣言を聞いた後、俺は身体力を抜いた。

「なんとか、勝てたな……」

空を見上げながら、そんなことを呟く。

……多分、一週間前の俺なら勝てなかっただろうなあ。

もしも俺が光なんてものを造り替えれるなんて知らなかったら、今頃地面にオネンネしてた可能性が高い。

だから、今回勝てたのは

「……師匠、元気にしてっかなあ……」

がしがしと頭を掻きながら、思い返す。

六日前に出逢い、三日前に去った、とある女性のことを。

「ま、あの人なら大丈夫だろ……いやまあ、ある意味すげー心配だけど」

ちつと感傷的になったが、すぐに笑ってその心配を振り払う。

なにはともあれ、決闘とやらは終わったんだ。俺は帰らせてもらおう。

そんなわけで、俺が家路へと足を向けていると、

「あれ？ 錬夜、どこいくのー！」

涙子が俺を呼び止めた。

「ああ？ 帰って寝るんだよ。もう終わったんだから、いいだろ」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

俺がそう言つと、なぜが黒子が慌てだして、

ヒュンッ

俺の眼前にテレポートしてきた。

「うおっ！？ だから、いきなり飛んでくるのはやめろ！ 心臓に悪い！」

「そんなことはいいですから、わたくしの話を聞いてくださいな！」

そんなことを言ってくる黒子。さらに、なんだなんだと野次馬のように涙子と飾利も寄ってきた。

んで、戦後対談（なんか違うな、この言い方）が始まった。

五分後。

「ふむ。つまりは、お前は俺の実力を見るために喧嘩を売ってきて、おまけに俺に風紀委員に入れ、とこういうことか？」

「はいですの。あなたに、わたくしの相棒になってほしいんですの」

黒子の言葉に、飾利が「ガン！」とか言いながら、シヨックを受けていた。俺、口でそんなこと言う奴、初めて見たよ。

で、黒子は慌ててそのフォローに入る。なんでも、初春にはバツクアップ面で、俺には戦闘面で相棒になってほしいんだとか。

……よし。

「断る」

「な、なんでですの!?!」

断られると思ってなかったのか、黒子がつるたえる。
なんでって……、

「決まってるだろ、んなもん。なんで好き好んでテメーから厄介事じけんに首つっこまなきゃならねえんだ。それに、相棒なら、同じ風紀委員の連中から引っ張って来いよ」

「そ、それは……」

ん? どうしたんだ、コイツ?

黒子は、なぜかさびしげな表情になって、目をそらした。
それを見た飾利が、おずおずと、

「……そ、その、白井さんって強いじゃないですか」

「あ? そりゃ強かったけど、それがどうしたんだ?」

「だから、白井さんが強すぎて、肩を並べられる人がいないんです。そりゃ、風紀委員全体で見れば、白井さん並の人も、白井さん以上の人もいますけど、私達の支部にはいないんです」

「……………」

それで、こんな表情かおしてんのか……。

俺は知らないが、もしかしたらこいつなりにプレッシャーを感じているのかもしれない。自分以上がないということは、裏を返せ

ば、自分だけは負けられないということになる。

もちろん、こいつの仲間はそのようなことは言わないだろう。だが、面と向かって、「こいつに背負わせてないか？」と聞けば、答えにつまるかもしれない。

そんなことを考えて、俺は……、

「……駄目だ。俺は平凡に生きてくって決めたんだよ」

あの日。

神に転生させられた、あの日。俺はもう、普通に生きて普通に死ぬんだと決めていた。

みっともないまでの、『生』への執着。

なまじ一度死んでるから、余計にそれを感じちまう。何を隠すまでもない。俺は結局

死ぬことが怖かった。

もちろん風紀委員に入ったから、即、死につながるわけじゃない。だが、その可能性は普通に暮らすよりは高いだろう。

……情けないとは思。その、『死ぬ可能性がある戦場』に女の子を一人にするなんて、とんだ最低野郎だ。その娘が誰にも頼れずに苦しんでいるなら、なおさら。

だけど、俺が臆病だから、弱虫だから、踏み出すことができない。

俺は『あいつ』とは違うんだから

パンツ！

……な？

「つてえな！ なにしやがんだ、涙子！」

「うっさい、バカ！ 錬夜が悪い！」

「なあ……？」

涙子にはたかれた頬を撫でながら、疑問の声を出す。

なんだって、こいつは怒ってんだ？

「なんでそんなことが言えるの！？ 錬夜には『力』があるんですよ？ みんなを守る、白井さんを支えられる、そんな『力』が！
なのに、こんなに苦しんでいる白井さんを、放っておくの！？」

「……………」

「力があるから、絶対に他人ひとの役に立たなきゃ悪いなんて言わない！ けど……………女の子一人ぐらい、友達一人ぐらい助けてあげてよ！ あたしの知ってる錬夜は、そんな人だよ？ あの日、見ず知らずのあたしを助けてくれた錬夜は、そんな正義の味方みたいな人だった。本当は、錬夜だって白井さんを助けたいんじゃないの…………？」

「……………」

必死に訴えてくる涙子は、いつの間にか涙を流していた。

きっと、こいつは、悔しいんだろう。

……………飾利に聞いた。涙子は無能力者（レベル0）で、それを気にしてるって。だから、力があるのにくすぶっている俺が、何の助けにもなれない自分が、『悔しい』んだ。

「佐天さん……………もう、いいんです。わたくしが無茶を言っている

だけです。錬夜さんも申し訳ありませんでした」

そう言っただけで黒子は、無理に笑う。

こんな顔をさせてるのは、誰だ？

「……………あゝクソ！」

「」「」？」「」

「わーっただよ！ やってやるうじやねえか、ジャッジメント風紀委員！ 黒子も、飾利も、涙子も、どいつもこいつも俺が守ってやらあ！」

逃げるのは、もうやめだ。チツ！ ちょっと前に、「友達が傷つけられたから」と怒ったのは、どこのどいつだよ？

その俺が、黒子こまごちを傷つけてどうする！

「……………」

「おい、黒子？」

俺が叫ぶと、黒子はうつむいて肩を振るわせ始めた。少し心配していると、

「本当……………ですか……………？」

「な……………っ！？」

涙目でこちらを見上げて、黒子がそう呟いた。

俺は不覚にも、ときめいてしまった。

だから、

「あ……か、勘違いすんなよ！ 単に、友達として助けてやるってだけだぞ！」

お前は、どこのツンデレだ。

「クスッ。ハイですよ！」

こうして。

俺はめでたく、風紀委員に入ることが決まった。ただ、俺はまだ知らなかった。この瞬間から俺は

様々な事件に身を落とすことになるのだ。

第七話 憎悪という名の火種（前書き）

今回は、そんなに話が進みませんでしたね。いつものことかもしねませんが。

進行が遅いと思った場合は、一言下さい。

第七話 憎悪という名の火種

七月十七日 夕方。

「はあ、今日は疲れたな……」

黒子との決闘が終わり、夕方。

俺は、ジュースでも買いにとあるコンビニへと来ていた。

「冷静に考えたら、やっぱり風紀委員って面倒そうだよなあ。ま、でも、黒子の支えになってやるって言うちまったしなあ……って、なんだこれ？」 『くさやドリアン』？ それは混ぜちゃいけねえだろ」

そうやって、俺が飲料系を物色していると、

「ジャツジメント風紀委員です！ この場から早急に避難してください！」

「ああ？」

店内に二名のジャツジメントが入ってきた。

一人はいかにも普通な男（こんな描写でごめんな）で、もう一人は眼鏡に黒のセミロング、ついでに巨乳（だと思っ）の女の子だった。

「あの、ウチの店で何か……？」

「この付近で、グラビトン重力子の爆発的な加速が観測されました。簡単に言えば、この店に爆弾が仕掛けられている可能性があると思われます」

ほー、物騒なもんだな。ま、そういうことなら、俺も脱出するか。もう他の客もいな

「きゃっ!」

「ん?」

声に振り向くと、肩口でツィーテルにした女の子が転んでいた。どつやら足をくじいたらしい。

が、すぐに風紀委員A（ホントごめん）が駆けつける。

「早く避難しないと……」

風紀委員Aは女の子に肩を貸し、なんとか連れ出そうとする。俺がそれをぼんやり見ていると、

「なにやってるの! 早くあなたも避難しなさい!」

眼鏡の風紀委員に怒られてしまった。

ヤベ、早く出ねえと

「何!? これが爆弾!」

風紀委員Aの叫び声が聞こえると同時、俺の身体は動いていた。陳列棚の下に転がってたウサギのぬいぐるみが圧縮しているのが、見える。

チッ! 趣味の悪い!

「おおおおおおおおおおおおお!」

俺が叫んで両手を合わせると同時

ドゴオオンッ！

店内に轟音が響いた。

* * *

S I D E 固法美偉

「くっ……！」

なんとか爆風を対衝撃シールドで防いだ後、私は呻いた。
思ったよりも規模が大きい……！

「大丈夫！？」

私はすぐに盾を投げ捨て、爆発が起こった場所へ駆け出す。
するとそこには女の子が座っていた。

「あなた、怪我はない！？」

「は、はい。私は庇ってもらったから……」

彼女の視線を追うと、そこには粉塵が舞っていた。
が、それも数秒。やがて煙は晴れ

「……えーと……」

爆発が起こった『はず』のその場所には、無傷の同僚、不和君と

同じく無傷の少年が立っていた。

「ふう。なんとか間に合った……」

「……あ、」

気の抜けたような彼の声で、私も正気を取り戻した。

「あなたが、爆発を止めたの？」

「んあ？ そうだけど」

こともなげに言う彼。けど、一体どうやって ん？

ふと、彼の奥に目をやると、そこにはコンクリートで出来た壁が。こんなもの、なかったわよね……？

「あなた、能力者？」

「あ……。まあ、そう……かな？」

「何、その言い方？ 煮え切らないわね。しゃきつとしなさい！」

「いや、それが事件を防いだ奴に言う台詞？」

それはそれ。これはこれ。

まあ、とはいえ、

「助かったわ。風紀委員を代表して、お礼を言います」

「俺からもありがとう。君がいなかったら、危なかった」

「あ、あの！ 私も助けてくれて、ありがとうございました！」

「あー、まあ、いいよ。なんかなれねえな、こういうの」

この後、事後処理を不和君に任せ、私と少年 桜咲錬夜君というそうだ は外で話をしていた。あ、決してサボりなんて思わないでね。これも立派な事情聴取おしごとです。

「それで、桜咲君の所属は？」

「錬夜でいいですよ。所属つつつても、柵川中学一年としか答えられないしな……」

「いいのよ、それで。はい、これで事情聴取終わり」

「適當つすねー。黄泉川さんとは、えらい違いだ」

少し呆れながら、錬夜君はそう言う。

黄泉川さんって警備員アンチスキルのあの人よね？ その人に事情聴取ってことは……、

「あら、あなた彼女に補導でもされた？」

「違いますよ！ 不良と風紀委員の喧嘩に首つっこんだから、いろいろ言われちゃって……」

あれ？ その話どこかで聞いたような……？

あ！

「じゃあ、もしかして、十日にあった事件に乱入はいつてきた『乱入男』
ってあなたのこと？」

「なんじゃそりゃ！？ 俺、風紀委員の間でそんな呼ばれ方されて
んのか！？」

あ、敬語が取れた。なんとなくそういうの嫌いそうに見えるわね。
そして彼は、そんな不審者みたいなあだ名嫌だな、なんて呟く。
ふむ。彼が『乱入男』ってことは、

「じゃあ、あなたが白井さんのパートナー候補？」

「……ナンノコトダカ」

「白井さんがね、嬉しそうに語ってたのよ。『もしかしたら、わた
くの相棒になってくれるかもしれない方を見つけましたわ！』っ
てね」

「……黒子あこがねえ」

「ええ。なかなかいないのよ、彼女が頼る人。私が知る限り、常盤
台の御坂さんか初春さんしかいないわね」

「んなことないでしょ。あんたのことだって、きつと頼りにしてる
と思いますよ」

そうかしら？ と私は返す。

あの娘とはもう長い付き合いになるけど……無茶ばかりしてるから、ホントに頼ってくれてるのか心配なのよね。

私は一つ溜息をついて、

「それで？ あなた、風紀委員に入るの？」

「……ん、まあ。ある奴に言われたんで。お前には、だれかを守る『力』があるんだろ、って」

「そう……。なら、近い将来私達は仲間ね」

そう言って、右手を差し出す。

それを彼は数秒見つめて、次に数秒眼をつむって。それからやっ
と、

「 ああ」

* * *

SIDE 鍊夜

七月十八日。

「んっんー！ 眠い……」

登校途中、俺は軽く伸びをして、眠気を覚ました。

昨日はなかなかハードな一日だったからなあ……。

と、

「うーいはるーん」

少し後ろから、涙子の声が聞こえてきた。
俺がそれに振り返ると、

「おっはよ ーん！」

ババツ

「ぶっ……!!」

涙子がいきなり飾利のスカートをめくり上げた。
慌てて鼻を押さえる。初心で悪かったな！

「だ、男子もいる往来でこの暴挙！？ 何すんですか佐天さん！」

そつだ、今は登校時間。俺以外の男子もいるんだ。

……なんか、ムカツク。

「こーら。何やってんだ、涙子」

「あ、鍊夜！ おっはよーん」

「おっはよーん、じゃねえだろ。何お前は堂々とスカートめくりしてんだ。同姓がやっても犯罪だぞ（知らんけど）。なあ、飾利？

……飾利サン？」

俺が飾利を見ると、なぜか肩を震わせていた。

あー、かつたりい。正直どうでもいいわ、んなこと。

まあ、前の世界にはなかったとはいえ、さすがにそろそろ新鮮味も薄れてくる。ノートはちゃんと取るけど。

てなわけで、適当に授業を乗り切っていると、

「（ねーねー、初春。『セブンスミスト』に放課後行くんだけど、付き合わない？ あ、あと錬夜も）」

「（俺はついでだよ。行ってもいいけど、飾利は無理なんじゃねえか？）」

「（？ なんで？）」

「（私、風邪つぴきなもんで……）」

「（な？）」

「（うーん、じゃあ、しかたないかあ。でもさあ、最近初春って）」

そこで涙子は、飾利を一度見回して、

「（ そのダサイマスクとか、すっかり女捨ててるよねー）」

「行きますよっ！」

あー今のはそりゃキレるよなあ。つか、スカートめくりする奴に言われたくないだろ。

なんてことを考えていると、

パコッ パコッ

涙子と飾利が先生に、丸めた教科書で叩かれた。

まあ、喋っていたのは俺も一緒なので、当然矛先はこっちにも回ってくる。

だが

「甘いわっ!」

「なにっ!?!」

振り下ろされた教科書にタイミングを合わせ、拳を振るう。すると、それは見事にヒットし、廊下へと吹っ飛んでいった。そう

廊下にいた校長の顔面に。

『……………』

時が止まった気がした。

この校長は、みんなの学習態度を見たいそうで、よく校内の見回りをしている。

まあ、そんなことは今、どうでもよくて。

「……………桜咲君」

「……………はい」

「……………昼休みに校長室にカモン」

「……………はい」

早くも、昼休みの予定が埋まった。

* * *

S I D E 佐天涙子

「あークソ。散々な昼休みだったぜ」

「自業自得じゃん？」

「錬夜君、おとなしく受けてればよかったのに」

放課後。

あたしたちは三人で、校門に向かっていた。

「まあ、そんなことはどうでもいいとして、明後日から夏休みだね」
「」

「そんなことつて……………。つか、もう夏休みかよ。実感ねえな」

「錬夜君、まだ一週間とちょっとしか学校来てませんからねえ」

そんなことを話しながら校門を出ると、

「あれ？ 初春さんに錬夜じゃない」

「あ、御坂さん！」

「げっ、御坂美琴……」

肩口で切りそろえた茶髪に、常盤台中学の制服を着た女の子が、こちらに向かって手を振っていた。

……ん？ 常盤台？

「ちょ、初春に錬夜！ あんたら、白井さん以外の常盤台中生と知り合いなの！？」

「はい、白井さんの先輩で御坂美琴さんです」

「まあ、知り合いと言うか、天敵というか……」

あたしは、まじまじと御坂さんを見してみる。

うーん、やっぱ、お嬢様ってだけあって気品があるなあ……。

「涙子、その考え不正解^{アウト}」

「は？ なんであたしの考えとか解るの？」

「いや、なんとなく……（見てくれはお嬢に見えるからタチ悪いよな）」

？ 何ぼそぼそ言ってんだろ？

「そつだ、佐天さん！ 実は彼女が、あの、『学園都市の第三位』、^{エレクトロマスター}最強の電撃使い、『^{レールガン}超電磁砲』で知られる常盤台のエースなん

……あれ？　なんか、あんまりお嬢様っぽくないような？

「なんでもいいから、勝負しなさい！」

「ふざけんなあ　あああああああああああ！」

* * *

SIDE 介旅初矢

弱肉強食。

結局、この世の中は、強い奴が弱い奴を食い物にすることで回ってるんだ。

「あんだよ、これっぽっちしかねえのかよ」

だから今、こうやって僕が暴力を振るわれているんだ。

「しかし、風紀委員もバカだよなあ。廊下水浸しにしてやったら、総出でお掃除だもんな！」

「さすがは頭がお堅いだけあるな！」

クツ！　なにが風紀委員だ！
せいぎのみかた

守らるべき僕がこんなところで殴られて、あいつらは廊下の掃除？　無能にもほどがある。

結局、この世の中は、強い奴が弱い奴を食い物にすることで回ってるんだ。

「 なら、僕が創ってやる」

風紀委員むぎいんはもう、いらぬ。新しい世界を。僕が僕を救う世界を。創り上げてやる！

「……そのためにはまず」

僕を救わなかった連中。無能な連中。つまり

「 今度はお前らが掃除される番だ 風紀委員！」

第七話 憎悪という名の火種（後書き）

錬夜の師匠ですが、気になると言う方はコメント下さい。番外として書きますので。

第八話 その一秒で掴むモノ（前書き）

今回はちょっと長めになってしまいました（汗）。前回をもっと長くすればよかったですかね？

第八話 その一秒で掴むモノ

SIDE 白井黒子

「はあ。全然解りませんわね……」

わたくしは今、風紀委員の支部で、今回の事件 『連続虚空爆
破事件』について、調査していますの。

アルミを基点にして、重力子の数ではなく速度を急激に加速させて、それを一気に周囲に撒き散らす。まあ、『アルミを爆弾に変える能力』とでも言った力を使って、各所で爆破事件が起きています。なのに、それが可能な容疑者は、現在謎の昏睡状態。つまり

「お手上げ、ですわね」

せめて何か関連性でもあればいいのに……。
知らず知らずの内にため息が出ていることに気付いて、

「おっと、いけませんわ、弱音なんて。同僚が七人も負傷してるんですから、早く捕まえて」

……七人？

それはいくらか何でも多すぎじゃ

「ッ！ まさか、犯人の狙いは……！」

* * *

SIDE 鍊夜

「おーこれとか、いんじゃない？」

「あ、確かに季節的にもよさそうですね」

「私はもうちょっと可愛い方が……」

セブンスミスト。

涙子たちは、そこで服を物色していた。

で、俺はそれを見守っていると、涙子が近寄り、

「ねえねえ、鍊夜」

「んあ？ どした？」

「これとか初春に似合いそうじゃない？」

「ブツ!？」

ジャーンと見せびらかしてきたのは、なんとヒモパン。
バカ野郎、んなの見せるな!

「佐天さん!？ そんなの穿けませんよ!」

「えー、そっかなー？ 鍊夜は似合っと思っよね?」

「同意を求めな!」

とか言いつつ、頭の中では飾利のヒモパン姿が
って俺はどこの変態だ！？ んなの想像したら、終わる！ なん
か社会的に！

「ノリ悪いなー錬夜。ところで、御坂さんは何を探してんですか？」

「私？ 私はパジャマをちよつとね」

「あ、じゃあ、向こうに寝巻きがありましたよ」

で、寝巻きコーナーへと移動。

それで、一番に目に入ってきたのが、パステルカラーの子供っぽいデザインをしたパジャマだった。

「ね、ね、コレかわ」

「アハハ、見てよ初春このパジャマ！ 今時これはないっしょ？」

「小学生の時は、よく着てましたけどねー」

「なんか、こんなのガキの頃に母さんがふざけて着せてたな。俺に」

俺たちは思い思いに批評する。

……っーか、

「美琴、今なんか言いかけたか？」

「え！？ あ、な、なんでもないわよ！ こんな子供っぽいのは、興味ないしー！」

「……ふーん」

興味ない、ねえ。

俺ががしがしと頭を掻いていると、涙子と飾利は水着を見に行っ
た。

で、それを見送った後、

「あれ？ ビリビリじゃん」

「御坂さんだよ、当麻」

「あ、アンタ、何でここにいんのよ！ それに御厨まで！」

俺たち（というか美琴に）に話しかけてきたのは、ツンツンした
黒髪の男と、黒の長髪をゴムで一つに括った美形の男だった。

「別にいてもいいだろ。って、そっちのもしかして彼氏か？」

「おお、御坂さんにも春が」

「な、か、かれ……！」

なんだこいつら。好き勝手言いやがって。

「んなんじゃねえよ。ところで、誰だお前ら」

「うわ。礼儀のなつてねーガキだな」

「多分、当麻には言われたくないと思うよ。僕は御厨みくりや空音そらね。で、こ
つちが上条当麻。君は？」

「俺は桜咲錬夜。よろしく。名前でいいぞ」

「そう？ 了解、よろしく錬夜」

そうやって俺たちが親睦を深めていると、美琴がいきなり、

「私を無視すんな！」

「いや、してねーよ。カリカリすんなよビリビリ」

「ビリビリ言うな！ それと、勝負しなさい！」

「脈絡がねえ！？」

あーなんか、当麻には近いもんを感じるな。なんとなくだけど。二人がじゃれ合い始めたので、俺は空音に話を振ってみる。

「ところでさあ、お前ら男二人で、なんで女向けの服売り場にいるだ？ ハッ！？ まさか、お前女装とか」

「しないよ！？ そんなこと大声で叫ばないで！」

いや、なんか似合いそうだったから、つい。

「そんなんじゃないくて、僕たちは付き添いだよ。あの子の」

「あの子？」

俺が空音が指差した方に目を向けると、小学生くらいの女の子が、

当麻たちに近寄っていた。反応を見るに、どうやら美琴も知り合いらしい。

「なるほどねえ。いいやつなんだな、お前ら」

「んー、僕はどうか？ 多分、いいやつなのは当麻だよ」

「謙遜すんなよ」

なんてことを話していると、当麻が女の子になにか言って、その場を後にした。

空音は「それじゃあ」といい、当麻を追いかけた。

* * *

SIDE 御坂美琴

「あーもう、なんか調子狂うなあ……………」

私はトイレで手を洗いながら、一人呟いた。

はあ。我ながら見境ないわ……………。

「でも、自分じゃどうしようもないし」

がしがしと頭を掻きながら、外に出る。そして、みんなの元へ戻る道すがら、

「！ ゲコ太!？」

眼鏡をかけた男の人が持っていたぬいぐるみが、私が好きなキャラクターに見えた。

けど結局違うわね、あれ。てか、別物だわ。それにしても……、

「なんである人、ぬいぐるみ持ってあんなところにいるんだろ？」

* * *

SIDE 鍊夜

「あれ？ さっきの女の子は？」

「トイレ。お前と行き違いになったんだろ」

戻ってきた美琴に、そう言ってやる。
すると、飾利が突然、

「た、大変です、みなさん！ この店で、重力子の加速が観測されたそうです！」

「は？ なんだそれ？」

重力子？ 最近聞いたような気もするな。

「この店に爆弾が仕掛けられてるってことですよー！」

爆弾、重力子。

なるほど、昨日の事件と同じってわけか！

「わかった。飾利は店員に伝えに行け！ 避難誘導は俺たちがやる
！」

「お願いします！」

飾利に指示を飛ばし、俺たちは入り口前へ。

やがて流れてきたアナウンスを聞いて走ってくる客を、外へと誘導する。

五分後。

「よし、これで全員だな」

「ええ。私たちも早く脱出して」

と、その時、

「ビリビリ！ 鍊夜！ あの子見なかったか！？」

「ああ！？ まだ戻ってねえのか！」

「僕たちもずっと待ってるんだけど、全然来ないんだ！」

冗談だろ、オイ！？

慌てて俺たちは、あの子を探すために、走り出そうとする。
が、それよりも早く

「逃げてください！ あれが爆弾ですっ！」

* * *

S I D E 初春飾利

一分前。

「これで全員……」

私は、きちんと全員避難したかを確認していました。
すると、

『初春！ 初春、聞きなさい！ 今すぐそこから離れなさい！』

「え？ 何言ってるんですか、白井さん？」

携帯電話からは、同僚の焦った声が。
私がそれに聞き返すと、

『いいですか、初春！ 過去八件の事件で、一つを除いた全て、風紀委員が負傷していますの！ つまり犯人の狙いは 観測地点周辺にいる風紀委員！』

「……………え？」

『つまり今回のターゲットは、あなたですよ初春っ！』

白井さんが叫ぶと同時、

「おねーちゃん！ メガネかけたおにーちゃんがおねーちゃんにわたしてって！」

『ぬいぐるみ』を抱えた、さっきの女の子が走り寄ってきた。

私は、白井さんの言葉を思い出す。

『ぬいぐるみの中にスプーンを入れて、爆発させたりしてるんです』

その瞬間

ぬいぐるみが内に内へと、圧縮されていった。

私は女の子の手からぬいぐるみを奪い、投げ飛ばす。
でも、この距離じゃ意味がない！

「く……っ！」

女の子を抱きこみ、私の身体を盾にする。
そして

「逃げてください！ あれが爆弾ですっ！」

* * *

SIDE 御坂美琴

初春さんの叫び声が聞こえた瞬間、私の体は動いていた。

「レールガンで爆弾ごと吹き飛ばす！」

ポケットに手を入れ、中からゲーセンのコインを取り出す。

いや。正確には、『取り出すはずだった』。

ポロツ

「しま……っ!?!」

焦っていたせいで、コインを取り落とした。

その間にも、みるみる縮まる爆弾。ないくるみ

あと一秒。

あと一秒あれば、拾って撃つことができたのに。

「間に合わ

瞬間。

ドゴオオンッ!

店内に爆音が響いた。

* * *

S I D E 上条当麻

風紀委員の女の子の叫び声が聞こえた瞬間、俺の体は動いていた。

イマジンプレイカー
「幻想殺しで消し飛ばす！」

右手に力を込め、一気に走り出す。
だが

「クッソ……！」

遠い。

距離がありすぎて、彼女達まで、届かない。

あと一秒。

あと一秒あれば、彼女達の前に出れたのに。

「お、おおおおおおおおおおお！」

瞬間。

ドゴオオンッ！

店内に爆音が響いた。

* * *

SIDE 御厨空音

頭に花飾りを乗つけた女の子の叫び声が聞こえた瞬間、僕の体は動いていた。

「間に合ってくれよ！」

僕の能力を使い、一気に加速。

なんとか彼女達の元にはたどり着けた。
けど

「や、ば……！」

彼女達を抱えたところで、リミット。
そこから離脱できるだけの時間がない。

あと一秒。

あと一秒あれば、当麻の近くまで運べたのに。

「畜生……！」

瞬間。

ドゴオオンッ！

店内に爆音が響いた。

* * *

SIDE 介旅初矢

「キヤ　　！」

「何だ！？　爆発したぞ！」

「例の連続爆破テロだって！」

僕はとある裏路地から、『成果』を見届けていた。
ふ、ふふふ！　やった！　やったぞ！

「スバラシイ！　スバラシイぞ僕の力！」

あのレベルの爆発なら、おそらく中の風紀委員も逝っただろう。
ようやくあれほどの爆発を起こせるようになってきた。

あと少し。あと少しだ。もうちよつと数をこなせば……そうすれば……！

「無能な風紀委員もアイツラも、みんなまとめて吹き飛ばしてやる
」！

そう、これは復讐なんだ！　もうすぐ、達成でき

「「　やってみるよ（みなさいよ）」「

「な……っ！？」

僕が振り返ると、そこには、ボロボロになっている黒の短髪の男と、常盤台中学の制服を着た女が立っていた。

「テメエ、俺達がなんの用でここに来たかわかってるよな？」

「ま、当然よね、爆弾魔さん？」

や、ばい。やばいやばいやばい！

「な、何の事だい？ 僕は偶々ここに」

ゴガンッ！

僕の言葉を遮って、男が壁に拳を打ち付けた。

「ひっ！？」

「るっせんだよ……。もう喋んな。じゃねえと、テメエをブチ殺しちまいそつだ……」

「鍊夜。少し落ち着きなさい」

こ、こうなったら……。

僕は後ろ手に隠したバッグの中から、スプーンを取り出す。そして、それを爆弾に変えようとした瞬間、

キュボッ！

僕の手の中にあったスプーンが黄色い閃光に吹き飛ばされた。

「な、あ……常盤台の『超電磁砲』……」

それに僕が驚いていると、

パンツ！ ゴガシャンツ！

その音に振り向くと、僕のバッグが、コンクリートの突起に弾き飛ばされていた。

「ふ、ふふふ……！ はっははははははは！ 今度は常盤台の εργασ 様様に、高位能力者か！ くくくく……。結局僕はいつもこうやって虐げられる！ お前らみたいな力のある連中が」

「うるせえ！」

「！？」

「……テメエ、自分でやってること、よく思い出してみる。お前がやってるのは、ただ罪もねえ人間を苦しめることだけだろうが！」

「……な、に？」

なんで僕が怒られてる？ だって、そんな、おかしいだろ。僕はただ単に復讐をしてるだけだぞ？ それなのになんで僕が

「 ねえ、知ってる？」

「え？」

突然、女が低い声で告げてきた。

「あんたが言う『常盤台のエース』ってさあ、元々は低能力者（レベル1）だったのよ。だけど、頑張って頑張って頑張って……超能力者（レベル5）と呼ばれる力を掴んだ」

「……………」

「だけど、勘違いすんな。力があるから偉いとか、そんなことない。力があるから誰かを傷つけていいなんて、絶対ない。　　なにより！　そんなことも解らないで誰かに『やつあたり』するなんて、あつていいわけじゃないでしょう！」

「……………あ、」

「気に入らないことがあるんなら、それに向かってブチ当たっていきなさいよ！　自分の『弱さ』を借り物の『強さ』で誤魔化すな！」

「……………」

僕は、なにも言い返せなかった。

自分がやっつてることが、ただのやつあたりだなんて、自分が一番わかってる。

でも、それでも、止まれなかった。力に溺れてしまった。

「…………お前、さ。確かにお前のやったことは許せねえけど、すごい力持ってるんじゃないか。なら、胸張ってしゃんとしてるよ」

最後に男がそう言って。

僕は完全に口を閉じた。

* * *

S I D E 白井黒子

「……錬夜、ですわね」

わたくしは、セブンスミスト内で起こった爆発の中心部に立ち、
そう呟いた。

その現場は、非常に奇妙な状態になっていましたの。

初春達がいた場所のみが、爆発から逃れたように、綺麗なままで
した。これは多分

「お姉様には無理。となると、後は錬夜ぐらいですが……」

どうやったら、こうなりますの？

* * *

S I D E 錬夜

十分前。

「逃げてください！ あれが爆弾ですっ！」

その声が聞こえた瞬間、俺の体は動いていた。

爆弾魔を警備員アンチスキルに引き渡した後、ちよつとした用事を済ませた俺は、玄関で当麻たちと騒いでる美琴の元へ、歩み寄った。

「よっ、お前ら。無事でなによりだな」

「」「錬夜!」「」

うお!? なんだよ、ビックリするな……。

「いきなり大声だすなよ」

「そんなことより、お前怪我はいいのか!??」

「お医者さんに見てもらった方がよくない!??」

「向こうに救護班がいたわよ!」

……ははあ、これはつまり心配してくれてると、そういうわけか。

「べつつに大したことねーよ。心配せんでいいぞ?」

「そ、そうか……。じゃあ、俺と空音は帰るけど、しっかり安静にしてるよ?」

「それじゃあ、お大事にね?」

「んじゃな〜」

去り行く当麻と空音を見送り、息を吐く。
と、

「ね、ねえ、錬夜」

「あん？ どした？」

「その……ありがとう。助けてくれて」

なんだ、そんなことか。

「いっていいって。俺も好きで助けたわけだし」

「なっ!？ す、好きって言われても、わ、私はあの馬鹿が
っ
て、何言わせんのよ!」

「は？」

美琴はいきなり顔を赤くして、慌てだした。

何言っただ、こいつ？

……まあ、いっか。それよりも

「ほらよ」

ポンッ

「へ？ な、なにこれ？」

「開けてみるよ」

美琴は、俺が渡した包みを開くと、

「あ……これって……」

中から出てきたのは、寝巻きコーナーで美琴が物欲しそうに見ていた、あのパステルカラーのパジャマだった。

実は、ついさっき店員に無理言って、売ってもらった。あんなことがあつた後だが、事件解決に協力してもらったからと、快く対応してくれた。まあ、そのときにちつとからかわれたが。

「無理すんな。欲しいなら、欲しいってはっきり言えよ」

「べ、別に欲しくなんか」

「じゃあ、いらねえのか？」

「……………(いる)」

小声だが、はっきりとそう言った。

俺は「よし」と一つ頷き、

「んじゃあ、もらっとけ。俺からのプレゼントだ」

「あり、がとう……」

ほー、こりゃいいもん見た。素直に礼言つ美琴なんて、レアだな。まあ、俺はそんなことを思いながら

「一件落着、だな」

笑って呟いた。

第八話 その一秒で掴むモノ（後書き）

今回、上条さんではなく、錬夜がみんなを救いました。一応、主人公です。

それと、御厨空音についての説明を。わかる方もいるかもしれませんが、彼は僕のもう一つの作品、『とある異世界の武具操者』の主人公です。

今回は、いよいよ錬夜が……？

第九話 その支部長（おとこ）の名は（前書き）

今回は、オリキャラを一人出してみました。

第九話 その支部長（おとこ）の名は

七月十九日 早朝。

「……で？ どういう状況だ、これ？」

風紀委員第一七七支部。

黒子や飾利、ついでに言えば、固法先輩も所属している部署だ。そして、朝、目が覚めた俺は

なぜか、その一七七支部にいた。

「ごめんなさいね？ 白井さんに頼んで、あなたをここに運んできたの」

「ねえ、その台詞はツッコミ待ち？」

手を合わせて片目をつぶる固法先輩に、そう尋ねる。

この人は本当に風紀委員なのだろうか？ 台詞を聞く限り、俺の人権がまったく尊重されていない気がする。

と、その隣にいた黒子が、

「まあまあ、錬夜。落ち着いてくださいですの」

「俺を拉致った張本人の言葉とは思えねえな」

てか、錬夜？ 前会ったときは錬夜『さん』だった気がするが…。

まあ、いつか。

「とりあえず、こんな朝っぱらから俺を呼び出した（つか拉致った）理由を聞かせてくれねえか？ 最近忙しい毎日が続いてきたから、休みてえんだが。つーか、学校あるし」

欠伸を堪えながら、そう言う。

すると、俺、固法先輩、黒子しかいなかった室内に、新たな声が響いた。

「ふむ。その件については、己が説明しよう」

「あ？ 一体誰……だ……」

ドアを開いて入ってきた『そいつ』を見た俺は、しだいに自分の声が尻すぼみになっていくのを感じた。

身長はおそらく二メートルオーバー。はちきれんばかりの鎧のような筋肉に、熊のようにいかつい顔。おまけに、左目には縦に一筋、傷跡が走っていた。

……どこの達人だ。

「な、な、な……」

「あ、紹介するわね、錬夜君。彼は、うちの支部長の、おにかりげんろう鬼狩元狼さん。こんなんだけど、一応高三よ？」

「わっはっは！ こんなのはないだろ、固法？」

な、なるほど。言われてみれば、確かに制服を着ている。もっとも、寿命は短そうだが。……あ。そんなこと言ってる間にも、ポタンが一個弾け飛んだ。

「改めて、自己紹介しよう。己は、鬼狩元狼。一応、支部長なんて呼ばれとる」

「ウ、ウツス！ 桜咲錬夜っス！」

「んん〜？ 元気がいいじゃあないか。そういう奴は好みだな！」

「アンタが怖えんだよ。」

「と、ところで鬼狩さん。本日は、どのようなご用件で俺を？」

「ほう、いきなり核心だな。まあ、いい。実はな お前を本日付で、ウチの風紀委員に任命することになった」

「……………は？」

俺は、呆けたような声を出す。

これには、ちゃんと理由がある。風紀委員というのは通常、九枚の契約書にサインし、十三種類の適正試験と、四ヶ月の研修をクリアしなければならぬらしい。

……………こう言つと、よく飾利はなれたな。

とにかく、

「いや、俺、まだ一枚の契約書すらサインしてないんすけど？」

「それは解っている。……………実は、な」

そこで、鬼狩さんは一度目を細め、

「風紀委員の申請というのは、一応、上層部じやうぶに伝える義務がある。そして、お前の申請も当然伝えた。そしたら何故か 統括理事会じやうかくりから、達しがあったのだ。『桜咲鍊夜を貴殿の部署に迎え入れるべし』、とな」

「統括理事会が？」

学園のトップである機関が俺を推薦？ どういうことだ？

「……………」

「まあ、そう深く考えるな！ 風紀委員は最近人手不足だし、お前はいくつかの事件を防いだ実績があるらしいじゃないか。おそらく、それでだろう」

「……………だと、いんすけどね」

心の内に釈然としない気持ちを抱えながらも、そう返す。
なんでだろうな。なんか、嫌な予感がする……………。

「……っと。じゃあ、今日俺が呼ばれたのは、それを伝えるために？ けど、それなら手紙とかそんなんでよかつたんじゃないすか？」

「いや。お前を呼び出した理由は他にある。それは」

* * *

SIDE 佐天涙子

「飾利のやつ、風邪こじらせたんか？」

「うーん、まあ、微熱だけどね」

学校に行く途中、偶然会った鍊夜と話しながら、あたしは通学路を歩いていた。

今朝初春から連絡を受けて様子を見に行ったら、熱が出ていた。だから今日初春はお休みってわけ。

「放課後にでも、一緒にお見舞いに行く？」

「悪い。放課後はちつと、用事があるんだわ。風紀委員になっちまったからな」

「え！？ もうなったの！？」

「……今朝、いろいろあつてな」

そう答える鍊夜の顔は、なぜか疲れていた。どうしたんだろ？と、

キーン コーン カーン コーン

始業ベルが鳴った。

「や、やっぱ！？ 急ぐよ、鍊夜！」

「勘弁してくれよ。疲れてんだよ俺あ」

「日曜日のサラリーマンか、アンタは！」

* * *

S I D E 錬夜

放課後。

つつても、終業式だけだから、まだ昼前だけだな。

「しっかし、なんだかな」

「？ 何が？」

「いんや。女子と下校なんて、『前』はなかったからな。俺も変わったな」と思ってみるわけですよ

「前って、『外』にいた時のこと？」

「……まあ、そうだな」

さすがに言えねーよな。『前』ってのが前世のことだ、なんて。そんな風に考えていると、

「あ、御坂さんに白井さん。昨日はどーも」

「よう、お前ら」

二人でカキ氷食ってる、常盤台の姉妹（百合的な意味で）コンビ

が現れた。

向こうも適当な挨拶を返し、俺達はとりあえず近くのベンチで話すことになった。

「初春さんの容態はどうなの？」

「微熱だから、多分大丈夫だと思いますよ」

涙子と美琴は、飾利のことで話していた。

となると、必然的に俺の相手は黒子になるわけで。

「それにしても、今朝は凄かったですわね」

「もういいだろ、その話は。つーか、オメエ支部長をパートナーにすればいいじゃねえか」

「……あんな暑苦しい方と四六時中いたら、熱中症になりますわ」

「何気に酷いな、お前」

と、そんな会話をしていると、

「あ、イチゴ味もおいしいですね」

「レモン味も結構いいわよ？」

ちよいと視線をやれば、涙子と美琴が食べ比べをしていた。

「な、なななな！？何をやってるんですのお二人ともっ！？」

羨ましい もとい悔しい もとい黒子とも関節キ もとい食

べ比べを！」

思考がダダ漏れだな、オイ。

「いや、アンタ私と同じの注文したじゃない」

「黒子のバカ！ 黒子のバカ！」

さらりという美琴の言葉に、黒子は自分の頭を地面にぶつけだした。

って、オイ！？

「やめろ、バカ！ 怪我してんじゃねえか！ それに、ビジュアル的に怖い！」

「だって黒子は……黒子は……！」

泣くなよ。

「あ、そういえば、佐天さん。黒子に、昨日言った『レベルアップ幻想御手』
ってやつ詳しく教えてあげてくれない？」

「え？ いいですけど……」

『幻想御手』？ そういや、昨日セブンスミストに行く途中、そんなこと言ってたな。

なんでも、それを使えば、簡単に能力のレベルを上げることができるのだとか。まあ、単なる都市伝説らしいが。

にしても、なんでこいつは、そんなの知りたがってんだ？

「昨日の事件で犯人の爆弾魔がいたじゃない？ 実はあいつ、書庫^{バンク}で調べたら、異能力（レベル2）判定だったのよ」

「はあ！？ そんなわけが ああ、なるほど。それでお前、そいつが幻想御手を使ったって考えてんだな？」

「うん」

こくりと頷く美琴。

幻想御手ねえ……。確かに、んなのがありやあすげえけど……。

「胡散臭いですわねえ……」

「だよなあ」

そんな魔法のアイテムみてえのがありや、誰も苦労はしねえだろ。

「でも……」

「あん？ どした？」

「……佐天さん！」

「はい！？」

なにかを考え始めたかと思えば、黒子はいきなり涙子を呼び、それから幻想御手についての情報を聞き出した。

それによれば、幻想御手を使ったと自称するやつらが、ネットの掲示板に書き込んでいるらしい。

それを聞いた黒子は、

「ふむ。一応当たってみるべきですわね……。錬夜！ 風紀委員として初仕事ですわよ！」

「はあ。ついに始まるのか……」

「え！？ アンタいつの間になったのよ！」

俺達はギャーギャーと騒ぎながら、その場を去っていった。

その後ろで、

「……………え？ 幻想御手ってマジモンなの？」

涙子がそう呟いているとは、知らずに。

* * *

十分後。

「で？ お前、なんで幻想御手の話信じた？」

場所は変わって一七七支部。俺達はそこで、作戦会議をしていた。

「実は、書庫のデータに違いがある生徒が起こした事件が、今数件起こってますの。ただの偶然と決め付けるには……いささか、タイミングが良すぎですの」

「へー、だから黒子は『こいつら』から情報を聞き出そうとしている

のね」

『こいつら』というのは、涙子の話にあつた自称幻想御手使用者の連中だ。ネットで調べてみたら、実名で書き込んでいたため、簡単に見つかった。

で、次はどうやって情報を聞き出すかなんだが……、

「あ、じゃあ私が行ってくるわ」

「はい!?!」

美琴が？ 情報を聞き出す？

おいおいおいおい!

「お前、分かってんのか？ こいつのはな、冷静さと忍耐力が必要なんだぞ」

「何よ、その言い方っ。まるで私には、それがないみたいじゃない!」

自覚ねえのかよ。

「とにかく! 私が行って、バツチリ情報を掴んでくるわ! タイタニック号にでも乗った気持ちで待ってなさい!」

「お前実はふざけてる!?! それ沈んだ船だろうが! ベタなボケするな!」

不安でいっぱいになった。

* * *

二時間後。

「おい、大丈夫なんだろうーな、この作戦？」

「お姉様を信じる他、ありませんわ」

掲示板から連中の溜まり場を突き止めた俺達は、さっそくその店へと向かった。

向かったのはいいんだが……、

『ああ？ 幻想御手について知りたいなあ？』

『うん！ できたら私にも教えてほしいなーなんて』

黒子が付けた盗聴器（ちなみにこれは支部にあつた備品ではなく、黒子の私物だ。あえて何故持っていたかは聞かないが）から、そんな会話が聞こえてくる。

「なあ、俺不安しか感じねえんだけど」

「同感ですわ……」

はあ。頼むから、上手くいつてくれよ。

俺はそんな願いを込めて、盗聴器から流れる声に耳を澄ませた

第九話 その支部長（おとこ）の名は（後書き）

最近、コメントがまったくないので悲しいです（涙）。

楽しみにしているので、待っています。

第十話 もう一つの世界（前書き）

久しぶりの更新です！ やっとテストから開放され、喜びに浸ります！

まあ、そんなことはどうでもいいとして。今回、錬夜が『あの二人に出会っちゃいます。七月十九日という日付を考えれば、良く分かるかもしれません。』

それから、もう一つ。皆様に頂いた感想に応える際、いくつかネタばらし(?)を書いたので、よかったら見てみてください。

いつのまにか総合評価が400pt超えてて驚きました。

第十話 もう一つの世界

とりあえず、心配ばっかしてても仕方ないからと、俺と黒子は飲み物を注文した。ちなみに、俺がコーラで黒子はアイスティー。

「にしても、美琴のやつ、キレたりしねえだろうな？ したら、一発でアウトだぞ」

「正直、それはわたくしも懸念していますわ。……まあ、もしもの時は実力行使も辞さない方向で」

「お前って、実は過激派だな」

多少の呆れを含めてそう言うと、注文していた物が届いた。それを手元に引き寄せつつ、再び盗聴器に耳を澄ませる。

『ねっ、いいでしょ？』

『こっちも情報を手に入れるのに、苦労したんだ。帰んな』

いつもとは若干トーンが違う美琴の声に続いて、ターゲットの男の声。

その後美琴はさらに頼み込むが、あるうことが「子供はもうねんねの時間だぜ」とあしらわれてしまった。

「ちっと、やべんじゃないかねえ？ アレはキレそうだな」

「あゝ胃が痛いですわ……」

頓挫の可能性が出てきたことで、俺達は焦る。

それを落ち着けるためにも、二人で飲み物を口に含んだところで、

『え〜〜〜〜？ 私、そんな子供じゃないよお？』

ブバツツ！

同時に飲み物を噴出した。虹がかかってキレイだなあってアホか！

「き、ききき聞いたか、黒子……？」

「はははいですの……それはもうバツチリと……」

何だ今の台詞は。俺達は、幻聴を聞いたのか……？

『ホントに〜？』

訂正。やっぱり現実でした。

「あいつ、意外と演技上手いんだな、黒子。……黒子？」

「はへえ〜……」

ダメだ、コイツ。あまりの事態に、トんでやがる。

はあ、仕方ない。こうなったら、俺一人で見張るか……。

『お、おい！？なんで泣くんだよ！？』

『私……実は無理言って学園都市に来させてもらったの。だけど、私、全然ダメで……』

『あ、あー』

『お母さんとお父さんの期待に応えたいのに、どうしようもできなくて。だから、もう私には幻想御手レベルアップしか頼れるものがないの！』

『い、いや、そんなこと言われても』

『ダメ……かな？（かわいく口元に拳をやって）』

……………。

なんていうか……、うん、女ってすげえな。あそこまで普段と違うと逆に引く。美琴の相手をしてるやつなんて、もうすっかり落ちてるし。

さてこれからどうなると思案していると、

『わーった。なら、金額しだいで教えてやるよ』

「おっ、釣ヒックれた」

まあ、多分美琴の演技じゃなくて、常盤台の制服を見てだらうけどな。なんだって、学園都市有数のお嬢様学校なわけだし。金って言うてるし。

とはいえ、これで上手くいくかと思っただが……、

『これこれ童子ども。よってたかって、女の子の財布を狙うんじゃありません』

「はっ。」

なにやら聞き覚えのある声が。

そつと現場を覗いてみると、そこにはなぜかツンツン高校生、上条当麻がいた。

「つて、え！？　なんであいつがいんだよ！？」

あゝまた面倒なことになった！　どうする？　黒子の言った通り
実力行使で情報を聞き出すか？

俺が出るべきか出ざるべきか悩んでいると、トイレから不良グループの仲間がぞろぞろと出てきて、当麻はそれを見た瞬間に逃げ出した。

「ええ！？　本当にアイツ、なんで来たんだよ！？　場を引つ掻き
回しただけじゃねえか！」

「錬夜！　私、あいつら追うから、会計任せたっ！」

「おい美琴！」

クソ！　どいつもこいつも勝手なことしやがって！

「あの～お客様？」

と、事態に付いていけていない店員が、そんなことを聞いてきた。
とりあえず、今はあいつら追いかねえと！

「あー大丈夫っス。それよりも、会計はコイツが全部払うんで、後
よろしく」

いまだ呆けている黒子に、ためらい無く会計を押し付けた俺は、

連中の後を追うように店を出る。

視線を左右に巡らすも、若干のタイムラグがあったせいで、あいつらは見当たらない。つか、美琴はどんだけ足が速えんだよ。

「しゃーねえ、カンで追いかける！」

とにもかくにも、走らなきゃ始まんねえ。

俺は慌てて、右の方へと進んだ。

「頼むから、面倒なことになってんなよ！」

ただ、俺は知らなかった。店を出た美琴たちが

『左』へ進んでいったことを。

* * *

「……………完璧に見失ったな」

十分後。

走れど走れどまったく連中が見えてこないため、俺はついに立ち止まった。やっぱ、無理あったわ。

しかも、ここがどこだか良くわかんねえし。

「うーん、第七学区だとは思っただけだなあ。けど、ここらへん来たことねえし」

ガリガリと頭をかきながら、溜息を吐く。

と、

ガシャンッ！

「なんだ？」

何か倒れるような音が、近くの路地裏から聞こえてきた。

……路地裏かあ。いい思い出がねえんだよなあ。前入ったときは炎で焼き殺されかけたし。

それでもちつと気になって、

「どうせやることねえしな。まあ、どうせネコでしたら、みたいなオチが待ってそうだけど、行ってみつか？」

呟いて、路地裏へと足を踏み入れる。

この瞬間から。

俺は、『もう一つの世界』に足を踏み入れることになる。

* * *

「えーと……、シスターさん、でいいのか？」

路地裏に入ってわずか一分。俺は、とあるシスターに出会った。

銀の長髪に碧眼で、年の頃はだいたい十四、五。金糸が織り込まれた修道服に身を包んだその女の子は、俺を見て驚いたように目を見開き、

「早く逃げてっ！」

「はぁ………？」

逃げろっ たって一体何から

「さて。僕としては極力殺したくないんだけど、やっぱりそういうわけにはいかないかな？」

「………はぁ？」

突如、シスターの背後から響いた声に目を向けると、今度は神父がいた。

ただし、二メートルほどの長身、赤く染めた金髪、真っ黒い修道服など、およそ神父らしくないやつだった。

……「逃げて」ってのは、もしかしてこいつからって意味か？

「で、そのシスターさん。あの勘違い神父野郎はナニモンだ？」

「私としては君の方が何者って感じかも……じゃなくて！ いいから、早くここから逃げて！ あれは魔術師なんだよ！」

「魔術師い？」

ははぁ、なるほど。こいつが魔術師、ね。原作のことすっかり忘れてたわ。

じゃあ、こいつはひょっとして……、

「なあ、お前名前なんてーの？」

「ほえ……？ わ、私は、Index - Librorum - Prohibitorum……インデックスっていうんだよ？」

「……ふーん」

言われてみれば、表紙に載ってた女の子に似ている気がするな。じゃ、これって原作介入ってやつになるのか？ てことは、俺が手を出さない方が…… ああ、でももう関わっちゃったから、逆に逃げたらヤバイのか？

次々に浮かんでは消える考えに、頭を悩ませる。

と、魔術師神父が、

「悪いけど、どの道君を逃がすつもりはないよ。ちょっと痛い目見てもらって、記憶を消さしてもらおう」

「やめてっ！ この人は関係ない！」

魔術師の言葉に、激昂するインデックス。

で、当の俺とさえも

「ははっ……」

「うん？ 何が可笑しいんだい、少年？」

「いやあ……単純シンプルでいいなと思ってよ。そう言われたら、もうなんも考えなくていい。お前をブツ飛ばしやあ、ケリがつく」

「……なるほど。それは確かに面白いね」

「えっ、えっ……?」

困惑するインデックスを他所に、二人で笑う。
そして、きっかり五秒後

「『巨人に苦痛の贈り物を』!」

「らああああっ!」

魔術師は炎剣を、俺は突起を生み出し、互いにぶつけさせる。
炎が酸素を焼き尽くす音と、俺が造った突起が壊れる音が響く。

「……………」

初撃は互角……………か。

「…………面白いね、君。名前を聞いてもいいかい?」

「桜咲錬夜。それから、テメエの国じゃどうか知らんが、人に名前を聞くときゃ、自分から名乗るもんだぜ?」

「ふむ。それじゃあ、ここはステイル＝マグヌス…………と名乗らせてもらおうか。いや、『魔法名』の方がいいかな?」

「どつという意味だよ、そりゃ?」

「魔法名ってのは、いわゆる殺し名なんだ。つまり、『君を殺すための名前』って意味だよ」

……ほほう。随分舐めてくれるじゃねえか。

「上等だよ。だったら、さっさと名乗れや」

「『我が名が最強である理由をここに証明する』Fortiss93
1)』 覚えておくといい。君を殺す男の名だよ」

互いに挑発し合い、じりじりと殺気を飛ばす。

俺もあいつもここまで来たら、やる気満々。というわけで

戦闘開始だ。

* * *

SIDE ステイル「マグヌス

面倒なことになったな。

そんなことを思いながら、僕は目の前の異能者を見据えた。

まったく、こんなことになるなら、人払いのルーンでも刻んでおくべきだったよ。

「とはいえ、言っても始まらない……か」

改めて戦闘態勢を整え、前方を見る。少年は同じく構え、インデックスはただおろおろしていた。

……急ぐとしようか。僕達には時間がないんだから。

「悪いけど、手加減はしてやれない。さっきのを見た以上、君が並

みの人間じゃないことくらい、わかるからね」

「ほっほお、んじゃあさっさと本気でかかってこいよ」

「……後悔するなよ」

僕は懐から何十枚ものカードを取り出し、それをそこら中に投げる。

そして

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ。それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。その名は炎、その役は剣。顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ」

『イノケンティウス 魔女狩りの王』！』

朗々と響いた詠唱に続いて、僕のコートから炎の巨人が這い出した。

僕の切り札たる、イノケンティウス。それを見て、桜咲錬夜

は……、

「へえ……。なかなかスゲエもん出してきたな、オイ」

「……それだけかい？ もっと怖がってもいいんだよ？」

「ああ？ トシケモべつつに珍しくもねーよ。この街にいりゃあ、そういう超常現象な光景、よく見ることになるぜ？」

「……あっそう」

……ちよつとガツカリなんて思つてない。本当だよ？

「そんじゃあ、鬨るとすつか よつと！」

パンツ バシィ！

彼が両手を合わせ、それを壁に押し付けると、突然イノケンティウスの隣の壁が、『伸びた』。

それはそのままイノケンティウスへと迫り

ジュウワツと、溶けていった。

「……あれ？」

「何不思議そうな顔をしてるんだい？ 言い忘れてたけど、この炎は三千度だから。コンクリートごときは、軽く溶かせるよ」

「……ふーん」

少し悩むように眉を寄せる少年。

クツ。いかに彼が不思議な力を使えようが、イノケンティウスの前では無力

「じゃあ、逃げるか」

「……は？」

呆けたように僕は呟き、どういう意味だと返そうとするが、それよりも速く彼は掌を合わせ

「三十六計逃げるにしかず　　つてな？」

ピカアアッ！

「何っ！？」

突如、辺りに強烈な光が満ち、それに目を焼かれる。

そしてなんとか回復し目を開けると、そこにはもう誰もいなかった。

「…………ふう。なんだか、妙に疲れる奴だったな」

イノケンティウスを元に戻し、嘆息する。

すると、

「　　悪いな。俺、逃げるの嫌いなんだよ」

「　　な…………っ！？」

背後から聞こえた声に振り返ると、そこには桜咲鍊夜が拳を構えて立っていた。

いつの間に…………とか、どうやって…………とか思ったが、それらが口を突くより先に

「アーメン」

「ぐ、ふ…………！」

思いつきり腹を殴られ、僕は意識を手放した。

* * *

S I D E 錬夜

「おっし、終わりっ」

ステイルを気絶させた後、俺は息を吐きながらそう言った。

実際のところ。

俺がやったことは大したことじゃない。まずは光を集めて即席の閃光を生み出し、続いて横の壁をイノケンティウスを越えてステイルまで届くように足場に変えた。ああ、もちろん気付かれないようにめっちゃくちや細くした。

そして今度はステイルが目をくらませている間に、インデックスを抱えて足場を使いステイルの背後へ移動。最期に、あいつをブン殴ればハイ終了。

と、まあこういうわけだ。

「あー疲れた。やっぱり好奇心で突っ込むのはよくねえな。平穩が一番いい。……にしても、つくづく路地裏と炎はセットで来るな……」

なんて、ちょっとばかり鬱うつになっていると、

「えっと……、ありがとう！」

「おーインデックス。ケガねえか？」

「うんっ。君が助けてくれたから平気かも！」

「なんで、そこで『かも』なんだ？ 確信持って言えよ。」

「なら、よかったよ。まあ、あの神父野朗は俺が警備員アンチスキルに引き渡して
て」

と、その時

ババツ！

「な……？」

振り返ると、さつきまで転がってたステイルが消えていた。ただ……一瞬、長い黒髪をなびかせた女を見たような……。

「あ……悪い。逃げられちゃった」

「うん。助けてもらっただけで、私は十分。……じゃあ、私も
う行くね？」

「行くねってお前……あいつらにまた追われるかもしれないぞ
？」

「大丈夫だよ。あてがあるから。それじゃあねっ！」

「あっ、おい！」

引き止める間もなく、インデックスは走り去ってしまった。

『あて』つつつたけど……んなもんホントにあんのか？

ちょっと心配になり、ガリガリと頭を掻いていると、

P r r r r !

ポケットに入れていた携帯が鳴った。ちなみにこれは、以前涙子たちと買いに行った。

まあ、それはともかく相手は……、

「黒子？」

どうしたんだ？ 『幻想御手』の情報でも手に入ったんかな？
なんて思いながら、通話ボタンをプッシュ。すると、

『……………錬夜ですの？』

「おー黒子。どした？ 美琴達見つかったのか？」

『……………それよりも、言うことがあるはずですよね』

「ああ？」

何言ってるんだ、コイツ？

「何の話をしてんだ、お前は？」

『錬夜、あなた 』

そこで黒子はなんだか暗い息を吐き

『 わたくし、あなた、お姉様、ついでに不良全員分の会計押し

付けましたわね？』

「……………あ」

すっかり忘れていた俺だった。

第十話 もう一つの世界（後書き）

ご意見・ご感想・レビュー、お待ちしております。同じ方でも、全然オールオツケーです！

それでは、また次回。

番外一 ケイタイ×巫女さん×赤い糸（前書き）

今回は本編から外れて、番外編です。

十話目で出てきた携帯電話を買った日のことを書いてみました。

これからも五話か十話ごとに番外を書いていくと思います。

番外一 ケイタイ×巫女さん×赤い糸

七月十五日。

「へえ、学園都市製つつつても、外見はあんましみため変わんねえな」

「そうでもないですよ。白井さん 同僚の携帯とか、『外』とは全然違いますし」

「錬夜が買ったのが、たまたま近かったってことっ」

「ほおーっ」

俺が学園都市に来て、六日がたった。

つい数日前には信じられないことだらけだったのに、今じゃ大分慣れつつある。大園先生に言われた通りだな。……まあ、あの『修行』も一役買ってるが。

なにはともあれ、心に余裕が出来た俺は、その日、ふと呟いた。

『……携帯、欲しいな』

この台詞を耳ざとく涙子と飾利が聞きつけ、放課後に三人でショッピングを回ることになった。

で。丁度手ごろなものが見つかり、こうして帰り道を歩いているわけだ。

「さつてと。まずはメルアドの設定だな。何にすっかな?」

「そんなのパパッと決めちゃいなよ」

「パパツとつて佐天さん……。相変わらず大雑把ですね」

「ぶー。いいじゃんか、別に」。あ。そういえばさ、メールと
言えば、『赤い糸メール』ってあったよね？」

『赤い糸メール』？ なんじゃ、そりゃ？

「ああ、私知ってます。確か、とあるサイトでいくつかの質問に答
えると、相性バツチリの相手が見つかる……。でしたっけ？」

「なんだ、ただの出会い系サイトじゃねーか」

興味をなくしたように、呟く。そんなのは、どーせ適当に決めら
れてんだ。相性なんてでっち上げだろ。

とまあ、俺はそういうつもりで言ったんだが、二人は違う意味で
受け取ったらしく、

「あつれー、錬夜？ 興味ない振りとはやるねー」

「さりげない感じが、上手いですよね」

こ、こいつ等……！

後にして思えば、ただからかったただけなんだろう。だが、
当時の俺は真面目に受け取ってしまい、仕返しを敢行した。

「バー口。お前らと一緒にいんのに、他の女なんて興味あるかよ」

ふっ。どうよ、この台詞。ちったー、驚いただろ？ 俺が一番
恥ずかしいがな。

それから続けて、なーんて冗談だよ、と言おうと思ったんだが…

「……………」

「お、おい。涙子？ 飾利？」

二人を見ると、顔が真っ赤になっていた。
……ア、ヤツチャツタ。

「そ、その……ねえ、初春？」

「は、はい。嬉しい、です……………」

おまけに、顔は赤らめたまんまで、そんなことを言ってくる。
畜生！ 今さら「冗談でした」なんて言えるかつ！

「あ、あー……あ！ そうだ俺、ちっと用事あったんだわ！ それ
じゃあな！」

早口にまくし立て、逃走を図る。
あとにはまあ、ぽーっとした二人が残された。

* * *

「ふう。やつべーなあ、明日どんな顔して会えばいいんだよ？」

とある街路樹を歩きながら、俺は溜息をつく。

ちょっとやりすぎたかな。今思い出しても、顔から火が出そうだ。

……それにしても。

「『赤い糸メール』、か。……やってみるか？」

騙しだとは、思う。だけど、相性がいい（とされる）女の子と会えるかもしれない。そう思うと、思春期まっさかりの俺としては気になるわけで。

「……………」

俺は、無言で携帯電話に手を伸ばし

* * *

五分後。

「……………やってしまった」

携帯のディスプレイには、『登録完了 後は、あなたと赤い糸で結ばれる人を待つだけ！』なんて文字が。いやいや、これは仕方がない。だって俺、男の子ですから。ちょっとぐらいこづいづいものにも興味が

ピリリリッ

「うおづうー!?!」

き、来たのか！？ 相性抜群の彼女とやらは！
震える手でボタンをいじり、二、三度ブツシュ。そして、表示されたメールは、

『第七学区のくじら公園。午後三時。』

ひめがみあいさ
『姫神秋沙』

「……………あ？ これだけ？」

いやに簡潔だな。もつといろいろ書いてくるかと思ったんだが…。

それにしても、挨拶とか会話とかすっ飛ばして、いきなり会う約束とは。随分と積極的なやつだな。

……………ふむ。とりあえず

「くじら公園つつつたら、こっから結構近いな。ちっと行ってみっか？」

* * *

「……………」

「……………」

第七学区、くじら公園。

俺が三時ジャストにそこにたどり着くと、一人の、長い黒髪の女の子が立っていた。

何故か、巫女服を着て。

「……………いやいやいやいや。いつから学園都市は秋葉原になったんだ？」

とはいえ、話しかけないことには始まらない。もしかしたら、彼女は全然関係なくて、俺の待ち合わせ相手が遅れてるだけかもしれないし。つか、そうであってくれ。

「……………えーっと、お名前は？」

「姫神秋沙」

……………ああ、まあ分かった。現実はそんなに甘くないって。

「……………なんで、巫女服？」

「……………？」

はい、キタコレ。自分の服装に、欠片も違和感持ってねえよ。ナチュラルにコスプレ続行だ。

……………ま、いつか。巫女服着ても、別に関係ねえし。

「あ……………、ところさ。これからどうするんだ？」

「どうするとは。どういう意味？」

「は？ だって呼び出したのお前じゃん。なんか考えてたんだろ？」

「……………なるほど」

ポンツと姫神は手を打つ。
呼び出したくせに、どうするつもりか忘れてたのか？

「それは。盲点だった」

「いや、考えなしかよ!？」

「む。それは失礼。あなたは私に謝罪すべき」

「ええ!？ まさかの俺が悪い流れ!？」

な、なんだこいつ。マイペース&天然すぎて、ついていけねえ。
どうしたもんかと、頭を掻く。とりあえず、予定がねえってんなら……、

「あー、んじゃあいつそ解散すつか？ また会うにしても、今度は計画立ててからの方がいいだろ？」

「……それは。私にはちよつと無理そう」

無理そう？ なんでだ？

「私には。今日しかないから」

「今日しかないってお前……、親が厳しいのか？」

「そうではない。けど無理」

少しだけ ほんの少しだけ顔をかげらせて、姫神はそう言った。
もしかしたら、なんか事情があんのかな？

「ああ、んじゃあさ。どっか遊び行くか？」

「どこかとは。どこ？」

「どこでもいいだろ、んなもん。俺達が楽しめるなら、どことかそんなん関係ねえよ」

「……………ん」

数秒おいて、姫神はコクリと頷く。無表情でそんなことするものだから、どこか小動物めいた印象を受けるな。

それはともかく、予定は決まった。そんじゃあ、さっそく

「……つと。そついや、俺まだ名前言ってなかったな。俺は、桜咲
錬夜。よろしくな！」

「よろしく」

改めて自己紹介を済ませ、俺達は連れ立って歩き出した。

* * *

……………こいつ、予想以上の天然だ。

「？ 私を見る眼が。ずいぶんと生暖かいのだけど。微妙に不愉快」

「いやあ、なんでもねえよ。ただ、ちょっとさっきまでの出来事を

思い出してみような」

心身ともに疲れた俺は、のろのろと歩きながら、姫神に返す。

結果的に言えば。まあ、何か厄介ごとに巻き込まれることもなく、俺達は平穏と過ごせた。

ただし、それは姫神視点（といっても、楽しんでいたかどうかはよくわからんが）の話。俺としては、なかなかエキサイティング（いろんな意味で）な時間だった。

ゲームセンター。

『この太鼓は。一体何？』

『あー、それな。画面に出てくる音符に合わせて、太鼓を叩くゲームだよ』

『……こんな感じ？』

『おっ。なかなか上手いじゃ　ぐえっ！』

『……バチがすつぽ抜けた』

『ぐう……！　まさか眼に来るとは……！』

洋服店。

『実は私。この服以外着たことがないのだけれど』

『んじゃあ、なんか着てみるよ。偶には違う服ってのも悪くねえだろ？』

『……分かった。 んしょ』

『 って、バカ野朗！？ 何でここで着替えようとしてんだ！？ 』

『 所謂いえば。ここには君以外にも。人がいるのを忘れてた 』

『 俺がいる時点でおかしいと思おうな？ てか、野朗共は見えてんじやねえ！ 』

街路。

『 はあ。 姫神、お前ちよつと無用心すぎだぞ 』

『 そんなこと言われても。私はおかしなことをしているつもりはない。むしろ。あなたの方が変 』

『 うーわ、何コイツ。言うにことかいて、俺の方が変とか吐かしやがった…… って、姫神？ 一体どこいったん 』

『 ブツブツブツブツブツブツブツブツ（何か祈りのなもの） 』

『 ふむふむ 』

『 ってオイ！ 何で宗教勧誘なんかにつっかかってんだよ！？ 巫女さんじゃねえのか、お前！？ 』

『 気付いたら。捕まって話を聞かされていた 』

『俺、さっき無用心すぎるって言ったばっかだよなあ！』

『それと。私は巫女さんじゃなくて魔法使い』

『んなの知るかああああああああああああああああ！』

桜咲宅前。

『……無駄に疲れた。俺ん家この近くだから、ちょっと休憩しねえか？』

『聞いたことがある。それは。いわゆるナンパというやつ？』

『いや、ナンパってお前、初めに俺を呼びだしたのお前じゃん。むしろ、俺がナンパ（？）されてるだろ』

『……優しくして（ポツ）』

『何で頬を赤らめるんだよ！？ お前本当は俺をからかってるだけだろ！』

『そんなことはない。………ちょっとしか』

『全部聞こえてんだよおおおおおおおお！』

で。回りまわって、今は始まりの場所である、くじら公園。そこまでたどり着いたところで、俺達は二人並んで、公園のベンチに座っていた。

「あー、なんか疲れたわ。主に精神的に」

「……………」

「姫神？」

急に黙り込んだ姫神を不思議に思い、ふと隣を見てみる。

そこには、相変わらず巫女さんな姫神秋沙が座っていた。

……だけど、なんでだろうな？ 俺には、その姫神の横顔が沈んでいるように見えた。

だから、

「……どしたよ、姫神。もしかして、今日一日楽しくなかったのか？」

「……そんなことはない。むしろその逆。私は今日とても楽しかった」

「じゃあ、なんでそんな顔してんだよ？」

その言葉に、彼女は俺の方を向く。視線と視線が絡み合い、妙にドキドキしてしまった。

一瞬眼をそらそうかと考えたが、やめた。なんつーか、それは姫神に失礼だろ、という考えがはたらいたからだ。

やがて、彼女はその白い喉を震わせた。

「あなたはついさっき疲れたと言った。それはつまり、あなたが楽しんでいなかったということになる。もしそれが私のせいなら。私は素直に今日の楽しみをかみ締めることが出来ない」

「なるほど……」

律儀っつーか、なんっつーか。変なところで真面目なやつだな。とはいえ、こんまま誤解させてるのは、まずいよな？

「変に勘繰んなよ。疲れたっつっても、俺は十分楽しかったぜ？スポーツだって、疲れても楽しいだろ。あれと一緒だ」

「……そう」

納得してくれたのか、姫神は一つ頷いた。

「そんじゃあ、もう日も遅いし、そろそろ帰るか。よかったら、送ってやるぞ？」

「大丈夫。もうすぐ」

そこまで言ったところで、背後からジャリツと砂を噛む音が聞こえた。

それに俺が振り返れば、一人の男が。二メートル近くある長身を純白のスーツに包み、オールバックにした緑髪に中世的な顔立ちをしたその男は、公園という雰囲気にもったたく似合っていなかった。

ソイツが、口を開く。

「当然。約束した時刻に私が現れるのは、なんら不思議なことではない。その少年。『なぜそんな驚いたような顔をする？』」

「……あんたの雰囲気、知り合いにちょっと似てたんでな」

こいつを見ると、なぜかあのクソ神父を思い出す。

「ふむ。その知り合いとやらには興味があるが、必然、尋ねる暇などなし。我々は早く帰還せねばならない。そうだろう、『吸血殺し』？」

「……………」

姫神は無言でこくりと頷き、俺に背を向けて歩きだした。それに俺はなんと声をかけるべきか迷っていると、

「さよなら」

「……………あ、」

……………結局は何も言えずに、彼女を見送った。

やがて、彼女は見えなくなるほど遠くに去っていった。ついでに言えば、あのスーツの男もいつの間にか消えていた。

これが、姫神秋沙との別れだった。

* * *

七月十六日 朝。

朝のHRも終わり、次の授業の準備をしていた俺に、涙子と飾利が近づいてきた。

……………ただ、その雰囲気がちよつと怖い。

「えーと……………、なんでお二人はそんなに怖い笑顔で俺を見ているの

でせう?」

「……鍊夜、昨日さ。こう言ったよね。『なんだ、ただの出会い系サイトじゃねーか』って」

「……鍊夜君、こうも言いましたよね。『バー口。お前らと一緒にいんのに、他の女なんて興味あるかよ』って」

「……………」

なんだこれ。別に怒られてるわけじゃねえのに、すごく怖え。

「えっと」

「ねえ、初春。女の子を口説いたその三十分後に違う女の子とデートしてる男って、どう思う?」

「そうですねえ。かなり酷いと思います」

「それでもって、偶然そのデートを見かけた、口説かれた女の子の気持ちはどんなだと思う?」

「さあ。私にはわかりませんねえ。あ、そうだ! 鍊夜君に聞いてみたらどうですか?」

「なるほどねえ。それじゃあ」

「「鍊夜(君)はどう思う(思いますか)?」」

二人揃って、にばあっと笑う。

……うん。なんて言うかあれだな。

」
……………」

『不用意な発言は控えましょう』。これが俺の学んだ教訓だ。

* * *

出逢い、そして別れた一人の少女、
姫神秋沙。
俺は後に

再び彼女と会うことになる。

番外一 ケイタイ×巫女さん×赤い糸（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております！

第十一話 木山春生（前書き）

はい、今回は本編に戻ってきての、第十一話です！

いつものことながら、まったくシリアスになりません（汗）。あ、でも次回はシリアスになる……と……いいなあ……。

総合評価600pt突破！ みなさん、ありがとうございます！

第十一話 木山春生

七月二十日。

「ふあ、あ……ダメだ、疲れがとれねえ……」

魔術師との決闘から明けて、今はもう日が昇っている。

あの後俺は黒子に謝り倒し、帰宅したのが夜十一時。連日いろいろあつた俺は、すぐにダウンした。

そして、今朝。何故かお陀仏になっていた冷蔵庫に愕然とし、しかたないから朝食を買いにコンビニまで出かけていたというわけだ。

「やつぱ朝早くだと、ロクなもんがねえな。まあでも、食えるだけよしとするか。……俺ん家の食材なんて、全て終わってたからな……」

わざわざ学区外まで行ったかいがあつたなー、なんてちよつと喜びに浸っていると、

P r r r r

「あん？ また黒子から電話？」

なんだろうか。まさか、昨日の詫びに何かおごれとか？ いやでも、結局黒子に払わせた金は、後で俺が全額返したしなー。

ま、考えててもしょうがないと、通話ボタンを押してから携帯を耳に当て、

「よお、黒」

『遅いですわよ、錬夜！ なぜもっと早くでないんですの！』

「は？」

なんでいきなり怒鳴るんだよ？

『とにかく、今すぐ水穂機構病院まで来てくださいですの！』

「ああ？ 何でだよ？」

『この前の爆弾魔がいたでしょう？ あの方が今朝、アンチスキル警備員の取調べ中に、突然意識を失ったんですの！』

なるほど、それで水穂機構病院に搬送されたわけか……。

「わーった、すぐ行く！」

俺は通話を切り、病院へと走り始めた

* * *

SIDE 佐天涙子

「あー、見つからないなあ、レヘルアップ幻想御手」

あたしは昨日から夜通し、幻想御手を自室のパソコンで探していた。

けど、結果は空振り。やっぱり闇雲に探しても見つからないか。

「あ、そうだ。コイツに新曲でも入れよ」

手元にあつた携帯音楽プレイヤーを手にとり、ネットで音楽配信サイトを開く。それから、背もたれに体重をかけたところで

ドタンツッ!

「……。小学生か、あたしは……」

体重をかけすぎて、後ろに倒れてしまった。

恥ずかしくなって、すばやく立ち上がる。それからパソコンのディスプレイを見て、

「ん？ 何だ、こりゃ？ 隠しページ？」

転んだ拍子にマウスが押されて、ページが変わっていた。
なんでわざわざこんなの作ってんの……？
少し気になって、ページをドロップすると

「って、あれ？ これって……」

『TITLE: Level Upper
ARTIST: UNKNOWN』

あたしはついに、『それ』を見つけてしまったのだ。

* * *

「……………おい、その変態コンビ。お前らはこんなところまで来て、一体何やってんだ」

「誰が変態コンビよ(ですの)!!」

俺が院内に入ると、待合室で黒子が美琴にキスをしかけていた。

……………うん、やっぱりいろいろと間違ってるだろ。

「それで、状況は？ あいつはどうなってんだ？」

「爆破事件の犯人は、現在昏睡状態。体に異常が見られないのに気を失っているということで、医者も頭を悩ませていますの」

「他には？」

「今週に入ってから、このケースの患者が急増しています。この状態から回復した患者は、まだいないそうです」

なるほど、な。「原因がわからない」と言っている以上、ウイルスや伝染病なんて可能性はないだろ。となると

「『幻想御手』か？」

「それはまだ分かりません。けど、わたくし個人としては、可能性は高いと思ってますの」

確かに、現時点でいちばん怪しいのはそれだ。だけど、本当にあんなのかあ……？

どうにも信じられず、頭をかいてみると、

「君達が、担当の風紀委員かな？」

声に振り返ると、こちらに向かって歩いてくる女性を発見した。ボサボサにした栗色のロングヘアーに、研究者らしき白衣。ついでに言えば、眼の下にはクマが出来ている。

「なあ、黒子。誰だこの人？」

「木山春生先生。脳生理学を研究している、研究者さんですわ。この病院が招聘したようです」

「ついでに言えば、AIM拡散力場を専攻しているよ」

その後、美琴も交えて互いに自己紹介した。さらに木山先生の話によると、これから患者のデータを持ち帰り、研究してみるつもりらしい。

「あの、木山先生にお尋ねしたいのですが、幻想御手……というものをご存知ですか？」

「なんだい、それは？」

「わたくし達もよくわかっていないのですが、もし知っていたら教えてほしいんですの」

「ふむ……。すまない、覚えはないね」

ま、そんな簡単にゃ見つからねえか。

「まあ、とりあえずそれは置いてこうぜ。これから木山先生に調べてん？」

黒子を向いて話していると、隣からシュルシュルという音が。なんだと眼を向けると

上半身が下着姿の木山先生が立っていた。

「って、オイいいいいいいいい！　なんで脱いでんだ、あんた！？」

「いや、だって暑いだろ？　だから少し脱いだだけなのだが……」

「高っ！　あんたの羞恥心の境界線高っ！　どれだけ恥知らずなんだよー！」

「そうですね！　風紀委員として、風紀を乱す行為は許しませんっ！」

「いや、黒子が言っても、説得力ないわよ」

病院では静かに、という鉄則を破りまくりの俺達だった。

* * *

木山先生がどうしても暑いと聞かないので、ファミレスに場所を移して話を聞くことになった。子供かよ。各々飲み物を注文し、いよいよ本題へ。

「さて。先ほどの話の続きだが、同程度の露出度でも、なぜ水着はよくて下着はダメなのか」

「……いや、そっちでなく……」

大丈夫か、この人？

五分後。

「なるほどね。それで幻想御手の調査を、私に頼みたい……と」

俺達は幻想御手に関して持っている情報を先生に教え、協力を頼んだ。脳の研究をしているなら、力になってくれるかも、と考えたわけだ。

果たして、その考えは当たっていた。

「よろこんで協力しよう。むしろ、君達にも協力してもらいたい」

「……もちろん（ですわ）！……」

こうして、大脳生理学者・木山春生の協力を得ることができた。……というわけで、

「おい、お前ら。さっさと入って来い」

いつの間にか、ガラス越しに俺達を見ていた涙子と飾利に、俺は

手招きした。

* * *

S I D E 初春飾利

「へー、学者さんなんですかー」

佐天さんに呼び出された私は、出逢い頭に音楽プレーヤーを見せ付けられました。

それがどうしたのかと尋ねると、佐天さん曰く、中身が重要だとのこと。

というわけで、その話を聞くために私達はファミレスに向かい、そこで鍊夜君たちを見かけ、こうして今一緒にいるというわけです。

「それにしても、なぜそのような方とお茶を？ 白井さんの脳に何か問題が？」

「飾利、それ、もしかしなくても失礼だぞ。……本当はな、美琴がキレやすいから、カルシウムが足りているかどうか調べてもらおうと」

「アンタの方が失礼だっ！」

「幻想御手について尋ねてたんですわ」

白井さんによれば、幻想御手使用者は保護するつもりだということ

とです。

ただ、それを聞いた佐天さんがいきなりぼうつとし始めて、

「？ どうしたんですか、佐天さん？」

「えっ？ あ、な、なんでもないっ」

慌てたように、手を後ろに持っていき

その拍子に、アイスティーが木山先生のストッキングにかかってしまいました。

「ハッ！？ 美琴に黒子！ 先生を抑えろ！ そして化粧室に連れて行くんだ！」

「「^{ラジャー}了解！」」

木山先生が動く前に、鍊夜君の指示の元、御坂さんと白井さんが先生を掴んで、化粧室へと直行していきました。

「？ どうしたんでしょう？」

「さあ？ どつたの、鍊夜」

「この世にはな。知らなくて良い事があんだよ……」

いかにも「疲れています」といった顔で、鍊夜君は呟きました。

* * *

SIDE 鍊夜

「じゃあ、木山先生。あざっした」

「わたくしからも、お礼を申し上げますわ」

「いや、構わない。昔の生徒を思い出して、私も楽しかったよ」

夕方。

話し合いが終わった俺らは、木山先生と別れの挨拶に入った。しかし、生徒ってこたあ……、

「あれ、教師だったんすか？」

「……昔、ね」

ふーん、この人が教師ねえ。似合わないようで似合うような……。まあ、いいか。先生も帰ったことだし

「んじゃあ、俺らも行くか」

「あ、あーあたし用事あるから、先に帰るわ！ じゃね！」

「あ、おい涙子！」

……行っちゃった。

どうしたんだ、あいつ？ なんか慌ててたな……。

「あらっ。あらららっ。」

「ん？ どした黒子？」

「お姉様がいなくなつて……おねーさまー？」

「なんだよ、どいつもこいつも？ 今日ば雲隠れが流行つてんのか？
さて、一気に三人になつちまつたが、

「どうすつか？ 幻想御手の件は」

「そうですね……。初春！ あなたは支部に戻つて情報収集をお願いしますの」

「白井さんと練夜君はどうするんですか？」

「……なんとなく。」

「黒子の考えが読めた気がする。まあ、面倒なことになりそうだな。」

「わたくしたちは、ちょっと強引にいかせてもらいますの」

「やっぱり俺もか……」

「当たり前ですの。あなたはわたくしの相棒、パートナーですわよね？」

挑発的に微笑んで、黒子はそんなことを言ってくる。

「……はあ。しゃーねえ」

「わーったよ。そんじゃあ 初タッグといきますか」

* * *

「ふーん。これが幻想御手、ねえ……」

黒子と二人で、幻想御手の情報を持った不良の三人組をボコにした後、俺は携帯音楽プレーヤーを手で弄びつつ、そう呟いた。

「嘘、ということはないんですの?」

「まあ、嘘だったらあいづらをもっぺんブチのめしゃいい」

「いや、それはそれでどうなんですの……」

嘘って可能性は低いだろ。身元を調べた後、「ガセだったらどうなるか……わかってるよな?」と念を押しだし。

ふむ。まあ、とりあえず

「支部に戻るか。ここにいってもどうしようもねえだろ」

「そうですね。初春に、データの元も探してもらいましょう」と、
というわけで。

俺達は、一七七支部へと向かうことにした。

* * *

「それで、あれが例の幻想御手ってわけ？」

「ま、一応はな」

一七七支部。

戻ってきた俺らは、まず初春に幻想御手の情報を探ってもらい始めた。黒子はそれにつき、一緒にいろいろ検討しているっぽい。んで、俺はといえば、丁度支部にいた固法先輩と話していた。ちなみに、「無理に敬語を使わなくていい」と言われ、タメ口になった。

「本当にあんなのでレベルが上がるの？」

「さあ？先輩が使ってみればいいんじゃない？あ、でも……」

「？』でも、何？」

「先輩って確か、強能力（レベル3）の透視系能力クリアポイアンスだったよな？」

「そうだけど……」

「これ以上レベル上がったら、ただでさえエロい能力なのに、超エロくなるな」

「エロ……！」

愕然とした先輩にどうしたと聞こうとすると、

「錬夜！手分けして幻想御手の取り引き場所をあたりますわよ！」

「はあ。また仕事か……」

いい加減ちよつと休みたいなあ、なんて思いながら俺は黒子と共に支部を出た。

……その直前。

「エロつて……エロつて……！」

……そんな声が聞こえた気がした。

* * *

「あゝ畜生！ これで十件連続ハズレだ……」

黒子から半分もらった取り引き場所のリストに従って、俺は学園都市を走りまくった。

しかし、結果はどこもかしこも取り引きの「と」の字も見えない、と悲惨なものだった。

「だいたい、こんだけの数を闇雲に当たるなんざ、無謀だろ。マジでどうすっかな……」

と。

P r r r r !

俺の携帯が鳴り響いた。

「ん？ 誰だコイツ？」

ディスプレイを見れば、そこには見知らぬ番号が。
誰か知らんが、とりあえず出てみる。すると

『錬夜！？ あたし！ 佐天！』

「おお、涙子。何の用」

『出るのが遅い！ 何してんの、錬夜！』

……今日、こんなんばっかだ。

「ああ、うん、もういい。悪かった。俺が全部悪かったから、もう怒鳴るな」

『？ 何言ってるかわかんないけど、早く来て！』

「なんだよ、そりゃ？ 早く来てっただってどこに」

その時。

唐突に、嫌な予感がした。それは虫の知らせのようなものかもしれないし、涙子の声がそう思わせたのかもしれないし、もしかしたらただの勘違いかもしれない。

それでも……嫌な予感がした。

そして、その考えを裏付けるように

『白井さんが、能力者に襲われてるの！』

「……………」

黒子が……襲われてる？ たった数十分前まで一緒にいた、あい
つが……？

ふっざけんな！

「今すぐ場所言え！」

気付けば、俺は叫んでいた。

第十一話 木山春生（後書き）

最近、微妙に感想が少ないのでちょっと悲しいです（涙）。

なんでもいいので、ご意見・ご感想お待ちしております！

第十二話 相棒（前書き）

遅くなりましたが、十五話目です！

『幻想御手』編もいよいよ中盤に入った今回は、VS偏光能力のお話です。黒子が倒すのか、それとも鍊夜が駆けつけて倒すのか、読んでみて下さい。

総合評価が700ptを超えました。みなさん、ありがとうございます！

第十二話 相棒

SIDE 白井黒子

「カカカカツ。おもしれー能力だな。空間移動テレポートつてやつか」

「他人事のおっしやいますけど、次はあなたの番ですよ？」

『幻想御手』の取り引き現場を調査中、偶然わたくしは佐天さんが三人の暴漢に襲われてる現場を発見しました。

状況を見る限り、どうやら同じく襲われていた殿方を、佐天さんが助けようとしていたようです。

そこでわたくしはそれを止めに入り、二人を昏倒させ、今こうして、最後の一人と向かい合っているわけです。

「いやあ、スゲエスゲエ。レベルが上がったこいつ等を瞬殺とはな。まあ、でも、テレポーターならラクショーってかあ？」

白髪で歯がところどころ抜け落ちた（クスリでもやっているのでしょうか？）その方は、くつくつと愉しそうに嘲笑わらう。

「こつこつ手合いは、さっさと片付けるに限りますわね。」

「申し訳ありませんが、お喋りする気はありませんの。こつちは友達を傷つけられて、トサカに来てますので。……ですから」

言葉を切つて、演算を開始。一秒にも満たない間に終了し、空間座標を男の背後に設定。

そして

「これで終わりです！」

男の背後へテレポルト。さらに、そのまま蹴りを放とうとして

目の前に誰もいないことに気が付いた。

「なっ!?!」

どういふことですか?!? まさかあの男も空間移動能力者?

驚愕は、けれど一瞬。背後から響いた佐天さんの声に従い、振り向きざまに手に持っていたカバンを、盾として構える。

ドゴンッ!

「痛ッ……!」

わたくしが後方にまわったはずの男は、わたくしの『後ろから』蹴りを放ってきました。衝撃を殺しきれず、地面に転倒……はしたものの、すぐに立ち上がりました。

さらに続けて、懐から取り出したナイフで、男は襲い掛かって来ます。それが数度わたくしの服を切り裂き、終いには、

スパッ

「ッ……!」

ナイフがわたくしの頬を切り裂き、つうと血が頬を伝う。

わたくしは痛みに眉をひそめ、それでもあることを考えていました。

この感覚はもしかして……、

「……試してみましようか」

呟いて、右手を太ももへ持っていく。そして巻きつけておいたベルトから、金属矢を一本抜き取り、構えました。
そして

「フッ……!!」

一息と共に、金属矢をやつの左肩にテレポートさせた

『はずでした』。

キインと、澄んだ音を響かせて、金属矢は地面に落ちます。

『思ったとおり』外れましたか……。

「オイオイ、どうした嬢ちゃん？　しっかり狙えよ、ほら。ここだよ、ここおー!」

男は唇を歪めながら、トントンと心臓を叩く。
はぁ。まったく

「安い挑発ですわね」

「……アアン？　さんざん外しといて、よくそんなデカイ口が利けたもんだな。テメエはまだ、この俺にかすり傷一つ負わせてねえんだぜ？」

「そうかもしれないわね。でも　あなたの能力はもう、見破りましたわよ？」

「ッ……!？」

おそらくは驚きに、男は顔を歪めました。

当然のことながら、わたくしは嘘はうたひなんて、使っていません。きつちりと理解はできましたの。

そう

『いや、めちゃくちゃ変わったぜ。多分これ、一番お前向きの戦い方だと思っ』

『どうした、黒子。そんなに「後ろ」に飛んで』

『簡単な話だ。周囲の「光」を練い成じつて、屈折率を変更させたんだ。もつとも、俺の周りだけだから、動き回ったら意味がねえんだが』

脳裏を、錬夜の言葉が駆け巡る。彼の言葉を借りるとすれば

「答えは、屈折率の変更……ですわね？」

あの、錬夜との決闘。あの時彼が見せた『技』と、今の状況は、とても酷似していますの。

わたくしが告げると、男は一瞬呆けたような顔になり、

「カカカッ。こいつぁ、驚いた。こんなに早く見破ったやつなんて、全くないなかったぜ？」

「残念ながら、力で他者を従えるあなたと違って、わたくしには頼パートナーりになる相棒パートナーがいますの」

偶然とはいえ、こうしてわたくしの助けになったのですから、案外わたくし達が相棒になったのは運命だったのかもしれないわね？
そんなことを考えて、思わずクスリと微笑みが零れます。

「まあ、そんなことはどうでもいいんだわ。俺が言いてえのは、『だからなんだ？』ってことだ。それがわかったところで、結局テーマの攻撃は当たらねえ。……この意味が解るか？ お前は俺には勝てねえつつうことなんだよッ！」

「……………」

まあ、間違っではいませんわね。

彼の能力とわたくしの能力では、相性が悪いですからね。

さてどうしたものかと悩んでいたら

「黒子ッ！」

遠くから、わたくしの相棒の声が聞こえてきました。

* * *

S I D E 佐天涙子

白井さんが能力者に押されているのを見て、あたしはあることを思いついた。

「すみません、携帯電話貸してくれませんか!？」

「え……いいけど……」

最初に襲われていた男の人に、携帯を借りる。
それからあたしは、『とある奴』の番号をプッシュした。
そして

P r r r r

ガチャ

「錬夜！？ あたし！ 佐天！」

『おお、涙子』

あーもう！ なんでそんなにのん気なのよ！

『何の用』

「出るのが遅い！ 何してんの、錬夜！」

『……ああ、うん、もういい。悪かった。俺が全部悪かったから、
もう怒鳴るな』

はあ？ どうしたんだろう、錬夜は。

とにかく！

「何言ってるかわかんないけど、早く来て！」

『なんだよ、そりゃ？ 早く来てったってどこに』

「白井さんが、能力者に襲われてるの！」

あたしがそう叫ぶと、電話の向こうで息を呑む音が聞こえた。
そして、それが吐き出されると同時、

『今すぐ場所言え!』

* * *

SIDE 鍊夜

「黒子ッ!」

涙子に教えられた現場に行くと、不良然とした男と対峙している、
黒子が眼に入った。

それを見た瞬間、喉から勝手に叫びが溢れた。

よかった……無事だったか!

「おい黒子! 死んでねえよな!？」

「ええ、無事 って、第一声がそれですよ!？ 失礼にも程が
ありますわよ!」

よしよし、いつもの黒子だ。元気じゃねえか。

「ったく、心配掛けやがって。俺あ、てつきり」

と。

遅まきながら、俺は気付いた。

蹴られたのか、へこんだカバン。
ぼろぼろになった制服。
そして……一筋の血が流れている頬。

「……………」

「おお？　なんだ、お前は。ヒーロー様のご登場かあ？」

「……………あ？」

さっきまで黒子と対峙していた男が、ケタケタ笑いながら、話しかけてきた。

その手には、一振りのナイフ。

……………あれか。

「オイ、テメエ……………。一応聞いてやる。黒子を傷つけたのは、お前なんだよな？　他の仲間とかじゃなくて、『お前』なんだよな？」

「カカツ。んなの、解りきってんだろぅがよお。バカか、テメエ？」

「そうか……………」

だったら、遠慮はいらねえな。

「ちよっ！　待ちなさい、鍊夜！　相手の能力も知らずに戦うつもりですか？！」

「……………なら、早く言えよ」

常には出さない低く暗い声に、黒子はビクリと体を振るわせる。

それを見て、俺は心の中で嘆息した。クソ。お前を怯えさせてえわけじゃねえのに……。

「あ、あの男の能力は、『屈折率の変更』。以前、あなたが見せてくれたのと同じですわ」

「そっか。サンキュー、黒子。後は俺に任せとけ」

なおも何か言いたげな黒子に背を向け、あのクソ野郎に向かって歩き出す。

そして、軽く両手を合わせ

パンツ　　バシィ！

「ん？　テメエ、何やったんだ？」

「気にすんな。ただの下ごしらえさ」

テメエをブチのめすためのな。

「まあ、どうでもいいか。つーか、次はお前が相手か？　いいぜえ、俺は。お前もその女みてえに、切り刻んでやるよ」

「……鬭りあう前によ。ちっと、俺の個人的な話聞いてくれや」

「ああん？」

訝しげに俺を見る、白髪の男。

俺は『あること』を思い出しながら、静かに語り始めた。

「俺はさ。もう、『二度と』大切なやつが傷つくのは嫌なんだよ。『あいつ』みてえなことには、絶対になつてほしくねえんだ」

「？ さつきから、なんの話を」

「だからよ。俺の大切なやつとまたちをナイフで殺そうとしてるクソツタレがいたら……俺はそいつを許せねえんだ」

「ッ!？」

ここに来て、ようやく男は悟つたらしい。
自分が一体、誰のダチを傷つけたのかを。
自分が一体

誰を怒らせたのかを。

「後悔しろよ、白髪野朗。お前が傷つけたのは……桜咲鍊夜おれの
パツツツン！」

「相棒だあああああああああああああああああああ！」

バシン！ バシ！ バシバシバシ！ バツシイイイイン！

すぐ隣にあつた廃ビルに向かつて、勢い良く掌をぶつける。

かつてないほどの練成音を響かせながら、みるみるビルは形を変えていく。そしてそれはやがて、そのビルと同高度の巨人の石像と化した。

「な……なんだこりゃあ!？ テメエ、一体」

あまりの現象に、男は腰を抜かす。
俺はその姿を睨み付け、

「ごちゃごちゃうるせえんだよ。お前、黒子を殺そうとしたんだろ？
なら……俺がテメエを殺しても、文句は言えねえよなあ？」

「ヒッ……!!？」

俺がドスのきいた声で尋ねると、男はみつともなく怯えた。
だけど、そんなの知ったことが。こいつは……ブチのめす！

「吹き飛ばやああああああああああああああああああ！」

「うわああああああああああああああああああああ！」

「鍊夜っ！」

グラァ……

俺、男、黒子の三者三様の叫びが響く中、俺が造った巨人は倒れ
始め、その豪腕が

男を『捉えずに』、

その手前の地面を破碎した。

「ぐ、ああああああああああああああ！」

衝撃で男は吹き飛び、二、三度地面を転がって止まる。もちろん、
とっくに気絶している。

うっし。こんなもんだろ。

「……………あのー、錬夜サン？」

「ん？ どした、黒子？ さんづけなんかして」

「い、いえ……………。てつきり、直撃させるものだとばかり思ってたから」

若干、気まずそうにしている黒子に、苦笑で答える。

それから『ダルい』体をへたり込ませ、

「バーカ。いくらキレても、殺すわけねえだろ」

「それはそうですけど、あの顔を見てたら……………」

そんなに怖かったか、俺？

「まあ、なんにしろ、どのみち危険でしたわ。相手は虚像のようなものでしたのよ？ 下手したら、直撃してたかもしれないのに……………」

「ああ、それは問題ねえよ」

「？」

実は、あいつの姿は、能力でゆがめられた虚像なんかじゃない。本当は、実物だった。というのも、俺が強制的に元に戻したからだ。これは別に不思議なことじゃない。だって、そうだろ？

『光』の屈折率を変えられるなら。
同じように、屈折率を『戻す』ことだってできる。

俺がそう言っただけだと、黒子は「やられましたわ……」と額に手を当て、

「あなた、意外と冷静だったんですね」

「おい、なんだその言い方は。単細胞キャラが前提みてえになっただけじゃねえか」

「だって、いくら当てないからって……『これ』はちよっと」

呆れたような目で、俺が作り上げた石像を見やる。どうやら、やりすぎだと言いたいらしい。

「……でも、なんでだろうな？　なぜか、俺がやらなくても、このビルは誰かに破壊されていた気がする。いや、まあ、カンだけだ。さて。お遊びはここまでにして、そろそろ本題に入るか。」

「で、黒子。そろそろ認めたかよ？」

「？　何がですか？」

「お前……今まで、ホントは心のどっかで俺を信用してなかったろ」「え……？」

なんだ、自分で気付いてなかったのか。

「おいおい、無意識かよ。俺から見れば、お前、俺を相棒と認めて

なかったように思うぜ？」

「い、いえ！ わたくしはちゃんとあなたのことを信頼して」

「じゃあ、なんで俺を呼ばなかった？　なんで一人で戦った？　なんで無茶した？」

「そ、それは……」

言葉につまり、彼女は顔をうつむかせる。

「つたく、別に責めてるわけじゃねえのにな。」

「あんなあ、別に後ろめたい気持ちなんて、これっぽっちも要らねえんだよ。お前が……今日のこと、俺をちつとでも認めたんなら、それで十分だ」

「鍊夜……」

「ここから『始めて』いこうぜ。信頼していくのなんて、少しずつでいいんだ。俺がお前の相棒になるって決めた決意せんたくが間違まちがってなかったって、お前が俺に思わせてくれよ」

ニツと笑って、黒子の頭を撫でる。

なりゆきからなることになった黒子の相棒だが、なった以上はこいつは俺が守る。

「一歩後ろじゃなく、一緒にならんで歩いていく。それが、相棒パートナーってやつだろ？」

言葉には出さなかったが、俺はそんな思いを抱いていた。

「……そう、ですわね。ならこれから、しっかりわたくしについて

きなさいっ!」

「ハッ。らしくなったじゃねえか」

二人で笑いあつて、拳を付き合わせる。

こうして俺達は、誰が呼んだのか知らんが警備員アンチスキルが来るまで、穏やかな時間を過ごした。

だけど、この時の俺達は気付いていなかった。

歯車は少しずつ……狂いはじめていたのだ。

* * *

SIDE 佐天涙子

「やっぱり凄いなあ、錬夜も白井さんも……」

街路を歩きながら、あたしは溜息を零した。

警備員を呼んだあと、なんとなくその場に居づらくなって、あたしはその場を去っていた。

それが、嫉妬とかそういう醜い感情のせいだってことは……あたしが一番良く分かつてる。

「能力者と無能力者、か……」

結局は、そこに尽きる。超えられない壁が確かにあることに、あたしは肩を落としていた。

と、

「ルイコー！」

「アケミ！ むーちゃんにマコチンも！」

声をかけて来たのは、あたしや初春のクラスメイトであり、友達でもある三人組。

髪を斜め分けにして前髪の右部分をピンで止めている子がアケミ、シヨートヘアでボーイッシュな感じの子がむーちゃん、黒髪のツインテールを赤っぱいゴムで縛っている子がマコチンだ。

「私らプール行ってたんだけどさ、人が多くて全然泳げなかったよ」

「へ、へー」

さっきまで変なことを考えていたから、ちょっと後ろめたい。それでもなんとか話を合わせていると、

「そういえばさ、『レベルアップ幻想御手』の話、聞いた？」

「なあに、ソレ？」

「あ、知ってるー！ 能力が上がるとかいうのでしょ」

「そうそう。どっかのサイトからダウンロードできるらしいんだけど、ジャックメント風紀委員がそこを閉鎖しちゃったんだって」

「えー？ なんでそんなことすんのよお」

……どうしよう。

あたしは、手に持っていた音楽プレイヤー……いや、『幻想御手』をギュッと握った。

頭の中では、これを使ったらもう引き返せないという気持ちと、みんなと一緒にならという気持ち、激しくせめぎあっていた。

そして、片方に軍配が上がり

「あ、あのさー！」

「ん？ どしたの、ルイコ？」

「あたし……それ、持ってるんだけど……」

決して引き返せない一言を、紡いだ。

第十二話 相棒（後書き）

錬夜のとどめは、ハガレンの原作第二話を参考にしました。

第十三話 開戦前（前書き）

というわけで完成しました、第十三話！

今回は戦闘シーンまで、あえて入りませんでした。なんか、中途半端になってしまいそうな気がしたので。

でも、次回からは戦闘なので、楽しんでいただけたらなあと思っ
ます。

総合800pt突破！ みなさん、ありがとうございます！

第十三話 開戦前

七月二十四日。

「はあ。犯人の手がかりはあいかわらず、ゼロ。『幻想御手』のシステムもよくわかってねえし、どうしろってんだよ」

現在、俺は風紀委員として巡回中。ジャッジメント面倒くせえことこの上なかつたが、黒子に強引に行かされた。曰く、風紀委員の自分は治安維持なのだとか。風紀委員が守るのは校内って話なのになあ……。本当にこんなことばっかやってて、事件が解決すんのか

P r r r r !

「お？ 美琴から？」

めずらしいこともあるもんだ。

「うーい。何か用か？」

『進展ってほどじゃないけど、幻想御手のシステムについて少し可能性が出てきたわ』

「可能性？」

美琴は「ええ」と前置きして、語り始めた。

そもそも。

学園都市が……というよりも、学生が行っている能力開発というのは、五感すべてに働きかけて、それで初めて成功するらしい。

しかし、擬似的にはいえ能力開発を成功させている『幻想御手』は、音楽データだ。つまり、聴覚にしか働きかけることができない。にもかかわらず、実際に能力が上がった連中がいる。

それに対する美琴たちの答えが 『共感性』。

一つの刺激で二つの感覚を得ること。まあ、分かりやすい例としては、赤系の色を見れば暖かく感じ、青系の色を見れば冷たく感じる、と言った視覚の情報のみでそれ以外の感覚を得るようなことを言うらしい。

あいにく俺はそんな知識は持ってないので詳しくはわからねえが、どうやらそいつを利用すれば、『幻想御手』でも能力アップが可能になるかもしれない……というのが、美琴たちの見解だった。

「は、そんなものがあんのか。じゃあ、それがやっぱり原因なのか？」

『確証はないけどね。今、初春さんが、木山先生のところに行ってその可能性を探ってもらいに頼みに行ったわ』

「ああ、あの人か。とりあえずは、朗報に期待だな」

美琴に別れを告げて、通話を切る。

共感性、か……。

「学生がちよつと考えた程度で分かることだぞ？ 大脳生理学を研究してるなら、思いついてもよさそうなもんだが……」

……ま、そういうこともあんだろ。

と、そんなことを考えていたら

「大丈夫ですっ！」

* * *

S I D E 初春飾利

木山先生に幻想御手に関する再調査を依頼した私は、先生の研究所に向かうべく、バスに乗り込みました。すると、タラップが上がったところで、

P r r r r !

突如鳴り響いた着信メロディに飛び上がって、私はポケットから携帯電話を取り出しました。

ディスプレイに映っていたその名前は

「佐天さん！？ 何日も連絡取れないから、心配したんですよ?!」

『……………れちゃった』

「はい？」

『アケミが急に……………っ、倒れちゃったの』

「な……………っ!？」

アケミさんが倒れた。

それは私にとっても、衝撃的で、そして唐突な話でした。
だから、私はさらに耳を傾けます。

『「幻想御手」を使ったら元に戻らないなんて、あたし知らなくて……。何でこんなことに……。あたしは……。こんなつもりじゃっ!』

「お、落ち着いてください、佐天さん！ 最初からゆっくり話してください!」

数秒の沈黙からややあつて、

『……。「幻想御手」をたまたま手に入れたんだけど、所有者を捕まえるって言うってたからどうしようって……。それで、アケミ達が能力の補習があるって言うって……。ううん、違う。本当は一人で使うのが怖かっただけ。本当は……。』

あたしがみんなを。

佐天さんがそう言いかけたところで、私は彼女の言葉を遮り、それからバスを降りました。

その続きを言わせたなら、彼女が壊れてしまいそうな気がしたから。そしてバスを降りてすぐ、電話口の声は、再び聞こえてきました。

『……。あたしももう、眠っちゃうのかな。そしたらもう、二度と起きれないのかな』

「……………」

『あたし、何の力もない自分がいやで……。でも、憧れは捨てられなくて…………』

そこまで言ったところで、佐天さんが何かを小さく呟いた気がして、私は問いかけました。

それには答えず、佐天さんは、

『無能力者（レベル0）って……欠陥品なのかな』

「何……を、」

『それがズルして力を手にしようとしたから、罰があたったのかな……危ないものに手を出して、周りを巻き込んで、あたしっ』

「大丈夫ですっ！」

知らないうちに、私は叫んでいました。

だけど、きつと今叫ばなきゃ駄目なんだ。そんな思いが溢れて、勝手に声を紡ぎます。

「もし眠っちゃっても私がすぐに起こしてあげます！ 佐天さんもアケミさんも他の眠ってる人たちも、みんな！ だから、ドーンと私に任せちゃってください！」

『初、春……？』

「佐天さんは欠陥品なんかじゃありませんっ！ 能力なんか使えなかつたって、いつも私を引っ張ってくれるじゃないですか！ 力があつてもなくても、佐天さんは佐天さんですっ！」

『……………』

「だって、佐天さんは、私の親友なんだからっ！ だからっ、だか

ら……ッ」

言葉と一緒に、涙が零れる。
それでも私は、最後まで続けた。

「そんな悲しいこと言わないで……」

とめどなく流れる涙を拭いながら、私は返答を待ちます。
と、そこに

「悪い。ちょっとかわってくんねえか？」

* * *

SIDE 佐天涙子

「……………」

初春を頼れ……かあ。

親友の言葉に、あたしはどう返そうか少し悩む。

正直、どれだけ怒られても、しかたないと思ってた。だけど、あの子は、本気でこんなあたしのことを心配してくれて。
だから、あたしは

『よう、涙子。ひさしぶりだな』

「え……？」

この声って……錬夜？
って、ええ！？　なんで錬夜が初春の電話に出てんの？！

『偶然、飾利が叫んでるのが聞こえてな。会話が一段落したところで話しかけたら、お前が「幻想御手」を使ったって話じゃねえか』

「あ………」

……そっか。錬夜も知ったんだ。

なんでだろ？　あいつには、知られなくなかった……いや、知ることで軽蔑されるのが嫌だった。

だからあたしが何も返せずに沈んでいると、

『勘違いすんなよ、お前』

「え………？」

『お前が「幻想御手」使ってぶっ倒れても、なんも問題ねえんだよ。むしろ、骨休みだと思って、ゆっくり寝てる』

「……………はあ？」

いやいや、ええ？　いくらなんでも、そんな言葉は予想外なんだけどー！

「ちょっと、錬夜、それどういう」

『だって、そっだろうが。お前はかならず』

そこで錬夜は言葉を切って、

『俺が助けてやつからよ』

「……………」

『お前、言ったじゃねえか。俺が正義の味方みてえなやつだ……………つて。だったら俺はお前を救ってみせるぞ。友達として……………そんで、お前の言う正義の味方として、な』

「……………あ、」

『だから後は俺達に任せとけ。お前は絶対に 助け出す』

根拠はないのに、錬夜は自信満々にそう言った。

なんていうか……………あいつらしいなあ。出逢ってまだ一月も経っていないのに、それがよくわかる。

不器用で、面倒臭がりやで、偶に現実主義で、でも本当は誰よりも友達思いで。

そんなやつだから……………根拠はなくても確信が持てる。
きつと

きつと、あいつなら助けてくれる。

「……………錬夜」

『あっ、』

「あと……………よろしくね」

『……………任せとけ』

その言葉を最後に。

あたしは意識を手放した。

* * *

SIDE 鍊夜

ゴトリ、と。

何かが倒れたような音が、電話の向こうから響いた。

「……………」

「れ、鍊夜君？ どうしたんですか？」

心配そうな飾利をよそに、俺は近くの電灯に歩み寄る。
そして

ゴガンッ！

『(ビクッ)(ビクッ)』

思いつきりそれを殴りつけると、周囲にいた人が全員驚いてこちらを見た。

だけど、そんなことはどうでもいい。今、俺の胸中にあるのは、堪えようもない怒りだった。

当然それは涙子に対するものではなく……………あいつの苦しみに気付

いてやれなかった自分の不甲斐なさに対してだ。

「……飾利」

「は、はいっ！」

「涙子ん家行くぞ。早く病院に運んでやらねえとな」

おどおどと心配そうな目で俺を見る飾利を伴って、俺は涙子の家へと足を向けた。

* * *

「黒子っ！ 鍊夜っ！ 佐天さんが倒れたって……」

涙子を病院に搬送してもらった後、俺は病院に向かい、飾利は木山先生のところへ向かった。

俺が院内に入ると、そこにはすでに黒子がいた。どうやら飾利が連絡して、自身のテレポートで飛んできたらしかった。

そして二人で待合室にいと、美琴が到着した。

「やっぱり『幻想御手』がらみ？」

「ええ。どうやら、その線のようなのです」

黒子と美琴が話し始め、俺は一人ソファへと腰を下ろした。

……どうして、俺は気付いてやれなかった？

今までなんども繰り返し返してきた自問自答を、再び心の中で呟く。

考えても詮無いことだというのはわかってるけど、それでも考えずにはいられない。そうでもしないと、何かに当たってしまいそうだったから。

そうでもしないと

また、『あの事』を思い出してしまいそうだったから。

「あー、ちよつといいかい？」

不意に聞こえた声に目を向けると、カエルに似た顔の医者が立っていた。

誰だ、この人？

「あんたは……？」

「うん？ まあ、誰でもいいじゃないか？ それよりも、君達に少し見てもらいたいものがあったね？」

「見てもらいたいもの？」

黒子たちに目を向けると、二人とも首を振った。どうやら、自分達も知らないというジェスチャーらしい。

俺達はいぶかしみつつも、「こつちだよ？」と俺達を促す医者について行く。

やがて一つの部屋（研究室か？）にたどり着いて、中に入る。それから、カエル顔の医者はパソコンの電源を入れ、とあるデータをディスプレイに映した。

「これは、なんですか？」

黒子の疑問に、医者は答える。

「『幻想御手』の患者達の脳波に、共通するパターンが見つかったね？」

「脳波に？」

「そうだよ？ まず前提として、人間の脳波は活動によって波が揺らぐんだね？ そいつを無理に正すとどうなるかといえば……」

そこで一旦言葉を切って、カエル顔の医者はこちらを振り向いた。

「まあ、人体の活動に大きな影響が出るだろうね？」

「だったら、『幻想御手』を使って植物状態になった連中は、無理やり脳波を正されたってことか？」

「だけど、誰が何のつもりでそんなことやったのよ？」

確かにそうだ。こんなことやったとして、何のメリットがある？ カエル医者は「それは僕には分からないけどね？」と前置きしてから、

「僕は職業柄、いろいろと新しいセキュリティを構築していてね？ その中の一つに、人間の脳波をキーにするロックがあるんだね？
そして、」

カタカタとキーボードを操作して、画面を変更。
そこに映し出された顔と名前は

「それに登録されてるある人物の脳波が、植物患者のものと同じなんだね？」

登録者名 木山春生。

* * *

「クソッ！ なんで出ない?!」

カエル医者のお話を聞き終えたあと、俺は部屋を飛び出して、すぐさま飾利に電話した。

しかし飾利が出ることはなく、俺は携帯片手に歯軋りをしていた。

「鍊夜！ 一度、支部に戻りますわよ！」

「チツ……！ わかったよ、畜生！」

ここでくすぶってても仕方ねえ。

もどかしい気持ちを感じながらも、俺達は一七七支部へと走り始めた。

その道すがら、美琴は言った。

「『幻想御手』は、使用者の能力を引き上げるものじゃないわ」

「あん？ けど、実際に連中は強くなってたぞ？」

「それは、出力が上がっただけよ。同じ脳波のネットワークに取り込まれることで、能力の幅と演算能力が一時的に上がってるだけな

んだわ」

つまりは、ネットワークと一体化することで能力の処理能力が上がったり、同系統の能力者と思考パターンを共有することでより効率的に能力が扱えたりするわけだ。

単純に一言で言うならば、『究極の助け合い』ってのがいいかもしれない。

「だったら、連中がぶっ倒れたのも……」

「ええ。たぶん、ネットワークに完全に取り込まれて、脳が自由を奪われているんでしょうね」

なんのつもりか知らんが、厄介なことをしてくれたもんだな。

そうこうしているうちに、支部へ到着。急いで中へ入り、アンチスキル警備員へと連絡を取った。

「で？ 調べはついたんすか？」

『いや、まだじゃん。職員たちも詰問したけど、木山は誰にも話してなかったようじゃん。今のところ、目的も行き先も不明じゃん』

「だったら、やることは一つ。ですよね？」

『まあ、もうちょっと待つじゃん。お前が考えてるとおり、今監視カメラや衛星を使って木山を探してる。って言うってる間に見つかった』

「場所は？」

『第一〇学区の高速道路……って、桜咲！ お前もしかして』

「サンキュー、黄泉川さん」

強引に通信を切ってから、二人を見る。

一人は決意を決めたような目つきで。もう一人は……、

「私も出撃^でるわ。言っとくけど、文句は聞かないからね？」

「……だよ、黒子。どうする？」

「……どうせ言っても、お姉様は聞きませんわ。ただしっ！ 一般人であるお姉様は、わたくしとあなたで守りますわよ！」

「おー、思いっきりがよくなったなお前」

軽く笑ってから、すぐに表情を引き締める。

それから、二人に向き直って口を開いた。

「さて。今回の『幻想御手事件』、俺達は負けっぱなしだった。『幻想御手』使用者の増加は止まるところを知らず、昏睡状態の患者は快復しない。完全にいいようにやられてた。……けどよ。そろそろいいんじゃないかねえか？」

それだけで伝わったのか、二人とも固い顔で頷いてきた。

俺はそれを認めると、後ろを向いて歩き始める。背後に、二人の気配を感じながら。

さあて

「反撃開始だ」

* * *

S I D E 初春飾利

今、私の目にはありえない光景が映っていました。

「ぐあっ!?!」

「ぎゃあああっ!」

独楽こまのように吹き飛ば、警備員たち。
それを起こしているのは

「どういうことだ?! 学生じゃないのに 能力者だ?!?」

そう叫んだ誰かは、直後に吹き飛ばされた。

木山先生が使った能力チカラによって。

「ああ、そう言えば言い忘れていたよ。警備員の諸君、もしまだ私
と戦うつもりならば」

木山先生は、数多の警備員に囲まれながらも、悠然と構えている。
そして、歌うようにこう言った。

「この都市まちの能力者一万人を相手にしていると思え」

第十三話 開戦前（後書き）

ところでみなさんに一つ質問があります。

今現在この作品は、それぞれのキャラによる多重視点となってます。そこで、以下の三つの中から、アンケートとして、今後の書き方を選んでもらいたいです。

？現状維持

？錬夜の視点一本

？神の視点（ようするに、主観は抜き）

の、三つから選んでください。

それでは、ご感想・ご意見、お待ちしております！

第十四話 Unhappy Birthday(前書き)

久しぶりに、二日続けて投稿できました！

今回、木山先生とのバトルですが、先生原作よりレベル上がってます。まあ、三対一ですから、上がらざるを得なかったんですが(汗)

それから、戦闘描写に関する感想を募集します！ 今回ほとんどバトルだったんで、上手く書けてるか不安なんです(汗)

第十四話 Unhappy Birthday

ドオオンッ！

「運転手！ ドア開けてくれ！」

「あつ、ちよつとお客さん?!」

俺達三人はタクシーを捕まえ、それで現場へと向かっていた。そしてその近くまで来た瞬間、道路の上で爆発が起きるのが見えた。

そこで俺達はタクシーを飛び出し、走り始めた。三人なら、黒子のテレポートより走った方が速い。

「どうなってんだよ、オイ！ 反撃開始だとかカッコつけたけど、正直とつくに警備員アンチスキルが捕まえたと思ってたぞ！」

「そんなこと言われても私だってわかんないわよっ！」

「お二人とも、喧嘩は後にしてください！ 今、わたくしが確かめますから！」

そう言って黒子は、耳に引っ掛けた通信機に意識をやる。それから数秒して、驚愕に顔を染めた。

「おい、どうした?!」

「……ありえない話になりますけど、どうやら木山は能力を使って警備員と交戦しているようです。それも複数の能力で」

「はあ！？ 能力は一人に一つ！ 例外はないはずよっ！」

「おそらく、『レベルアップ幻想御手』を利用したのでしよう。何千人もの能力者の脳と、ネットワークという名のシナプスでできた『一つの巨大な脳』。もしもそれを操れるとしたら、今の木山の状態 すなわち、幻の存在と呼ばれた『デュアルスキル多重能力者』も説明できますわ！」

そうこう話しているうちに、俺達は現場に到着。

そこで目にしたのは、全滅した警備員と、車（多分、木山先生の中）の中で気絶した飾利だった。

「飾利！ おいコラ、起きろ！」

「初春さん、しっかりして！」

慌てて三人で駆け寄る。

すると、その背後から

「安心していい。戦闘の余波を受けて、気絶しているだけだ。命に別状はない」

「……先生」

振り向けば、そこには悠然と立つ木山先生がいた。

こんだけの警備員を相手にして、なお無傷。その事実が、俺達を戦慄させた。

「『超能力者（レベル5）』・御坂美琴。『大能力者（レベル4）』
・白井黒子。そして『ノンレベル測定待ち』・桜咲鍊夜、か。随分とおも

刹那。

ズガアアアッ！

轟音と共に、俺達がいた地面が爆発した。

マジで能力を使つてやがる！ しかもこの威力、異能力（レベル2）や強能力（レベル3）じゃ済まねえぞ！

「本当に能力が使えるなんて……」

「しかも、『多重能力者』……ですのね」

俺と同様、なんとか一撃を避けた二人が声を上げる。

それに答える声は、場違いなほどゆつたりとしたものだった。

「その呼称は適切ではないな。私の能力は、理論上不可能とされるアレとは、方式が違う。言うなれば、『多才能力者』だ」

先生が横なぎに右手を振るうと、それに合わせて炎の壁が生まれ向かってきた。おそらく、パイロキネシス発火能力の大能力クラスだ。

俺が二メートルほどの壁を練成して全員を守ると、即座に俺と美琴は壁から出て、先生へと走りこむ。

「呼び方なんかどうでもいいわよ！ こっちがやることに変わりはないわ！」

「同じく！」

僅かに先行した美琴が雷撃を先生に放つのを横目に見ながら、俺

は両手を合わせ、

バシィッ！

一本の槍を作り上げる。武器なんざ使ったことねえが、素手よりはマシだ！

美琴の雷撃は、先生にブチ当たる寸前に、何かに弾かれた。

「お、おおおおおおおおお！」

それに驚くことはせず、一気に距離を詰めて、上段から槍を振り下ろす。しかし、それはその役目を果たすことなく、先端からぐんにやりと急に『捻じ曲がった』。

「テレキネ念動能」

俺の言葉が終わるより早く

ドゴンッ！

「か、は……っ！」

腹に鉄球でも叩き込まれたみたいに、俺の体は地面と平行に吹き飛び、やがて背中から着地した。

痛む体に鞭を入れて上体を起こすと、先生の頭上にコンクリートの塊が落下するのが見えた。黒子がテレポートしたらしい。

「フッ」

しかしそれに対し、先生は笑って左手を挙げる。すると彼女の掌

テレポートで一度地面に降り立ち、再度テレポートで錬夜の隣へ。それから彼の腕を掴んで、もう一度地面へと飛ぶ。こうしてなんとか事なきを得た錬夜は、胸の辺りを押さえながら、わたくしにお礼を言ってきました。

「サンキュー、黒子。あー、心臓に悪かった……」

「それはもういいですから、早く立ってください　な！」

錬夜に呼びかけながら、木山の肩に向かって、ダイツ金属矢を打ち込む。しかしそれは

あっさりと外れて、地面に転がりました。

「ッ！　これはあの時の……！」

「『トリックアート偏光能力』。君にとっては、天敵のような能力だろうか？」

この女、きつちりわたくしの戦い方を調べてましたわね……！

「任せろ黒子！」

隣の錬夜が、パシンと手を合わせる。

あの時と同じく、屈折率を元に戻す心づもりなのでしょうが

「君の考えそんなことくらい、分かるさ」

「」「なっ……！？」

ドガガガガッ！

それが発動する前に、木山はいくつかの水球を飛ばしてくる。おそらく水流操作系というよりは、水力使用アクアマスターの要領で空気中の水蒸気を集めてるんでしょうけど、それにしただってなんて速度……！念デ動能力レキネシスも混ぜているんでしょうか？

「パクらせてもらっぜー！」

パンツ バシィ！

錬夜が両手を合わせそれを空中に向けると、みるみる水の盾が出来る。上がって、すべての水球を防ぎきりました。

さらに、

「返すぞー！」

再度、両手を水の壁にぶつけると、それは一本の水流となって木山に襲い掛かった。

さすがにこれは予想外らしく、木山は「チッ」と舌打ちして横へと飛んだ。

さらに、そこへ

バチィッ！

「くっ………！」

木山を突如、雷撃が襲う。

これはもちろん、

「お姉様ッ！」

* * *

S I D E 御坂美琴

「ソニヤロ……やっぱり電流が誘導されてる。いくつかの能力を組み合わせ、避雷針でも作ってるのかしら？」

どちらにせよ、電撃は効かないか。まだ出力は上げられるけど、さすがにそれ使ったら、彼女死んじゃうわ。

さてどうしようかと考える。黒子と錬夜も攻めあぐねているようで、動かないでいる。

と、そんな私達を見て木山が、

「拍子抜けだな。学園都市きつての高レベル能力者が、三人がかりでこのザマか」

「カチン」

ほっほ、いいい言ってくれるじゃない……。
私を

「舐めるなあ！」

「ざけんじゃねえ！」

磁力で鉄筋コンクリートを操り、それを思いっきりブン投げる。

錬夜も同時に、地面を五指がある石柱に変えて、それを突っ込ませた。

「　　まだまだ、甘い」

木山は両手を広げ、掌を返す。

するとそれだけで周囲の鉄塊が浮き上がり、私達の攻撃を防いだ。

「あーもう！　一体どこまで反則的　ん？」

愚痴を零す最中、私はあることに気付いた。木山が人差し指を、私が立っている柱に向ける。

そして

ポヒュンッ！

彼女の指から出たビームが柱を貫き、私が張り付いていた鉄板が落下しはじめた。

って、指からビームとか、宇宙人がアンタは！

「お姉様！」

「お………？」

自由落下を続けているはずの私の体は、いつの間にやら飛んできた黒子に支えられた。

ナイス、黒子！

「なんてやつよ、まったく。反則にもほどがあるでしょうが」

「愚痴を零してもしかたありませんわ。とにかく、戦うしかない！」

黒子が驚愕の声を上げたのは、一瞬。

気付けば、木山春生は黒子の眼前へと立っていた。

「黒」

その声よりも早く。

ゴガンッ！

黒子の体は、トラックに撥ねられたかのように、吹き飛んだ。

「ア、ンタあああああああああああ！」

一瞬で沸点へと達した私は、容赦のない雷撃を放つ。

けど、それが当たる前に、木山は元の位置へと戻っていた。

「テレポート……ッ！」

「悪いが、一番弱いものから倒させてもらったよ。兵法の基本だ、覚えておきたまえ」

「ふざけんなあああああああ！」

手を地面について、砂鉄を幾筋の槍と変えつつ、打ち込む。

そのすべてに対し、木山はいつの間にか持っていた空き缶を投げた。

ドゴオオンッ！

爆音を撒き散らしながら爆発したそれは、私の攻撃をすべてなぎ払った。

さらに、もう数個空き缶を私に放って来るが、

「おらあっ！」

私の傍まで駆けつけた錬夜が、水流で叩き落した。

「何、アンタ？ 水力使い気取り？」

「うっせ。ありゃあグロビトン虚空爆破事件の時の、シンクロトロン量子変速だろ？ ……ま、それはともかく」

錬夜はちらりと、黒子に目を向ける。

私としても駆け寄りたいのは山々だけど、目の前の女がそれをさせてくれない。

だから

「とつとつとブツ倒す！」

* * *

SIDE 錬夜

「俺が囿になるから、その隙に電撃を零距离で流し込め。いくら避雷針があっても、それならいけるだろ」

「オツケー」

美琴が頷くのを確認して、足に力を込める。

そんじゃま、一丁

「行くぜ！」

大地を俺の靴が蹴り叩き、俺の体は一気に加速する。
接近戦に持ち込めば、勝機はある！

「させるかっ！」

先生は叫び、念動力で近くにあったゴミ箱を引き寄せる。さらにその中身に手を触れ、空中でひっくり返した。

その中身は　空き缶数十個。

「絨毯爆撃でもするつもりか、あんたは！」

思わずたたらを踏んで、そうツッコむ。

が、よくよく考えたら問題がないことに気付いた。
なぜなら

「量子変速は攻略済みだ！」

直後起こった大爆発に合わせて、両手を突き出す。

あの時よりも規模は段違いだったが、要領は同じだ。俺を避けるように造り替えりゃあいい。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

ズガガガッ！

さすがに全てとまではいかなかったが、大方は回避できた。爆風は辺りの砂塵を巻き上げ、爆発自体の黒煙と共に、一気に視界を奪う。

が、俺はそれを逆手にとった。

「くっ……どこにいる、桜咲錬夜！」

悪いが、それを教えるバカはいねえよ！

密かに短剣を練成しながら、黒煙に紛れて近づく。そして、

「フッ　　！」

「な！？」

逆手に持った短剣を、先生めがけて振るう。が、その一閃は、先生がレポートすることでかわされてしまった。

「危ないところだったよ。それじゃあ、試合再開プレイといこうか？」

ニヤリと笑いながら、先生はそう言う。だけど、その発言は的外れだよ、先生。俺は先生を真似てニヤリと笑い、

「いいや。ゲームセット 試合終了だよ、木山先生」

「……？」

先生が怪訝な顔をした、その刹那

「つかまーえたー？」

「なっ……！？」

俺に気を取られている間に背後に近づいた美琴が、先生に抱きついた。

まあ、なんだ。こいつで

「終わりだああああああああああ！」

ズガシヤアアアン！

美琴の雷撃をモロに喰らった先生は、膝から崩れ落ちた。

* * *

「ふう。これで決着だな」

がくりと座り込みながら、俺は呟いた。

まったく、デタラメに強い人だったな。これで研究者だってんだから、呆れるぜ。

「ま、なんとか事件解決だな、美琴……美琴？」

「はあ……はあ……」

なんだこれ……様子がおかしい。
美琴は息を荒くしながら頭を抑え、その顔を蒼白に変えていた。
俺は慌てて、美琴を揺さぶる。

「おい！ おい、美琴！ 返事しろ！」

「え、あ……錬夜？」

よし！

「そつだ、俺だよ！ どうしたんだ、一体?!」

「……大丈夫。もう大丈夫だから」

美琴はそう言って、俺ではなく木山先生を見る。
その視線を俺も追うと、先生も頭を抑えてくずおれていた。

「フーツ、フーツ、観られた……のか!？」

「何で……何で、あんなこと!」

何だ？ 何の話をしてるんだ？

「おい、美こ」

俺の呼びかけは、先生の笑いに遮られた。

「くっ……フフフフ。あの実験の正体は、『暴走能力の法則解析
用誘爆実験』。能力者のAIM拡散力場を刺激して、暴走の条件を

「探るものだったんだ」

「「……………」」

「あの子達を　　モルモットにしてね」

「……………詳しい話はよく分からない。だけど、その台詞で、大体の事情はわかった。」

人間を『モルモット実験動物』にする行為。つまり

「「人体実験……………」」

「……………二十三回。二十三回だ。あの子達の快復手段と事故の原因を探るシミュレーションを行うために、『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』の使用を申請して、却下された回数だ。この意味が、分かるか？ あの子達を苦しめた実験に、『統括理事会』が　学園都市の上層部がグルになっているということなんだぞッ！」

「「！？」」

「冗談だろ、おい？　俺達を統治している連中が、人体実験を容認しているだど？」

「……………いや。ありえない話じゃない、か。そもそも『かいほつ能力開発』からして、はたから見たら十分非人道的行為だ。そんなことがあつても、おかしくねえ。」

「だけど。」

「だったら、なんであなたはこんなことやってんだよ?!　これじゃあ、あんたが憎んでる連中と同じだろうが！　あんたは、罪もねえ学生たちを苦しめてんだぞ?!」

「そうよ！ もっと方法なんていくらでもあったでしょ！？」

「君達に何が分かるっ！」

木山先生の慟哭なげに、思わず怯おそんでしまう。

感情の塊をぶつけられたみてえに、体じゃなく、心が臆おそした。

先生はもうボロボロになった体を起こしながら、なおも感情を吐き出し続ける。

「あんな悲劇、二度と繰り返させはしない。そのためなら、私はなんだってする。私はッ　この街の全てを敵に回しても、止まるわけにはいかないんだっ！」

「……………」

俺達は、何も言えない。言えるわけがない。

所詮、俺達の言葉なんて、薄っぺらいものにしか、今のあの人には聞こえないだろう。だから、何も言えない。

その代わりに、奥歯が鳴るほど歯噛みしていると、

「ぎっ、あ、あああああああああああああああああ！」

「「なっ!?!」「」

いきなり先生が苦しみだした。

一体、なにが起こってるんだ?!

「ガッ、ぐ…………ネットワークの、暴走…………? いやっ、これは…………

虚数学区(AIM)…………の「

そこまで呟いたところで、先生は倒れた。
そして

『ズルリ』、と。

先生の頭から、『何か』が這い出してきた。

『そいつ』は、一度地面にべチャリと落ちると、ゆっくりと浮かび上がった。

「「……は？」」

かすれた声で、俺達は呟く。

そんな中、『そいつ』……胎児の形をしたその何かは、パチツツと瞳を開け

「キオオオヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」

禍々しい、産声を上げた。

第十四話 Unhappy Birthday(後書き)

ご意見・ご感想、お待ちしております！

第十五話 Round 2 (前書き)

大変長い間更新できず、真にもうしわけありませんでした！ いろいろと都合が重なってしまい、こんなに間が空いてしまいました。

しかし、ごちゃごちゃと言いつつ重ねてもしかたないので、失礼になるかもしれませんが、あまり謝罪は抜きにしておきます。

さて、今回でいよいよ、AIMバースト戦がスタートです。しかし、今回は戦闘シーンはあんまりありません。そこらへんは読んでもらうとお分かりになると思います。

次回で幻想御手編は終了予定。上手く書けるかわかりませんが、がんばってみます！

ついについにの、総合1000pt突破！ 感謝感激の嵐です！

第十五話 Round 2

俺達の目の前で叫びを上げたソイツは、ギョロリと目をむいた。それを眺め、俺は美琴に声をかける。

「おいおい！　ありゃあ、なんだよ?!」

「私を知るわけないでしょう!？」

まったく意味がわからねえ。なんで、木山先生の頭から、あんなもんが生まれんだよ?!

……とはいえ、言ってもしかたねえ。

「しゃーねえ。考えんのは、とりあえず後だ」

「そうね」

パキパキと指を鳴らしながら、構えをとる。

あいつがどんな存在なのか、そんなことは分かんねえ。だけど、放つといたらやべえのは、なんとなく分かる。だから

「行くぜ　ラウンド2だッ!」

* * *

「ん……あれ？」

いつの間にか気絶していた私は、ズズンという音と地鳴りに、意識を揺り起こされました。

目を開けると、フロントガラス越しに、倒れている幾人の警備員アンチスキルと変わり果てた道路が確認できました。

驚き慌てて車を飛び出した私は、一人の警備員に駆け寄り、

「えっと、大丈夫ですかあ……？」

「うう……」

「駄目だ、気絶しちゃってる……」

どうしようと困り顔していると、再びズズンという音が。それに目を向けてから、私は息を呑みました。

「み、道がなくなってる……」

まっすぐ続いていたはずの高速道路は、私の十メートルほど先で、ぷつぷつりと途切れていました。

私はそれに近づき、落ちないように気をつけながら、下を覗き込みました。

そして、

「何、アレ……？」

私の目に飛び込んできたのは、大量の瓦礫の上に浮かんだ、胎児のような形をした何かでした。

何で、あんなものが……ん？

「あれって……!!」

* * *

SIDE 鍊夜

「右だ！ 避ける！」

「わかってるっ！」

ドグオンツ！

胎児（仮）が叫びを上げるたびに、奴の周りが爆発する。それを身を以って知った俺達は、現在右往左往していた。広範囲の爆発だから、避けるのだけでも一苦労なんだ。それでもなんとかかわしながら、俺達は会話する。

「どうするよ？ 得体が知れなさすぎて、攻撃していいのかもわかんねえ」

「つつても、やらなきゃしょうがないでしょ。放つといたら、まだまだ暴れそうよ、アレ」

「だよな。なら」

パシンと両手を合わせながら、イメージ想像を開始する。

素材は水蒸気、目的は圧縮、用途は弾丸！

「らあッ！」

「はあッ！」

叫び、両手を前に突き出す。

バシッ！

鋭い音を響かせ、俺の眼前で数十の水の弾丸が出来上がる。それが打ち出されると同時、美琴の前髪からも、雷撃が進った。雷と水の同時攻撃は、流れるように胎児に吸い込まれていき

パイン、と。

妙に澄んだ音を響かせて、胎児の体を消し飛ばした。

「はあ？！ なんだよ、アレ。てんでザコじゃ」

「ッ！ 違うわ、よく見なさい！」

「？」

美琴の注意に、俺は目を凝らす。

すると、あることに気が付いた。俺達が弾き飛ばした部分が、ポコポコといやな音を立てて、再生していきやがった。

ああ、そうかい！ 効いてねえってことかよ！

「ちっ。メンドイな、あいつ。レールガンでも復活しそうで、怖え。

俺の攻撃も多分きかねえだろうし、一度退くか？」

「……そうね。とりあえず、距離を取りましょ」

逃げるのは性にあわないが、このまま至近距離の爆発を避け続けるのもキツイ。

そう判断した俺達は、ひとまず数メートル走って距離を取った。それから、改めて遠距離から攻撃するために振り返り

「ん？ なんだ、追ってこねえぞ？」

「狙いは私たちじゃない……というよりも、闇雲に暴れてるだけじゃない？」

「闇雲であんな真似されちゃ、かなわねえよな。……つたく、木山先生も厄介なモンを」

つて、そついや先生どこ行つた？

俺はその場でキョロキョロと視線を巡らせるも、見えるのは瓦礫の山ばかり。木山先生どころか、人影一つ見えない。

……あれ？ そついやなんか忘れてるような

「ああああああああああああああああああ！？」

「（ビクッ）。な、なによいきなり大声出して！ 鼓膜破れるかと思つたじゃない！」

「んなことどうでもいいんだよ！ それよりお前、俺達大事なこと忘れてるぞ！」

「？ なによ大事なことって？」

俺は息を吸い込み、声と共に一気に吐き出した。

「黒子は?!」

「……………あ」

* * *

SIDE 白井黒子

「って、二人とも忘れてたんですの!？」

「わっ!？」

がばつと起き上がったわたくしは、大声で叫びました。

何か、とてもひどいことを言われたような気がして、つい気絶から快復しましたの。

「っ痛ウ……………！ 木山先生も同じ女なら、お腹は反則だと思ってほしかったですわね……………」

慌てて起き上がったことで痛んだお腹を擦りながら、独り言を漏らします。

なのに、その独り言には、「だ、大丈夫ですか……………？」という返事が……………って！

「初春！ あなた、なんでここにいますの？！ 車の中で気絶してたんじゃなかったんですの？」

「爆発音が聞こえて、数分前に目が覚めたんですよ。それで道路の上からここを見たら、気絶している白井さんを発見しまして……」

「ぼりぼりと頬を人差し指で掻きながら、初春はそう言いました。うう、なら、一人だけ戦線リタイア離脱していたのがバレたわけですね……。はあ。なんか、情けないですね。……。いえ。今は落ち込むより先にやる必要がありますね。」

「初春、状況を教えなさい。わたくしが気絶している間、何があったんですの？」

初春は、「それが……」と言いよどんでから、スツとある方向を指差しました。

それにわたくしは目を向けて……、

「は……？」

そこにいたのは、電撃を撒き散らしながら暴れる、胎児に似た化け物。

な、なんですか、アレ……？

「状況が飛躍しすぎでしょう！？ なんでいつのまにか、怪獣大決戦が始まっていますの？！ 答えなさい、初春！」

「わ、私にもわかりませんよお！ ききき気が付いたらもう、いたんです！ だだだだから揺さぶらないでくださいいいいいいいいいいい！」

「もつと他に方法がありましたよね（あつただろう）！？」「

あら、息ピツタリ。

まあ別段語る必要性はありませんが、わたくしの行動を説明すると、初春を木山の上空に頭が下になるようにテレポートさせて、そのまま頭をゴツチンコというわけですの。

「まあまあ、過ぎたことを今更言ってもしかたありませんわよ？」

「今！ たつた今あつたことだ！」

「そんなことより、あの化け物はなんなんですか？ どうせあれも、あなたが原因なんでしょう？」

「決め付けは気に入らないが、その通りだから言い返せない……原因は、おそらく虚数学区がそうなんだろう。はっきりとした確証はないがね」

「虚数学区？ あれは確か、都市伝説の一種のはずですわよね？」

「いや。よくある、噂と実体が違うという単純な話さ。虚数学区とは、AIM拡散力場の集合体だったんだ。アレもおそらく原理は同じ。AIM拡散力場からできた……そうだな、『^{AIMバースト}幻想猛獣』とでも呼んでおこうか」

『幻想猛獣』……。なるほど、なかば分かっていたましたが、生物ではないようですね。

木山の話は、続く。

「『レベルアップ幻想御手』のネットワークによって束ねられた一人のAI M 拡散力場が触媒になって生まれ、学園都市のAI M 拡散力場を取り込んで成長しようとしているのだらう。そんなモノに自我があるとは考えにくい、ネットワークの核であった私の感情に影響されて暴走しているのかもしれない」

隣で初春が、「なんかカワイソウかも……」と呟きました。

まあ、わからなくもありません。恐らくはあの胎児も苦しんでいるでしょう。一人もの『劣等感』に苛まれ、それに突き動かされるように力を振るう。

それは、確かにカワイソウなことなのでしょう。でも……いえ、だからこそ。

「アレは、どうやったら倒せますの？」

「……ハッ。それを私に聞くかい？ 今の私は、研究員でも教師でも、ましてやまともな大人ですらない。ただの犯罪者だ。そんな私が何を言ったところで、信用されるわけが」

「御託はいいのです。いいですか、木山先生。あなたには、義務とそして責任があるんです。あれを形作っているのが一人のAI M 拡散力場でも、あれを『生み出したのは』あなた。なら、その後始末をするのは、あなたの役目ですよ」

「……………」

「それに……………」

「？」

わたくしは言葉を切つて、隣で何か言いたげな初春を見る。それが合図だとわかったのか、初春は頷いて口を開きました。

「木山先生。私は、木山先生の言葉を疑ったりしません。だって木山先生は嘘をつきませんから」

「……………」

一点の曇りもない瞳でそう言う初春を見て、木山は目を見開いた後「はあ……………」と溜息をつきました。

それから、

「…………預けたものは、まだ持っているかい？ アレが『幻想御手』のネットワークが産んだ怪物ならば、ネットワークを破壊することで止まるかもしれない。試してみる価値ぐらいは、おそらくあるだろう」

その言葉に、初春が慌ててポケットから何かを取り出す。

これは…………ICチップ？

「初春。それは…………？」

「『幻想御手』をアンインストールする、治療用プログラムです！

これがあれば…………！」

初春が顔をほころばせる。

確かにこれなら、いけるかも知れませんね。なら、早速 あれは？

「警備員の応援ですわ……………」

ファンファンとサイレンの音が頭上から聞こえてき始めました。まったく、対応が遅すぎますわ！

とはいえ、こちらにとつては好都合。これでアンインストールデータの散布が楽になります。

「行きますわよ、初春！ わたくしにつかまりなさい！」

「はい！」

初春が手を握ったのを確認して、テレポートしようとする。

しかし、その前に初春が、「ちょっと待ってください」とわたくしを引き止めた。

「木山先生！ ありがとうございます！ それから、変な考え起こしちゃダメですよっ」

それを聞きおえたわたくしは、初春を連れて道路上にテレポートしました。

木山春美が

「……まったく。根拠も無く人を信用する人間が多くて困る」

そう呟いていたことは知らずに。

* * *

「ハツ……ハツ……あークソ。キリがねえ」

「はあ……はあ……何よ、錬夜。息上がってんじゃない？」

「うつせ。そりやお互いさまだろうが。……それに、例え体力が切れても、退くわけにはいかねえ『理由』があんだろ」

俺は、チラリと後ろを振り返る。

そこには、市街地から隔離された『とある施設』がある。そして、その施設の名は

「まったく、冗談じゃないわ。なんだって、原子力実験炉なんて狙ってんのよ!」

「俺が知るかよ。とにかく、ぜってえあれだけは守らねえとな」

飾利と黒子が木山先生と話しているのを見かけた俺達は、再び戦闘を開始した。

その最中、警備員の意識を取り戻した連中が、化け物に発砲を開始した。しかし、あいつが自らを攻撃したものを標的にすることはわかっていた。だから美琴に警備員を助けに行かせ、俺は流れ弾が飾利たちに行かないように、攻撃を弾いていた。

そして戻ってきた美琴から、「あの化け物が向かう先には、原子力実験炉がある」と聞かされた。

「ってヤベ!？」

俺が回想していると、化け物が数多の氷の柱を宙に生み出し、それを俺達に放ってきた。

俺は土から生み出した壁で、美琴は砂鉄を周囲に展開して、それぞれ防御した。

「マズいな……！ このままじゃこり押しされて、いずれ抜かれちまう。そうすりゃ、あいつは実験所まで到達するぞ！」

「二人がかりで足止めも出来ないなんて……！」

「言うなよ。相手は、あのデカさであの能力でおまけに不死身ときたもんだ。実際問題、『倒せる』相手じゃねえよ」

泣き言になるかもしれないが、これは本当の話だ。

何やつても、まるで止まらない。どころか、攻撃すればするだけ何故か巨大化していく。つたく、こんな厄介な赤ん坊を生み出すんだ、先生はどんな母親だよ？

ズズズツ

「チツ！ また動き出しやがった！」

ジリ貧になっちまうが、しかたねえ。やれるだけのことはやらねえと。

俺がそう思い、掌を合わせると

『

』

突如、不思議な　　まるで、五感に訴えてくるような　　メロデ
イが流れてきた。

「なんだこれ……？　歌、なのか？」

「今はそんなのに構ってる暇はないわ！ 効かないのはわかってる
け……ど！」

声を張り上げ、美琴が前髪から雷を飛ばす。

それは、光の軌跡を描きながら、化け物の触手にぶち当たって

そのまま、焼き焦がした。

「ッ！ 再生しない！？」

なんでだ？ 今までまったく効かなかったのに……ハッ！

「もしかして、この曲のお陰なのか？」

「そうだ」

俺の言葉に返ってきた声の元を辿ると、つらそうに歩いてくる木
山先生がいた。

「そうだ」ってこの人、なにか知ってるのか？

「なあ、先生。一体、この歌はなんなんだよ？」

「これは、『幻想御手』のアンインストールデータを音楽化したも
のだよ。本来は昏睡状態の使用者たちを起こすためのものだったん
だが、どうやらアレにも有効らしいな。花飾りの少女と白井君が上
手くやってくれたらしい」

「ッ！ あいつらが?!」

先生が上空に位置する道路を指差す。どうやら、あそこに二人はいるらしい。

俺はその先生の指につられてそちらを見ると、人影が見えた。

それは、飾利と黒子の人影

『ではなく』。

「……え？」

なんで、あの人がここにいるんだ？

* * *

S I D E 初春飾利

白井さんにレポートされて道路の上に降り立った私達は、当然警備員に発見されました。

「おい！ なんでこんなところにいる?! 早く、避難するじゃん」

「お言葉ですけど、わたくしたちは警備員あなたたちに用があって来ましたの。決して、逃げ遅れたわけではありませんわ」

お尻までのびたロングヘアを揺らしながら怒鳴る警備員さんに、白井さんは臆することなく返しました。こういったところが、彼女の強みなんです。

「私達に用事……？ ふむ。こんな状況で冗談を言うとは、思えないじゃん。それでその『用』ってのはなんなんじゃん？」

「それは 初春！」

「は、はいっ」

白井さんの言葉に頷いて、私は慌ててポケットからチップを取り出します。それからそれを警備員さんに見せ、事情を話しました。警備員さんは、つまり、と前置きして、

「これを学園都市中に流せば、あの化け物を倒せるってことじゃない？ なら、私に任せておくといいじゃん。お前らは引き続き、アレの相手をしている！」

部下に指示を飛ばした彼女は、「付いてくるじゃん」と私達を促す。

それに従い、私達は警備員が乗ってきた一台の装甲車に乗り込みました。

中に入ると、彼女は既に誰かと通信していました。

「ああ、そうだ。今から転送する音声ファイルを、あらゆる手段を使って学園都市中に流せ。責任なら私が取るから、今すぐ なん だど！？」

私達が見守っていると、彼女がいきなり激昂し始めました。

私と白井さんは、何事かと顔を見合わせます。

「情報の信憑性が薄いから許可できない、今から上に報告して判断を仰ぐ、だど！？ ふざけるな！ そんな悠長なことをしている間

に、『二人の生徒』が危険に晒されてるんだぞ！ それだけじゃない、昏睡状態になってる子供たちだって、いるんだぞ?!」

信憑性が薄い……たしかに、普通に考えたら、そうかもしれない。なにせ、それを渡したのは木山先生はんにんなんですから。

「ど、どうしましょう、白井さん!？」

「クツ。仕方ないですわ、初春！ このパソコンを使って、あなたが直接」

その言葉が終わるより早く。

車内に、聞き覚えのある声が響きました。

「まあ、待て。白井に、初春。ここは一つ、己に任せておけ」

その声の主は……、

「「お、鬼狩おにかり支部長!？」」

なんで、支部長がここにいるんですか?!

「その話は、今はいいだろう。今はこちらの方が重要だ。どれ、ご婦人。少々己に替わってくれんか？」

「な!?! お前、誰」

警備員の言葉が終わる前に、支部長はのしのと通信機の前に陣取る。

それから重々しい声で、話し始めました。

「すまんが、君。今すぐ先ほどの要求を呑んでくれないか？ 事は一刻を争う。どうしても無理だというのなら、鬼狩元狼げんろうの名を出せ……聞こえんのか？ ならば、率直に言っただけでやろう。貴様が底辺の部署に飛ばされたいのなら、断れ。そうでないのなら 潔く受け入れんかあ！」

そういうと、支部長はくるりと振り返り、

「初春。後はお前に任せた。早急に、音楽データを送信してくれ」

「は、はいっ！」

私が返事を返すと、支部長は再びのしと外へ出来ました。

正直な話を言えば、今の会話、すごく気になります。だけど

「わかっていきますわね、初春。今わたくしたちがやるべきは、詮索ではありません。早く、転送を開始なさい」

「はい！」

勢いよく答え、私はデータの転送を始めました。

* * *

S I D E 鬼狩元狼

「……………」

装甲車から出た己は、そのままガードレールまで寄って行った。少し離れたところで、御坂美琴と桜咲が戦っているのが見える。ふん。なかなかアイツも頑張っているようだな。

しばらくそうしていると、ふいに桜咲がこちらを見た……気がする。なにぶん距離があるから、詳しくはわからん。

「……………まあ、聞こえとらんだろうが、頑張れよ桜咲。お前なら、やり遂げられるだろう」

聞こえぬ激励を飛ばし、己は再び、行くべき場所へと足を向ける。それから、少し歩いたところで

「これも予想の内か？ アレイスター」

そう、呟いた。

第十五話 Round 2 (後書き)

ご意見・ご感想、お待ちしております！

第十六話 決着（前書き）

やっと……やっと終了しました、幻想御手編！ ここまで付き合っ
てくださったみなさま、真にありがとうございます！

今回、いつもより長くなってしまいました。終わり方が原作とは大
分異なってしまったので。いや、正直言えば錬夜を活躍させたかっ
たんです（汗）

そんなこんなで完成しました、第十六話『決着』。楽しんでいただ
けたら、幸いです！

総合1100ptオーバー！ 皆様、ありがとうございます！

第十六話 決着

「あれは……支部長？」

俺が、見えた人影に抱いた疑問を口に出すと、美琴の叱責が飛んできた。

「錬夜！ 何、ボサツとしてんの！ 何か知らないけど、今がチャンスよ！」

「ッ！ わーってるよ！」

なぜこの局面で支部長が来ていたのかはわからないが、今は後回しだ。

美琴の攻撃でダメージが入ったということは、あいつの再生能力がなくなったということ。それなら後は、叩き潰すだけだ！

「行くぜ、美琴！」

「もっちろん！」

俺はパシンと両手を合わせ、その掌を地面に押し付ける。

その隣では美琴が化け物の触手を掴み、能力を^{ちから}ブチかました。

バリイ！ バチバチバチバチ！

触手を伝って流れた電流は、化け物の体表を黒コゲにした。いくらあいつでも、これを喰らえばもう限界だろう。

だが 念には念を、だ！

ズガン！

先生の叫びが聞こえた瞬間、俺達は勘にしたがってその場を飛びのいた。

するとその刹那の後に、俺達がいた場所目掛けて、黒コゲの触手が飛んできた。

って、オイオイオイオイ！

「冗談だろ？！　なんでまだ生きてんだ、あの化け物は！　あんな連撃喰らって生きてる生物なんて、普通いねえだろ！」

「普通なものか。アレはAIM拡散力場の塊、生物の常識の外にいる。体表をどれだけ焦がして潰そうが、その本質には何の影響もないんだ」

「チツ！　なんつーデタラメな……」

じゃあ、何だ？　結局あいつは倒せないってことか？

俺がどうするべきか思索していると、美琴が口を開いた。

「なんか……なんか無いの?!　あいつを倒す方法！」

先生は一瞬思索するように顎に指を沿え、

「……おそらくだが、やつはどこかに、力場の塊を自立させている核のようなものがあるはずだ。それさえ破壊できれば」

と、先生がそこまで言ったところで、

『 k g 苦 s n k 憤 d d k n r 歎 y j t n j w 羨 k i 遭 b g

「……………」

……なんだよ。結局こいつだつて被害者じゃねえか。

勝手に生み出されて、訳も分からず攻撃されて、そしてその身の内の憎悪にのた打ち回る。

そんな状態が 今のこいつだ。

「……………はあ。ならもつ、『救つてやる』しかねえよな……………」

「同感ね」

俺達は顔を見合わせ、苦笑する。

こいつが楽になるためには……………ぶつ倒すしかねえ！

「さつてと。とりあえず先生は下がっててくれや。ここにいちや危ないから、さ」

「構うもんか！ アレを生み出したのは私だ！ その私には、『義務と責任』がある！」

「アンタさあ、その責任つてやつはアンタが死ぬことを言ってるの？ だったらそれ大間違いだから、やめときなさい。アンタが本当にやんなきゃいけないのは、生きて教え子達に会う事。違う？」

「それは……………」

思うところがあるのか、先生は口ごもった。多分、自分でも本当はどうすればいいのか分かってるんだらう。だけど、罪悪感からそ

れが出来ないでいるんだ。
なら

「あーもう！ ごちゃごちゃ言うのはやめろよ、先生。あんたは教え子に会いてえのか？ 会いたくねえのか？」

「ッ！ 会いたいじゃ決まっているだろう？！ そのために私は、この街を敵にまわしたんだ！」

「だったら、すっこんでろ！」

俺の言葉に、先生はビクリと震える。
俺はそれを見て、続けた。

「あんたがやるべきことは、あの化け物を倒すことじゃない。教え子を救うために、新しい方法を模索することだ。なら、あいつは俺達に任せろよ」

「……………」

先生は僅かの逡巡の後、数歩だけ後退してくれた。

ふう。まあ正直あんまり変わんねえが、多分あれ以上はテコでも動かないだろう。なら、先生に被害がいかないように気をつけねえとな。

と、そこまで考えたところで

ヒュンッ！

「お姉様！ 錬夜！ 無事ですよ?!」

「お、黒子。元気そうで何よりだ」

俺達の元へテレポートしてきたのは、当然ながら黒子だった。推測だが、アンインストールルデータの放送が終わったんで、応援に駆けつけたんだろう。

ま、それはともかく、役者は揃った。これで

「さあって、お前ら。佳境だ。ビシッと決めるぜ？」

「言われなくてもそのつもりよ」

「お姉様と同じ、ですの」

ハッ。いい返事なこった。

そんじゃあ、一丁

「行くぜッ！」

* * *

「こん中で一番破壊力があんのは、美琴だ！俺と黒子が出来るだけダメージ与えるから、最後はお前が決める！」

「りょーかいつ！」

「わかりましたの！」

さってと。そんじゃあまずは、攻撃方法の確保だな。

水の弾丸や水流はいかんせん、攻撃力が乏しい。故に、もつと強力な技がいる。

そして俺が選んだのは

「先生！ あんた、ライター持ってねえか？！」

「ライター？ 持っているがそれが」

「俺に、貸してくれ！」

突然の俺の懇願に、先生はいぶかしみながらも懐からライターを取り出し、俺に放つて来る。それをキャッチしてから、軽く上に投げ、それが落ちてくる前に手を打ち鳴らす。

やっぱり、錬金術師になつたんならこれをやんなきゃな？

「技あ借りるぜ、焰の錬金術師！」

パシンツ シュボツ！

落ちてきたライターを手に取り、そのまま打ち石を鳴らす。

対象を燃焼物に設定、空気中の酸素濃度を調節、そしてライターで点火する。

一瞬、光の筋のようなものが化け物へと奔り

ドガアアアアアアンツ！

強烈な爆炎と化して、化け物を襲った。

「おースゲエ……。これが焰の錬金術か……」

予想外の威力だ。

なんてことを思っていたら、次々と鉄板が化け物の触手を断ち切った。黒子がレポートで転移させたらしい。レポートは対象を押しつけて転移ができるから、今と同様の方法で紙切れ一枚あればダイヤモンドも切断できるのだとか。

まあそれはともかく

「今だ！ 得意のレールガン、ブチ込んでやれ！」

「任せといて！」

キーン パシッ

澄んだ音を立てて舞い上がったコインを、美琴は掴む。
それを腕を突き出して構え

「 こんなところで苦しんでないで、とつとと帰んなさい」

ドゴオンッ！

打ち出された光の奔流は、軌跡を描きながら一直線に伸びていく。それは、全てを終わらせる幕引きの合図だ。学園都市の超能力者（レベル5）が放つ、圧倒的な力を持った矛だ。
そして、それは化け物の体を貫く

『ことはなく』。

バシイイイイイイイイイ！

した。

『幻想猛獣』を中心として、半径数十メートルにわたったクレイターが出来上がっていたのです。原子力実験炉に届かなかったのは、不幸中の幸いでしたが。

いえ、そんなことよりも……、

「み、みんなは……！」

あれだけの爆発、近くにいたら助かりっこない！

私は情けなくおろおろと慌てて　そして、唐突に思い至った。

「……あ、」

確かに、普通なら助かるわけがない。

だけど……あの場には『彼』がいる。いつだって、みんなを助けてくれた『彼』がいる。

ならば。

私はその気持ちに突き動かされるように、『彼』の名を呟いた。

「錬夜君……」

* * *

SIDE 錬夜

「ハッ……ハッ……ハッ……ハッ……」

断続的に漏れる吐息は、他の誰でもない俺のものだ。

俺は荒野となった大地に、両手を突き出した状態で立っている。背後にはなんとか守りきれた三人が、倒れている。

「お、前ら……無事か？」

問いに、頷きが三つ返る。どうやら、重症を負ったものは一人もいないらしい。

……あの時。

奴が大爆発を引き起こしたその直前、俺はみんなが寄つたのを確認すると、手を合わせ走り出しながら突き出した。

既におなじみとなりつつある、『爆発を避けるように作り変える』回避方法で、ギリギリ事なきを得た。

が。さすがにあの規模だと爆風や熱波の影響で、俺はもちろんのこと、美琴たちもダメージを負ってしまった。

「ク、ソ……。どういうことだ、あのスーパーバイビーは。美琴のレールガンを弾くなんざ、どんなボディしてんだよ」

吐き捨てるようにそう言った俺に、先生が反応した。

「違うな。あれはおそらく、力を集中させて、強固な誘電力場を張つたんだ。広範囲の電撃を長時間与え続けるならともかく、瞬間的で一点狙いのレールガンだからこそ、やつも耐えられたんだろう」

「……チツ。まあ、今更文句言ってもしょうがねえ。早く止めを刺さねえと……」

あれだけの爆発を起こしたからか、今のやつの動きは鈍い。あれならいけるかもしれねえ。

そう思って一歩踏み出してから

ガクリ、と。

思いつきり膝をついてしまった。

「畜生……。限界がきてんな……」

これは最近になって分かったことだが、どうやら俺の錬金術は使いすぎたり巨大なものを造ったりするたびに、比例した体力を消費する。今までもきつかったが、どうやらさっきので限界を向かえちまったらしい。

が。それでも俺はやらなきゃいけねえ。

「お、おおおおおおおおおおおおおおおお！」

無理に両足に力を入れ立ち上がる。

そこに、叫びにも似た声がかげられた。

「錬夜！ 私がやるから、アンタは休んでなさいよ！ アンタ、私たちを守ったときに相当ダメージ受けてるでしょ?!」

「そうですねわ！ これ以上無茶を続けたら、後でどうなるかわかりませんわよ!？」

「……美琴。お前は、さっきのレールガンで電池切れだろ。黒子もずいぶんレポート繰り返し返して、そろそろ演算も限界に近いだろ」

「それは……」

バツが悪そうに口ごもる二人。

バカ野郎、バレバレなんだよ。お前らも限界だつてことぐらい、な。

「だったら、俺がやるしかねえだろ。ビシッと決めてやつから、そこで大人しく」

「一つ、いいかい？」

俺の言葉を遮ったのは、先生。

そちらに目を向けてみれば、真剣な瞳をした先生が、俺を見つめていた。

「……なんだよ先生」

「君は……なぜそこまで頑張れる？ 君が風紀委員ジャッジメンに入ったのは、つい先日。正義感や責任感で動いているわけじゃないだろう？ それに正直な話を言えば、あとは警備員にでも任せて逃げることで済むんだぞ？」

「……………」

俺の戦う理由……か。

そんなもん たった一つしかねえよ。

「……俺は、さ。まだ救えてねえんだよ」

「？」

「救いたい奴がいる。救わなきゃならない奴がいる。それに、『救われなきゃならない』奴らもいる。一人には必ず救うと誓ったし、

それ以外の連中だつて、きつと救われてしかるべきなんだ。そんな連中を　俺はまだ一人だつて救えてねえ」

「……………」

「だから、ここは退けない瞬間とぎで…………だから、それが退かない理由わけだ」

脳裏に浮かぶのは、『あいつ』との会話。

『お前は絶対に　助け出す』

『…………錬夜。あと…………よろしくね』

もうちよつとだけ、待つてる。絶対に俺が、お前『ら』を助けだしてやる。

拳を固く握り決意を新たにする俺に、先生は溜息で答えた。

「わかったよ。ならもう、無理するなどは言えないな。君も、私と同じ種類の人間』なのだから」

「ああ。あんたと俺は似てるよ」

自分が守りたいものを、全てを賭けて守り抜く。

俺もあんたも、多分根っこでは似たもの同士なんだろうぜ。

「　　っし。そんじゃあ…………黒子！」

「な、なんですの？」

会話に入り込めず、少しぼうつとしていた黒子が、慌てて返す。
それに苦笑しながら、俺は言った。

「最後のお願い……聞いてくれるか？」

* * *

「それじゃあ、行きますわよ……！」

「頼む」

黒子は俺の背にそっと手を触れ、瞳を閉じて意識を集中させる。
「ごめんな、黒子。無理させちゃまって。」

「構いませんわよ」

「ッ！？ 俺、今、口に出してたか？」

「それはもうバツチリと。けど……どのみち、そんなようなことを
考えるとは思ってましたわ」

「敵わねえなあ、お前には……」

「ふふつ。それじゃあ錬夜 行ってきなさい！」

「コン！」

瞬間、様変わりする景色。後に、俺の体は急激な落下を開始した。

俺が黒子に頼んだのは、化け物の上空へのテレポートだ。つまり俺は今、やつの上目掛けて降下していることになる。そして、俺が取った行動は

「お、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

パシンッ！ バシイイイイインッ！

落下しながら俺は、『風』を圧縮していく。

風を、集めて延ばして薄くする。それはまるで、風で出来た一枚の刃のように、どんどん鋭さを増していった。

カマイタチにも似たそれを、俺は掴んで思いっきり振り下ろした。

ズプリ、と。

容易に化け物の頭頂に滑り込んだ風の刃は、勢いを加速させながら、化け物を縦一文字に切り裂いていき

ガキンッ！

突然、固い感触と共に、止まった。

こいつが 『核』か！

「らあああああああああああああああああああ！」

その強度に負けないように、俺は叫びを上げながら、さらに力を込めていく。

ちよつとずつだが、刃は沈み込む。あと……少しだ！

「お、れは……負けらんねえんだよ！ てめえが奪った友達^{モン}取り返

すまで
「

ビシリ。

「負けてたまるかあああああああああああああああああ！」

パキイイイイイイイインツ！

澄んだ音を響かせて、おそらく『核』は砕け散った。

同時に、化け物の形は崩れ、やがてその姿は空気に溶けていった。そして俺はといえば、重力に従って落下していき

「よっ！」

パンツ バシン！

地面に激突しかけたところで、空気を固めてクッションを造り、ことなきを得た。いやあ、高速道路から落ちかけたのがいい経験になった。そりゃ、大分衝撃はきたが。

「ダメだ。もう力入んねえ……」

あーやっぱ、もう限界だな。指一本動かねえ。

どうしようか……このまま寝るか？ なんて思って少し首を傾けると

「あ……………」

多分相当キツイだろう美琴と黒子、それにいつの間にも下りてきたのか飾利が、こちらに駆け寄ってくるのが見えた。

……ふう。

「俺、勝ったぜ。美琴、黒子、飾利　涙子」

* * *

S I D E　木山春生

「……まったく。なんて子だ、彼は」

わいわいと騒ぎあう桜咲君らを見ながら、私はそつと息をついた。なんだか、体の力がいつぺんに抜けた気分だ。

もちろん、私はあの子達を諦めるつもりは毛頭ない。しかし……、

「少しだけ、スッキリしたよ」

彼らには、とても大切なことを教わった。

私のように歪むことなく、真つ直ぐに困難を打ち破る。そして、たとえ転ぼうともまた立ち上がる。もしかしたら、私に足りなかったのはそういうところだったのかもしれない。

考えてみれば簡単な話だ。あの時……あの子達が犠牲になったとき、私は一度諦めてしまった。あの時すぐに立ち上がったのなら、もっと違った結末もあったかもしれない。

百回失敗したら、百回起き上がる。千回失敗したら、千回這い上がる。

「どうやら、願いを叶える一番大切なことは、『諦めない事』らしいな……。
もしかしたら、彼なら

「桜咲錬夜君……君なら、『彼女』の絶望も打ち破れるかもしれないな」

そう呟いて、私は彼らの元に歩き始めた。

* * *

S I D E 錬夜

「んで、先生。あんた、これからどうするんだ？」

先生がこちらに近寄ってきたことに気付いた俺は、彼女に問いかけた。

それに対する答えは、実に先生らしいものだった。

「当然、私はあの子たちを諦めない。もう一度最初からやりなおすさ。理論を組み立てることなら、どこでもできる。なぜなら」

先生は、珍しく微笑を浮かべて、

「刑務所の中だろうと、世界の果てだろうと、私の頭脳は常にここにあるのだから」

……へえ。

「……ハッ。カッコイイ答えだな」

「君も十分格好よかったさ。きっと将来、いい男になるだろう。お姉さんが保障してあげよう」

「そりゃどーも」

俺達は二人で笑いあう。

……もしかしたら、この人はまた子供たちのために事件を起こすかもしれない。だけど、今はこういうのもいいんじゃないか？
それに

「今度は無茶すんなよ、先生。するならまず、俺に相談しろ。危ねー橋は渡らねえ主義だけど、アンタを助けるぐらいはしてやるさ」

「……そうだな。その時はお願いしよう」

先生がスツと差し出してきた手を、握り返す。

と、そこで三人でじゃれあっていた美琴が口を開いた。

「それにしても、脳波のネットワークを構築するなんて、突拍子もないアイデアをよく実行に移そうなんて思ったわね？」

「言われてみれば、そうですね……。よほどの想像力と技術力が必要じゃ出来せんわ」

「木山先生は天才さんだったんでしょ？……？」

三人娘の疑問の声に、先生はしばし沈黙で答える。

それから、ゆっくりと口を開いて、

「複数の脳を繋ぐ電磁的ネットワーク。『学習装置』テストメントを使って、整頓された脳構造。これらは全て、御坂君。君から得たものだ」

「は？ 私そんな論文書いた覚え、ないんだけど」

「そうじゃないさ。君には君の、私と同じ……あるいは私以上の『絶望の運命』が待っているということさ……」

「？ ちょっと、それどういう意味よ？」

先生はそれには答えず、今度は俺の方を向いた。

「それから、桜咲君。君も気をつけた方がいい」

「あ？ 俺？」

「ああ。学園都市の第三位でさえ倒せなかった化け物を、結果的には君が倒したということ。それから、君の類まれざる能力。さらには、君がこの学園都市に『戻ってきた』経緯。すべて」

と、そこまで言ったところで、

キキィッ！
バタンバタン！

今まで忘れていた警備員たちが、やってきた。

「木山春生だな？ 今回の事件の犯人ということで、アンタを逮捕するじゃん」

「あ、黄泉川さん。随分来るのおそいな」

「仕方ないじゃん。あの化け物に人員のほとんどをやられて、加えてアンインストールデータの散布に協力してたんじゃん」

ふーん。まあ、そういうことなら仕方ないか。

俺との話を切り上げた黄泉川さんは、木山先生を護送車に連れて行った。

そして、それに乗り込む寸前、先生が俺を呼び寄せた。

「さっき言いかけたことだが、忘れてくれ。あれはただの推測にすぎないからな」

「なんだよ、そんなことか。べつつに気にしてねえから、大丈夫だぜ?」

「君らしいな。……じゃあ、もう一つの用事を済ませよう」

「? もう一つの用事ってなんの」

言いかけた俺を遮り、先生がいきなり顔を寄せてきた。そして

チュッ

頬に、柔らかい感触が生まれた。

………って!

「「「「んなっ!?!」「」「」

俺と三人娘の声が重なる。
いきなりなにすんだこの人！

「はははっ！ お礼だよ、桜咲 いや、鍊夜君。受け取っておきたまえ」

「おい、ちょっと待て」

俺の制止もむなしく、護送車の扉は閉められ、車は発進してしまっただ。

……以前も似たようなことを言ったが、運転手の黄泉川さんの顔がムカついたことを追記しておく。

あの人、ニヤニヤ笑いながら見やがって……！

「……はあ。まったく、困った人たちだよなあ。お前らもそう思……
……わねえ……か……」

「……」

な、なんだこいつら。なぜ三人そろって俯いているんだ！？
怖い！ 果てしなく！

「あ、あははは。な、なんだよ、お前ら。暗えな、オイ。せつかく事件が解決したんだから、もっとパアツと」

「……鍊夜（君）……」

「……なんでごうざいましてっ？」

あーなんか、あれだな。嫌な予感しかないんだけど。
はい、予感的中まで、3、2、1、

「「「どういふことか説明しなさいっ!」「「「

「やっぱりかよおおおおおおおおおおおおおおおおおお!」

あーもう、なんだこの状況!

俺は嘆いて、空を見上げる。

茜色に染まった空には、一番星が輝いていた。

第十六話 決着（後書き）

いかがでしたでしょうか？ 幻想御手編のラストに相応しい話になりましたでしょうか？

『百回失敗したら』は言わずとした当麻の名台詞ですが、つい使ってしまった。個人的にすごく好きなので。

それでは、ご意見・ご感想、お待ちしております！

どなたか、アニメ版『超電磁砲』であった、盛夏祭やあすなる園などのオリジナルストーリーの時間軸を教えてくださいませんか？

第十七話 プール掃除（前編）（前書き）

おひさしぶりです、みなさん。読んでくださっている方に申し訳なくなるほど、ひさびさの更新です。いろいろ事情があったのですが、言い訳になってしまっているのでそれは書きません。

さて、それは置いておいて、今回が幻想御手終了後の本編一話目です。本当はこの一話で話がまとまるはずだったのですが、なんだかんで長くなりそうだったので、二話構成になりました（汗）

総合1400ptオーバー！ みなさん、ありがとうございます！

第十七話 プール掃除（前編）

七月二十五日。

「ねえ、マジで言ってるの？」

「ま、まあまあ、錬夜。ここは一つ、友達を助けると思って」

「そ、そうですね。だからそんな怖い顔はやめてくださいな」

取り繕うように笑いながら、そう言う美琴と黒子。

俺はそれに、はあ、と溜息をつき、

「……別にな。俺だって、友達おまえらが困ってるなら、手を貸すぞ。お前らとの付き合いも、他人といえねえところまで来てるしな。……だけど、さ」

そこで、俺は周りを見渡す。

夏らしく抜けるように青い、広大な空。

その空を漂う、白い雲。

こちらを見ている、美琴と黒子の顔。

「そして……」

男子禁制 常盤台中学のプール。

「……これはないわ」

* * *

一時間前。

「うーあー……、なんもやる気しねー……」

幻想御手事件が帰結をみた、その翌日。

俺は自室（クーラー作動中）で横になっていた。前日……というか、連日の疲れがどつとでてきて、体中が倦怠感に包まれていたからだ。

限界以上まで力を使った代償は、思いのほか出ていたらしい。家に帰った瞬間、ぶつ倒れてしまったからな。

「つつても、まあ、一件落ち着いたからいいんだけどさー」

ぼやくように呟いてから、ごろんと寝返りを打つ。はあ、なんもしなくていいって幸せだ。え？ 風紀委員の仕事？ ……まあ、それは置いといて。

と、そんなことを考えていたら、

ピンポーン

「んあ？ 誰か来たのか？」

のそのそと起き上がりつつ、玄関に向かう。これで勧誘だったら、どうしようか？

なんてことを危惧しながら、ガチャリとドアを開ける。

そこに立っていたのは

「おはよう、錬夜！ さあ、あたしの快気祝いに付き合ってくれたまえー！」

「ご、ごめんなさい、錬夜君。いきなりおしかけちゃって……」

「……いや、いいけどさ」

にやははと笑う涙子と、申し訳なさそうに眉根を寄せる飾利を見ながら、腕を組む。

つか、

「涙子、お前、体調はもういいのか？ まだ、昨日の今日じゃねえか」

そう、涙子が目を覚ましたのは、昨日の夕方。つまり、まだ意識を取り戻してから、数時間しか経っていないということだ。

それなのに歩いて、大丈夫なのか？

「んー？ だーいじょうぶ、大丈夫。『骨休みだと思ってゆっくり寝てた』だけだからねん」

「……ああ、そうかい」

「?????」

首を捻る飾利を置いてけぼりな会話だが、こればかりは俺達しか知らないことだ。

あの、涙子が倒れる直前の電話。あの時確かに、俺はそう言ったっけな……。

「　　っと。それで、快気祝いだったか？　付き合つのは構わねえけど、どこ行くんだ？」

「『Joseph's』！　あそこの新作パフエ、食べにいこつ」

「へいへい。ちょっと、待ってる。着替えてくつから」

そう言つて、俺は一度ドアを閉めた。

体の疲れは　　いつの間にか、消えていた。

* * *

「そついや、今更だけど、飾利の私服つて珍しいな」

「そ、そうですかね？」

『Joseph's』　ファミレスに向かう最中、俺はそんなことを呟いた。

飾利の今のファッションは、頭の花飾りはいつものこととして、随所にレースが付いた淡い黄色のコットンワンピース。普段が制服姿なだけに、新鮮味がある。

ついでに言つておくと、涙子のファッションは、三段フリルのキヤミソールに、下はハーフパンツ。フィンコンフォートサンダルと相まって、夏らしい涼しげなファッションだ。

俺？　俺は基本制服だな。私服買いに行くのが面倒なんだよ。てか、最近はその暇もなかったし。まあ、暇になったら見に行くのもいいけど。

「今日は昨日の事件が片付いたので、非番なんです。だから、せっかくのお休みぐらい、私服にしなさいって佐天さんが」

「なんだ、涙子の仕業だったのか」

「だって初春ったら、普通に制服で来ようとしてたんだよ？ 夏休みのデートのときぐらい、女を見せなくてどうすんのって感じじゃない？」

「デートって、お前……」

そんなこんなを話していると、いつのまにやらファミレスに到着。三人連れ立って自動ドアをくぐると、クーラーの涼しげな風が、体を撫ぜた。

そしてその数秒後、茶髪をアップにしたウエイトレスさんがやってきた。

「いらっしゃいませ！ 何名様でしょうか？」

「三人です。席は、禁煙席でお願いできますか？」

「かしこまりました、こちらへどうぞ」

ウエイトレスさんの指示に従い、窓際にある四人掛けの席へ。席順は、当然のことながら、片側に涙子と飾利、向かい合う側に俺と言う順番だった。

座り終え、口を開いたのは涙子だった。

「鍊夜って、基本は礼儀正しいよね」

「基本はってなんだよ？」

「だからさ。さっきのウエイトレスさんのときみたいに、初対面で年上の人にはだいたい敬語じゃない？ けど、しばらくしたら敬語が取れるじゃん。だから、基本的ってわけ」

「そういえば、そうですね。固法先輩とかにも、今じゃ普通にタメ口ですし」

「あー、まあそうかもな。なんとなく、ちょっと親しくなるとあんまり敬語は使わねえかな」

これはもう、昔からのクセだな。

「つか、そんなことより、パフェ頼まねえのか？」

俺がそう言うと、涙子はパチンと手を叩いて、

「あ！ そうだった、そうだった。 店員さん！ 新作の、『激辛マグマパフェ』ハバネロとキムチのガチンコ勝負編』一つお願いしまーす！」

「ちょっと待て正気かお前?!」

* * *

さすがにそれはねーよ、となんとか説得し終え、普通にフルーツ

パフェを三人で注文した。

そしてそれをパクついている最中、俺の携帯が鳴った。

「あれ？ 鍊夜君、携帯鳴ってますよ？」

「お、ホントだ。相手は……黒子？」

なんだろう？ 風紀委員を無断でサボったのがバレたか？

無視しようか出ようかひとしきり悩んで、結局出ることにした。

もし後で居留守を使ったことがバレた場合、おそらく酷い目に遭う
(主に俺の体が)。

ピッ

「よお、黒子。なんか用か？」

『あ、鍊夜ですの？ 実は折り入って、頼みたいことがあるのです
が』

「頼みたいことお？ お前が？ 俺に？」

『ええ。もし差し支えなければ、今から「学舎の園」の正面ゲート
に来て欲しいんですの。』

「学舎の園」？ なんで？

「いや、なんでだよ？」

『ですから、ちょっとした仕事を頼みたいんですの。このままでは、
黒子と美琴お姉様は、オシオキスパイラル罰地獄に……ああ、考えたら頭に光景が浮か

んできましたわ。プール掃除が終わらなければ、次の罰。それが終わらなければ、また次の罰……エンドレスですのおおおおのおお！』

「ッ！ 痛ウ~~~~~！」

っの馬鹿！ いきなり叫びやがって……鼓膜がイかれるかと思っただぞ！？

「ああもつ、ちょっと黙ってる！ 今考えるから！」

返事も聞かず、スピーカーを下にして、携帯を椅子の上に置く。それから、涙子たちのほうへと向き直った。

「あー、悪い。なんか、黒子が頼みたいことがあるとか言ってきてな。ちよつと行ってやらなきゃなんねえんだ」

「ん、まあ、そういうことなら仕方ないかな？ そんなし、今度なんか埋め合わせしてよね！」

「わーった、考えておく。それから、ここは俺が奢るから。んじゃあ、二人とも、また今度な！」

三人分の代金をテーブルの上に置き、席を立つ。それから、一応店員さんに会計は涙子たちに任せる旨を告げ、ファミレスを出て、夏空の元へと再び足を踏み入れた。

* * *

唐突だが、常盤台中学は、『学舎の園』の一角に存在している。

『学舎の園』というのは、学園都市第七学区の南西部（通常の学校の十五倍ほどの面積）を利用した、一つの『街』のようなものだ。ただし、その内情はちよつと変わっていて、その中に居るのは全て女性のみ。これには理由があつて、この街は常盤台中学を始めとする、五つのお嬢様学校の共用地帯となつているからだ。

とまあ、結局俺が何を言いたいのかといえば、そんな男子禁制のエリアに俺が入ることなんてできないってわけだ。

「で。一応来たものの、どうしたもんかな？」

『学舎の園』。その入り口と呼ばれているゲートの前に俺は立っていた。

ここから先は通常、教員や関係者しか入ることはできない。だから、どのみちここでストップというわけだ。

しかし、来いというから来てみたものの……黒子いねえじゃん。

「つかしいなあ？　なんでいねえんだ？」

しゃーねえ。電話してみるか。

P r r r r P r r r r P r r r r

ガチャ

『もしもし、白井ですの』

「おー黒子。今、『学舎の園』のゲート前にいんだけどさ。なんでお前、いねえんだよ？」

『えっ！？　もう来たんですの？！　ちょ、ちよつとお待ちを！』

ブツッ、という音と共に、通話が切れる。
それから一時経って

ヒュンッ！

「オッス、黒子」

「お待たせして申し訳ないですの」

「ん？ 別にいいよ、んなの」

テレポートしてきた黒子に、ひらひらと手を振って返す。

彼女の出立ちは、いつものように常盤台中学の制服。ただし、サマーセーターはなく、半袖のブラウス姿だった。

おかしいな？ 常盤台は規則に厳しいところらしいから、勝手に制服とか脱いでいいのか？

とは思ったが、多分暑いからいいんだろっな、と適当に結論付ける。それから、俺が呼び出された理由を尋ねることにした。

「んで、だ。わざわざ俺を呼び出したりして、どうしたんだ？」

「えっと、電話でも少し言いましたが、ちょっとしたお手伝いを頼みたいんですの」

「手伝い？」

「はいですの。とりあえず、わたくしについてきてください」

そう言って、黒子はゲートの先へ進もうとする。って、ここか

なにはともあれ、そんな町並みをした『学舎の園』内を進みつつ、黒子に目的地を訪ねた。

「おい。どこいくつもりだよ？」

「すぐにつきます　というより、もう着きましたわ」

「ん？」

ふと視線を向けると、壮麗といった言葉が相応しい外観の建物が目に入った。

えっと……どこだここ？

「ここって……」

「ああ。あなたは見るのは初めてでしょうね。ここは、常盤台中学校。わたくしやお姉様の母校ですわ」

「へえ……」

「ここが、常盤台……。なるほど。噂に違わぬ絢爛ぶりだな。まあ、それはそれとして。」

「んで？　わざわざこんなところまで引っ張ってきて、なにさせるつもりだ？」

「ええっと……とりあえず手を出してくれませんか？」

「ん？　手を出せ？」

疑問には思ったが、とりあえず従ってみた。すると黒子はいきな

り俺の手を握り、申し訳なさそうな声音で

「ちよこつと、『プール掃除』を手伝ってもらいたいんですの

「へ？」

ヒュンッ！

俺を、^{プール}地獄へと引きずりこんでいった。

* * *

とまあ、ここで冒頭に戻るわけだ。

美琴と黒子に、頼むなら頼むでもうちよい礼儀をわきまえろ、とひとしきり説教をしたところで、俺は事情を問い始めた。

そして、五分後

「なるほどな。昨日の事件で寮の門限やぶっちゃったから、寮監に罰としてプール掃除を言い渡された。しかし、到底一日では終わらせうにないため、援軍として俺を呼んだ……と。つまりはそういうことわけだ」

「はい……」

ちよつと説教しすぎたのか、うなだれた二人を見て、そつと溜息を零す。

それから、改めてプールを見渡してから、思った。

「この広さを、たった二人で掃除しろ、か。なかなか無理がありそうだな。この罰にしたのは多分、お前らの能力ちからが使えないからだろうな」

エレクトロマスター テレポーター

電撃使いと空間移動能力者。確かに二人ともすごい能力を持つてるが、能力は万能じゃない。いくらすごかろうが、こいつらはプール掃除においては唯の女子中学生だ。

俺がそう言くと、美琴が肩を落としながら言った。

「そうじゃなかったら、罰になんないわよ」

「だよなあ……………」

ぼんやりと返し、考える。

確かに…………門限、ひいては校則を破ったことは問題だ。だけど、こいつらはこの街を救うために必死で戦った。その結果が、賞賛ではなくプール掃除っつーのは…………。

「……………」

「? 何黙ってんの?」

「暑さで、疲れたんですの?」

「いんや。なんでもねえよ。ま、大変そうだから手伝ってやるよ、プール掃除」

「「本当()ですか?!!」」

おおう、食いつきいいなオイ。

まあ、手伝うことについてはやぶさかじゃない。ちょいと考え付いた方法なら、案外すぐに終わりそうだし。ただ、一つ問題がある。

「ここって、男子禁制だろ？ 一応許可証はもらったけど、それでイコール常盤台に入っていっていいことになるのか？」

そう。この常盤台中学 というよりも、学舎の園に男子は存在しない。タクシーの運転手も女性で、監視カメラは確か二千台を超えるそうだし。

そんな中でもさらに一段階警戒レベルの高そうなプールおれに男がいて、大丈夫なんだろうか？

「ああ、それなら問題ありませんわよ。監視カメラもここにはありませんし、今日は水泳部などで人が来ることはありません。さらに、あなたが来客として来る事を『寮監を通さずに』事務局に申請しておいたので、万が一バレてもあなたに害は及びませんわ」

「ん？ なんだ、寮監を通さずに、って？」

「プール掃除をしているはずのわたくしたちが、来客なんて呼べるはずがないでしょう。バレないようにするのは当然ですの」

「ふーん。ところで、何でここには監視カメラがないんだ？ 溺れたやつを見つけたら、いろいろ必要な感じがするけどな」

「ああ、それには理由があるのよ。昔はちゃんと監視カメラが付いてたんだけど、どっかのバカがその映像データを盗もうと、ハッキングを仕掛けたみたいだね。以来、監視カメラは撤去されたの」

「学舎の園のセキュリティは、そうとう高いって聞いたぞ？ ハッカーごときが破れるのか？」

「んー、ほとんどの人は無理でしょうけど、そっち系の高レベル能力者だったり、ネットで噂になってる『守護神』とか『捕食者』ゴールキーパー
プレイヤークラスの人なら、不可能じゃないわ。だから、念には念をつてわけ」

『守護神』と『捕食者』というのは少し気になったが、メンドイのでスルーしておく。文脈からして凄腕のハッカーっぽいな。飾利の情報処理能力も凄いが、どちらが上なんだろうか？

「ってか、そんなに凄いやつが普通プールの映像データとか盗むか？」

「さあ？ そこらへんの事情は、私たちもよく知らないわよ。前例があったからそうなってるだけじゃないの？」

「ふーん……」

……ま、いつか。そんなことより、さっさと掃除してから帰ろう。そう思い、俺は美琴と黒子に『とある指示』を出した

第十七話 プール掃除（前編）（後書き）

いかがでしたでしょうか？ 久しぶりの投稿なので、イマイチ感覚が掴めません（汗）

それと、学舎の園に関して独自設定として、町自体には許可証の発行があれば男も入っていいということにしました。そうじゃなきゃ、話成り立ちませんしね（汗）

ご意見・ご感想をお待ちしております。

一つみなさんに、質問したいことがあります。現在錬夜は開発を受けずに今の能力を得たわけですが、ここで開発を受けて新しい能力を増やすのはアリでしょうか？ 自分で考えろと言われそうな質問ですが、あまりやり過ぎるのは嫌だという方がいるかもしれませんので、質問とさせていただきます。

第十八話 プール掃除（後半）（前書き）

はい、お久しぶりです。長い間更新することができず申し訳ない気持ちでいっぱいでお送りする、十八話です。

今回でプール掃除のお話は終わりです。勢いで書いてしまいました。が、この話が後の話に生かせるようにしたいです。

総合1700pt突破！ 前回から300近く上がっていたので、驚きました（汗）

第十八話 プール掃除（後半）

十分後。

「おーし、こんなもんでいいだろ」

俺の眼前には現在、存分に水を湛えられたプールの姿がある。つまりは、俺が美琴たちに下した指示というのは、プールの水を張ることだったわけだ。

……いや、ごめんなさい。』とある指示』とか言って、こんな才子で。カツコつけたかっただけなんです。あつ、石は投げないでっ。

「アンタの言うように水張ったけどさあ、これからどうするの？」

「お前、俺が昨日の戦いで水を操ったのを覚えてるだろ？ 『水流使い気取りか』とか言ってたヤツ」

「ああ、なんかあったわね、そんなの。で？ それとこれと何の関係があんの？」

汗を拭いながら首を傾げる。だがその意識がプールに向けられていることは、ちらちら視線をさ迷わせていることから分かる。暑いから入りたいんだろうな。

っと。んなことは今、どうでもよくて。

「その応用で、この水をブン回す。こう、洗濯機みたいな感じで、シュゴゴゴって汚れが落ちる……ハズだ！」

「……………ホントに？」

疑わしそつにこちらを見やる美琴に、固く頷いてみる。

……いや、正直どうなるか知らないよ？ 内心、失敗しそうな気がするとか、少しずつ錬金術で汚れを落とした方が確実じゃね？ とか、でもやっぱ楽しそうだからやりたいとか、これっぽっちもオモッテナイヨ？

「なんで最後片言なのよ……」

「ハイ、心の中へのツツ」三禁止」

呆れたように肩を落とす美琴を尻目に、手を合わせる。

ヤベ、ちよつとわくわくしてきた。小学校のころに、みんなでプールの中を円を書くように歩いて水を回し、水流を作る遊びがあったが、そのときの楽しさを思い出す。

さあて 行くぜ！

「「きやつ！？」」

………きやつ？

突如響いた悲鳴に首を傾げながら、視線をその元へずらす。そして目に入ったのは、二人の女の子。一人はライトブラウンの髪でふんわりしたイメージの女の子、もう一人はどことなく涙子を彷彿とさせる黒のロングヘアの女の子。ちなみに、どちらもスクール水着（だと思つ）の上から白のブラウスを着ているだけだった。

えーと……誰？ っていうか俺がいることばれちゃったけど、大丈夫なのか？！

「あ！ 湾内わんないさんに泡浮あわつきさん！ どうしてお二人とも、ここにいますの？！」

プールの水入れ作業から戻ってきた黒子が、開口一番そう言った。知り合いか？

「おおおい、黒子！ 誰だよ、この二人?!」

「ええつと、一応紹介しておきますが、こちらが湾内絹保わんないきぬほさんで、こちらが泡浮万彬あわつきまあやさんですの。二人とも、わたくしのクラスメイトですわ」

ふむ。ライトブラウンの娘が湾内で、黒のロングの娘が泡浮か。それはそれとして……、

「水泳部はこないんじゃないのかなかったのか?!」

「その筈なんですけど……」

俺達の疑問に泡浮が、

「わたくし達は、濾過タンクの点検に来ましたの。部活はありませんけど、そのかわりに点検があるんです。それで……そちらの殿方は?」

「ええつと、彼はわたくしたちの友人で、桜咲錬夜さんと申しますの。わざわざ来てもらってるんですわ。……しかし、濾過タンクの点検とは、盲点でしたわ……」

「ちゃんと調べればよかったわね」

そう言って乾いた笑みを浮かべる、美琴と黒子。はあ、こいつら

はまったく……。まあ、なんとかスルーしてもらえそうではよかった。面倒な事態になってきたことに溜息をついた俺は、そこでとあることに気が付いた。

「……………」

「湾内さん？ どうしたんですの？」

黒子の言葉にも何も返さず、湾内はふるふると震えながら、こちらを見ている。その様子からなんとなく俺を怖がっていることがわかるが……。なんかしたつけ、俺？

さすがに身に覚えのないことで怖がられるのはいやだったので、とりあえず話しかけてみる。

「えっと」

「きゃあっ！」

…………俺、泣いていいかな？

湾内はビクリと震えて、泡浮の陰に隠れる。それから、泡浮が苦笑して、

「すみません。彼女は、少し前……進学間もない頃に繁華街で、いわゆるナンパを受けたらしくて。それ以来、男性が苦手なようです」

「へえ……………」

進学間もないころってほぼ小学生じゃねえか。そういや、俺が涙子に会ったのもナンパがきっかけだったな。この街にロリコンが多

いようだ。

しかし……、それだけでここまで過剰に怖がるもんか？ こういうの何て言うんだっけ。純粹培養？ と、そんなことを考えていると、湾内は美琴の方を向き、

「あつ！ もしかして、み、御坂様でして?!」

「え!?! い、一応そうだけど……?」

……『様』はスルーなんか。

「知り合いか？ 美琴」

「うーん、なんとなくーく覚えがある気もするんだけど……えっと、どちら様？」

美琴の問いに、湾内は説明を始める。

なんでも、さっきの泡浮の話に出てきた、ナンパ行為。そこから湾内を助け出したのが美琴だったという、なんとというかお約束な感じの話だった。

とはいえ本人にとっては大事だったようで、しきりに美琴に感謝していた。それで感謝されてる美琴はというと、困ったように頬を掻いている。たぶん、こそばゆいんだろうな。

まあ、それはそうとして。

「えっと、湾内、だっけか。ちょっといいか？」

「な、なんででしょう……?」

いまだに震えられてるが、とりあえず話は聞いてくれるらしい。

まずは、男に対する誤解を解くことから始めよう。

「あのさ。なんつーか、男がみんながみんな怖い奴だって思うの、考え直してくれねーか？ あ、勘違いすんなよ？ イチャモンつけてるわけじゃねえから。……ただ、男にだっていいやつや優しいやつはいっぱいいる」

「そう、ですの……？」

「ああ。現に、俺の友達は」

「……あ、あの。どうかなさいますか？」

突然黙った俺を見かねて、湾内はそう尋ねてくる。だけど、俺はそれに答えない。というよりも、答えることができなかった。

友達。

今までできるだけ考えねえようにしてたのに、一気に記憶が溢れ出した。楽しいことも悲しいことも一緒に経験して、時には喧嘩もした、あいつらのこと。俺の大切な、だけでももう会うことはできない……友達のこと。

それを思い出して俺は……、

「……いや。なんでもねえ。とにかく、俺はお前を傷つけるつもりはない。それだけ知って欲しかったんだ」

思い出は胸にしまいなおして、微笑みながら言った。
湾内はそれを聞いて一度目を閉じ、それから、

「……そう、ですわね。ごめんなさい。一部の方を見ただけで、わたくし、男の人は怖いものだと思いますわ」

「もういいさ。今度からは、頼むぜ？」

「はいっ」

湾内は、ころころと笑って答えた。

よしよし、これでなんとか一件落着だな。これで、常盤台に俺がいることも、なんとなく見逃してもらえそうだ。

ややこしくなりそうだった状況が軟化したことで、俺はそつと溜息をついた。ここで騒がれてもしたら、明日の朝刊には、『常盤台中学に変質者、侵入！』なんて見出しが躍ってしまいそうだからな。

「ようし、誤解も解けたところで、本題だ。プール掃除に戻るぞ。ああ、水が飛ぶだろうから、お前らはちょっと、離れてろ」

そう注意を促すと、美琴以下俺を除く全員がプールサイドから離れた。暑いのなら水にかかってもいいかもしれないけど、そんなときには汚れを含んだ水になってるだろうからな。

というわけで、俺はみんなが離れるのを確認してから、もう一度手を合わせた。

「そんじゃあ、今度こそ」

行くぜ！

「ちょっと、待った」

……………？

気合を入れたところに水を差された感じになったので、俺は少々気が抜けてしまった。拍子抜けてやつか？

いや、それよりも……なんだ今の声？ 美琴でも黒子でも湾内でも泡浮でもなかった。それじゃあ、一体誰が……？

疑問を解消するために振り返ると、そこには一人の女性がいた。背中の中ほどまで伸びた茶色がかった黒髪を夏の風にゆらし、すどく光る眼鏡を直しながら、スーツ姿のその人は俺達のもとへと歩いてくる。

「誰だ……？」

そう呟いて、俺は眉をひそめる。その疑問の答えは、彼女ではなく美琴たちからもたらされた。

「……りよ、寮監?!」「……」

みごとに重なった四つの声を聞きながら、俺は頭をかいた。

ふーん、寮監ねえ……。

「……え!? 寮監?!」

ちよちよちよちよつと?! それはマズくないか?! よりにもよって、ある意味教師より生徒の安全を預かってるような人が来ちゃったよ!

「……さて。まじめにやってるか確認しにきたんだが……これはどういうことだ? 御坂、白井」

底冷えするような冷たい声で、寮監はそう言う。対して質問を投げかけられた二人は、がたがたと震えていた。

やがてその行為に意味がないと悟ったのか、黒子は慌てて詰め寄り弁明に走った。

「ごごごご機嫌麗しゅう、寮監様！ こ、これにはヒマラヤ山脈よりも高く、マリアナ海溝よりも深い理由があああるんですの！ そう！ なんと言うか、その、とある広大な水泳目的の空間をたつた二人できれいにするのはいささかオーバーワークな気がしないでもないような」

「能書きはいい。簡潔に答える」

「掃除が間に合いそうもないので助っ人を呼びました！」

弱え！？

敬礼しながら答える黒子を見て、俺はそう思った。軍隊か、あいつらは。

「ふむふむ。なるほど、事情はわかった。確かにこの面積を二人で掃除しろというのは、少し罰が重すぎたかもしれんな。私も反省しよう」

「えっ！？ 本当ですよ！？ では許して」

そこまで言ったところで、寮監は黒子の首に腕を絡ませ、

「それとこれとは話が別だ」

「ぐえっ！？」

「キュッという小気味良い音と共に、一気に締め上げた。

……つて、おい！

「黒子?! おい、黒子！」

「……………」

返事はなく、黒子はがっくりと意識を失ったまま、寮監にもたれかかり……訂正、今寮監にポイツと投げ捨てられた。

ゴミには興味はないとでもいうように、彼女は既に黒子には目も向けない。こ、怖え……。

「さて。この件については後でしっかりと話し合うとして……御坂。君たちが呼んだのは……その男子生徒か？」

「はいっ！ この男であります！」

「いや、身代わり速えよ！」

なんてやつだ。あっさり俺を売りやがった。

ちなみにだが、湾内と泡浮は既にもいない。彼女達もそそくさと退散してしまっていたため、俺の味方は皆無だった。

「いや、えーっと、寮監さん？ 俺はただ呼ばただけであって、

今回の責任の所在を問われるのはむしろいつら」

そう言っつて美琴に矛先を戻そうとして、俺はふと気付いた。確か、黒子はこんなことを言っていた。

『あなたが来客として来る事を寮監を通さずに事務局に申請しておいたので、万が一バレてもあなたに害は及びませんわ』

「そうだ、そうだよ。俺はいわば、招かれた客。ビクつく必要はねえんだ！」

「気を持ち直した俺は、余裕を取り戻しつつ、寮監にこう言っただった。」

「えっと、俺は来客として申請されてるはずですよ。別にここについても問題ないはずですけど？」

「来客？ 私は聞いていないが？」

「？ 別にあんたが聞いてなくても関係ないでしょう？」

警備員じゃあるまいし、そんな義務はないはずだ。

「そう、思ってたんだが……、」

「いや、関係ある。『学舎の園』に外部の生徒を入れるのは個人で申請しても構わないが、常盤台中学校内に招くというなら、話は別だ。その場合には、生徒は一度私に報告する義務がある。そこから私が書類を起こして、さらに事務局に申請するようになっていくんだ。生徒手帳にも書いてあるぞ」

「何いつ!？」

「おい、ホントか美琴?!」

「(ぶつぶつぶつぶつ)」「(ぶつぶつぶつぶつ)」

「美琴……?」「」

「ダメだ……この後私と黒子は、きっと死より恐ろしい罰を与えられるんだわ。どんな罰だろう……？ ああ、ダメ。想像できない。私たち……終わった！」

イカン、使い物にならなくなってる。

「つて、ちょっと待ってくれ！なんでそんな権限がアンタにある？！アンタはただの寮監だろ！」

ヤベ、敬語が取れた。テンパると敬語が取れる癖、直さないとな。俺の当然の疑問に寮監は薄く笑いながら、

「さあ、なんでだろうな？」

こ、この人は……！
得体の知れない薄ら寒さに体を震わせると、彼女は続けてこう言った。

「この街に住む人間なら、この常盤台中学が男子禁制ということは知っているだろう？ 仮にも女子中学校なのだからな。……さて。そこに現在、申請未登録の男子生徒が一人……。君が置かれている状況は理解できたか？」

「な、な、な……」

や、やばい。脳裏に再び、『常盤台中学に変質者、侵入！』という見出しがネオンサインのようにちかちかと光りだした。

この人は、間違いなく俺を警備員アンチスキルに引き渡すだろう。話を聞く限りでは、そういった義務や権利がありそうだ。

となると、俺はどうなる？ 噂というものは、どれだけ情報封鎖

しても、いつの間にか漏れてしまうものだ。あるいは事実以上の悪評が流れる可能性もある。そうなれば

「俺の尊厳は地に墮ちる……！」

冗談じゃない！ 変態の名は、背負って生きるには重過ぎる！

俺は一つの決意を固める。すなわち 脱出だ！

パンツ！ バシイ！

勢いよく両手を合わせ、プールの水面に叩きつける。すると、水は一気に水蒸気と化し、視界を遮る霧へと変わっていった。

その隙に、俺は急いで現場からの離脱を図る。思いつきり足を動かし、出口へと向かった。

しかし。

「甘い」

「っ！？」

視界のきかないはずの霧中から、一本の腕（ぶっちゃけ寮監の）が伸びてきた。それが俺の首にかかるすのでこのとこでかわし、バックステップで距離を取る。

そして霧はどんどんと薄くなっていき、やがては晴れていった。まあ、即席物だったからなあ……。

てか……、

「なんでだよ！？ 俺の姿は見えなかったはずだ！」

「ん？ 気配を読んで腕を伸ばしただけだが？」

こともなげに言う彼女に、俺は呆れる。

「いやいやいやいや！ だから何度でも言うけど、アンタただの寮監だろ？！ 気配読むとか、なんでそんなどこぞの達人みてえな真似ができたんだよ?!」

「知らなかったのか？ 寮監には気配察知のスキルがデフォルトで備わっているんだぞ？」

「いる?! そのスキル、ホントに寮監にいる?!」

ダメだ、この人。いろんな意味で、規格外だ。

クソ！ こうなったら、いたしかたがない。一度気絶させてから逃げる！

拳を握り締めて、飛び出そうとしたところで、俺は寮監に待ったをかけられた。

「まあ、落ち着け少年。君が私を倒して逃げたところで、監視カメラはいたるところについている。結局は後々、君の素性はバレることになる」

「た、確かに……」

ここに監視カメラがないのは、例外みたいなものだ。学校外へと逃げようとすれば、否応なく俺の姿は監視カメラに映るだろう。

そうなれば、結局のところ、元の木阿弥だ。

「ぬぐぐぐ……」

「まあ、そう悲観するな。私はなにも、君を警備員につきだすつもりはない」

「へ……？」

マジ？

「事情を聞く限り、君はうちの生徒の都合で連れてこられたようだから。君には落ち度はないと、私は考える。むしろ、被害者だろう」

……WAO。

なんだ、話ができるじゃねえか。いい人や！ この人、ホンマイいや！

再びの危機脱出を確かめ、俺は涙を流して喜んだ。そんな俺に、彼女は一言。

「ま、これは私の考えであって、学校側がどう考えるかはわからんがな」

「は？」

つまり……、どゆこと？

「簡単に言えば、だ。私が学校に報告するか否か。君は私の心配しだいで、被害者から不法侵入者へと変貌してしまう……とまあ、こういうわけだ」

「な……なにいいいいいいいいいいいいいい！？」

「ここの女性……！」

「一体……何が目的だ！」

「目的？ 別にそんなものはないさ。強いて言えば……そうだな。私は、自分に利益のあるものは、なんであれ利用するしたたかな女、と言ったところか」

つまり……、俺はこの人に弱みを握られたということか。この人から何かを頼まれたりした場合、俺には拒否権がない？

その質問に対する答えは、YESだった。

「ま、そう重く考えるな。半分冗談みたいなものだから」

「半分?! 残りの半分は?!」

くつくつくと笑う寮監。懸命に抗議する俺。壊れた美琴。屍と化した黒子。

そんな力才な光景を最後に、『プール掃除』は終わりを告げた。

P・S この後、復活した黒子によって、俺は無事帰宅した。はあ……。

第十八話 プール掃除（後半）（後書き）

いかがでしたでしょうか？ 寮監がキーパーソンな十八話でした。

それから話は変わりますが、質問への解答が多数寄せられています。ありがとうございます。つきましては、まだ検討してみたいので、引き続き意見を募集いたします。

合わせて、も一個お話が。もし、こういった話が読みたい！ といったのがありましたら、ご一報ください。リクエストエピソードとして、書いてみたいと思います。

というわけで、ご意見・ご感想・リクエスト、なんでもお待ちしております。それではまた次回で。

第十九話 Summer Vacation In The Beach (前編)

今回は、水着回の話となっております。知ってる方は知ってるでしょうが、水着モデルのお話です。

今回、一人新キャラが投入されました。今後も使っていくかは未定ですが(汗)

七月二十八日。

「うーだー。なーんもやる気でね〜」

相変わらず下がるところかどんどん上がっていく気温に耐え切れず、今日も今日とてクーラーがガンガンに効いた部屋で俺は寝転んでいた。ダメ人間？ なんとでも言え。

「はあ。冬は平気なんだけどなあ。夏は苦手だ」

そう言っつて、軽く欠伸をする。別に昨日寝足りなかったわけじゃねえけど、快適な空間で横たわっていると、ついつい眠くなってくる。と、そんなときだった。

P r r r r

着信音を聞いた俺は、もそもそと手を伸ばして、携帯を取る。それから相手は確認せずに、通話ボタンを押した。

「ほーい。こちら、鍊夜。ドウゾ？」

『いや〜、まただらけた返事だね、こりゃ』

ばあさんみたいな台詞をはいたのは、涙子だった。

「なんだ、お前か。なんか用か？ 鍊夜さんは今、絶賛まどろみ中

だ。ぶつちやけ、早く眠りたい」

『うわっ、女の子から電話がかかってきたってのに、そんな態度？
こっぴつの何て言うんだっけ。ストマツク？』

「ストイックだ、バカ。それから、こんなときに使う言葉じゃねえぞ、それ」

つか、ホントに何の用だ？

『ああ、忘れてた。錬夜さあ、今から用事とかある？ あ、さつき眠たいとか言ってたからないよね。じゃあ、あたしがいまから言うところに』

「ちよっ、おい！ 勝手に話進めんな！ まずは説明しろ、説明！」

『えー、じゃあ、ちゃんと聞いててよ？ えっとね』

話は、少し前にさかのぼる。

先日会った湾内と泡浮。彼女達……というよりも、常盤台の水泳部メンバーが、世話になってるメーカーから水着モデルの依頼を頼まれた。なんでも、ウェブカタログに載せるらしい。

で、ここで一つの問題が発生した。上級生が大会で忙しいために、その依頼に参加できるメンバーが、湾内と泡浮の二人だけだったのだ。

しかし、いかんせん二人では心もとない。そこで彼女達は美琴と黒子にも協力を頼み、そこからさらに涙子と飾利にも話が広がったんだが……。

「それで、なんで俺に話が回ってくんだよ？ そんな話されても、

「どうしようもねえんだけど」

『いやいや、鍊夜も一緒に来ないかって誘ってるわけだよん？』

「『だよん？』じゃねえんだよ。水着モデルの話なのに、男の俺が行ってどうする？」

『んー、なんか、男物の水着もあるらしいから、できれば男友達も呼んでって言われたよ？ それに、遊びに行くみたいな感じで、気軽な撮影になるらしいし』

「遊び、ねえ……」

……ま、暇つぶしにはなるか。

「わかった。んじゃあ、今から行くよ。場所は？」

『えっと、場所は』

涙子からスタジオ（？）の位置を聞いた後、俺は通話を切った。水着モデル、か。まあ、楽しみではある。なんてったって、水着だし。一応俺、男子中学生だし。

そんなこんなで期待に胸を膨らませていると、もう一度電話がかかってきた。

「んあ？ 今度は誰だ？」

上体を起こしつつ、通話ボタンを押す。やがて流れてきたのは

『鍊夜あ！ 俺も！ 俺も連れてってくれ！』

「……………正人^{まひと}。いきなりすぎて、いろいろわけがわからない」

さて。みなさんにとっては初登場になる通話口の向こうの男は、
一善正人^{いちぜんまさと}。一応俺のクラスメートで、友達だ。

名前からして善人のイメージ漂うやつだが、実のところそんな人間じゃない。いや、悪いやつってわけじゃないけど、女好きなんだ。極度の。

で、そんなやつがなんで俺と友達になっただのかは置いておくとして……、

「んで？ 一体なんの話だ？」

「「視た」んだよ！ お前が初春や佐天やその他の女子と、浜辺にいるのを！ だから、俺も！ 俺も連れてつてくれ、鍊夜！」

「あー……、またか」

視たというのは、ほかでもない。正人の能力の話だ。

彼の能力は、レベル3の『ヴィジョンリーダー未来視界』。その能力は、自分と親しい人間の未来を、不規則に見ることができるというもの。フアーレジョン予知能力系としては珍しい、『他人の未来を視ることができ』る』タイプのものだ。

ちなみに、これがもう少しレベルが上がれば、好きな時間の未来も見れるらしいが……、生憎と正人にそういった向上心はないため、永遠にレベル3止まりだと俺は思っている。

んで、話はもどる。なぜかは知らんが、正人が視る未来は、俺のものが多い。それも決まって、女子と一緒にいる未来が。システムスキャン身体検査を担当した先生によれば、おそらくは嫉妬心が原因だろうと言われた。

というわけで、今回もこの後の俺の未来が見えたらしかった。

「んー、別に俺は構わねえけどさあ……かざ　初春たちがなんて言うか、わかんねえぞ？」

『頼む、お前から頼んでくれ！　同級生の女子の水着姿が見られる機会なんて、今を逃したらもうこの夏には訪れない！』

「……わーったよ」

ふうと一息を吐いて、正人との会話を終わらせる。それから今度はもう一度涙子に電話をかけるため、アドレス帳を開いた

* * *

「お前は、神だ！」

「ああ、そうかい……」

俺はとある男と連れ立って街中を歩きながら、嘆息した。

となりに居るのは、なんとなく察しはつくだろうが、正人だ。中一のくせに170オーバーの身長。スプレーで染めた上に、ワックスで固めた茶髪。極めつけに、左耳にぶら下がっている金の三連ピアス。

どうみても見た目不良なんだが、ちゃらんぽらんなんで、怖い雰囲気はしない。不思議なやつだよ、まったく。

「お前さあ、少しはその性格改めたらどうなんだよ？　せっかく顔

は悪くねえのに、その女好きのせいでモテねえんだぞ?」

「バカ言え! これは俺のアイデンティティだ! そう簡単に変わるか!」

「わかったから、ちょっとはテンション下げろ……」

道行く人が俺らをチラチラ見てくんだよ。

「お。あそこか……」

正人と歩き始めて数十分。ようやく俺達は、目的の場所へと到着した。

見た目は普通の企業ビルって感じだが、ビル壁にはめ込まれた電光パネルが特徴的だ。水着メーカーだけあって、そこには色とりどりの水着を着たモデルが、多彩なポーズを取っていた。

俺はそれに釘付けになっている正人を引っ張りつつ、自動ドアをくぐった。

「えーっと、あいつらは……おっ、いたいた」

なかなか凝ったデザインになっているロビーを縫い歩きながら奥へ進むと、小さな人だまりを発見した。常盤台の制服を着た、美琴、黒子、湾内、泡浮。私服の、飾利と涙子。合計六人だ。俺はその集団に近づきつつ、声を上げた。

「よう。来たぞ」

「あっ、鍊夜だ」

最初に気付いたのは、涙子だった。それに続いて俺達に気付いた面々が、こちらに近寄ってくる。

「あら、意外と遅かったですわね。鍊夜のことですから、『ぐへへへ。水着のモデルか……。速攻、行くぜ！』みたいな感じで、ダッシュで来るかと思いましたが」

「え、何それ！？ いつから俺はそんな変態キャラになったんだ？」

「違うの？」

「美琴まで！？ おいやめろよ、お前ら！ 湾内と泡浮が引いてるだろうが！」

そんなこんなで、冗談を言ってくる二人に、ツッコミを入れる。

「冗談……だよな？」

「ほらほら、遊んでないで……。ん？ 何やってんの、一善？」

涙子が俺達をなだめ、続いて怪訝な顔をする。その原因であろう正人に目を向けると、やつは何故か涙を流しながら清々しい笑みを浮かべていた。

「……いや、それだけじゃない。なんか、ブツブツ言ってる。」

「嗚呼……。初春と佐天のみならず、あの名門常盤台の生徒が四人も……。ありがとう、鍊夜！」

「……は……」

「一体、どこまで自分に正直なんだろう。」

「こ、個性的なお友達ですわね……」

「そ、そうですね」

「湾内。泡浮。このバカのフォローはしなくていいから」

「やっぱ、置いてくりゃよかったかな？」

「そんなことを思っているよ、」

「お待たせしましたあっ！」

声に振り返れば、こちらに向かって歩いてくる女性が一人。俺はそれを横目で見つつ、湾内に尋ねる。

「どちらさん？」

「メーカーの担当さんです」

「ああ、なるほどな。」

担当の女性は、俺達に挨拶をして、それから「後の二人は？」と聞いてきた。

「二人？ 他にも誰か来るのか……？」

「あら、白井さん？」

「げっ、この声は……」

いやそうに顔をゆがめる黒子の視線を追うと、そこには着物を着

てキャリアバッグを引く黒髪の少女と、ジャージ姿の固法先輩がいた。

「美琴。あつちの着物のやつ、誰だ？」

黒子と着物の子が会話している間に、俺はそう尋ねてみる。

「彼女は、こんじうみつこ婚后光子さん。私と同じ常盤台の二年生よ」

「ふーん。先輩か」

そうこうしているうちに婚后さんと黒子の会話は終わり、今度は固法先輩へと話の照準が移った。

口火を切ったのは、飾利。

「固法先輩も水着のモデルを……？」

「ええ。いつも通ってるジムで、ジマツジメント風紀委員の先輩に頼まれちゃってね……って、あれ？　一善君じゃない？」

固法先輩が俺の後ろを見つつ、驚いたような声を上げる。その理由は簡単で、正人が俺の後ろに隠れていたからだ。

何やってんだ、こいつ……？

「おい、何やってんだよ、正人」

「ハッハッハ。誰だ、正人って？　俺の名前は、ジョニーだ（棒読み）」

「はあ？」

俺が頭に？マークを浮かべていると、涙子が固法先輩に尋ねた。

「固法先輩って、一善のこと知ってるんですか？」

「んーまあ、ちょっとね。そういうあなた達は、彼のこと知ってるの？」

「ええ。一応、クラスメートなんで」

一応ってなんだとは思いつつ、スルーしておく。
それにしても、この二人に何があったんだ？

「えっと、そろそろいいかしら？ そろそろ撮影に入りたいのですが」

このまま放っておいたら長くなりそうだと判断したのか、担当さんがそう提案してくる。俺たちは素直にそれを聞きいれ、さっそく試着室へと向かうことになった。

* * *

SIDE 佐天涙子

「それでは、どれでも好きな水着を選んでくださいね？」

『はーいー』

担当さんからそう言われて、さっそくあたし達は、水着を選び始めた。水着メーカーなんだから当たり前だけど、ホントに数多くの水着があつて、どれにしようか迷ってしまう。

それでも初春と互いに話し合いながら探していると、御坂さんが一着の水着を持って固まっているのが見えた。

「わあー……」

歓声を上げている御坂さんの後ろから覗いてみると、カラフルなフリル付きのセパレート水着を手にしていた。

うーん、前から思ってたけど、御坂さんって意外と子供っぽいのが好きなんだよね。けど、本人は隠したがってるようだし……うん。手伝ってあげよう！

「わっ、それ可愛いですね！ 初春もそう思うよねっ？」

初春にアイコンタクトを送る。すると彼女も気付いたようで、

「ほんとだ。フリフリもいい感じですね」

「い、いや、違うよ！ 別にこれを着たいわけじゃな「あたし見てみたいな」。御坂さんのその水着姿っ」えっ？ えっ？

御坂さんの言葉をさえぎると、初春も乗ってきた。

「私も見てみたいです！」

「そ、そうかな？ じゃ、じゃあ着てみ」

「あら？ 御坂さんって、結構子供っぽいデザインが好きなのね？」

「「「なっ」「」」

気付かないうちに固法先輩が近づいてきていて、そんなことを言ってきた。御坂さんはそれに数秒固まった後、慌てて弁解して、スクール水着みたいなのを取って試着室に逃げ込んだ。

「「はあ……」」

「あ、あれ？ 私、何かした？」

違うんです、固法先輩が悪いわけじゃないんです。ただ……もうちょっと空気読んでください！

十分後。

白井さん、婚后さん、固法先輩以外は着替え終わり、あたし達は互いの水着を見合っていた。

初春は花柄のAラインワンピース。泡浮さんもおなじくワンピース型だけど、深い色合いで落ち着いた感じ。湾内さんが黄緑を基調としたビキニ。私も青と白のビキニだけど、下にパレオを巻いていた。御坂さんは、さっき言ったとおりだ。

「な、なんか恥ずかしいですね……」

「えー？ 女の子同士なんだからいいじゃん　って、外には鍊夜と一善がいるんだった」

「うー、やっぱり恥ずかしいですよ……」

なおも恥ずかしがる初春に、泡浮さんと灣内さんからフォローが入る。

「よくお似合いですよ。きつと、桜咲さんと一善さんも見とれてしまつと思えます」

「そ、そうですかねっ?」

「ビキニは目線が上下に分かれますけど、ワンピースは体のラインが出ますから、細い方しか似合わないんですよ?」

「え、えへへ……」

赤くなりながら笑う、初春。嬉しそうにしちゃって、もう。

その後もちよこちよこ話していると、いきなりカーテンの開く音がした。あそこは確か、白井さんが入った更衣室だ。どれどれ、彼女はどんな

「……え!?!」「……」

「うーん、おとなしめのデザインしかないのがちょっとあれですけど、まあ、こんなものでしょうか?」

そう言っって歩み寄ってくる白井さんの水着は、三角ビキニ……というよりも、ほとんどマイクロビキニに近かった。

それで大人しいって……どゆこと?

呆然としてあたし達が何も言えずにいると、今度は別方向から声がかかった。

「あーら、みなさん! その程度ですよ?」

「……いっつ?!」「……」「わぁ……!」

モノキニ（前から見るとワンピース、後ろから見るとビキニの水着）姿の婚后さんがニシキへビを身体にまとわり付かせているのを見て、あたし達（マイナス初春）は悲鳴を上げた。それをどう勘違いしたのか、彼女は満足げな様子で、

「ごらんになつて？ セクシー&エキゾチック。これぞオーディエンスの求める、究極の水着モデルですわぁ!」

「……ひい!?へビい?!」「……」「怖くないですよぉ」

「エカテリーナちゃんです」

エキゾチックってより、バイオレンスとかデンジャラスって感じなんですけど!

突然のへビ登場に、あたし達（マイナス初春）はビビりまくる。そりゃあ、あたし達は女の子だもん。レベル5もレベル0も関係ない。怖いものは怖いんだ。

そんなこんなで騒がしさがどんどん増していくなか、

「うーん、ちょっとキツイけど、これ以上サイズないし、仕方ないか……」

『……………』

現れたのは、白地に黒のビキニを着た、固法先輩。だけど、そのプロポーションに、あたし達は口を開けなかった。

着やせする……タイプなのかな?

「いいな……」by湾内

「「「「「え？」「」「」「」

* * *

SIDE 鍊夜

「あーまあ、お約束だけど……女子の着替えてのはなげえな」

「バカかお前は！ 一つ、この時間にいろいろ想像して楽しむべし！ 二つ、出てきた時に見て、また楽しむべし！ この二段構えが女子と泳ぎに行ったときの楽しみ方だ」

「何の役にも立たない豆知識をありがとう」

俺達は早々に着替え終わり、今は何も無い、真っ白いパネルに囲まれた部屋にいる。なんでこんな部屋なのか訪ねたら、それは後で説明することだ。

ちなみに俺らの水着は、普通にトランクスタイルのもの。以上。

「 っと。着たみたいだぞ」

「マジでか?!」

担当さんに引き連れてこられた女子集団が、部屋に入ってくる。水着モデルという目的のためか、けっこうタイプが分かっている。

そのうちの一人である黒子に目をやって

「「かつつつつっ！」」

俺と正人は盛大に鼻血をふいた。

バカか、あいつは！ 何て水着着てやがる！？

「ぐ、あ……なんつー大胆さだ……」

「だ、だな。さすがの俺も効いたぜ……。だけど、他のみんなは普通にキレ　ぐぶあっ！？」

「正人おおおおおおおおおおおお？！」

再び鼻血をふきだす正人を尻目に、俺は視線を追ってしまふ。見れば二の舞になるであろうことは確実だが、それでも首は勝手に動いてしまった。

そして

「がはああっ！？」

まるでナイフかなにかで刺されたような声を上げて、俺は膝をつく。

固法先輩……それは反則だ……！

「鍊夜……なにやってんだか」

「一善君もです……」

俺達のクラスメートは、ジトツとした視線をプレゼントしてくれ

た。

その光景に苦笑いしながら、担当さんは切り出した。

「それでは、今から撮影に入ります。『こんな部屋で?』と思われるでしょうが」

そこで言葉を切って、彼女はポケットからリモコンのようなものを取り出した。それから、そこについているボタンを二、三度押すと

『おお……!』

ビーチ、繁華街、山頂、教室……担当さんがリモコンを操作するたびに、景色はめまぐるしく様変わりしていった。

彼女によれば、学園都市の最新技術を使用したこのスタジオは、さまざまなシチュエーションでの撮影が可能らしい。しかも、景色が変わるだけじゃない。

再びビーチに戻ったところで、涙子が生えていた椰子の木に触れる。

「わっ、すごい、触れるんだ」

どういった原理かはわかんねえけど、全ての物体にきちんと質感があるらしい。よくできてるどころのレベルじゃねえな……。

あまりの技術力に俺らが感心していると、担当さんはこう告げた。

「カメラは全て自動撮影になっています。なので、自然に……そうですね、友達同士で普通に海に来たと思って、気軽に遊んでいてください」

その言葉で、若干あった緊張感は消えた。
つまり

「そんじゃあ……遊ぶか！」

『おおー！』

俺達の『海水浴』が幕を開けた。

第十九話 Summer Vacation In The Beach (前編)

ご意見・ご感想・リクエスト、お待ちしております！

続けて読んでくれている方、初めて読んでくれた方、どんな方でもいいので、感想をもらえると嬉しいです。

第二十話 Summer Vacation In The Beach (後編)

というわけで、水着編の後編です。前回からあんまり時間を置くことなく投稿できたので、若干満足です。

それでは、どうぞ！

総合1800ptオーバー！ みなさん、ありがとうございます

！

「ビーチと言ったら……これだろ！」

そう言っただけで俺が取り出したのは、ビニール製のバレーボール。すぐ近くに転がっていた。さすがに用意は万端ということらしい。で、つまるところ何が言いたいかと言えば、

「へー、ビーチバレーかあ。私はいいわよ！」

「あたしもやる！ 浜辺のストライカーの名はあたしの物だ！」

「おつ。やっぱ、美琴と涙子に乗ってきたか。他のみんなはどうだ？」

涙子の台詞をスルーしつつ、みんなに問いかける。すると、返ってきたのは、色よい返事。これにより、開催が決定した。

まずはグループでチームわけ。結果は、俺、美琴、飾利、固法先輩、湾内で一チーム。正人、黒子、涙子、婚后さん、泡浮で一チームとなった。ま、二人チームじゃないが、いいだろ。

さてさて、図らずも、なかなかバランスのいいチームわけになったな。んじゃ、次は……、

「お前ら、線書いといてくれ」

そういい残し、俺は一本の椰子の木へと近づく。それから

パンツ！ バシィ！

幹の部分からポールを、ツタからネットを作り出し、みんなが書いてくれたコートに設置した。これで準備は完了。
というわけで

「ゲームスタートだ！」

* * *

先行は正人チーム。サーバーは正人。

あいつは見た目どおり、なかなか運動神経がいい。となると……、

「せやつ！」

正人の手から放たれたボールは、ものすごい速さで、俺の隣で構える飾利に突っ込んでいく。飾利はそのスピードにビビって、目をつぶってしまった。

「鍊夜！」

「オツケー！」

美琴の叱責を聞いて、俺は飾利の前に飛び込みながら、ダイビングでレシーブした。

高く上がったボールは、そのまま真下に落ちてくる。

「飾利、真上だ！ ネット際にトス上げろ！」

「は、はい……！」

慌てて目を見開いた飾利が、なんとかネット際にボールを飛ばす。そこに詰めていた美琴は、きれいなフォームでスパイクを叩き込んだ。

「くっ……!!」

涙子が飛び込むも、一瞬間に合わない。

「「しゃっ!!」」

パンツッ!

駆けてきた美琴とハイタッチをかわす。向こうで正人が悔しがっているのは……、点を取られたからではなく、ハイタッチが羨ましいんだろう。

というわけで、次は俺達がサーブ。サーバーは湾内。

「落ち着けよ、湾内! 下打ちでいいから、狙っていけ!」

「はいっ!!」

こくりと一度頷いて、湾内はサーブする。そのボールはシュルシユルと弧を描き、ネットを越えた辺りで

くねっと曲がった。

『は!?!』

これには全員大驚き。どんなうち方すれば、あんな軌道を描くん

だ……！

なにはともあれ、たなぼた的なサーブで見事二点目　　じゃない！

「おりゃあー！　ですの！」

諦めの悪い黒子が飛び込み、ぎりぎりです。それをなんとか涙子がつなぎ、ボールは正人の頭上へ跳ね上がった。

チツ！　俺じゃブロックは間に合わねえ！

「先輩、ブロック！」

丁度正人の正面に居た固法先輩に、声を飛ばす。

「任せて！」

そう言った先輩と正人が、同時に飛び上がった。そして、正人の腕がボールを捉えようとした瞬間

「ぶふあ……ッ！」

正人が鼻血をふきながら倒れた。当然ボールは、やつらのコートに落ちる。正人は、なにをやってるんだと涙子・黒子・婚后さんに叩かれていた。……嬉しそうに見えるのは気のせいだよな？

しかし……正人のやつ、多分、目の前で先輩の胸が揺れるの見たんだろうなあ……。

一瞬、俺も向こうがよかったと思ってしまった。

「え？　え？　わ、私、なんかした？」

「いや、先輩は何もしてねえよ」

あいつがバカなだけだ。

「とはいえ、これで二点目ゲットだ！ 畳み掛けるぞ！」

「無性に釈然としないのは、私だけ……？」

そりゃ、美琴おまえに胸がないからゲフンゲフン！
さて、続けて、サーブは俺ら。サーバーは

「よっしゃ、行くぞ！」

言って、俺は数歩後退する。それから、ボールを斜め前に放り投げた。

「ジャンピングサーブ!?」

涙子が叫ぶが、もう遅い！

「とりゃー！」

気合一声、飛び上がりながらボールを叩き飛ばす。それは一直線に飛んでいき、正人チームのコートに突き刺さる

と、俺は思っていた。

「はいっ！」

「やっ！」

俺が放ったボールを婚后さんは柔らかくレシーブし、それを今度は泡浮がトスを上げる。最後に詰めていた涙子が、ボールがネットを越えた瞬間にスパイクを放った。

ふ、普通にうめえ……。お嬢様のくせに。

俺が啞然としてしていると、婚后さんはどこから取り出したのか、扇子で自身を扇ぎながらこう言った。

「あなた……桜咲さん、と申しましたか？　どうやら、驚きに声もでないようですわね？」

「ま、まあ予想外ではあった」

「お嬢様学校に通っているからといって、舐めないでもらいたいですわ。これでも運動神経には自信がありますの。」

そう言って高笑いをする婚后さん。泡浮は苦笑してるだけだけでなんも言わねえけど、あいつも運動神経いいんだろうな。

……正直舐めてたが……面白くなってきたからまあ、いつか。

とまあ、この後も、黒子がレポート使ったり、湾内の曲がるサーブが出たり、初春のミラクルプレーが出たり、先輩の胸が揺れたり、正人が血の海に沈んだり、涙子が足で得点を入れたり、婚后・泡浮ペアの好プレーが見れたり、美琴が誤って電撃でボールが焼けたり、いろいろあった。

決着？　まあ……、それは秘密ということだ。

* * *

俺達がビーチバレーを終えると、次はホテルのプールに変わった。そこで俺達は疲れを取りつつ、バカンス気分を満喫。

その次は、海上クルージング。クルーザーの甲板で肌を焼いたり、船長室から海の景色を眺めたり、これまた最高の撮影だった。

それで、その次が……。

「つて、なんで雪山!?!」

美琴のツツコミどおり、何故か今度は氷雪吹きすさぶ、雪山へと変わった。

「きゅ、急に寒くなりましたね……」

「た、多分、景色と気温が連動するようになってるんだと思います

……」

「HEY、みんな！俺が暖めてあげらっ!」

「テメエは黙ってる!」

寒さがまぎれるわけではないが、みんなで騒ぐ。なんとなく、ちよつとはマシになった気がする。

と、さらに景色が変わる。

ヒュンッ

『今度は砂漠!?!』

ヒュンッ

『時化^{しけ}た海！？』

ヒュンッ

『そして月面！？』

なんだなんだ、どうしたってんだ！？

月の上で事態を図りかねていると、唐突にアナウンスが流れてきた。

『すみません。ちょっと調整しますので、景色変えますね』

調整って……今度はどこ行くんだ？

ヒュンッ

『ここは……、キャンプ場？』

そう。俺達が飛ばされたのは、緑豊かな木々に囲まれた、ありふれたキャンプ場だった。ご丁寧に、テントやキッチンまで用意されている。

つか……キャンプ場と水着って、間逆の取り合わせだろ……。

そんなことを考えていると、こちらに担当さんが駆け寄ってきた。

「ごめんなさい。ちょっとカメラのシステムにエラーがでちゃって……。すぐ直ると思うから、ここで休憩してください」

「休憩たって……なあ？」

俺の問いかけに、みんなも困ったような顔で頷く。すると、担当

さんが、

「あっ、机の上の食材は本物だから、自由に使ってください」

と、声を飛ばしてきた。

なるほど、机の上に目を向ければ、肉・野菜・魚、数多くの食材が置いてあった。

ふむ。こいつぁ……、

「……………カレーだな（ね）（ですね）（だよな）（ですわね）

……………」

婚后さん、湾内、泡浮以外が口を揃えて言う。

このシチュエーションなら、やっぱりカレーだろ？

* * *

「んじゃあ、役割分担な。カレーとご飯、やりたい方を言ってくれ」

必要な分だけ食材をキッチンに移動させた後、俺は指揮を執ることになった。別に誰でもよかったんだが、なんとなく俺がすることになった。

「じゃああたし、カレー！」

「私も」

「飾利と涙子がカレーだな。他は？」

俺が視線を巡らせると、今度は美琴が手を上げた。

「なら、私、ご飯行くわ」

「お姉様が行くなら、わたくしも」

「美琴と黒子のご飯、か。んじゃあ、他は？」

「じゃあ、俺は」

「テメエは、飯だ」

「そ、そつだよ、一善はご飯に行きなよ！」

「で、ですよね！一善君はご飯がいいと思います！」

「何ゆえ?!」

何かを言おうとした正人の機先を制し、俺たちの独断でご飯担当に配属させる。当然のごとく理由を求める声が飛んできたが、

「後でわかる。おとなしく、行つとけ」

「……ま、いつか」

ふう。適当だったが、これで大丈夫だ。

……実は、これはクラスの男子に聞いたんだが、正人は料理が壊滅的にダメらしい。一学期にあった調理実習では、家庭科室を一つ潰したほどだとか。

涙子たちはそれを身をもって知っているので、俺の案に簡単に乗ってくれた。ご飯なら美琴たちがやればいいのだが、カレーは作業が多すぎて手がつけられるのを阻止できないからな。
さて……。

「俺はカレーに行くとして……婚后さん、湾内、泡浮。お前らはどうする?」

「ふっ。そうですねえ……。カレーなんて庶民の食べ物、わたくしの口に合つかしら?」

「……いや、今そんなこと聞いてないんだが」

つか、なんかこの人冷や汗かいてないか?

「えー、おいしいですよカレー?」

「もしかして、嫌いなんですか?」

涙子と飾利が婚后さんの言葉に反発し、そこに黒子があわせてくる。

「おやあ? もしかして、婚后さん、あなたカレー作れないんじゃない?」

「なっ!?!?」

……わかりやすいほど動揺してんなあ。

「そ、そんなわけないでしょう? もちろん作れますわよ! 婚后

家に代々伝わるカレーを！」

プライド高いせいで、自分から大風呂敷広げやがった。

「へー、なんか凄そうねそれ。私、食べてみたい！」

「あ！ あたしも食べてみたいです！」

「作ってくれませんか、婚后さん！」

「うっ……！」

美琴、涙子、飾利の加重攻撃に、婚后さんはうなる。そして、だんだん自分が追い込まれているのがわかるのか、冷や汗を流しながら言葉をつむいだ。

「い、いえ、今日はせつかくですので庶民のカレーを食べてさしあげてもいいかなあと」

お、上手いな。なかなからしい言い訳だ。

俺もそれに乗ってやろうと口を開きかけたところで、固法先輩が、

「じゃあ、どっちも作ったらいいんじゃないかしら？ 材料も人手もあるんだし」

「え？」

空気、読めよ……。

その台詞から賛成ムードが広がり、結局カレーチームは二つに分かれることに。

というわけで、分担は次の通りになった。

・飯盒炊飯チーム 御坂美琴、白井黒子、一善正人、固法美偉
・カレーチーム？ 初春飾利、佐天涙子、固法美偉、桜咲錬夜
・カレーチーム？ 桜咲錬夜、婚后光子、湾内絹保、泡浮万彬

表を見てわかるように、俺と先輩は兼任だ。これでバランスが取れたとみんなは思ってるんだろうが……、カレー？がなあ……。
ま、とりあえずやってみつか。

* * *

S I D E 飯盒炊飯チーム

「あれえ……？」

「ん？ どうかした、御坂さん？」

「いやっ、なんかっ、ちよっつっ」

固法先輩に言葉を返しながら、私はガスコンロのつまみを回す。ただ、カスカスと音がするだけで、火なんてこれっぽっちも付かない。

「うーん、火がなきゃご飯作れないんだけど……」。

「チャッカマンは？」

「それもこの通り、ウンともスンとも言いませんの」

一善(だったわよね、確か?)が代案を出すも、黒子がそれを実演を交えながら否定。これでいよいよ、火元がなくなった。

さてどうしようかと悩んでいると、

「ちょっと、待ってる。俺が今から薪を探してくる。それで火起こしだ!」

「は? どれだけ時間がかかると」「うおおおおおおおおおおおおおおお!」……行っちゃった」

私が、引き止めるよりも早く、一善は走り出していった。
って、どうすんのよ、この状況……?

「うーん、彼には悪いけど、火おこしは時間がかかりすぎるわ。ここは御坂さん、あなたの能力の出番よ」

「へ?」

先輩に突然話を振られ、私はまぬけな声を出す。私の能力が出番って、どういうこと?

三分後。

「こういうことね……」

今、私は力加減に気をつけながら、お米が入った飯盒に電流を流している。

つまりは、IH(誘導加熱)によってお米を炊いているわけだ。
バッサリ言ってしまうえば、電磁誘導の原理を利用して加熱している。

SIDE カレーチーム？

私たちが作るのは、無難にチキンカレー。錬夜君指揮のもと、私達は現在、野菜を切っていました。

もちろん、切り方は……、

「やっぱり、人参はイチヨウ切りですよ〜」

「え、なんで？ カレーのときは、乱切りでしょ？」

私の言葉に、すぐに佐天さんが反応した。

「イチヨウ切りの方が、可愛いし火の通りも早いと思うんですけど」

「あーあー初春わかってないな！。カレーの野菜は、大きすぎず小さすぎずが基本でしょ？」

む……。

「ウチのカレーは、野菜を細かくしてルーと一体化させて食べるんです！」

「いやいや、細かくなんてありえないよ！ ジャガイモもちゃんと面取りして、見栄えよくするほうが大事じゃん！」

「見栄えよりも味が大事なんです！」

「味だつておいしいもん！」

私と佐天さんは互いに顔を突き合わせ、険しい顔でにらみ合つ。

お互いに今までの習慣を否定される形になったわけだから、譲れないんです。

やがてこのままでは平行線になると思った私達は、『彼』に尋ねることにしました。

「「錬夜（君）はどっちだと思う（思いますか）?!」「」

私達は同時に錬夜君に目を向けて……向けて……。

「ん？ 何か言ったか、お前ら？」

「な、なぜに飾り切りなんでしょうか……？」

「さ、さあ……？」

首を傾げて言う錬夜君は、人参を使つて、桜、蝶、とさか、末広、果てはまるまる一本使つて海老えびの飾り切りを作り上げていました。

こ、これは予想外です……。

「んだよ、お前ら……ってああ！？ や、やつちまった。昔のクセでつつい飾り切りに……桜とか蝶とかはともかく、海老とかどうしよう……」

「い、いやいや！ これはこれで、文字通り飾りに使えば大丈夫ですって！」

「そ、そうそう！ きつとこれがお皿に乗ったらすごい綺麗になるから！」

って、なんで私達が励ましてるんでしょうか……？

「な、何があつたの?!」

それを聞いてなにごとかと駆け出そうとする固法先輩を引き止めて、錬夜君が言います。

「あー先輩、あの馬鹿はほつといて構わない。だから、大丈夫だと思うけど、こいつらのカレー手伝ってやってくれ。俺は向こうに回る」

そう言つて、彼は言葉どおりカレー?の面々の所へ向かう。

ちよつと焦つているように見えたけど……どうしたんでしょうか?

* * *

S I D E カレーチーム?

完全に誤算だった。まさか、野菜を切るまでなら問題ないだろうと思つて放つていたのがまずかった。

俺の前に広がるのは、らっきよほどの大きさにカットされた玉ねぎ、すりおろされたトウモロコシ、ぶつ切りにされたワカメ、皮ごと輪切りにされたミカン、サイコロ状になつたゴボウ、なぜかイチゴ。

もののみごとに出来上がりが想像できない食品群だった。

「どんなカレーになるのかしら? 食材がとってもユニークなので、楽しみですわ」

「初めて作るカレーですもの。おいしくなるといいですわね」

ふわふわと笑いあっている湾内と泡浮を見て、こころ思った。
ああ、このチームは人選ミスだった。

「……………ん？」

そんな時だった。俺が婚后さんの顔が曇っていることに気付いたのは。

この人、もしかして……………。

俺は彼女にそつと近づき、耳元でささやいた。

「（意地はるだけじゃ、何にもなんないっすよ？）」

「（ビクッ）」

彼女は驚いた風に俺を見た。

「プライドが高いのも、別に悪いことじゃない。sonだけ自分に自信があるってことだからな。……………だけど、それだけじゃダメだ。できないことがあるなら、できない。手伝って欲しいなら、素直に頼む。そうやっていかねえと……………最後にはとんでもねえことになっちゃうまいますよ？」

「……………」

「だから、さ。まずは謝ることから始めてみたらどうですか？」

じつと婚后さんの瞳を見つめ、俺はそう説得する。やがて彼女も覚悟を決めたのか、こくりと頷いて、湾内と泡浮に向き直った。

「あ、あの……」

「？」

「実はわたくし……カレー作ったことないんですの。いいえ、それはおろか、お料理さえ初めてで……。でも、言い出せなくて……。ごめんなさい……」

うつむきかけに告げた婚后さんに、二人は一瞬戸惑うようなそぶりを見せたが、すぐに笑って「それならみなさんに教えてもらいましょう」と言った。

……ふう。これでなんとか……、

「未知のカレーを食わずに済みそう……か？」

* * *

「んっ、おいしい！」

「細かい野菜も味が出ていいねえ！」

「大きいのもおいしいです！」

「あら、こつちのものなかなかですわね！」

「本当、おいしいわ」

「あっ、ため正人！ お前自分の食べよ！」

「うるさい！ どちらの種類も食ってみたいんだよ！」

「ふつ。庶民のカレーもなかなか悪くありませんわね」

「初めてのカレー、上手くいってよかったですわねっ」

「本当にそうですわねっ」

時は流れ、俺達はみんなでカレーを食べた。カレー？が作ったチキンカレー。カレー？が作ったシーフードカレー。どちらも、とても美味しく仕上がっていた。

そしてそれを食べている途中にアナウンスが入り、俺達は並んで写真を撮ることになった。

「あつ、ちよつと黒子っ?!」

「お姉様が口をつけたカレー、ゲットですよ！」

「ぎゃー！ カレーが目に飛んできたぁあああああああああ
」!

「一善……。あんたってホント運ないね」

「あはは……。学校でもこんな感じですよね」

「ほらほら、あなたたち暴れないの」

「ほら、真ん中空いてるっすよ婚后さん」

「そうですね、婚后さんっ」

「ぜひ、真ん中にどうぞっ」

「ええ！？ わ、わたくしが、そんな」

『それでは撮りますよー？』

パシャリッ！

俺達の視界に入ることのないカメラは、それでも確かに俺達の『時間』をくりぬいた。

そして……夏休みの一コマは、こうして幕を閉じた。

第二十話 Summer Vacation In The Beach (後編)

いかがでしたでしょうか？ 楽しんでもらえたなら幸いです。

ご意見・ご感想・アンケート、お待ちしております。

番外二 知られざる三日間（前書き）

今回は番外編第二話です。しかし、思った以上に長くなってしまいました（汗）。なにせ、丸三日分のお話です。

時系列的には、日付も書いてあるのでわかるかもしれませんが、第三話と第四話の間。これで、プロローグから始まって、一、二、三、番外二、番外一の順番で、原作開始までの日々が明らかになりました。

内容的には、覚えてない方もいるかもしれませんが、錬夜の師匠の話です。それから、初春と佐天の二人がなぜ錬夜を名前で呼ぶようになったのか、ひいてはなぜ錬夜が二人を名前で呼ぶようになったかの理由も。

実を言えば、この話は書いておきたかったんです。しかし、『リクエストがある場合は書く』と言ってしまったので、なかなか書けずじまいでした（汗）。なので、きっかけを与えてくれた舞月さん、ありがとうございました！

番外二 知られざる三日間

七月十一日。

「……………で？ あんたはあんなところで何してたんだ？」

「……………行き倒れてた」

俺の質問に、淡々かつ簡潔に答えた彼女。

こちらを見つめる瞳の色は、赤。カラコンなのかは知らんが、端正なその顔立ちにはよく映える。

腰まで伸びた赤髪をポニーテールにして、170センチほどのその身はとどころが擦り切れた茶色のコートに包まれている。暑くねえのかな？

俺は彼女を一通り見回してから、ふうと息をついた。

彼女との出会いは、数十分前。

俺が、帰宅途中のことだった。

* * *

一時間前。

「あゝ、やっと終わった。学校ってのは本当メンドイな」

「だよな〜」

「もう、ダメですよ、佐天さんに桜咲さん。学校は勉強するところなんですから」

転生三日目となる今日、最後の授業が終わった後、俺は佐天と初春の二人と話していた。

再会した当初の気まずさも無くなり、普通に話せるようになった。

「真面目かよ、初春は。あゝでも、お前は風紀委員だから、当然っ
ちや当然か」
ジャッジメント

「あれ？　なんで桜咲は初春が風紀委員だって知ってんの？」

「ん？　あゝ昨日ちょっとあつてな。初春、佐天に言わなかったのか？」

「えっと、あの後疲れてたんで、すぐ寝ちゃったんです」

まあ、事後処理やらなんやらいろいろあつたっぽかったしなあ。
と、そんなことを考えていたら、

ガララッ

「さて、みんな。早く帰りたいなら、席につけ」

大園先生が教室に入ってきて、HRが始まった。

とはいえ、堅苦しいことはしない先生だから、必要事項だけ告げると、早々に切り上げた。俺らが早く帰れるための配慮だろう。いい先生だ。

「それじゃあ、みんな、また明日」

先生の号令で、だれも彼もが席を立ち、教室を出て行く。
当然それは、初春たちも例外ではなかった。

「それじゃあ、桜咲さん、また明日」

「じゃあねくん」

「おう」

手を振りながら去っていく二人に、俺は軽く手を挙げて返す。
……ふう。

「やっぱ、まだ実感ねえなあ……」

速攻で誰もいなくなった教室で、俺は一人窓の外を見上げる。そこには、『前の世界』となんら変わらない、青々とした大空が広がっていた。

だからこそ……上手く自覚できない。

「頭ん中じゃ、分かってんだけどなあ。ここは俺がいた世界とは違うし、何より俺はもうあの世界に帰ることはできない。それはきちり分かってんだけど……」

だからと言って、未練がないかと問われれば……まあ、言わずもがなだな。

あくダメだ、この考え。ネガティブなんて、らしくもねえ。

鬱々とした考えを消すように頭を振って、俺はカバンを引っつかむ。それから席を立ち、消灯してから、教室を後にした。

* * *

「……………なんだコレ」

みなさん、聞いて欲しい。ついさっきまでちょっとシリアス入ってた俺だが、眼前に見えるモノのおかげで、そんなもん吹き飛んでしまった。

俺が見たもの。それは

「う、うう……………」

うめき声を上げながら倒れている、一人の女性だった。

いやまあ、これも本当は十分シリアスな展開なんだが……………。

グウウウウウウウ！

明らかに空腹が原因じゃあな？

「……………えっと、アンタ。これでよかったら食う？」

「（ガバツ！）」

俺の言葉に反応した彼女は、俺の手からブツ（ゴーヤ焼きそばパン。税込み315円）を引ったくり、ガツガツと喰らいはじめた。まさかこんなところで役に立つとは。

それをものの数秒で食い終わった彼女は、一言、

「足りない」

「（イラッ）」

「こ、この人は……！ ありがとうの前にそれかよ！
ふざけんなど怒鳴りつけようとしたところで、

ギュルルルルルルルルル！

「……はあ。わーったよ。ファミレスでなんか奢ってやる」

「ッ！ 本当か、君！」

「だあああああああ！ 本当だから抱きつくな！ 周りの目がい
てえんだよ！」

グサグサと突き刺さる「え？ 何？ こいつらバカップル？」み
たいな視線に、俺は慌てて彼女を引っ張って逃げ出す。

……っ！か、お前ら助けてやれよ。

* * *

で。話は冒頭に巻き戻る。

ファミレスで十分に腹を満たした（この人、三千円分も食いやが
った！）のか、ふうと息をついた彼女に、俺は冒頭の台詞を吐いた。
それに対する答えは、言わなくてもわかるよな？

「行き倒れてたって……まあ、もしかしたらとは思っただけど」

「仕方がないんだよ。この街に入ってから、何も食べてなかったんだ。我ながら、情けないミスをしたおかげで、一文無しだ」

「ふーん。財布でも忘れたのか？」

「いや、スられた」

「切ねえ！」

意外とまとも(?)な理由だった。

「ま、そりゃあ、災難だったな」

「ああ。だから君にはとても感謝している　　と。そういえば君、名前は？」

「ん？　俺あ、桜咲錬夜。そういうあんたは？」

「私は、彩葉伊織^{さいはこほり}。ちよつとした小用で、この街に来ている」

赤い瞳で俺を見つめながら、彼女　彩葉さんはそう言った。小用ねえ。こんな街になんの用があるんだか。

「まあ、いいや。そんじゃあ、俺はこれで　　」

ガシッ

立ち去ろうとしたところで、腕を掴まれた。

「……おい、なんの真似だ？」

「悪いけど、しばらく泊めてくれないか？」

「は!？」

いきなり何言い出すんだ!

「私は今、お金がない。つまりは、ホテルにも泊まれない。君はうら若き乙女に、野宿でもしてると言うのか? そんな冷血漢なのか?」

「ぐっ……!」

「そうかそうか、なるほどな。今晚君は、ベットの上で想像するわけだ。『ぐへへへ。今頃あいつ、草むらの上で無防備に寝ころがってんだろうなあ……おっと、考えたらヨダレが』なんて妄想にふけて、私のことを」

「考えるかあああああああああ! 一切! 微塵も! そんなこと考えるつもりはねえよ!」

「ほほう。なら、泊めてくれるな?」

キラリと目を光らせながら、彩葉さんは怪しく笑う。

どこまで舐めたまねをするんだ……!

「なんでそうなんだよ! 大体俺は関係無」

「ああっ! なんとということだ! この街の学生がこんな鬼畜だったなんて!」

なんで俺、こんなところで寝てんだ？
その疑問を解消するために俺は視線をベッドに移して

「……………そうだった。この人がいたんだった」

俺の目に飛び込んできたのは、Ｔシャツ（俺の）と短パン（俺の）を着て幸せそうに眠る、彩葉さんの姿だった。

昨日、俺の部屋へと上がりこんだ彼女は、勝手にうちの風呂を使い、俺の服を寄越せと要求してきた。「断った場合、私は裸で過ごす」なんて言い出すもんだから、吞まざるを得なかった。

そして着替えた彼女は、浴室から出てくると、髪も乾かさずにベツドに飛び込んで寝てしまった。なんて人だ。

それを見た俺はツツコムのも面倒になり、さっさと寝てしまうことにしたのだった。

「……………はあ。ガッコ行くか」

溜息をつきつつ、俺は制服に着替えはじめる。

それから俺の分と彼女の分の朝食・昼食をつくり、俺は朝食を食べる。昼食（弁当）は学生鞆の中に放り込んだ。さらに、もろもろのことが書かれた紙と合鍵をテーブルの上に置く。これでまあ、彼女が困ることもないだろ。

「つて、すっかり順応してんな、俺」

お人よしなんかね、俺は？

そんな考えに苦笑して、俺は学校へと足を向けた。

* * *

朝のHRが終わり、一限の準備が整ったところで、俺は机につく
ぷし「これからどうなのかなー」と呟いた。
それにいち早く反応したのは、佐天だった。

「んー？ お疲れだねー、桜咲。なんかあった？」

「なんかあったつつつか……なんか来たつつつか……」

「？ どゆこと？」

「ちょっとな。うちに厄介なモンが住みついちまって」

「へー。それってやつぱ猫とか？ あたし猫好きだから、わかんな
いことあったら教えてあげるけど、どうする？」

「ん。まあ、考えとく」

猫、ねえ。だったらどんなによかったことか。猫よりも気ままで
大喰らいなやつが、現在進行形で俺のベットに寝てるんだよなあ……
…。

とは、当然のことながら言えねえんだけどさ。無いとは思うが、
『知り合って間もない女を家に連れ込んだ変態野郎』なんて噂が流
れたら、怖いからな。

「　　つと。そろそろ授業始まんぞ」

「あ、ホントだ。初春も丁度トイレから戻ってきたし……はあ、授
業メンドイ」

「同感だな」

キンコンカンコンと鳴り響くチャイムを聞きながら、俺は教科書を開いた。

* * *

「はあ。やっと帰り着いた……」

柵川中学から俺の家までは、存外遠い。とはいえ、バスを使うほど遠くはない。この微妙な距離感に現在、俺は悩まされている。自転車でも買うか？ と考えながら自宅のドアを開けると、

「おお、帰って来たね。おかえり」

「ただいま……って言うべきなんだろうな」

出迎えてくれたのは、当然彩葉さんだ。

俺は靴を脱いで、リビングに向かう。すると、昨日見たコート姿の彼女が、座布団の上に鎮座していた。

「君が作っておいてくれたご飯、とてもおいしかったよ。押しかけた身でこう言うのもなんだけど、随分好待遇じゃないか？」

「一応、客だからな、あんたは。んなことより、飯作るから、もうちょっとだけ待っていてくれ」

「すまないね〜」

これがホントにただのわがままならともかく、ちゃんと事情があって押しかけてるんだ。それを受け入れた以上、こんぐらいはするさ。

三十分後。

二人で夕食 今日メニューは、簡単にカレーだった。ただし、いくつか工夫を凝らしているが を食べている最中、伊織さん（ついさつきそれでいいと言われた）はこんなことを訊いてきた。

「そういえば、君もこの街に住む学生なら、能力者ということになるんだろう？ どんな能力を持っているんだい？」

「ん〜……。そうだな、物質変化したのが一番いいのかもしれない。名前とかは特に付いてねえけど、たぶんそんな感じだと思う。実際にやってみると」

パンツ バシィ！

カレーを食べるのに使っていたスプーンを、小さな人形に練成してみせた。

それを見た伊織さんは、ほうと感心したような声を上げて、

「なるほど面白いな。これが能力というものか。ところで、君は今、どうやってこの形状まで持っていたんだ？ まさか勝手にこうなっただけではあるまい？」

「え？ いやどうって、普通に」

……あれ？　そーいや、俺どうやってこんな形にしたんだ？　と
りあえず適当にやったらこうなって……あれえ？

首を捻る俺に、伊織さんはふむと唸って考え始めた。

「自分でもまだ上手く把握できていないのか……。だったら、いろ
いろ試してみるのも面白いかもしれないな。あれをああしてこうな
って……ああ、あんなこともできるかも」

な、なんだなんだ？　いきなりぶつくさ言い始めたぞ？

と思ったら一転、今度は無言で何事かを考えている。アップダウ
ンの激しい人だな。

そして考えがまとまったのか、やおら手を打ち、

「よし。やはり泊めてもらうからには、相応の礼が必要だな。超能
力は畑違いだが、まあなんとかなるだろう」

「？　どーという意味だよ？」

「なァーに、簡単な話さ」

伊織さんは、にやりと笑って、

「私が君の師匠になってやる！」

………は、

「はああああああああああああああああ！？」

* * *

七月十三日。

「よし。それじゃあ、『ドキドキ 伊織さんの超能力講座』、始まるよ〜」

「うぜえ！」

時間は流れて、今は翌日の放課後。

伊織さん曰く『お礼』ということで、俺が錬金術が上手く扱えるように、特訓してもらったことになった。ついでに言えば、呼び方も『師匠』に変えられた。

「それで、伊 師匠。一体何をするんだよ？」

「簡単だ。君の可能性を引き出してやるのさ」

「可能性？」

「なんだ、そりゃ？」

「そう。可能性だ。君は昨日単に物質変化と呼称したが、なんとも曖昧だと思わないかい？ システムもわからない。発動の過程がわからない。なにより、その能力の有効範囲がわからない。これじゃあ、君は能力を使いこなせているとは、到底言えない」

「……………」

まあ……確かに一理ある。

「じゃあ、どうすんだよ？」

「それも、簡単だ。君は無意識にあの人形を作り出した。以前も似たようなことは無かったかい？」

「あつた」

そう言われてみれば、先日不良の火球を防いだ時も、とつさの行動だった。俺は壁を作り出そうなんて、いちいち考えていなかった。

「なら、答えは一つ。君はなんてことはない、イメージで物質を変えているんだ。無意識のときには、とつさに一番その状況に適したイメージを考えたんだろう。それが分かれば、まず一つ進歩だ。……そうだな。槍を想像しながら、能力を使ってみればいい」

「ん」

パンツ バシィ！

俺が掌を合わせ、地面に押し付けると、コンクリートが一本の槍になった。それも、俺が想像したのとまったく同じのが。

なるほどなー。そう言えば、あのクソ神の手紙にも、イメージがどうのこうのあったわ。

「って、ちょっと待てよ？ この能力、だいぶ強くねえか……？」

「うん、強いよ？ でも、私の想像が正しければ、もっと強い能力のほすだよ」

「もつと?」

「って、これ以上ってどんなだよ？」

「そうだなあ……君、屈折率って知ってる?」

「……あー、まあ一応な。何かの本で偶然読んだだけだから、あんましよくわかんねえけど」

「何、問題ないさ。今度はこうイメージしながら、能力を使いなさい。『光の屈折率を変更し、自分の前に自分と同じ虚像を作り出す』ってね」

「んなことできんのか？」

「そうは思ったが、とりあえずやってみる。屈折率の変更ねえ……とりあえず、自分の前に虚像を作る感じでやってみよう。」

「パンツ　　バシィ！」

「見た目は何も変わらないなか、練成音が響き渡る。」

「その数秒後、何を思ったか、師匠は俺に向かって走り寄り」

『俺の目の前の空間をブン殴った。』

「……………へ?」

「何がしたいんだ？」

「うん。やっぱり、光も効果範囲か。これはなかなか……………」

師匠は昨日のようにブツブツ考え込み始めた。
それを見て、俺は師匠に尋ねる。

「なんの意味があつたんだ、今の？」

「ん？ ああ、君から見たら、私は君の目の前で空振りしたことになるのか。けどね。私からすれば、『君を確かに殴ったはずだった』。この意味がわかるかい？ これは、屈折率の変更が成功したという証明なんだよ」

「じゃあ……」

「そつだ。君の能力は、コンクリートや金属など、目に見えるものだけに限らず、光や風などの目に見えないものすら好きにいじれるらしい。これは相当のことだよ」

「……………」

なるほど、確かにこれは凄い。だけど……、

これほどの力を俺に与えて、神は一体何がしたいんだ？

別に、これほどの力がなくても、生きていける。むしろ、大きすぎる力は、結果的に危険を生む。なら、ほどほどにしておくのが一番賢いやり方だろ？

これが偶然なら、別にいい。だけど、もしそつでないのなら……、

「……………ハッ。なんてな。あのバカ神がんなごちゃごちゃしたこと、考えねえだろ」

「ん？ 何の話だい？」

「何でもねーよ。んなことより、次は何すんだ？」

「いや、もう修行は終わり」

もう？ 早くねえか？

そんなことを考えていたのがわかったんだろ。師匠は一つ苦笑を漏らして、

「君が今まで理解していたのは、基礎の基礎。そして今私が教えたのが、基礎とわずかな応用。ここから先は、君が切り開く道さ」

「師匠……」

……なんだ。ただのダメな人かと思ったら、割といい人

「というか、もうメンドイから切り上げたい」

「台無しだよコンチクショー！」

* * *

修行も無事(?)に終わり、今は深夜。

俺はやっぱり床で、伊織さん(修行が終わったので、呼び名は戻った)はベットで寝ていた。とはいっても、どちらも寝転んでいるだけで、まだ睡眠には入っていない。なぜなら、俺達は会話してい

たからだ。

始めはたわいない会話から始まって、今はお互いの事を軽く話していた。伊織さんは明日学園都市を去るらしく、今のうちにいろいろ話しておこうと俺が思ったからだ。

……いや、まあなんでそんなことを思ったのかはわからねえけど。

「そついやさ、伊織さんはなんでこの街に来たんだ？」

「……ちよつとね。『とある能力者』を探してるんだ」

とある能力者？

「私はもう、その能力者を五年間探してる。噂が流れるばかりで、実在するという証拠すらない、伝説とも呼べる能力者をね。この街ならいるかと思ったんだが、ハズレだったよ」

「なんでそんな奴を……」

「それは秘密さ。親しき仲にも礼儀ありって言葉があるだろう？ 他人の事情つてのは、そんなとやかく詮索するものじゃあないよ」

「他人つて……」

なんとなくその言葉が面白くなって、俺は無然と呟く。
ベッドの上でクスリと笑われた気配があって、少し恥ずかしかった。

「さあさ。このお話はもう終わりだ。君は明日も学校があるんだろ
う？ 早く寝るといい」

「……わーったよ」

釈然としない感じは残りながらも、俺は返事を返す。

胸にくすぶる思いはあったが、それを押し込めて、俺は無理やり眠りについた。

* * *

七月十四日。

「さて、と。それじゃあ、お別れだ」

伊織さんは、律儀にも俺が学校から帰宅するのを待っていてくれた。

それが俺のためだったのは……まあ、自惚れではないだろう。出ようと思えば、いつでも出れたわけだし。

「ああ。長いようで短い三日間だったよ」

「そうだね。君には世話になった　　と。そうだ。修行……とい
うのはちよっと違うが、少しだけヒントを与えよう」

ヒント？

伊織さんは悪戯を企んだ子供みたいな笑みを浮かべて、

「君の能力だけだね。私は、単なる超能力だとは思わない。君の力は、『世界を捻じ曲げる』ための力だ」

なんだそりゃ？ とか、意味わかんねえ！ とか……思ったはずだ。

だけど、口を突いたのは、違う言葉だった。

「……そう、なのか？」

「ああ。それが君の本当の力だ。 まったく、デタラメだね。君、本当はレベル5？」

「いや、知らねえ。 システムスキャン 身体検査つてのは、まだやってねえからな」

これは本当の話だ。なぜだか知らんが、俺の身体検査はまだ行われていない。故に、『測定待ち』ノンレベルなんてあだ名がつけられた。

「ふうん。まあ、いいや。とにかく、これで私の修行は終わりだね」

そう言っつて、伊織さんはきびすを返す。

俺はその背に、慌てて呼びかけた。

「なんだよ、もう行くのかよ？」

「うん、まあね。私にもスケジュールってものがあるし」

多分、昨日言っつた能力者探しだろう。五年も探してるなら、引き止めるわけにはいかねえ。

「……そっか」

「そんな悲しそうな顔をするなよ。君と私は、会っつて三日の関係だろっつ。」

「そりゃそうだけども……」

頭を掻きながらそう言う俺に、伊織さんは笑って、

「ふふつ。まあ、憎からず思ってくれるなら、私としては僥倖かな？ とは言え、私も歩みを止めるわけにはいかないんだ。私の目的の為に、ね」

「例の能力者探しか？」

「そう。いるかどうかもわからないけどね」

「……分かった。じゃあ、またいつか会おうな、伊 師匠！」

俺がなぜあえて『伊織さん』ではなく、『師匠』と呼んだのか。それは俺にもよくわからない。だけど、なんとなくそう呼ぶべきだと思った。

そんな俺を見て、伊織さんは背を向けて去りながら、こつ言った。

「今度会う時は、私の弟子に相応しい男になっておきなよ！
錬夜！」

最初で最後。

彼女は、俺を『君』ではなく、『錬夜』と呼んだ。
その意味はわからないが……、

「……オッス！」

彼女の言いつけは、守ろうと思った。

* * *

七月十五日。

「おはよう、錬夜！」

朝。

教室に入って早々、俺は佐天にそう呼ばれた。

「いや、なんでいきなり名前？」

「そ、そうですよ佐天さん。唐突ですよ」

「ん？ どうでもいいじゃん、そんなこと。それよりさ、錬夜もあたしのこと名前で呼んでいいよ」

名前？ 別に構わねえけど……。

「……………涙子？」

「ッ！ なんか、照れるね〜」

「お前がそう呼べつつつたんですけど?!」

なんなんだ、こいつは？ なんか変じゃね？
そんなことを考えていたら、初春が、

「うっ！ だったら、私も名前で呼んでください！ 私も錬夜君って呼んじゃいます！」

「ええ！？ 初春まで?!」

「錬夜君！」

「わ、わーったよ！ 飾利！ これでいいのか？」

「はいっ！」

な、なんだなんだ！？ 今日はい体どうなってるんだ？！
誰か俺に教えてくれよ！

実の話。

俺と伊織さんが別れるシーンを、涙子は偶然見ていたらしい。それで彼女が俺を名前で呼んだことに、嫉妬したのだとか。どうやら初日に助けたことでフラグが立っていたらしい。飾利は言わずもがな、二日目に助けたことでフラグが立った。それで涙子に対抗しようだ。

あ、ちなみにこの事実は『俺』は知らないぜ？ 今は『語り部としての桜咲錬夜』だから。

……って、何言ってるんだろっな、俺？

* * *

七月十四日。

学園都市を抜け出した私は、ふうと息をついた。
考えるのは、『あの少年』のこと。

「彼の能力は、やはり『アレ』なのだろうか……？」

瞳を閉じて、思い出す。

彼が能力を使う時、一瞬だけ首の後ろに『十字架』が表れた。さらに、あの能力の在り方は……私の想像をさらに裏付けるものだった。

つまり

「『神の三柱』……その一柱を担うのが、彼ということなのだろうか。だとしたら、あの能力者は噂どおり存在する……」

と、そこまで呟いたところで

P r r r r P r r r r P r r r r

「む。うるさい上司からの電話か」

心情としては無視したいが、そうもいかないだろう。

仕方なく覚悟（まあ、実際そんな大げさなものではないが）を決めて、通話ボタンを押す。

「ああ。私だ。……何？ なんだその面倒くさい仕事は。ほかの人員をまわすか、お前が直々に出ればいいだろう？ ……自分は仕事が入っているし、一番近いのは私？ そんなこと知るか お

い、それは卑怯だぞ。私が彼女を苦手としていることは、お前も知っているだろう。……はあ。わかったよ」

この台詞でわかると思うが、私は電話口の向こうの相手に、ままとやり込められてしまった。

まったく、少し前までは可愛い子だったのに……。

「仕方ないな。わかったよ、火織ちゃ　神裂。その仕事　」

そこで私は声に真剣味を混ぜ、

「　イギリス清教・必要悪ネセサリウスの教会が一人、彩葉伊織が請け負った」

さあ、お仕事の時間だ。

番外二 知られざる三日間（後書き）

鍊夜が出逢った師匠のこと、これで分かってもらえたでしょうか？

後、個人的には鍊夜と初春たちが名字で呼び合っている新鮮さも感じてもらえると嬉しいです。

第二十一話 あすなる園（前書き）

今回は、ビッグスパイダーの話を飛ばして、原作ほぼ遵守のあすなる園のお話です。ただし、時系列はこちらが作りました。ていうか、レールガンの時系列はわけがわからなすぎるので、基本全部自分が決めてます。だから、お話の順番がシャッフルされたりすることもあると思います。時系列をきっちり書くと、こういう時困りますね（汗）

それは置いていて、ようやくと長かった七月が終わり、次回から八月に入ります。しかし、当然八月もイベント盛りだくさんなので、これまた長くなると思います。

そんなこんなでお送りする、七月最後のお話です！

第二十一話 あすなる園

七月二十九日。

「ふう。やっぱり、偶には鍛えねえとな……」

額に浮き出た汗を首に巻いたタオルで拭いながら、俺は呟いた。現在、俺はジャージ姿でランニング中。ここ最近はずっかりなまけていたから、久々にトレーニングを行っているわけだ。

……ま、暇だったのも理由の一つだがな。涙子と正人がテストの点が悪いとかでどっかの養護施設にボランティアに行かされ、飾利も付き添いでついてった。そこに加えて他の友達もいろいろ用事があるらしく、捕まらなかった。

というわけで、俺は結局走ることにして……そしてあいつらを発見した。

「何やってんだ、あいつら……？」

俺が見たのは、物陰に隠れる美琴と黒子の姿だった。

二人に近づき、ぼんと肩に手を乗せて声をかける。

「よづ。こんなところで」

「「ひゃー!?」」

ヒュンッ！（黒子にレポートさせられる音）

ゴチン！（天地が逆さまになり、俺の頭が地面にぶつかる音）

ビリビリビリ！（俺が美琴の電流に焼かれる音）

「「なんだ、錬夜か（ですの）」」

「殺す気か?!」

いきなりこれはねえだろ!?

「だって、いきなり肩触られたら、ねえ？」

「まったくですわ。まあ、錬夜だったからよかったものの……」

「よかねえよ!?! ギャグパートじゃなかったら、死んでたよ?!」

なんて危険な思想を持つてるんだ、こいつらは……。
って、じゃなかった。

「んで、結局お前ら何してんだよ。あんな隠れたりなんかして」

俺の問いかけに、二人は無言である方向を指差した。俺がそれにつられて目を向けると……、

「寮監……?」

そこにいたのは、私服の常盤台中学寮監。こいつら、あの人のこと追いかけてんのか? 何のために?

「あの女が、最近ちよくちよくどこかへ出かけているらしいのですが……きつと、お見合いですわ! あんな賞味期限目の女とお見合いするような男、一目見ないことには収まりませんの!」

うけけけと悪魔の耳と尻尾が見えそうな声で笑う黒子。
それを見て、俺と美琴は互いに苦笑した。

* * *

結局俺も暇なので動向させてもらい、追いかけるうちに十三学区へとたどり着いた。そういやあ、あの人気配読めるとか言ってたわりに俺らに全然気付かなかったけど……気でも緩んでんのか？
ま、それはそうと、十三学区は小学校や幼稚園が多いことで知られる学区なわけだが……こんなところに何の用だ？

「それで、いつまで続けるの、これ？」

「無論、マルコをこの目で確かめるまで、ですわ」

二人の会話を聞きつつ、俺は歩を進める。ちなみにマルコというのは、寮監が何故かピザ屋でピザを十箱ほど買ったことから黒子が想像した、想像上の見合い相手のことだ。

と、そうこうしているうちに、寮監がとある施設へと入っていた。

「児童養護施設『あすなる園』……」

遠めに見えた門柱の文字を読み上げ、それから施設を囲う鉄柵の間から、三人で中を覗き見る。

中では数人の幼児が遊んでいて、寮監を発見したらしき子供が声を上げた。

「あー！ おばちゃんだ！」

その言葉を皮切りに、子供達はピザを手提げる寮監へと駆け寄っていく。

それを見ながら、彼女は言った。

「『おばちゃん』って誰のことかなあ………？」

ひゃあ、相変わらず、底冷えするような声だな。子供にもあんな

「お姉さんって言わないと、あげないゾ」

急に声を高くして、微笑みながら寮監は言った。

……………。

「……（って、誰だよ?!）……」

俺達は、バレないように小声で叫んだ。

その後もこの前とはまるきり印象の違う彼女は、子供と話したり、職員らしき女の人と話したりしていた。それを見ている途中、黒子が携帯端末でこの施設を調べた。

「……、『チャイルドエラー置き去り』の施設ですわ………」

『置き去り』。

これは、学園都市の社会現象ともいえるものの一つだ。学園都市の原則、入学した生徒は都市内に住居を持つ事となるという制度を利用し、入学費のみ払って子供を寮に入れ、その後に行方を眩ま

す行為。

そして、その『置き去り』を保護する施設の一つが、こことなるわけだ。

「ってことは……ボランティアか」

あの寮監がねえ……。

「わたくし、ちつとも知りませんでした……。寮監『様』がこんな
に心根の優しい方だったなんて……」

「そうね……って、『様』？」

美琴と二人、黒子を見ると、なぜか沈痛な面持ちをしていた。

「ああ、それなのにわたくし達は、なんてひどいことを言っていたの
でしょう……。黒子、自分が恥ずかしいっ！」

「いや、俺（私）たち、何も言っていないし」「」

まったく、こいつは……ん？

「あいつら……なんでここにいるんだ？」

* * *

SIDE 佐天涙子

していた。

いくつか言葉を交わしたのち、話題は寮監へと移る。

「あの人、白井さんたちの寮の、寮監さんですよ？　一緒に来たりんですか？」

「い、いえ、これにはよんどころの無い事情がありまして……」

初春の疑問に、黒子は冷や汗交じりで答える。よんどころのないつて……素直に「ストーカーしてました」つて言えよ。

と、そこで俺は、園内で会話している『二人』を見て、

「そついやあ、大園先生も来てたんか。てつきりお前らだけかと思つたぜ」

「ん？　ああ、つか、元々大園はここでボランティアしてたんだと」

へー、見かけどおりつつつか、なんかあの先生らしいな。

なんてことを考えていたら、黒子がしたり顔で頷きながら言った。

「なるほどなるほど、お相手はあの大園先生という方ですね」

「は？　相手つて？」

美琴が訊いた。

「ずばり！　寮監様はあのお方に恋をしていますのよ！」

「」「恋い？！」「」

「ほほう」

「大園に恋人！？ ふざけんな！」

驚く美琴と涙子と飾利。にやりと笑う俺。なぜかキレル正人。恋、ねえ。あの寮監が……。これはなかなか

「おもしろそうだな」

これは、ある意味でチャンスだ。前回の借りを返してやろう。というわけで、俺は提案した。「その恋、俺達で実らせてみたらどうか」と。

「あら、わたくしもそう言おうと思っただんですの。見ていてください、寮監様！ 黒子が必ずや、二人をくつつけて見せますわ！」

「わあ、なんかそれ面白そうですね！ あの園に恋人かあ」

「私も、ちょっとやってみたいです！」

「ぐぐぐ……。俺より先に恋人だと？ 園の野朗お……！」

「そんな上手くいくかなあ……？」

乗り気な涙子・飾利とは対照的に、美琴のテンションは低い。そして正人がうざい。が、まあ多数決ということで、結局こいつらも参加するだろう。

と、いうわけで。

「さ、こうしてはいただけませんわ！ 作戦会議ですの！」

「「「おー!」「」「おー……」

「いいのかなあ……?」

* * *

七月三十日 昼。

「こちらが、今日一日みんなと遊んでくれる、お兄さんお姉さんですよ」

「「「「「よろしくお願いします!」「」「」「」

そんなこんなで、翌日。俺達はこうして、再びあすなる園に足を運んでいた。正人たちは引き続き補習代わりとして、美琴と黒子と俺は自主的なボランティアとして。

そして、大園先生が子供達のもとへ向かったのを見計らい、作戦会議が始まった。

「それでは、さっそく作戦を始めたいと思いますの。まずは寮監様、貴女は厨房に向かってくださいですの。そしたら、アクションがあるまで待機ですわ」

「は？ 厨房？ なぜ私がそんなところに」

「いいからいいから。涙子、この人を厨房まで連れてってくれ」

涙子が厨房へ寮監を連れて行ったことを確認し、次は第二段階へ。俺は大園先生を呼び、それから「寮監さんが子供達の誕生日のためにケーキを作るらしいぞ」と吹き込んだ。したら、案の定彼はそれを手伝うために厨房へ。

「なあ、錬夜。この作戦の意図ってどこにあるんだ？」

一日たって諦めたのか、協力的になった正人が尋ねてくる。

「ああ？ そんなこともわかんねえのか、お前は」

さすが、馬鹿だな。

「簡単なことです。こうすることにより、二人きりで共同作業を行うことになり、それによってさらに親密化！ これぞ名づけて、『愛の結晶作戦』ですのっ！」

「ふえ！？ あ、愛の結晶って……なんかやらしい響きですね……」

「ははあ、なーる」

黒子の説明でようやく理解したのか、正人はしきりに頷く。……それにしても、なんで涙子は赤くなってるんだ？

それに、一応俺も乗ったとはいえ……、

「そんなに上手くいくかあ……？」

「そんなに上手くいくかなあ……？」

いろいろと、先行き不安ではあった。

『ぎゃああああああああああ！？』

「「「「！？」」」」

美琴・正人を子供達のお守りに行かせた後、俺達は残った四人でこれからの展望を話し合っていた。

そんな時、突如、寮監の叫び声が響いてきた。慌てて俺達は厨房に向かい、扉を開けた。

「んだよ、これ……」

清潔に保たれていたはずの厨房は、『小麦粉』によってそこら中が真っ白に変わっていた。まるで、スモッグみたいだ。

事情を聞けば、寮監が小麦粉を開けようとして、盛大にぶちまけたらしい。

「なんで小麦粉あけるだけでこんなに……」

「同感だな……」

呆然と呟く涙子に同意を示し、苦笑いを浮かべる。

さて、こんな状況だが、黒子は想定内だったらしい。なんと、ケーキを作り直す時間がないことを理由に、二人をケーキ屋へ行かせた。無論、保険として涙子と飾利をつけて。

* * *

結論から言えば、誕生日会は無事開催された。みんなで大教室に集まり、ケーキや料理を食べている。

ただし、そこまでの過程は大変だったようで……、

「はあ。疲れましたねえ、佐天さん」

「うん。まさか、ケーキ買いに行くだけで、道に迷ったり、犬に追いかけられたり、川に落ちそうになったりするとは思わなかったよ……」

「うーん、多分大園先生がいたからだろうなあ。普段のあの人がいたら、そんなことなさそうだし。」

「ま、一応上手くいったようだし、よかったんじゃないかねえ？」

「まあな」

正人の言葉に軽く返し、笑う。なにはともあれ、これで上手いきそうだし。

と、そのとき、突然一人の女の子が声を上げた。

「あー！ お姉さんと大園先生、らぶらぶだあ！」

それに触発されたように、他の子供達も騒ぎ出す。寮監は珍しくうるたえ、大園先生も「僕なんかじゃ役不足だよ」と、困ったように頬をかいた。

「では、どんな方が理想的でいらっしやいますの?」

「え? そうだなあ……尊敬できる人、かな」

尊敬……。

「と、言いますと具体的には?」

「うーん、自分の事より他人のために行動できる人、かな」

「(錬夜みたいなのことかな?)」

俺の隣で、涙子がぼそつと尋ねてくる。「俺は、んな人間じゃねえよ」と軽く笑うだけに止め、自分の考えに没頭し始めた。

尊敬できる人……か。俺の場合は、伊織さんとか、結構いるな。

でも一番は……やっぱり『あいつ』かな……。

あ
『あたしはさ、錬夜。誰かの役に立てる人間になりたいんだ
……』

「あれ? どうかしましたか、錬夜君?」

「なんか、暗えぞ?」

「……ん。なんでもねえよ、飾利、正人」

と、そう言った時だった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ

「ッ！ 地震か！？」

突如大地が揺れ動き、室内のものがガチャガチャと音を立て始めた。当然子供達はパニックになり、騒然とした雰囲気の流れ始めた。クソッ！ このままパニックってたら……！

「動くな！ 落ち着いてテーブルの下へ！」

寮監の一声で若干落ち着きを取り戻した子供達は、すぐさまその指示に従った。俺と正人は今だ暴れる子供を、半ばむりやり机の下に押し込んだ。

それでも取りこぼしがあったようで、一人の男の子が悲鳴を上げながら出口へと駆け出す。

しかし焦っていたためか、その拍子に棚にぶつかり、その上に載っていたポットが彼目掛けて落ちていく。

「チッ！」「

俺と正人は舌打ち交じりに駆け出すが、テーブルを挟んで向こう側にいるため、距離があった。

間に合うか……！

「危な

大園先生の声も、どこか遠く聞こえる。こうなったら風を生み出

して吹き飛ばすかと考えて手を合わせたとき、寮監が子供の上に覆いかぶさった。

ゴツ！

鈍い音を響かせ、ポットは寮監の背にぶつかる。俺達は慌てて駆け寄り、声をかけた。

「おい、大丈夫か?!」

寮監は軽くうめくが、たいした傷もないようで、ゆっくりと上体を起こした。

ほっ。頭も打ってないし、一安心だな。

と思っていたら、寮監はいきなり険しい顔つきになり、

「こら！ だから落ち着けていったでしょ！」

「い、いめんなさい……」

「……ふう。どこか、痛いところない？」

「あ……うん！」

……。なんか、印象変わったな。いい人じゃん。
そして皆が大分落ち着いたころ、大園先生が、

「先生……。流石です。尊敬します……」

「大園、先生……」

……お？

「これは……」

「もしかして……」

俺と正人は互いに顔を見合わせる。
上手くいった……のか？

* * *

七月三十日 夜。

ファミリーレストラン『Jona Garden』。俺達は今、その一角からとある席を眺めていた。

「プロポーズかあ。いよいよ、大詰めですね！」

「ああ、なんか、あたしまでドキドキしてきちゃったよ」

「でも……なんで、ファミレスなのかな？」

「これだから、彼女いない暦〓年齢の男は困るんですよ」

「いや、それはどうかわかんねえだろ」

「くう……！！ 大園に先を越されるとはっ！ 一旦は認めたとはいえ、やっぱり悔しい……」

とまあ、以上の会話を聞いてわかるだろうが、俺達が見ていたのは、寮監と大園先生の相席だ。なんでも、相談があるとかで寮監が先生に呼び出されたらしい。

で、それをプロポーズの申し込みと解釈した黒子が召集をかけ、こうしてみんなで集まっているというわけだ。

「　　と。話始めたぞ」

「「「「「「「「「「「「」

俺が注意を促せば、そろいも揃って集中し始めた。興味津々か、お前ら。

ま、かくいう俺も当然興味はあるので、静かに耳を傾ける。

『それで……、私に相談というのは？』

『……単刀直入に訊きますけど……先生は、結婚相手が年下って、どう思いますか？』

「「「「「「「「キタ

「!?」「「「「「「」

「（これはもう、完璧なんじゃないの!?!）」

「（け、決定打ですよ、佐天さん！　これはもう決まりです!）」

「（ああ、ついにあの鬼寮監が結婚するのね……）」

「（大園殺殺殺殺殺殺殺殺　　ツ!）」

「（怖っ！？ 今だかつてないほど正人から殺意を感じる！？）」

「（シッ！ まだ話は続いていますのよ！）」

『け、けけけ結婚、相手、ですか……………』

『はい。例えば……………僕、みたいな』

『 と、年は関係ないと思います……………。その人を、尊敬できれば……………』

『 やっぱり！ 先生なら、そう言ってくれると思ってました！』

……………こいつはもう 決まりだな！

パン！

夜中のファミレスに、ハイタッチの音が響いた。

* * *

七月三十一日。

明けて、翌日。七月の終わりとなるこの日、同時に一つの片思いにも決着がつこうとしていた。

前日の夜、寮監は、女性陣に服装のプロデュースを頼んだ。大園先生のプロポーズに対する答えをきちんとしたいという、本人の気持ちの表れだろう。

そして、ここまで見守ってきた俺達は、ことの顛末を見届けようと、先日のように鉄柵の隙間から二人の様子を覗いていた。

二人は今、園内にあるブランコに座っている。口火を切ったのは先生だった。

「今日はなんだか、雰囲気が変わりますね」

「……あの、昨夜のお話ですけど……」

「ああ。ありがとうございます。先生のおかげで、やっと決心がつかれました」

「え……？」

そうやって先生が懐から取り出したのは、一つの小箱。中には……

「これって……」

寮監が、それを見ながら零す。小箱の中身は、結婚指輪だった。そして、先生は続けて言った。

「『彼女』にプロポーズしようと思って……」

おお、ついに来た！ これでやっと……ん？

「……………彼女（彼女）？」「……………」

寮監の呟きと、俺達の心中が重なった。

……普通、プロポーズする本人に向かって、『彼女』なんて使う

だろうか？ いや、それはないだろう。それだと、あまりに不自然すぎる。

ってことは、まさか……、

「ええ……」

感慨深げにつぶやいて、大園先生は園長先生を見る。もしかして、『彼女』って……。

「あの時、先生に『年は関係ない』って言われて、勇気が出ました。だから、僕は和子さんに、プロポーズしてみようかと思うんです。

……先生。本当にありがとうございました」

「……………」

……………。

「……………いえ。よかったです、お役にたてて」

寮監はうつむいていた顔をスツと上げ、

「お幸せに、大園先生」

その言葉を最後に、大園先生はブランコから立ち上がり、寮監に一礼したあとで、園長先生と子供達のもとへと駆けていった。

「……………」

それを見送った後、寮監はおめかしのために外していた眼鏡を再びかけ、先生と同じように子供達のもとへと向かう。

俺達は、そこまで見たところで溜息をついた。

「……まさか、こんな結末とはなあ」

「だよな。大園のやつ……年上好きにもほどがあんだろ。何歳差だよ」

とまあ、俺達は割りとあっさりしてたんだが、女性陣は違ったよ
うで、

「うーん、絶対上手くいくと思ってたんだけどなあ……」

「ですよ。なんか、寮監さん、かわいそうです……」

「……ま、けどさ。きつといいことあるよ、そのうち」

「ですわよね。寮監様、いい人ですもの……」

と、それぞれ思うところがあるのか、しみじみと述べていた。

これは後日わかることだが、先生のプロポーズは成功し、園長先生と無事結ばれたようだ。

一つの片思いが潰え、一つの片思いが成就した。ハッピーエンドともバッドエンドともつかない結末だったが、こうしてこの三日間の恋愛騒動は終着を見た。

* * *

「泣きたいのはこつちだああああああああああ！」

失ったものは、野口英世さんの一個小隊（寮監は財布を忘れていた。サ エさんかよ）。手に入れたのは、寮監が泣き上戸だという情報。

……等価交換なんてのは嘘だと思いつつ、桜咲錬夜の中学一年の七月は幕を閉じた。

第二十一話 あすなる園（後書き）

というわけで、あすなる園のお話でした……が、最後の最後で寮監のキャラ、崩れちゃいましたね（汗）。何か話にオチをつけたいと思っていましたが、気付いたらあんな話になってました。

ちなみに、作中の地震はポルターガイストの影響ではありません。その話はまだまだ先になる予定なので。

それはともかく、次回から盛夏祭編に入りたいと思います。原作とは大分違った展開がありますので、そこらへんを楽しんでいただけたらなあと思っております。

それでは、ご意見・ご感想・アドバイス、お待ちしております。

第二十二話 盛夏祭・前日談（前書き）

というわけで、盛夏祭編第一話をお送りします。第一話と銘ついたのは、これが二、三話構成であり、前日（といっても、二日前から一日前）の話であるからです。

今回は新キャラや原作にはない展開、会話のほとんどが新キャラ相手など、オリジナル色はかなり強い話になりました。はつきり言って、盛夏祭の上手いじり方が思いつかなかったんです（汗）

そんなこんなでお送りする第二十二話、楽しんでもらえると幸いです。

第二十二話 盛夏祭・前日談

八月四日。

「ミロト……」

「レンヤ……」

さびしげに濡れるミロトの瞳を見つめながら、俺はそつと彼女を抱き寄せる。普段の気丈な態度からは想像もできないほど、彼女の身体は柔らかく、一瞬ドキリとしてしまう。

そんな内心はおくびにも出さず、俺は彼女の顎を軽く持ち、わずかに顔を上げさせた。

「……………」

二人の間に、もはや言葉はない。そんなものがなくとも、互いの気持ちは用意にわかった。

スツ……と。

唐突とも言えるタイミングで、俺は彼女に唇を近づける。

俺達は共に両目をつむり、やがてお互いの唇と唇の距離はゼロへと

「……っ、やっぱりムリイ……いいいいいいいいいいいいいいいい……」

ブルブルブルブルブル……

「ぐはああああああああああああああああああああ！」

……フツ。なるほど、これが俺の死に様というわけか。

愛する彼女の雷に焼かれ、その亡骸を彼女の両腕の中へと横たえる。ああ、理想どおりの死に方だ。

我が人生に……一片の悔いなし！

「って、んなわけあるかああああああああああああ！」

悔い残りまくりだわ！ なんだこの人生の幕切れは！？

俺が溢れる思いを叫ぶと、鋭い声が飛んできた。

「カット！ なにやってんのよ、桜咲君！ せつかくいい感じで進んでたのに！」

「アンタの目は節穴か？！ どう見ても俺、被害者じゃん！ 俺、がんばってたじゃん！」

「女の子は正義。これ、アタシの基本方針だから」

「あまりにも理不尽っ！」

わて。

俺が今こうして、常盤台中学演劇部部长、言祝初音ことのはつねさんと対面し、美琴とコテコテのラブストーリーを演じていたのには、きちんとした理由がある。

始まりは、二日前

* * *

八月二日。

常盤台中学女子寮の寮監が俺を呼んでいる。

そんな知らせを受けたのは、いろいろあった七月が終わり、八月に入ったばかりのことだった。

前日の八月一日はちよつとした事件があつて、その解決に奔走したせいで爆睡してたんだが、黒子からの目覚まし代わりのモーニングコールによつて起こされ、そう伝えられた。

はつきり言つて嫌な予感しかしなかつたが、あの人には借り（と）いつていいのかはなはだ疑問だが）がある。情けねえが、下手に逆らうことができない。

というわけで、現在俺は常盤台中学の女子寮に来ているわけだが……。

「えーと……もっぺん言つてもらつてもいいですか？」

「ああ。君を呼び出したのは私だからな。何度でも、わかるまで言つてやるわ」

場所は女子寮のロビー。そこで俺は寮監と話をしていた。

内容は当然、俺を呼び出した件について……なんだが、

「盛夏祭で行う劇の主演男優、君がやれ」

……これは、どういふことでしょう？

「つて、おい！ そんな説明で理解も納得もできるわけねえだろ！

もつと詳しく教えてくれよ！」

「しかたないな。いいか」

その後続いた説明をまとめると、以下のようになる。

なんでも、三日後　つまり八月五日に、常盤台中学寮祭、通称『盛夏祭』なるものが開催されるらしい。で、そこで寮生による演劇が行われるのだとか。

しかし、先日問題が発生。主演の一人である王子役の女子生徒が骨折してしまい、演劇が不可能になった。だが、今更代役を立てようにも、役者や裏方があるので、代わりがない。当然演劇のみに客が集まるわけでもないの、他の出し物にも人員は必要。とくれば、余裕がないんだ。簡単に言ってしまうえば、

そんで、そこで白羽の矢がたつたのが……、

「なんで、俺……?」

「もともと王子役が女子生徒だと、いささかりアル感が欠けてしまふと思つていたところだ。これを機に、どうせなら男子生徒が演じた方がいいと思つてな」

「だ・か・ら！　なんでその男子生徒が俺なんだ?!」

「そんなこと決まつているだろう。ここ常盤台中学は、女子校だ。つまりいないんだよ、男子生徒が。ただの一人も、な」

「そういうことを訊いてんじゃねえよ?!」

あいかかわらず、なんて人だ。まったくもって無関係な俺を引っ張りだそうなんざ

「プール（ボソッ）」

「誠心誠意、身を粉にする気持ちでがんばらせていただきますっ！」

く、クソ……！ ダメだ、もはや身体が条件反射のレベルでその言葉に反応するようになっていて。どうやらこの人には、俺はもう逆らえないらしい。

というわけで、半ば無理やり俺は演劇に参加することになった。

* * *

一時間後。

……無理。これ、無理。

寮内にある講堂。そこで俺たち演劇メンバーは練習するわけだが

……、

「あら、じきげんよう」

「そちら、お疲れになってはいなくて？」

「こまめに水分補給することを、お勧めしますわ」

当然、俺以外のメンバーは女子生徒、しかもお嬢様なわけで。

湾内や泡浮で多少なれたとはいえ、さすがにこれだけの数のお嬢様がいる空間は、そこはかとなく居心地が悪い。まるで自分が虫けらのように下賤な存在に感じてしまう。まあ、もちろん他の連中は

そんなことを思っているわけではないだろうが。

ただまあ、嫌煙されないのはよかった。はじめは不信感ばかりの目で見られたが、寮監がきちんと紹介すると、途端に態度が軟化した。あの寮監、すげえ信頼されてんだな……。

「ほいほい、桜咲君。そろそろアタシたちの雰囲気には慣れたかにやん？」

「『かにやん？』、じゃないですよ。つか、んな簡単になれるわけないでしょ。こちらら、普通の男子中学生。こんなお嬢様空間には、ホントなら一生縁のねえ人間っすよ？」

「にやはははっ。ま、それもそうだよねえ。同じ女であるアタシでさえ、この空間には初っ端のころは圧倒されっぱなしだったもん」

講堂の隅っこの方で練習を眺めていた俺に話しかけて来たのは、一人の常盤台中生。美琴たちで見慣れたサマーセーターを着こなし、栗色のサイドポニーを揺らしている。ついでに、中二にしては身長が小さい。

彼女の名前は、言祝初音。常盤台中学演劇部部长であり、今回行う演劇の舞台監督でもある。ちなみにまだ二年生らしいが、その能力の高さから部長に就任したらしい。

「で？ 肝心の台詞はもう覚えた？ ソラで行けそう？」

「まさか。まだ覚えて三割程度。主役だけあつて結構台詞多いから、覚えるのは大変ですよ。それに……」

手元に持っていた台本からチラッと顔を上げれば、こちらを見ていた女子生徒がそそくさと顔をそらす。さっきから男が珍しいのか

見られっぱなしで、台本に集中できねえんだよな……。

そんなことを言ってみれば、言祝さんはからからと笑って、

「桜咲君がかっこいいから、みんな見とれてたんじゃないかにや〜」
「？」

「それこそ、まさかだよ。あるわけないでしょ、んなこと」

かっこいいなら前世でもっとモテてもよかつたろ……。

「ん〜？ ま、それはいいや。しかし、三割……か。一時間の成果にしては、上々上々。この分だと今日中には全部覚えられるんじゃないの？」

「まあ、かもしれないですけど……」

こちらら、失敗したらあの寮監おにになにされるかわかったもんじやないからな。それこそ死に物狂いで覚えてやるさ。

ま、問題は……、

「たった三日でストーリーの進行、演技、その他もろもろを覚えられるか……」

「うん、そこが問題だろうね。演劇なめちやいけないよ。そんな簡単に覚えきれものじゃない。……とはいえ、それは君以外がなくても同じことだよ。なら、付け焼刃でも君が頑張るしかないね！」

「ですよねー……」

果てしなく不安だ。お嬢様同士の演劇だからそんな大したものじ

やないだろうと思っていたんだが、ところがどっこい。予想外にハイレベルな演技なもんで、驚いた。たぶん真面目なやつらばっかの
上に頭もいいから、覚えが早いんだろうな。

で、そんな中でも一番目立つのが……、

「やっぱ美琴だよなあ……」

そう、この演劇で主人公である王子と対をなす、ヒロインである
姫様。その姫様を演じるのは、なんと御坂美琴その人であった。

今なお迫真の演技で練習に励む彼女を見ながら、俺は素直に思っ
たことを口にした。

「普段はじゃじゃ馬でも、こういうときは普通に尊敬できるよな……」

「おおっと、これは予想外の発言来ましたよ？ 桜咲君、その台詞
はまるでミコちゃんと付き合いがあるかのような言い方だけど、こ
れいかに？」

「（ミコちゃん？ あ、あだ名か）まあ、他人ではないっすね。友
達……かな。それよか、言祝さんもあいつと知り合いなんすか？」

「んー、彼女を知らない人間は常盤台にはいないけど、それとは別
にアタシはクラス一緒だしねー。なんかあんまりお嬢様っぽくない
感じが気が合ったのよ。もっとも、ちよっと常識知らずな面もある
けど」

そこはまあ、同感だな。

「しかし、ミコちゃんもよくやるねー。ただでさえ『アレ』があ

るのに、こつちまで引き受けちゃって。頼まれたらめったに断らないあの性格、美点ではあるけどソンだよな」

「『アレ』？ 何の話ですか？」

「ん？ ああ、君は寮生じゃないから知らないのか。それじゃあ、練習も一段落みただし、言ってみなよ。『盛夏祭でのお前の「アレ」、楽しみにしてるぜ』って」

「？」

なんだかよくわかんねえけど……。

首を捻りながらも俺は腰を浮かせて、タオルで汗を拭っている美琴の元へと歩いてゆく。すると向こうもこちらに気づいたのか、軽く手を上げて応えた。

「ちっす。アンタも大変ねー。巻き込まれちゃって」

「ん、まあ……」

こいつは、俺がプール掃除の件で寮監に弱みを握られていることはいらない。だから単に寮監の顔見知りである俺が呼ばれたと思っているようだ。

っと。それはおいといて。

「なあ、美琴」

「ん？ 何？」

「『盛夏祭でのお前の「アレ」、楽しみにしてるぜ』？」

とりあえず言祝さんに言われたとおりに言ってみる。するとその変化は劇的で、美琴はすぐに真っ赤になった。

「な、なななななんでアンタがそれを知ってるのよ!?」
ハッ
「そうか、初音ね!? 初音に教わったんでしょ?!」

「ちよっ、待つ、落ち、落ち着けけけけけ! くくく首を揺するな!」

「わ、私だつて似合わないって思うわよ! 悪い!?!」

「悪くない! 悪くないから揺するな! 酔う!」

な、なんだつてんだ!?

「笑うなら笑えコンチクシヨおおおおおおおおお!」

「なんのことだよチクシヨおおおおおおお!」

遠くで、言祝さんの笑い声が聞こえた気がした。

* * *

八月四日。

そんなこんなであつたという間に時はすぎ、いよいよ盛夏祭前日となつた。

まあ、黒子が乱入してきたり、気分屋な監督サマがちよくちよく台本を変えたり、婚後がヒロイン役を奪いにきたりいろいろあったが、それでもなんとかここまでこれた。

俺自身も、まだまだ甘いけど、とりあえずとちらずに演技できるようにはなった。人間ってのは、死ぬ気でやれば案外無理そうなおともできるもんだなと学んだ。

「というわけで、順調なはずだったんだが……これはなんだ、監督サマ？」

現在、場所は練習場所である講堂。そこで俺はこの三日間ですっかり見慣れた顔に抗議を飛ばした。その手には、『とある変更』が加えられた台本を持って。

「なんだって言われても……そのまんまの変更だけど？」

「って、なんすかこの『王子と姫のキスシーン』とかいうやつは？
！ そんなもん、今日までなかったはずだ！」

「そうよ！ ききキスシーンなんて、できるわけないじゃない！」

同じく害を被る美琴からも抗議が飛び出す。それを言祝さんは涼しい顔で見返しながら、こう言った。

「いやー、そりゃ最初はそんなシーンなかったんだけどねえ。なんてたって、役柄では王子と姫だけど実際は女の子同士なわけだから、ちよつとそれは画的にどうかかなーって思ってたんだけど……でも、せつかく男女になったわけだから、やっぱり王道は入れたくなつて。あ、そりゃアタシも最初は悩んだよ？ だけど、アタシの演劇魂が、こう、メラメラと」

「言い訳はもういいすから！ これ、ホントにやんの?!」

「うん。もちろんフリだけど」

って、言われてもなあ……。

俺はチラリと美琴を伺い見てみると、彼女はトマトみたいな顔になっていた。こいつ、見かけによらないところあるからなあ。もしかしたら、俺が思ってるよりも初心なのかもしれないねえ。

というわけで、やっぱり無理だと言おうとしたら、

「おやあ？ まさか、天下の電撃姫様が、キスそれもフリごときでたじたじなのかにやん？ いまどき中学生でキスぐらい、どってことないよねえ桜咲君？」

「え？ あ、ああ……」

あ、やべ、つい頷いちゃった。

「ッ！ わ、わかったわよ！ やってやるっじゃないの……!」

「フッ……」

計画通り、みたいな顔でにやりと笑う言祝さんを見ながら、俺は思った。

「この人、絶対にDSだな」と。

「さーて！ というわけで、修正版ラストシーンの練習行くよ！ はいみんな、配置についてー!」

監督らしい、よく通る声で言祝さんはみんなに指示を下す。もし
かしたら能力を使ってるのかもしれないが。
はあ、こうなったらもう覚悟決めるしかないか。

「ほら、行くぞ美琴。……美琴？」

「……………」

なんだこいつ。なんかブツブツ言ってるあ。
俺がそつと耳を近づけてみると、

「大丈夫……これは演技、これは演技……いざとなったら、逃げる
か錬夜を倒せばいいんだし……………」

「……………」

ものすごく、先行きが不安になった。

* * *

んでまあ、この設定で練習が始まったわけだが、結果は冒頭の通
り。最終的に美琴の中の選択肢は、俺の撃破が選択されたい。
できれば、逃亡を選択してほしかった。

「いててて……………。つたく、どうすんだよ、これ。やっぱり台本戻し
た方がいいんじゃないすか？」

「うーん、でもやっぱり一端の監督としてはこだわるところはこだ

わりたいし……」

「とはいっても、ヒロインがああ調子じゃ……」

さすがにお客さんの前でああなったら、目も当てられない。それならいつそのことやっぱり無くしたほうがいいんじゃないかと、言祝さんに提案してみる。

ちなみに、この場に美琴はいない。あいつは「ちよっと頭を冷やしてくる」といって、どこかへ行った。中庭かどっかで、紅茶でも飲んでいるのかもしれない。

「むむむむ……あ！ そうだ、そうしよう！」

「……どうで、どうするんですか？」

突如、「私、名案思いつきました」みたいな顔で言祝さんは声を上げた。はつきり言って嫌な予感ぐらいしかしなかったが、一応尋ねてみる。

すると彼女は、実にすばらしい笑顔でいった。

「直前まで、ミコちゃんに言わなければいいのよ……」

「は？」

何を言い出すんだ、この人は。

「だから、つまりはこういうこと。ミコちゃんには、『やっぱり無理そうなんでキスシーンは無くす』と言っておき、本番になったら、君が予定通りキスを仕掛ける。その後は、君が上手くやってね」

「いやいやいや、アンタ鬼か?!」

美琴に言わないこともそうだし、俺に丸投げなところとか、かなり無理ある注文だと思うんですが!

「大丈夫! 君ならできる!」

「その根拠が欠片もない自信はどこから湧いてくるんだよ?!」

しかし、結局この後俺は流され、計画を了承させられることになる。

そしてその日の夜中、俺はどうやって上手くことを運ぼうか考え、結局行き当たりばったりでいくしかないという結論に達し、眠りについた。

そして、翌日 いよいよ盛夏祭が幕を開けることになった。

……………そういやあ、『アレ』ってなんのことだったんだろ?

第二十二話 盛夏祭・前日談（後書き）

ここまでで前日のお話。なので、次回がいよいよ当日のお話になります。まだおぼろげな構想しかありませんが、上手くいくようにしたいです。

それでは、また次回。

ご意見・ご感想・リクエスト、お待ちしております。

第二十三話 盛夏祭・当日談（前書き）

今回は、盛夏祭編・第二話ということになります。原作＋演劇という構成になっていますので、少し長くなりました。

次回で盛夏祭編は終了。というわけで、以前の番外編が生かされる
ときがやってきます。

第二十三話 盛夏祭・当日談

八月五日。

「あつ、いたいた！ おはよう、鍊夜！」

「おはようございます、鍊夜君」

「うーっす。来たぜ、鍊夜」

「おう。んじゃ、行くうぜ」

今日はいよいよ、常盤台中学寮祭『盛夏祭』の当日。

いろいろと悩みの種を抱えながらも迎えたこの日、俺は涙子や飾利、それから正人を寮門で出迎えた。

といつても、別に俺が招待したからというわけではなく（招待したのは黒子だ）、単にみんなで集まる予定だったのが、俺だけ早く着いてしまったからだ。

「行くのはいいけど、鍊夜、演劇の練習しなくていいの？ 午後にあるんでしょ？」

「ん？ ああ、まあそうだけど、本番前の最終チェックまでは俺はいいんだ。舞台の細かい整備とかは裏方の人がやるし、昨日で練習は終わったから。だから、役者のメンバーは接客に回るんだと」

この寮祭では、学園祭並にいろんな展示や出し物があるらしくて、かなり忙しいと聞いた。まあ、役者が裏仕事をするよりかは接客に回した方がいいってのは、なんとなくわかる。

「ってわけだから、午後までは俺も一緒に回るよ」

「じゃあ！ じゃあ！ 早く、早く行きましようみなさん！」

「ちよつ、初春！？ そんな慌てなくても、終わったりしないって
！」

「ふふつ……腕が鳴るぜ」

「ああ？」

何言ってるんだ、こいつ？

怪しく笑いながら呟く正人に問いかけるが、返ってくるのは「気にするな」という、なんとも曖昧な答え。どうでもいいが、不審者に見えるぞ。

「……ま、いつか。んじゃあ、行くか？」

「」「」「はい（うん）（おう）！」「」「」

* * *

「……………おい、その変態コンビ。お前らは、一体何やってんだ」

「「誰が変態コンビよ（）ですの（）！」「」

寮門を抜け、玄関ホールにたどり着くと、いつものようにいきす

きたじゃれあいを行っている美琴と黒子を発見し、ついっこんでしまった。

……てか、このやり取り、前にした気もするな。

「白井さん！ ご招待ありがとうございます！」

「いえいえ、お礼には及びませんわよ」

「うわー！ その格好、可愛いですね、御坂さん！」

「そ、そうかな……って、鍊夜、何よその目は？」

咎めるような口調でそう言う美琴を無視し、彼女の『格好』に注目してみる。

まあ、ぶつちやけて言えば……美琴はメイド姿だった。

「……なんで？」

「し、仕方ないじゃない！ 接客には基本、寮生はこの格好じゃないけいないんだから！」

「……じゃ、黒子はなんで制服？」

「わたくしは記録係だから、いいんですの。接客なんてしている暇ありませんわ。それに……お姉様のベストショットも撮らなければいけませんし！」

「撮らんでいい！」

二人でぎゃーぎゃー騒ぎあっているのを見ながら、俺はふと想像

してみる。

もしも俺が主人で、美琴がメイドだったら……、

(鍊夜、妄想スタート)

ガシャーン！

『 ああ！ 旦那様が大切にしている壺を割っちゃった！ 』

『 なにに！！？ 』

『 す、すみません旦那様っ 』

『 謝って済む問題かあ！ このダメダメなメイド、略してダメメイドが！ 』

『 ……すみませんって言うてんでしょうが、ゴラァッ！ 』

ビリビリビリビリイッ！

『 うぎぎや ああああああああああああ！ 』

(妄想終了)

『 ……絶対、こいつだけは雇わない 』

『 ん？ なんか言った？ 』

『 いや、なんも 』

……つて、あれ？ そういや正人どこいった？

普段なら口やかましく喋り倒す男がいないことに気付き、俺は辺りを見回す。見えるのは、来場している一般生徒やメイド姿の寮生それから

変態まわてが一人。

「HEY、お嬢さん！ 接客なんて放りだして、今から俺だけのメイドになってくれませんか？（まばたきバツチーン）」

「えっ？ あ、あの、困ります……」

「いいじゃん、いいじゃん。な？ ちょっとだけだからさ！」

どこから取り出したのか知らんが、バラを一輪差し出しながら、正人は一人の常盤台生をナンパしていた。「腕が鳴る」ってこのことだったのか。

やれやれ、あいつにも困ったもんだ。これ以上あの女生徒が被害を受ける前に、回収しよう。

「おい、正」

「お前は何してる！」

スパコーン！

「ぐへっ！？」

俺が声をかけるよりも早く、美琴となぜか寮監が正人の頭をしばいて、叩きのめしていた。その際にナンパされていた女生徒は二人

にお礼を言つて、逃げていった。
てか……、

「なんで、寮監あんたがここにいるんですか？」

「決まっているだろう。見回りだ」

なる。

俺が頷くと、正人が飛び上がりながら、

「おい！ 俺は客だぞ！ 手を出してもいいのかあ！」

「いや、お前よくそんな台詞を吐けるよな……」

黒子からの招待も、半ば温情や同情からのものだと教えたほうが
いいだろうか？

「フン。この寮祭においては、寮生の撮影すら禁止しているのに、
ナンパ行為などもつてのほかだ。見過ごせんな。……それに、貴様
は大園先生の悪口を言っていたしな」

少しやりすぎな気もするが、建前と最後にボソリと呟かれた一言
を聞いて、俺は納得した。

それにしても、この人、この前の「大園殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺
ッ！」を聞いてたのか。なんて地獄耳だ。あと、未練たらたらじ
ゃん。

「(ギロツ)()」

「あ、なんも思つてないっす。ホント、全然」

読心術でも使えるのか、この女は。

俺は内心を悟らせないために口笛を吹いていると、寮監は一つ溜息をついて、こそこそ美琴を盗撮している黒子に言った。

「……まあ、いい。それよりも白井。土御門がお前のことを探していたぞ」

「え？　なぜですか？」

「さあな。口ぶりから、お前が何かの仕事をサボっているといった感じだったが」

「あ……忘れてましたの」

「なら、さつさと持ち場につけ。今日は君達は招待し、もてなす側の人間だ。特定の客人にこだわってその他をおろそかにするなど、言語道断だ」

厳しいともとれる発言だったが、まあ言ってることはまちがっちゃいない。確かに、友達と遊ぶためにいるわけじゃないしな。

黒子は一時逡巡するようなそぶりを見せたが、やがて諦めたのか俺たちに一言断りを入れて去って行った。ついでに言えば、寮監もいつの間にか消えていた。

さて、と……。

「つーわけなんだが……どうする？　俺たちだけで回るか？」

「ああ、いいわよ。代わりに私が案内するわ」

俺の提案に美琴がすぐさま返し、俺たちはその申し出をありがたく受け入れた。

そして……俺たちにとっての盛夏祭は、いよいよ幕を開けた。

* * *

CASE 1 シュガークラフト

「ほー、こりやすげえ」

俺たちが最初にやってきたのは、シュガークラフトの展示だった。色とりどりに着色された砂糖細工が等間隔に並べられている。

「相良さかさんのもも、こんな感じだったな……」

軽く作品の一つに触れながら、呟く。それから今度は、他の面子はどうしているかを見てみた。

まずは、飾利と涙子。

「うわー！ 凄いですね、佐天さん！ これ全部、砂糖ですよ！」

「うーん、ホントかなあ……。どれ　　うわっ、果てしなく砂糖だね……」

「あー！ ダメですよ、食べちゃ！」

続いて、美琴（とそれに群がる寮生）。

「御坂様もお一つどうですか？」

「ぜひ、召し上がってください！」

「あ、ありがとう。でも、私は遠慮しとくわ……」

最後に、正人。

「HEY！ お嬢さん、これから俺と一緒に」

「「ってだからいいかげんにしろっ！」」

とりあえず、美琴と一緒にしばいておいた。

* * *

CASE 2 ステッチ教室

次に俺たちが向かったのは、ステッチ教室。まあ、言ってしまうば、裁縫や刺繍などを教えてくれる場所なわけだ。

俺となぜか美琴は難色を示したんだが、テンションの上だった飾利に半ば強引に参加させられた。

というわけで……、

「痛ッ……！ だあ、クソ！ また刺さった……」

「あははっ。あんた、この前はあたしたちの前で飾切りとかやってたのに、裁縫は苦手なの？」

「ほえー、なんか意外です……」

「なーんか、アンタが苦手なことって、珍しいわね」

「うっせ……」

料理は得意だが、裁縫は苦手だ。なんかこう、ちまちました感じが嫌になる。現に今俺は狼を縫おうとしてるのに、スライムみたいなのが出来上がっていた。

んで、その反対に女性陣はさすがの腕前だった。飾利は普通にひまわりが縫えていたし、涙子は青いスピードカー、美琴に至ってはあのゲコ太とかいうキャラクターがきれいに刺繍されていた。

く、クソ……こうなったら、正人だ。あいつは味方のはず！

「なあ、こんなの男は誰でも苦手ぎゃあああああああああああああああ
ああ!？」

「ぐう……!」

道連れにしようとして正人の手元を見ると、あらゆる指に針が刺さった形跡がみられ、そこから流れた血が生地を真っ赤に染めていた。

「怖えよ! 何やってんだ、お前?!」

「わ、わざとじゃないんだっ! なぜかいつの間にかこうなってて……何故だ?」

「お前が壊滅的に不器用だからだ!」

結局、一旦救護室に寄り、正人は包帯を装備することになった。

* * *

CASE 3 生け花

救護室でロスした時間を取り戻すように、俺たちは足早に次の生け花の展示へと足を運んだ。

さすがにお嬢様学校というか、綺麗な花々がさらに綺麗になるように活けられていた。

「なーんか、生け花ってイコールお嬢様って感じっぽくない？」

「んーまあな。実際、昔、金持ちの同級生が生け花やってたし」

「ま、一応必須科目ではあるしね」

花を愛でる趣味があるわけじゃねえけど、これは凄いな……。

そんなことを考えていると、後ろからこんな会話が聞こえてきた。飾利と担当の寮生だな。

「あの、こちらの生け花は、全部ご自分で活けたものなんですか？」

「ええ、もちろんですわ」

「へー………とつても素敵ですっ！」

「恐れ入ります。でも、あなたの御髪の髪飾りの方が、素敵ですよ?。」

「? なんのことですか?。」

「……………」

……………なにやってるんだ、あいつらは。

なかなか不思議空間を作っている飾利たちを見ると、今度は別方向から正人の声が聞こえてきた。

「だからな? この花はここよりもここにこう挿した方がいいだろ。そしたら、その後ここにその花を持ってきたら、もっと見栄えよくなるぞ。」

「まあっ! 本当ですわ、あなたお上手なんですねっ。」

……………? なんであいつ、あんなに活け花に詳しいんだ? 不器用のくせに。

ま、出会ってからまだ数週間。知らねえことがあっても当然か。

* * *

楽しい時間は過ぎるのも早いとはよく言うが、あっという間に昼になった。

それまでに俺たちも数多くの展示を回ることができ、疲れを取るといふ意味も込めて、とりあえず昼食を取ることに。

そして各自が好きな料理を盛り(バイキング形式だったんだ)、

席に着く途中俺は見知った顔を発見した。

みんなに先に行くよう伝えて、俺はそのテーブルに近づく。

「黄泉川さんじゃん。何やってんすか、こんなところで」

「ん？ ああ、桜咲か。この格好見ればわかるじゃん。私らは今日は、この寮祭の警備にかりだされてる。まったく、警備員アシチスキルも楽じゃないじゃん……」

「ふーん……んで、そっちの人は？」

俺は黄泉川さんと相席している、丸眼鏡をかけた緑がかった黒髪の警備員を見た。ちなみに彼女は、腹を抑えて悶えている。卓上の皿数を見る限り、食いすぎたんだろうな……。

「ああ、こいつは鉄装綴里てつそうづつり。私の同僚で、まだまだ半人前の警備員じゃん」

「うー……それはひどいですよおお……」

「本当のことじゃん。……それより桜咲。お前この後、演劇に出るらしいじゃん？」

うっ……。

「んで、知ってんすか？」

「言ったじゃん、私らは警備に来たって。なら、ある程度プラグラムも裏事情も知ってるじゃん。当然、今回の主演男優が誰なのかも、てかそもそも、そこら中で寮生が噂してるじゃん。多分、知らない

奴の方が少ないじゃんよ」

「げ、マジか……」

ときたま視線を感じたのは、そのせいか。

「まあ、いつか。んじゃあ、俺はもう行くんで」

「ああ。しつかりやるじゃん！」

「先輩、もう動けません」

「お前もしつかりするじゃんっ！」

コントみたいな二人組みに別れを告げ、俺もみんなの元へと向かう。そのために踵を返したところで、「美琴お姉ちゃんのステージとお芝居！」という女の子の声が食堂に響いた。

その声に目を向ければ、寮監に手を引かれたあすなる園の子供たちが、楽しそうに美琴に話しかけていた。寮監、招待したんか……。しかし、お芝居つてのは演劇のことだとして……。ステージつてのは何だ？ もしかして、言祝さんが言ってた『アレ』のことか……。？

「ん？ 演劇……？」

なぜだかその言葉が引つかかって って！

「ああああああああっ！」

突然叫んだ俺の言葉に注目が集まるが、知ったことじゃない。今はそれよりも大事なことがある。

俺は走って美琴の元に行き、慌てて告げた。

「おい、美琴！ もう劇のミーティングまで時間ねえぞ?!」

「は？ ミーティングって……ああっ！」

気付いて顔を青くさせる美琴の手を引き、俺は急いで食堂の出口へと駆ける。

目指すは、講堂。最終チェックであるミーティングの開始時間は、もうすぐそこまで迫っていた。

と、その時、

「「「錬夜（君）！ 御坂（さん）！」「」」

「「ん……?」「」

俺たちを呼び止めたのは、正人、涙子、飾利の三人。彼らはそろって親指を立てて、

「「「がんばれよ（がんばれ）（がんばってください）っ！」「」」

「「「……おう（うん）っ！」「」

* * *

SIDE 佐天涙子

「さて。それじゃあ、そろそろ行きますか？」

「そうですねっ。鍊夜君と御坂さんのお芝居、楽しみですっ！」

「でも……王子役かぁ。鍊夜、いいな……」

「あら、一善君。あなた、羨ましいの？」

「ふっ。白井さん、あなたは本当にメイドのなんたるかが分かっていますの？」

「あー、相も変わらず面倒くさい女ですわねー」

「御坂様と桜咲さんの演劇、楽しみですわね、泡浮さん」

「そうですね、湾内さん」

現在時刻は、午後一時。いよいよ、鍊夜と御坂さんが主役の劇が幕を開ける時間だ。

もともと一緒だった、あたしに初春に一善。中庭でオークションに参加していた固法先輩と白井さん。ここではなく『学舎の園』の中にある常盤台中学女子寮から来た、婚后さんに湾内さんに泡浮さん。どんどん合流していつて、結局この総勢八名で観に行くことになった。

「でもさー初春。鍊夜ってたしか、三日前から練習し始めたんだよね？ そんなんで、本当に大丈夫なのかな？」

「うーん、確かに厳しそうですけど……なんか、鍊夜君ならなんとかなっちゃうしそんな気がしません？」

そう言われてみれば……そうかもね。
あいつなら、結局なんだかんだでやり遂げちゃいそうだ。

「お。あれじゃないか？」

一善が指差す方に目を向ければ、そこには確かに演劇会場だとい
うことを告げる看板があった。

あたし達はさっそく中に入る。すると、開演までまだ時間がある
のに、席は結構埋まっていた。

「くーっ、出遅れましたわ！ 良席でお姉様とついでに鍊夜の勇姿
をフィルムに納めたかったのに……黒子、不覚ですわ！」

「まあまあ、白井さん。まだ空いてる席はあるんだし、そこに座り
ましょ？ それと、彼をついでなんて言っちゃかわいそうよ」

地団駄を踏みかねない白井さんをみかねて、固法先輩がそう提案
した。

あたし達もそれに乗っかり、中列の辺りに腰を下ろす。それから
みんなでどんな展開になるのかとか、鍊夜がとちったら罰ゲームし
ようとか、そんな話をする。

そして

『大変長らくお待たせしました。只今より、演劇、「茨の国のイベ
ルデイ」を公演いたします。どうか最後までご静観くださいますよ
う、お願いします』

そのアナウンスと共に、ゆっくりとステージの緞帳じゆんちやうが上がって
いく。

さて

「がんばってね、錬夜」

* * *

SIDE 錬夜

「さつてと。んじゃあ、行くか」

「そ、そうね」

舞台袖で緞帳が上がったのを確認して、俺は美琴を促す。今は前フリのアレクション。これが終わったら、人物紹介の意味も含めて、俺たちは一度舞台上上がる。それが初登場だ。

『そしてその国には、一人の王子が。もう一つの国には、一人の王女がいました』

アレクションが途切れる。よし、ここだ！

「それじゃあ、二人とも、バツチリ決めてよ！」

「了解！」

舞台監督と書かれた鉢巻をつけた言祝さんに送り出され、俺たちは舞台袖から身を躍らせる。

が。そこで問題が起きた。

「きゃっ!?!」

短い悲鳴を上げながら、美琴がつまづく。動きにくいドレスに、みんなの前で演技するという緊張。それらが合わさって足がもつれたんだろっ。

「ちっ!」

「あ……」

短く舌打ちして、すんでのところで美琴を支える。だけど、このままじゃあまりに不自然だ。
なら

「（おい、俺に合わせる。 ステップ）」

「（え? あ……そゆことね）」

美琴とタイミングを合わせて、ステップを踏む。ダンスの経験なんて学校のフォークダンスぐらいしかないが、まあいいだろ。
とりあえず踊りながら登場ということで、なんとかその場は誤魔化せた。

はあ、初っ端からハプニングとは、こんなんで大丈夫なのか……?

* * *

SIDE 白井黒子

「……………」

「？　どうかした、白井さん」

「いえ……………」

錬夜とお姉様の登場シーン……………普通にダンスしながらの登場に見えましたが、なんか不自然だったような気が……………？

「おやおや、白井さん。集中して観ないなんて、マナー違反ですよ？」

「むっ。わたくしはちゃんと観てますわよ！」

* * *

S I D E 錬夜

物語は進み、そろそろ中盤へと差し掛かってきた。今のシーンは、魔王に捕まった姫を王子が助けに行くという、なかなかテンプレなストーリー。だが、観客の様子を見るに、つまらなそうな表情の人はいない。案外、こっちの世界の人は情感深いのかもしれない。

『ここが、魔王の住む城か……………。待っていてくれ、ミコト姫。どんな障害があるのが、今すぐ飛んでって助け出してやる！』

自分でも恥ずかしくなるような台詞を吐きながら、木材で出来た城を練り歩いていく。そうしている内に、モンスターに扮した生徒

が現れた。

『来たか、王子よ。ここを通りたくば、この私を倒していくがいい』

『……だったら、お望みどおりそうしてやろう。私は、何者にも屈することはせず、必ず愛しの姫を救い出すと誓ったのだ!』

そう叫んで、腰に下げていた両刃の剣を鞘から抜き出す。そして、モンスターに切りかかっていった。

* * *

SIDE 初春飾利

「……………」

「あら？ どうかありません、初春さん？」

私が少し複雑そうな顔を作っていると、隣に座っていた湾内さんにそう言われました。私はそれに「なんでもありません」と笑いながら返します。

「はあ……………」

演劇……すごいとは、思います。たった三日間しか練習してないのに錬夜君の演技は堂々としているし、ほかのみなさんも上手いし……………。

でも

「なーんか、複雑なんだよねえ……」

湾内さんの逆隣にいる佐天さんが、独り言かはわからないけど、そう呟いた。

そうなんですよね……。なんか、鍊夜君が御坂さんのために命を懸けてがんばってるみたいに見えて、それがなんとなく嫌っていか……。か……。

「ホントは、こんなこと思っちゃいけないんですけどね……」

「だよねえ……」

気付かないうちに、私と佐天さんは二人揃って溜息をつきました。

* * *

SIDE 鍊夜

ついに……ついに、このシーンがやってきた。

場面はいよいよエンディングに近づく。魔王を倒し、王子が姫様を救出。そして、問題のキス（予定）シーン。

だが、美琴はそのことを知らない。よって、俺が自分から仕掛けるしかないというわけだ。

「……………」

ちらりと舞台袖に目をやれば、言祝さんは親指を立てて、早くやれと急かして来ている。これは、ホントに逃れられそうもないな……。

ええい、ままよ！

『……ミコト姫。私は、あなたが好きだ。これからの全てを、君と共に過ごしたい』

『王子様……。わたくしも、お慕いしていました……』

本来なら、ここで最後のナレーションが入り、緞帳が下りる。しかし、いつまで経ってもナレーションは流れず、それに美琴が怪訝な顔をした。

俺は覚悟を決め、顔を近づけていった。

「（え、な、ちよつ、錬夜！？）」

「（我慢しろ。フリだから、寸前で止める）」

下手に説得はせずに、強引に演技を進める。ちんたらしてたら不自然だし、何より美琴が渋る。

美琴もさすがにここで抵抗する気はないのか、顔を赤くしながらも両目をつぶる。それを確認した俺は、さらに唇を寄せ

……？

「（……？ 錬夜、どうしたの？）」

「……………」

問う美琴の声には答えず、俺は客席に目を向けた。
なんだ……？ 俺は今、美琴とキスしかけた時

『誰の顔を思い浮かべたんだ？』

「俺は……」

と、そう呟いたところで、俺は気付いた。

正人たちが座っている、その数列後ろの二席。そこに、知り合いが腰掛けていた。

「（当麻……に、インデックス？）」

なんであいつら一緒にいるんだ？ 偶然……じゃねえな、会話してるし。それにしても、インデックスのやつ菓子に夢中になってっけど、劇みてたのか？

そんなことをつらつらと考えていると、美琴がぼそぼそと呟きだした。

「（なんであの馬鹿がここに……！ ってか、もしかして今の見られた！？ ううん、絶対見られたわよね！？ というより、あの野郎女の子連れか！）」

バチバチと前髪を帯電させながら呟く美琴の姿は、そりゃもう怖かった。

そして、当麻がインデックスの菓子クズがついた口元を拭き取った時、『それ』は起こった。

「って、イチヤイチャしてんじゃないわよコンチクショおおおおお
おおおおおおおおおお！」

バチイインッ！

叫んだ瞬間、美琴の前髪から雷撃の槍が当麻目掛けて飛んでいった。

って、おいおいおいおい！

「何やってんだ、お前は？！ あいつ死ぬぞ？！」

「っさいわよ！ ってか、アンタもアンタでしょうがあああああああああああー！」

ビリビリビリイイイイイイイイイイ！

「があああああああああっ！」

身体を駆け巡った雷が意識の糸を焼き切るのを感じながら、俺の耳はとある会話を捉えた。

『うおおおおおおっ！？ なんで？！ 上条さんが何かしましたか？！』

『とうま、とうま！ このお菓子、すっごくおいしいんだよ！』

『マイペースすぎねえか、お前！？ そして少しは俺の心配をしろと切に訴えたい！』

結局、劇はここで終了。というより、大騒ぎになってそれどころではなかった。

ただし、なぜか評判はよかった。常盤台一のお嬢様と認識されて

いる美琴の新しい面が見れたということ、客もそれほど怒ってはいなかった。てか、寮生に至っては、「凜々しい御坂様も素敵ですわ?」とか言っていたらしい。もはや、妄信の域だと思う。

それから、言祝さんにも怒られることはなかった。元はといえば自分が原因だし、なにより評判がよかったことが幸いしたらしい。

というわけで……こうして俺たちの演劇は幕を閉じた。

* * *

「あー……酷い目にあつたな……」

誰に運ばれたのかはわからないが、俺は救護室のベッドで寝ていた。起きてみると、シーツの上に「ごめん」と簡潔に書かれた置手紙があったので、美琴も付き添ったのかもしれない。

まあ、それはそれとして、俺は救護室を出て、寮内をぶらぶらと歩いていた。ひとりでどこかの展示を見に行く気にもなれなかったし、なんとなくそうしていたかった。

「そっいや、結局美琴の『アレ』とやらは見れずじまいだったな」

祭の喧騒で賑わう廊下を歩きながら、ぼんやりとそんなことを考えてみる。

すると

「……? なんだ?」

何か、微かに聞こえたような……。

自分の耳を信じて、音が聞こえた方向へ足を進めてみる。そうしている、俺の聴覚が間違っちゃいなかったことを示すように、バイオリンの音色が届いてきた。

それにつられるように、さらに足を進める。やがて音がはっきりと聞こえるようになったところで、俺は視線を窓の外に向けた。

中庭。そこに設置された、ステージ。その中心でバイオリンを弾いていたのは……。

「……ふうん」

演劇のときはまた違ったドレスで奏でる美琴を見て、自然と自分が微笑んでいるのがわかった。

つまるところ……これが言祝さんの言っていた、『アレ』ってことか。

「……………」

窓枠にもたれかかり、耳を澄ます。

その音の波は、誰もを魅了し、そして高く空へと昇っていく。高く、高く、蒼く澄んだ大空へ

ゆっくりと、昇っていく。

第二十三話 盛夏祭・当日談（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしております！

第二十四話 祭のあととプロローグ（前書き）

というわけで、やっとこさ盛夏祭編が終了。合わせて、原作二巻介入のためのプロローグとなっております。

しかし、今回自分で書いててビミョーになってしまいました。反省です。

総合2000pt突破！ みなさん、ありがとうございます！

第二十四話 祭の後とプロローグ

「ね？ 美琴ちゃんの『アレ』、良かったでしょ？」

「ん、まあ。あいつ、バイオリンも出来たんすね。さすがはお嬢様だ」

盛夏祭が終わりを迎えて、今はもう夜。本来ならこの時間帯は静寂が満ちているはずの寮内は、常時とは違って少し賑やかだった。

その理由は簡単なもので、言ってしまうえば打ち上げパーティーみたいなものかな？ 寮監が今日一日（準備を含めればそれ以上）頑張った寮生を労うために、企画したそうさ。やっぱりなんだかんだで、あの人いいところあるよな。

んで、そんななかでなんで本来部外者の俺がいるのかと言えば、ひとえに寮監と美琴、それから言祝さんの口添えがあったからだ。

そんなわけで、俺は今こうして談笑する寮生を見ながら、言祝さんと二人、ジューズを飲みつつ会話していた。

「そりゃあ、彼女だって、伊達にこの学校のエースなんて呼ばれないよ。君も知ってるかもしれないけど、ミコちゃんは頑張りやさんだよ？ バイオリンの一つや二つやってるわ」

「あいつが頑張りやなのは知ってますよ。それに、頑固者だったことも」

「にやはっ。それは確かに、違くないねっ」

からからと彼女は楽しそうに笑って、グラスのジューズを一気に煽る。それから、何かに気付いたような顔になって、

「おっと、ご本人様の登場ね」

「ん？」

見れば、こちらに歩いてくる美琴の姿があった。書き忘れたが、パーティーといっても舞踏会とかそんなんじゃないから、みんな制服姿だ。当然、美琴も。

言祝さんは、「それじゃあ、また後で話そうね」と言って、さっさと離れていった。

それを美琴は視線で追いながらも、特に何も言わずに俺の隣に立った。

「……よお」

「うん……」

「……」

「……」

き、気まずい……。

なんで喋んねえんだ、こいつ。いつもがあんなにテンション高いだけに、こつこつ風になんか静かにされると、こつこちの調子が出ない。

どうする？ こつちから話しかけるべきか……？

「……おえ」

「……おつ……」

思案していたところへの唐突な呼びかけだったので、えらく驚いてしまった。

「何驚いてんのよ？」

「いや……なんでもねえけどさ」

ポリポリと頭をかきながら、言い訳交じりにそう言ってみる。

美琴は「そう……」と言ったつきりまた黙って、再び俺たちの間に沈黙が流れた。が、さすがに耐え切れなくなったところで、

「……あの、さ」

「ん？ なんだよ？」

「その……ちょっとアンタに言いたいことが、あるんだけど」

言いたいこと……？

「言いたいことって……なんだよ？」

「あつと……」

彼女はバツが悪そうに視線を右往左往させている。つか、ホントにこいつどうしたんだ？ 悪いものでも食ったのだろうか？

ちなみに、素直にそう聞いてみたら、頭をはたかれた。

「ちっがうわよ、たく……。ああ、もう、アンタが変なことというか、緊張してるのが馬鹿らしくなっちゃったじゃない」

「緊張？」

お前が？ という続きはとっさに飲み込む。そういえば、劇のしよっぱなも緊張してたな……。

「あんまり引つ張るのもあれだからもう言っけど……その、ごめんね」

「ごめんって……何が？」

「だから、劇の話よ。最後にその、倒しちゃったじゃない……？」

ああ、あれか。

よつやく美琴の言わんとすることがわかって、一つ頷く。そういえば、そのことについてきっちり話した覚えがない。まあ、みんなでまた展示めぐりしてたから、それどころじゃなかったってのも理由の一つだけだな。

ははあ、なるほどな……。それでこいつ、少し気まずそうにしてたのか。

「まあ、別に俺は気にしてないからいいんじゃない？ 結果的に被害を受けたのは俺と当麻だけだし、なぜか劇の評判はよかったし。言うことねえじゃねえか」

「そんなわけにもいかないでしょうが。あの時ちょっといろいろテンプアっちゃってたけど、だからってあれはやりすぎだと思ってるわ」

「……………」

こいつは、その「やりすぎな電撃」を結構俺に撃っているという

ことに気付いているのだろうか？

「だから、ごめんってわけ。私からはそれだけ言いたかったから。あと、一切異論は受け付けなかつもりだから、もううだうだ言うの禁止よ」

「んだそりゃ。最後らへん押し付けじゃねえか……」

まあ、こいつらしいといえはらしいが。

「いいから、素直に受けときなさいって。んじゃ、そういつことで」

「あつ、おいっー！」

呼び止めるも、美琴はさっさと走り去っていった。

うーん……結局あいつは何がしたかったんだ？ 謝りたかったに
しては少し乱暴だったしな……。

「女って、よくわかんね」

そう結論づけてから、もう一度ジュースをぐびりと飲む。そうしている
と、再び言祝さんが姿を現し、こちらに近寄ってきた。

「はい、アタシ参上！」

「テンション高……。前から思ってたけど、あんた全然お嬢様らしく
ないっすね」

「ん？ そりゃそうだよ、だってアタシ編入生だもん。しかも、も
といた学校は超平凡だったからね。こーんな学校肌に合わないっ

らない」

ふーん、そりゃ初耳だな。

「んじゃあ、なんで編入なんかしてきたんすか？」

「んふふ〜知りたい？」

……なんか、こつあからさまにされると聞く気失せるどころか、ちよつとイラツとくる。

が、本人がものすごくアピールしてくるので、とりあえず訊いてみる。

「ああ、知りたい」

「教えな〜い」

ケンカ売ってるのだろうか。

「つて、ごめんごめん。からかったわけじゃないからさ。ただ、アタシが話したくないだけなんだよ。いろいろあったからねー」

「じゃあ、いいですよもう……」

この人と話していると、なんか疲れる……。話すだけで疲れるなんて、伊織さんか、後は

「姫神くらいのもんだよなあ……」

一月ほど前、『赤い糸メール』で知り合った一人の女の子。

あいつも、まあ行動もそうなんだが、会話がすごく疲れるやつだった。天然っつーかなんつーか……時々言葉のキャッチボールが通らないことがあったしな。

そのときのことを思い出していると、言祝さんが少し驚いたように、

「あれ？ 君、アイちゃんのこと知ってるの？」

「え……？」

この口ぶり、もしかして……。

「言祝さんもあいつのこと知ってるの？」

「うん。二、三回しか会ったことないけど友達だよ」

「へー、どこで知り合ったんすか？」

「そこはまあ、女の子のプライベートというところで」

「なんじゃそりゃ……」

あいかわらずな彼女の言い方に笑って、最後に残ったジュースを一口で飲んだ。

結局、この後も大したことはなく、打ち上げパーティーは終わりを告げる。俺は美琴や黒子、それから言祝さんに別れをつけ、一人自分の寮へと帰って行った。

今思えば。

最後に言祝さんと交わした、あの会話。あれが、『俺』にとって

のプロローグだったのかもしれない。
だけど、本当はもっと深い場所……プロローグは流れていた

* * *

SIDE スティール・マグヌス

八月八日。

「それで、僕を呼び出した理由は、一体なんですかね……」

学園都市。

魔術師である僕がいるはずのない……もつといえは、いてはならない場所。

その中でも真の意味で『中枢』と言える場所に僕はいた。ドアもなく、階段もなく、エレベーターもなく通路も無い、空間移動の超能力者がいなければ入ることもできないビル。そんなおよそ何のためにあるのか分からない建物の一室。そこで僕は、一人の人間と対面していた。

巨大なビーカーの中に逆さに浮かぶ、銀髪の『人間』。男にも女にも大人にも子供にも聖人にも囚人にも見える『人間』。

学園都市統括理事長、アレイスター・クロウリー。

それが、この人間の名前だった。

「それが、とぼけているのか駆け引きなのかどうかはさておき……」

『ディープブラッド吸血殺し』が魔術師に監禁された」

「……故にこそ。相手が魔術師だからこそ、魔術師が呼ばれたということですか」

「そのとおりだ」とアレイスターは頷く。

今回の『事件』。『吸血殺し』という『とある生き物』を殺す能力を持った少女が、ある魔術師に奪われ、監禁された。それもこの科学の街で。

だが、その魔術師をこの街が潰すことはできない。魔術師がこの街の能力者を潰せないように。

『超能力』と『非現実』。お互いに領分を守っているからこそ、今の不干涉（実際はそうでもないが）の情勢が保たれている。だから、その均衡が崩れるような戦闘はできない。

しかし、魔術師が魔術師を倒した場合なんの問題もない。ようは、単なる内輪もめで済む話なのだから。

「さて。『戦場』の見取り図と実情は後で伝えるとして……君に少々話がある」

「それは……『吸血殺し』とはまた別件で？」

「そうだ。『吸血殺し』の件も問題だが、もう一つ気がかりなことがあってね」

「……気がかり？」

この男がそんなことを言うとは、珍しい。この、何もかも全てを把握しているかのような男が。

アレイスターは無言で部屋の一角を指差す。すると、そこにあったモニターの一つが動き、二枚の写真を映し出した。

「これは……」

「どちらも君は知っているはずだろう？ なにせ、君はどちらとも既に刃を交えているのだから」

「確かに……そうですね」

アレイスターの言うとおり、その写真に写る人物を僕は知っていた。なるほど、完全にお見通しというわけだ。

「しかし、この二人がどうしたというんです？ 確かに少タイレギュラーな存在であったことは認めますが、それも偶然の範疇でしょう」

「偶然……ね。君の言うことは間違っていない。この二人が君たちに関わったのは、確かにただの偶然だ」

しかし、と言葉を続けて、

「私にはどうも、この二人が偶然以上のイレギュラーに思えてならない。『経歴』だけ見れば、少々気になる奇異性もあるにはあるが、基本は唯の学生のはずだ。……にもかかわらず、彼らが真の意味でイレギュラーな存在に思えてしかたがないんだよ。これは、私には珍しいことに勘だけどね」

「それで……それで、僕にどうしろと？」

アレイスターはもう一度指を伸ばし、二枚のうち一枚だけ写真を指差した。

「その男を、同行させてもらいたい。本当はもう一人も同行させたかったが、生憎と彼は今この街にいないくてね」

「同行させて、それから？」

「何も。彼がまるで役に立たないようなら、問題はない。だが、もしなんらかの反応があれば……」

その先は言葉にせず、アレイスターはこちらに向き直る。

「いや、それはいい。とにかく、君は『イマジンプレイカー幻想殺し』並びに『彼』と、『吸血殺し』の奪還を即時慣行したまえ」

「幻想殺し……上条当麻も同行させるのですか？」

「ああ。アレは科学側サイエンスの情報を持っておらず、魔術側マジックの技術を理解する頭もない。共にいてもたいした問題にはならないだろう」

「なるほど。もう一人も同様に、ということですね」

「その通りだ。少々無茶かもしれないが、頼むよ」

「……………」

何が、頼むだ。ふざけるなと言ってやりたい。

……が、断ることはできない。断った場合、僕がこの街を生きて出れる可能性は……まあ、限りなくゼロに近いだろう。

なら

「わかりました」

そう答えを返し、やがて僕はこの『窓の無いビル』を後にし、受け取った資料に目を通す。

それから、僕は街中へと足を進める。これから共に『仕事』へと向かう上条当麻と

桜咲鍊夜を探すために。

第二十四話 祭のあととプロローグ（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしております。

第二十五話 たった一つの約束（前書き）

吸血殺し編、第一話！ な、今回です。でも、これを読む前に、吸血殺し編第0話とでもいうべき番外一を読んだ方がいいかもしれません。

実は今回、ホントは三沢塾突入までいきたくはあったんですけど、ちょっと忙しくてそこまでいきませんでした。ご容赦ください。

2100pt突破！ みなさん、ありがとうございます！

第二十五話 たった一つの約束

八月八日。

再会は、突然だった。

「久しぶりだね、桜咲鍊夜」

「テ、メエ……なんでここに……！」

いつものように朝起きて、いつものように飯食って、いつものように暇つぶしにコンビニ行って……。

そして、その帰り道。

あまりにも自然に、あまりにも突然に、『そいつ』は現れた。

「確か……ステイルつつたか……」

二メートル近い身長、黒い修道服、両の手にはめた指輪、赤く染めた金髪。

何もかもがあの日と同じ。そいつはまぎれもなく、俺を殺そうとし、インデックスを狙っていたあの神父野朗だった。

ステイルは、煙草の火をくゆらせながら、

「ふん。君に名前を覚えてもらっていても別段嬉しくもないが、まあ話が早くて助かるよ。　　そうだ。七月十九日の夜、君と殺し合いを演じた男だよ」

「だったら、なおさらなんでここにいる？　俺とお前の間にあるのは、殺意ぐらいのもんじゃないかねえのか？　それとも……また殺し合お

うってんなら、今度は容赦しねえぞ」

「……その殺気バリバリの目、いいね。『あいつ』とは大違いだ。一度は殺そうとした人間に日和られることほどムカつくことはない」

「なんの話だよ?」

「なんでも」とステイルは首を振って、それから改めて口を開いた。

「唐突でもうしわけないんだけどね。君に、頼みがある」

「頼み……?」

ふざけてんのか、コイツ?

「おい、さっきの言葉聞いてなかったのか? 俺たちの関係は、殺しあった者同士ってモンだろ。その俺に頼み……唐突なんてことよりも、そっちの方がよっぽど理解できねえな」

「……ふう。僕にもいろいろと事情があるんだが……察してくれと言う方が無理だし、してもらう必要はない。どのみち、君はこの要請を受けることになるんだからね」

「? そりゃ、どういう意味だ?」

ステイルは、俺の疑問に薄く笑って答える。その瞬間、なぜか猛烈に嫌な予感がした。

「従わない場合は 『彼女』 を殺す」

「ッ！ テメエ！」

一瞬で頭に血が上り、駆け出す。

握った拳には十分なほどの力が籠っていて、それを目の前のクソ野郎にぶつけるために、俺は思いっきり振り上げた。

しかし その拳が奴の顔面に届くことはなかった。

「Kenaz
炎よ

ボワッ！

ステイルが弾いた煙草は小さな弧を描き、そして俺の眼前で炎の塊と化した。ひさしく見ていない そもそもこの街では見る事が出来ない魔術。コンクリートさえ軽々しく溶かすそれを見て、俺の背筋に戦慄が走った。

慌てて飛びのき、呻きをもらす。

「く……っ！」

「落ち着けよ。まだ、誰とも言っていないというのに」

「関係あるか！ 例え誰だとしても、俺の関係者なのは目に見えてる！ そんなふざけたマネは絶対にさせねえぞ……！」

そうだ。俺は風紀委員ジャッジメントになると決めたあの日、みんなを守ると、守り通すと決めた。なのに、その俺が原因で友達が傷つくなんてことが、あっていいわけがない。

だから、俺はこいつを許せないんだ。

「落ち着けと言っているだろう。僕は、『従わなければ』と言ったはずだ。なら、答えは簡単。君はだまって首を縦に振ればいい」

「お前をブチのめせば、それで解決じゃねえのか」

「ふう。まるで子供の理論だね。『悪者をやつつけたから、平和が訪れました』ってかい？ そんな簡単に解決するほど、この世界は優しくできちゃいない」

「……………」

確かに、それはそうだろう。こいつを倒したところで、こいつがなんらかの命令を受けている場合、意味が無い。また次のやつが来るか、でなければもっとひどい結末になるだけだ。

なら……………」

俺はのぼせた頭を冷やして、深く息を吐きながら答えた。

「……………わかった。その頼みってやつ、聞いてやる。そんなし……………俺の友達に手え出してみる。そんなときゃ 殺すぞ」

「……………いいだろう。契約成立だ」

ステイルは長く息を吐きながら、若干ほっとしたように言った。こいつなりに交渉が上手くいくか緊張してたのかもしれないが、知ったことが。

俺はさっさと話を進めるために、説明を求めた。

「それで？ お前は一体俺に何をさせようってんだ？」

「そうだね……………うん、ここから話そうか。君は、『三沢塾』って進

学予備校を知っているかい？」

「ああ……名前ぐらいは」

「なら、話は早いね。簡単に言えば、そこには女の子が監禁されててね。それを助け出すのが、僕たちと君の役目だ」

「ふーん……って、はあ!？」

あっさり言ったけど、冷静に考えればとんでもねえことだぞ！

「驚きたくなる気持ちもわからないでもないけど、話が進まないから、次いくよ?」

その後も続いたステイルの話をまとめると、こうだ。

三沢塾は現在、科学崇拜を軸にした新興宗教と化しているらしい。ただし、これは今はどうでもいい。なぜなら、三沢塾は今、錬金術師とやらに占拠されているからだ。

錬金術師ってのは少し気になったが、それはおいておく。一番問題なのは、もっと別にある。

『ディーブブラッド
吸血殺し』

どうやら、そう呼ばれる能力を持った人間が、例の監禁されてる女の子らしい。もとは三沢塾が発見・監禁していたそうだが、それを錬金術師が強引に奪ったそうだ。

……って、ちょっと待てよ。

「吸血殺し……?」

「うん？ ああ、名前で気付いたのか。存外、君はなかなか鋭いね」

「あ、いや」

違う。ステイルがどう受け取ったのかは知らないが、きっとそういうことじゃない。

吸血殺し……。俺は、その言葉をどこかで聞いたことがある。だから、俺はそう言おうとして、

「まあ、信じられないだろうけど。僕だって、未だに半信半疑だ。というよりも、信じたくないって方が適切かな？」
「まさか、吸血鬼が実在すると言われても、そうホイホイ信じられるわけがないだろうに」

「……………は？」

今こいつ……なんて言った？

「いや、ちよっ、ちよっと待てよっ！ 何が実在するって？」

「だから、吸血鬼だよ。魔術師ほくたしの間ではカインの末裔なんて呼ばれてるけど、そっちのほうほくたしが馴染み深いだろう？ そもそも、吸血殺しってのは、吸血鬼を殺すための能力なんだ。なら、『殺されるべき吸血鬼』がいなければ、話にならない。『正義の味方の為の悪人』みたいな、非常に矛盾した理論だけだね」

「そりゃ、そうかもしんねえけど……………」

だからって、吸血鬼ってのはさすがに有り得ない……………って、冷静

に考えたら超能力や魔術も十分に有り得ないよな。オカルト

「吸血鬼ってのはね、存在してはいけないものだったのさ。心臓を刺されたって、生き続ける。不老不死がゆえの、無限の魔力。意味が分からないなら、核爆弾でも思い浮かべている。アレは、ゲームや絵本に出てくるほど矮小な存在じゃない。それ単体がすでに、『地球の危機』だ」

「……………」

スケールがでかすぎてなんとなくわかんねえけど…………吸血鬼の危険度だけはわかった。

でも、じゃあ…………、

「それじゃあ…………そもそもなんで、三沢塾や錬金術師は吸血殺しそんなもんを求めたんだ？」

「三沢塾の方に関しては、割と簡単だよ。単に、吸血殺しの希少性を目的にしているだけだ。かの能力を研究し、『限りなく珍しい能力を量産することができる』という触れ込みが作りたいらしい。もっとも、そこらへんの事情は僕もよくわかってないんだけどね」

「なら、錬金術師は？」

「そっちも簡単ではあるが、厄介だ。錬金術師は吸血殺しの真の価値を知っている。すなわち、『吸血殺しを餌にして吸血鬼を呼び寄せることができる』という価値が、ね」

餌って…………。

「そんな危険なもんを呼び寄せて、いったい何しようってんだ？」

「さっき言っただろう。吸血鬼は不老不死だって。そのための方法でも聞きたいんじゃないのかな」

「マジで言ってるのか、そんなこと……」

「さあね。実際問題、目的なんていくら想像しても足りない。吸血鬼を手に入れることができるなら、それこそ利用価値はいくらでもある。……（まあ、僕は不老不死の方法なんてものよりは、もっと別のものが目的のような気がするけどね）」

不老不死。いよいよゲームじみてきやがった。最後になんか呟いてたけど、別に大したことじゃないだろ。

予想外の話に俺が辟易していると、ステイルは懐から煙草を一本取り出し、それに魔術で火をつけながら言った。

「……ま、状況説明はこんなところかな。後で三沢塾の見取り図は渡すとして、とりあえずの作戦会議は終わった。ああ、言い忘れてた。吸血殺しの本名は、ひめがみ あしな姫神秋沙。写真も今渡すから、見るといい」

………は？

「……おい、ステイル。お前今、吸血殺しの本名がなんていった？」

「うん？ 姫神秋沙だけど……それがどうかしたかい？」

どうかした、どころじゃない。俺は乾いた口内を潤すように、つばを飲み込む。

姫神秋沙。

それは、つい先日の会話にも上った名前であり、一月ほど前に出逢った少女の名前でもあった。

ステイルが懐から取り出し放ってきた写真を掴むと、それをじっと見つめる。そこには、間違えようもないほどはっきりと、あの日一日共にいた巫女服の少女が写っていた。

「……なあ、ステイル。こいつが三沢塾に監禁されたのっていつだ？」

「報告では、三沢塾に監禁されたのが、一月ほど前。その数日後…
…七月十五日に改めて錬金術師に捕まったとなっているね」

「そっか……」

返事を返してから、姫神の台詞を思い出す。

『私には。今日しかないから』

それは、錬金術師から与えられた、最後の自由な日という意味だったのだろうか。

『私は今日とても楽しかった』

それは、果たして、どんな思いで口に出した言葉だったのだろうか。

『さよなら』

それは……彼女が納得していたことだったのだろうか。

「そんなわけ、ねえよな……」

本当に心の底から望んでたことなら、あんな風にかげった表情を見せるはずがない。

……いや。もしかしたら、本当はあいつ側にもなにか事情はあるのかもしれない。もしそうでないのなら、公園で別れた時、抵抗の一つでもしていたはずだ。

でも……たとえそうだとしても、俺はそんなのは認めない。俺はそんな『建前』なんかよりも、あの日あいつが言った『楽しかった』という言葉と、さびしげな顔を信じる。

あいつは きっと一人でいたわけじゃない。

それなら……、

「助けてやらなきゃな」

* * *

突入は、三十分後。

そう取り決めてから、俺はステイルと別れた。なんでも、あいつには少しやることがあるのだとか。

というわけで、三十分後まで暇になった俺は、どこに行くともなくプラプラと歩いている。手には、ステイルから貰った資料。十分に読み終わったら、嚴重に処分するように言われた。

「アウレオルスIIイザード……か」

それが、資料に記された『敵』の名前。

チユーリツヒ学派の錬金術師。元ローマ正教の人間。教会のために魔道書を書く、『カンセラリウス隠秘記録官』。

そんなことがつらつらと書かれていたんだが……。

「面ツラだけ知ってりゃ、十分だ」

そう。必要なのは、その一点。それだけ知ってれば、思いつきりブン殴ることもできる。

そして、俺はソイツの顔を知っていた。

『当然。約束した時刻に私が現れるのは、なんら不思議なことではない。その少年。なぜそんな驚いたような顔をする?』

純白のスーツに包まれた長身。緑に染めたオールバック。あの日姫神を迎えに来たあの男が、アウレオルスIIイザードだったんだ。

「……………」

ビリッ　　ビリッ

パンッ　　バシィ!

資料をバラバラに引き裂いてからコンクリートの地面に落とす、それから錬金術でコンクリートの下に埋めた。これで、おそらくは大丈夫だろ。

さて……。

「約束の時間までは、あと十分。どうすっかな……」

手持ち無沙汰になってしまった俺は、頭をかきながら呟く。別に、待ち合わせ場所に向かってもいいんだが……。

と。そんな時だった。

「おりよ？ 錬夜じゃん。何してんの、こんなところで」

「涙子……」

背後からかけられた声に振り向くと、そこにはすっかり見慣れた佐天涙子が立っていた。

「お前こそ、何してんだ？」

「ん？ あたしは買い物つ。特売だったんだよね」

そう言っつて、戦利品であろうスーパーの袋を見せてくる。パンパ
ンに張っているところを見ると、どうやら戦果は上々だったらしい。
俺は、曖昧に笑って、

「そっか。よかったじゃねえか……」

「……どうしたの？ なんか、元気ないね？」

「そっか？」

いろいろ暗いことを考えてたから、顔に出たのか？
とにかく、余計な心配はかけないようにしないと。

「うんにゃ。なんでもねえよ。いつもどおりの桜咲錬夜ですの」

「あははっ。なにそれ、白井さんの真似？」

「ははっ……………」

ふう。なんとか誤魔化せたかな。

そう、思ってたんだが、涙子はすぐに真剣な顔になって言った。

「………… ホントは、なんか隠してるでしょ」

「………… なんでそう思う？」

「だって、錬夜って嘘下手だもん。出会ったばかりのころならともかく、今はそのくらい分かるよ。で。なんとなく危ないことしようとしてるんだろーってことも」

うわあ。ダメダメだな、俺。

これは………… 誤魔化せんな。

「ん…………。まあ、な。ちょっと危ないかもしれない。もしかしたら、今までで一番」

俺がこの世界で戦ったのは、学生や先生といった相手だ。だけど、今回は違う。相手はプロの魔術師で、死ぬ可能性なんてのが簡単に転がっている戦場に行くんだ。

危険度は最高値。不安になるのも、しかたないのかもしれない。

だから、もしかしたら心配させてしまうかもと思いつながら、俺は正直に言う。すると涙子は、しばらく目をつぶり、数秒後に開いて尋ねてきた。

「そっか……。どうせ、止めたって行くんでしょ？」

「そりゃあ、行くさ。行かなきゃ、ダメなんだよ」

「んー……。じゃあさ、一つだけ約束して」

涙子は、袋を持ってないほうの手をこちらに差し出し、小指を立てる。

「絶対、無事に帰ってきて」

「……………」

すぐには握り返すことができずに、俺は小指をじっとみつめる。生きて帰ってこれるかなんて、確実に約束なんてできない。無責任に安心させるなんて、俺にはできない。

『だからこそ』。

「……………ああ。約束だ」

しっかりと彼女の小指を握り返し、約束を交わす。

これで、俺は確実に生きて帰らなきゃならなくなった。だけど、それが支えになる。たとえ死んでしまいつなときでも、その約束を思い出せば、俺はきつとまだ頑張れる。

「よろしい！ それなら、行ってらっしゃい！」

「りょーかいつ！」

別れは、おどろくほどあっさりしていた。

涙子の声に背中を押されるように、俺は踵を返す。スタイルと決めた待ち合わせ場所に行くために。そして、三沢塾という戦場に行くために。

「行ってくる」

最後にそう呟いて、俺は力強く足を踏み出した。

* * *

SIDE 佐天涙子

「……あーあ。なんで、送り出しちゃったんだろ」

去っていく錬夜の後姿を見送りながら、一人自問してみる。
本当は、彼が傷つくことが嫌だったくせに。
本当は、彼がいなくなるかもしれないのが怖かったくせに。
でも……。

「あんな顔されちゃったら、しかたないよね……」

さっきのあいつの顔は、本当に大切な時にだけ見せる、男の子の顔だった。自分で決めたことだから、やりぬきとおす。そんな、表情だった。

……まあ、そういう時は女の子を助けるためってのが多いのが、ちよっと微妙だけど。

そんなわけで、まあ、うん。あたしは、やっぱり彼を止められな
い。

だけど、大丈夫だ。だって、鍊夜は約束してくれた。必ず帰ると、
そう約束してくれた。前にあたしを助け出すと言ってくれたように。
だから

「今度も、ちゃんと約束守ってよね」

あたしは、ここで待ってるから。

第二十五話 たった一つの約束（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしております！

オリキャラ設定？（前書き）

壊れていたパソコンが微妙に復活したので、ひさしぶりに投稿してみます。とりあえずこれが現時点でのオリキャラ設定になります。おかしなところや疑問点がありましたら、ご指摘ください。なお、これは二十六話までのキャラ紹介ですので、そこまで読んで上でご覧ください

今までの話をちよくちよく編集しました。プロローグや幻想猛獣戦に出てきた『隠し技』や『切り札』がなくなったり、主人公の能力名が変わったりしています

オリキャラ設定？

プロローグ〜二十五話＋番外一〜二

NO・1 神

初出 プロローグ

年齢 忘れた（by神）

容姿 身長185cm。金髪と右耳のピアスが特徴。ただし、神なので、容姿の変更は自由

所属 神界

性格 基本は面倒くさがり。しかし、胸に秘めた願いのためには全てをいとわない

好きなもの 惰眠

嫌いなもの 働くこと

能力 世界移動 能力付与

備考 何を隠そう、錬夜を禁書世界へ飛ばした張本人。創作世界に人を送り込んだり、能力を付与したりできることをみると、それなりの力はあるらしい。プロローグにて、「親父にバレる」と発言していたが、前神である父親は既に消滅している。ここらへんの真相とともに、最終章ではキーパーソンになる予定

NO・2 あまながれみよ
天流美代

初出 プロローグ

年齢 二十四歳

容姿 身長172cm。栗色のロングヘアを腰まで伸ばしている。基本はタイトスーツ着用。銀ぶち眼鏡を装備しているが、眼鏡っ娘

とても呼ぼうものなら、鋭い眼光が飛んでくる

所属 柵川中学、???

性格 見た目どおりのクールキャラ。決してクーデレではない。ただ、ごく一部の人間には甘くはないが優しくなる。若干、天然好きなもの 買ったら三日で飽きるような限定商品（本人曰く、「限定というところに乗っかってテンションを上げるのが楽しいのです」）

嫌いなもの ゴキブリ

能力 円周率暗唱、???

備考 柵川中学校に数学教師として在籍。転生初日に鍊夜に電話をかけた。その理知的な容貌と有能な仕事ぶりから、男女問わず生徒・教師から人気を集めている（一部、「踏まれたい」などという声も）。現在は明かされないが、教師以外の裏の顔を持つ

NO・3 おさかへげんらく 刑部蔵楽

初出 第二話

年齢 四十二歳

容姿 身長180cm。角刈り+筋肉+ジャージ。ゴリラ

所属 柵川中学、ラーメン「いちめん一麺」

性格 たとえ煙たがられようとも生徒の指導を心がける。生徒のことを本当に大切に思っているゆえだが、人の話を聞かなかつたり勘違いが激しいところがあるので、あまり生徒の評判はよくない

好きなもの 剣道

嫌いなもの 煙草、麻薬、生徒の害になるもの

能力 長時間説教

備考 第二話にて、鍊夜を校門で呼び止めた男。生徒は、誰もが初見で「ゴリラ」とあだ名をつける。体育教師でもあるが、生徒指導も担当。あまり知られていないが、第七学区でラーメン屋の手伝い

をしている。副業というわけではなくただのボランティアなので給金は無し。ついでに言えば、二十一話で錬夜と寮監が訪れたおでん屋の親父とも知り合い

NO・4 不和良助ふわりよすけ

初出 第七話

年齢 十七歳

容姿 身長168cm。普通

所属 二志巻にしまき高校二年、風紀委員第一七七支部

性格 ありがちな反応をする

好きなもの ハンバーグ

嫌いなもの 不良

能力 『念動能力』テレキネシス。レベル2

備考 固法先輩の一時パートナーとして登場。正直、これから先登場することがあるのか不明。もしかしたら、錬夜の一時パートナーにもなるかも

NO・5 校長

初出 第七話

年齢 五十八歳

容姿 身長158cm。顔は、過去はそれなりに良かったことがわかるレベル。ただし、ビールっ腹のせいで脂を意識してしまう。小さな丸眼鏡をつけている

所属 柵川中学

性格 基本的に温和。昔は気性が激しかったが、現在ではなりを潜めている

好きなもの 長風呂（この趣味を知っている生徒は彼の溺死の心配をしているらしい）

嫌いなもの 三年部学年主任の小言

能力 『閻魔大王』の残滓ヘルチャンプ
さんし

備考 柵川中学校長。三年まえに着任してから、厳しすぎる校則は全て撤廃させた経歴を持つ。集会事の挨拶は校長特有の面倒さがなく、生徒には好印象をもたれている。十数年前までは学園都市内のある高校で教鞭を振るっていたことがあり、『閻魔大王』ヘルチャンプの異名を取るほどの恐ろしい教師だった

NO・6 御厨空音みくりやそらね

初出 第八話

年齢 十六歳

容姿 身長171cm。腰まで伸ばした黒髪をゴムで一つに括っている。一見優男だが、美形

所属 上条当麻と同じ高校一年

性格 あまり争いごとは好まない楽道家。が、一度決めたことには全力。トラウマ持ち

好きなもの 楽しいこと、当麻をいじること

嫌いなもの 静寂、友達を傷つけるヤツ

能力 『武器操者』。レベル4
ウェポンユーザー

備考 同作者の『とある異世界の武器操者』の主人公。鍊夜同様、神から禁書世界に飛ばされた。実を言えば、第一話のVS不良の時、すぐ近くを歩いていた。天草式十字凄教との関わりがある。後に、鍊夜との深い関わりを持つことに

NO・7 鬼狩元狼おにかりげんろう

初出 第九話

年齢 十八歳

容姿 身長207cm。制服のボタンが弾け飛ぶほどの筋肉質。高校生どころか三十台でも通りそうな顔。左目に縦に一筋の傷跡（刀傷）あり

所属 崖段がいたん高校三年、風紀委員第一七七支部、元???

性格 いかつい外見に似合わず、親しみやすい父性のような雰囲気を持つ。反面、暑苦しい面も。豪気かつ豪快を信条とする。が、ある時になると……？

好きなもの 男同士の熱さ（例：夕方の土手での殴り合い）、平和嫌いなもの 男らしくないもの、自分のサイズに合わない商品（嫌いというよりは苦手）

能力 『身体向上』。レベル4

備考 風紀委員第一七七支部の支部長。最年長というだけでなく、そのリーダーシップも大きな要素として、前支部長から拝命した。しかし、デスクワークを嫌い（決して苦手ではなくむしろ得意ではある）、平時はよく巡回パトロールを行い、日夜不良の制圧に尽力している。戦闘面の実力は白井以上。アレキスターを知っていることから、裏の世界的関係者だということが分かる

NO・8 一善正人いちぜんまさひと

初出 第十九話

年齢 十三歳

容姿 身長172cm。スプレーとワックスを使った茶の短髪。左耳には小さな十字架を象った金の三連ピアス。明らかに校則違反だが、一部の教師（刑部や校長など）以外は見た目に怯えて何も言わない

所属 柵川中学一年、『クローバー』

性格 極度の女好きだが、実は一途でもある。騒がしくはあるが、自然と周囲を楽しませる性格から、『基本迷惑だが、いないとつまらない奴』という評価がクラスメートの総意になっている
好きなもの 女子、ゲーム、活け花（本人は否定している）

嫌いなもの 実家

能力 『ビジョンリーダー未来視界』。レベル3

備考 錬夜たちのクラスメート。実は『外』にある実家が活け花の名家であり、その四代目当主ということになっている。しかし、その未来を嫌った本人は元当主である祖母に頼み、小学五年の時に学園都市へと転校。その後、とある出来事をキッカケに固法美偉に恋心を抱くことになる。現在は、ネットで知り合った三人とともに『クローバー』というチームを結成した

NO・9 ことほきはつね 言祝初音

初出 第二十二話

年齢 十四歳

容姿 身長145cm。中二にしてはやけに小さい身長に加え、顔でもあるせいで、常盤台ではマスコットの的な扱いを受ける。栗色のサイドポニーが特徴

所属 常盤台中学二年、常盤台中学校演劇部、元てんじん天仁中学

性格 一言で言うなら天真爛漫。しかし責任感が強かったり、大事なところでは真面目だったりする。部活内では、後輩からは尊敬を先輩からは信頼を受けている。イタズラ好き

好きなもの 演劇

嫌いなもの 喧嘩（過去のトラウマから）

能力 『テクニカルボイス操作音声』。レベル3

備考 能力と信頼から常盤台中学演劇部部长に就任。盛夏祭での演

劇の舞台監督も努めた。元から常盤台にいたわけではなく、一年ほど前に転入した。御坂とは転入時に同じクラスなため知り合い、なおかつ一騒動を起こした。その後は親友的關係へと発展する。姫神秋沙が霧ヶ丘女学院にいたところに、ひよんなことから知り合った。本人曰く、「二、三回しか会ってないけど友達」らしい

NO・10 相良優あがらゆう

初出 第二十三話

備考 盛夏祭のシュガークラフトにて、名字のみ登場。錬夜の世界にいる女性パティシエで、日本ではそれなりに知られた名前。錬夜の近所に住み、小学生のころからお菓子を優遇してもらっていた。裏話として、以前作者が部活で書いた小説の主人公でもある

NO・11 彩葉伊織さいはやおり

初出 番外二（台詞のみなら第六話）

年齢 二十八歳

容姿 身長169cm。魔術的な効果を持つ赤のカラーコンタクトをつけている。腰まで伸ばした赤髪はポニーテールにしており、初登場時には、全身を覆う擦り切れた茶色のコートを着ていた

所属 イギリス清教・必要悪の教会ネセサリウス

性格 お姉さんキャラと子供っぽさが同居している。よくスリに遭うせいか、金銭が絡むことになる、どこまでも凶々しくなる。その他、背負い込みがち、かわいいもの好きという一面も

好きなもの 妹

嫌いなもの 自分の無力さ

能力 通り一片の炎の魔術、治癒術式、『マルドゥックの炎の剣』

備考 錬夜の錬金術における師匠。魔術師としてイギリス清教からの仕事をこなすかたわら、世界を回り『とある能力者』を探している。彼女には一人、不治の病におかされた妹がいて、彼女を助けるためにその能力者が必要らしい。ちなみに、ローラ・スチュアートとは友達関係ではあるが、苦手な相手でもある。追記として、錬夜が初対面にもかかわらずタメ口を使ったり無意識に好意を抱いたのは、彼女が母親に似ていたから

* * *

オリキャラ設定の第一弾になります。例のごとく変わることがあるでしょうが、そのときは許してください

オリキャラ設定？（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしております

第二十六話 二度目のエンカウンター（前書き）

超、お久しぶりの更新です。ホントは前書きなんかもあっさりさせて、こっそり投稿しようかと考えていましたが、止めました。きちんとして、挨拶することにします。

自己満足で始めた作品にもかかわらず読んでくださった方がいるのに、勝手に中断させてしまったこと、まことに申し訳ありませんでした。

これからはまた、できるかぎり更新していくので、もしよろしければまたよろしくお願いします。

第二十六話 二度目のエンカウンター

『絶対、無事に帰ってきて』

『…………おつ。約束だ』

うーん…………。

「今思えば、死亡フラグだったかなあ…………」

「は？ 何言ってるんだお前？」

「うんにゃ、なんでも」

隣を歩く当麻に軽く答え、俺は再び歩を進めた。

…………いや、ごめん。さすがにいきなりすぎたな。少し、回想を入れよう。

遡ること十分前

* * *

涙子に別れを告げ、俺は待ち合わせ場所へ。

そこには当然ステイルがいたわけだが、同時に予想外な人物もいた。

「え…………なっ、ちよっ！？ なんでお前がいんだよ?!」

そう。ツンツン頭の高校生こと、上条当麻がステイルと一緒に
つたっていた。

いや、ホントになんでいんの？ インデックスといたから、もし
かしたら魔術側関係者かもなーとは思ってたけど……。

「え？ いや、えっと……」

「うん？ なんだい、桜咲鍊夜。君は上条当麻と知り合いなのかい
？」

困惑したように頭をかく当麻の台詞を遮って、ステイルが言う。

「あ、ああ。まあ、知り合いつつつても、ちゃんと会って話したの
は一回だけだな」

こつちが見かけたのは数回あつたけど。

「そ。なら説明する暇が省けたね。君に言うのを忘れてたけど、彼
も僕達と共に三沢塾に乗り込むから。なんせ、彼の右手は魔術師の
天敵みたいなものだからね」

「右手……？」

「？ ああ、そっちは知らないのか。彼の右手には『幻想殺し』と
かいう能力が宿っていてね。曰く、『それが異能の力であるならば、
神様の奇跡でさえ問答無用で打ち消す能力』チカラなんてフザケタ代物だ
よ。……ま、言ってしまうば？ 超能力だろうが魔術だろうが一撃
必殺ってわけだね」

えー、なにその反則技。

「へえ。当麻って、んなスゲー能力持ってたんだな」

「あ、いや、けど無効化能力つつつても、効果は右手首から上だから、そこ以外に当たったらアウトなんだけどな」

……………？

唐突に、当麻に違和感を覚えた。いや、まともに話したことなんて大してないけど、こいつこんな遠慮がちに話す奴だったか？
ぎこちないっていうか……………。

「ど、どうした、桜咲？」

「んー…………いや、なんでもねえ　　っていうか、桜咲？　前に名前
でいいつつつたる」

「あ、あー、そうだったな。悪い、鍊夜！」

「いや別にいいけど……………」

なんかやけに焦ってた気がするが…………ま、気のせいだろう。

そう結論づけたところで、ステイルが号令をかけ、俺たちは三沢塾へと足を向けた。

* * *

で、さっきの冒頭に戻るわけだ。

「死亡フラグって……お前、なんかやったのか？」

「だーから。なんでもねえって言ってんだろ」

「……君たち、もう少し緊張感を持つたらどうなんだい？」

そうはいつでもなあ……知り合いにあつたら、どつと緊張が抜けてしまった。

と。

「そうこうしてるうちに……見なよ。あれが戦場だ」

ステイルが指差す先には、四棟のビルが建っていた。十字路で互いに繋がったそれは、ちょうど漢字の『田』に似ていた。真ん中の『+』の部分が十字路な。

しかし、これ全部で三沢塾だというから凄い。最近の塾は気合入ってんな。

「んで？ どつから入るんだ？ まさか正面からってわけにも」

「うん？ 真正面から行くつもりだけど？」

「はあ！？ 正気かよお前！」

当麻の驚愕にステイルは「しかたないだろ」と溜息をつき、

「僕や君がどこから入ろうが、一発ではれるんだよ」

なんでも、この三沢塾の中にはアウレオールの魔力が充満してお

り、ステイルが魔術を使った時点で違和感が生じ、ばれる。当麻にいたっては右手がバンバン魔力を消してしまい、やっぱりばれる。まあ、つまりは

「発信機みたいなもんか」

「む……。間違っちゃいけないけど、じゃあどうする？ このまま敵前で手をこまねいているわけにもいかないだろ」

「まあ、そりゃあごもつとも」

そんなわけでいろいろ不安要素はあるが

開戦だ。

* * *

「なんか……思ったより普通だな」

自動ドアをくぐった先にあるのは、ごくごく普通のロビーだった。普通に塾生が歩き回ってるし、とても『誘拐』とか『科学崇拜』とか、そういった危険な感じは全くしない。

それでも……たった一つ、大きな違和感があった。

「なあ、錬夜……学園都市にあんなロボットがあったか？」

そうやって当麻が指差した先には、ひしゃげた西洋鎧みたいなものがあつた。人の形をしたそれは、赤黒い液体を流しながら、壁に

もたれかかっていた。

確かに……あれはロボットにも見えるかもしれない。だけど……、あれは違う。

あれは

「いや、違う」

「え……？」

不思議そうにこちらを振り向く当麻を横目に見ながら、スタイルが言う。

「へえ。こんな平和ボケした国の学生にしては、冷静だね。そして、冷静じゃない方の学生くん。なんてことはない。あれは」

そこで言葉を切って、

「あれは……ただの死体だよ」

「ッ　　！？」

息がつまったような、当麻の顔。それはまぎれもなく、あんな無残な死を知らない人間の顔だった。

……でも。

俺は、知っている。

溢れる血も。ひしゃげた手足も。似たような死に様を見たことがあるから。

脳裏にこびりついた……姿だから。

「……………」

その後のことは、よく覚えていない。

ぼんやりと、ステイルが死体（まだ息はあったそうだ）を神父として看取ったことや、どうやらこの建物が結界になっていることは覚えてる。

だけど……………どこか意識はふわふわしていた。

「……………」

* * *

SIDE 上条当麻

錬夜のやつ、どうしたんだ？ そりゃ、あんなもん見たら呆けちまうのもわかるけど、なんかそれとは違うっつーか……………。

てか、俺自身錬夜のこととはよくわかってないんだから、偉そうなことは言えねーか。

だって俺には……………記憶がないんだから。

七月二十八日を境に、俺の記憶はぶつつりと途絶えている。

なんでも、魔術とかいうオカルトチックなことが原因らしいが、詳しいことはよくわからない。だから、見た目幼女なシスターさんがなぜか居候になっている原因もわからない。

いや違う。断じて異常性癖とかじゃねーからな？ おもちかえり攫ってきたと

かじゃねーからな？

「……君はさつきから、何をぶつぶつ言ってるんだい、上条当麻はつきり言つと傷つくかもしれないけど、かなり不気味だよ？」

「うつせーよ……」

軽く引きぎみなステイルに、嘆息しながら答える。

記憶喪失といえば、こいつのことも覚えがない。俺の記憶喪失に多少なりとも関わっているらしいが……正直、胡散臭い神父にしか見えない。

まあ、さつきの死体を見てイザードに怒りを覚えるくらいだから、悪い奴ではなさそうだけど。

「それより、問題はこの結界だろ。自分達でドアも開けられねーって、それ結構マズくねーか？」

「何。不利は百も承知だったろう。もともと準備万端でこちらを迎え入れたことぐらい、わかってた。僕はむしろ、入った瞬間ゲームオーバーとかじゃないだけ、マシだと思っただけね」

「そりゃあまあ……そうかもしれないけど……」

現在、この三沢塾には『とある結界』が仕掛けられている。

ステイル曰く、『コインの表と裏』のようなものらしい。この三沢塾という建物自体や寮生は『コインの表』で、俺達は『コインの裏』。表が裏に気付かないように、裏は表に干渉できない。それこそ、さつき俺が言っみたいに、ドアを開けることさえ、無理だ。

この状況は結構、マズい。なぜなら、例えば女神がどこかの部屋に監禁されている場合、俺達はそれだけで手出しできなくなる。

そのくせ電話は使える（さつき試した）ってんだから、おかしな

もんだよな。

「ま、実際問題これ以上結界について論議していてもしかたない。そんなことより、問題は姫神秋沙だ。恐らくはこの『隠し部屋』にいるだろうに、手出しができないっていうのは中々歯がゆいものがあるね」

「だな」

そう。俺達が今いるこの通路。その壁の向こうに、ステイルがいうには隠し部屋があるらしい。

だけど、この壁も『コインの表』である以上、入るところか、破壊することさえできない。まるで、答えは分かっているのに鉛筆がないせいで解答できないテストみたいに、もやもやした感覚が残る。

「とりあえず……その部屋に入るうか」

手をこまねいているうちに、ステイルが近くの部屋を指した。ひよいと中を覗いてみると、そこが学生食堂になっているとわかる。今だにぼうつとしている錬夜を引きつれ、俺達はその中へと入っていった。

* * *

「なんだ。存外、科学宗教ってのは特別な感じでもないね。僕には経験ないけど、どこにでもある学習塾みたいじゃないか」

室内に入っのステイルの第一声がそれだった。

食堂内では、多くの生徒が会話しながら少し早めの夕食をとっている。これからさらに勉強するための休憩を兼ねているのかもしれない。

……確かに。一見すれば、『普通』に見えるかもな。

「……そうでもなさそうだな。見るよ、そこら中に、いかにも『こころで勉強してる連中だけが合格できる』みたいなポスターが張ってるだろ。それに、生徒たちの会話も、他人を蹴落とすようなもんじゃないか。こいつは……立派な科学宗教だよ」

「……ふうん。なるほどね」

スタイルは軽く目を細め、今更のように理解したらいいのか一つ頷く。

それから、何かを言おうとした、その瞬間

食堂にいる生徒全員が一斉にこちらを向いた。

* * *

SIDE 鍊夜

俺は……俺は、なんであの時……。

「や」

どろどろ、間違ってたんだ。一体、どろどろ……。

「い、錬夜」

……なあ。教えてくれよ。る

「おい、錬夜！ 緊急事態だ、しつかりしろ！」

「……あ？」

思考の波に嵌っていた俺は、切羽詰ったような当麻の声に現実に戻ってきた。クソッ。俺はいまだに『あの時』のことを忘れられないらしい。

しかし……ここは、食堂か？ ぼうつとしてたから、なんでこんなところにいるのかわかりやしねえ。

だから、そのことを当麻たちに聞こうとして

食堂内の生徒が、全員こちらを無機質な瞳で見つめていることに気付いた。

「……って、怖っ!？」

「今更かよっ?! 反応遅すぎだ、バカ！」

「ま、単純に考えて僕達が隠し部屋に近づいたせいだね。一種の警備システムと見て間違いないだろうね」

「お前もなんでそんなに冷静に解説してんだ！」

ステイルに対する当麻のつつこみを聞きながら、頭をめぐらせる。一体、どういう状況だ、これ。

と、不意に生徒の一人が口を開いた。

「熾天の翼は輝く光、輝く光は罪を暴く純白」

「ああ？ 何言ってるんだ、あいつ？」

「ふむ……これはちょっとマズイかな。 時に、桜咲。君、さっきから上の空だったけど、どのくらい状況を理解してる？」

「んー……もしかして、結構ピンチ？」

俺がそう答えると、ステイルは皮肉げに口元をゆがめて、

「大正解だ。見てご覧、そろそろやつらが何しようとしているのかわかるよ」

……？

ステイルの言葉に従って生徒連中を見ると、全員が口を開きはじめているのがわかった。

そして……『合唱』が始まる。

「純白は浄化」の証、証は行動の結「果」

「結」果は未来、未来「は」「時間、時間は一」律「」

「一律は全」て、全てを創るのは過去、過去は原「因、原因は」「つ、つ」つは「罪、罪は人、人は」罰を恐れ、恐れ「るは罪」「悪、罪悪とは」己の中に、己「」の中に忌み嫌うべきものがあ「るなら」「ば、熾天の翼に」より「己の罪を暴」き内から弾け飛ぶべし
「ッ……」

そこまで言った瞬間、生徒一人一人の額から、青白い光球が生まれる。さらにそれらは一つのまとまりになり、一斉に襲い掛かってきた！

「げえっ！？ マジかよ、おい！」

「言っとくが、触れないことをオススメするよ。あれは、君の身体なんて簡単に溶かしきる」

「言われなくても触れねえよっ！」

ステイルとの短い会話を終え、三人で一気に外に出る。光球の群れは、俺達に追うように食堂を飛び出した。その時にかすったのか、扉の枠が溶けるのが見えた。

「まったく、『グレゴリオの聖歌隊』とはやってくれるな。所詮は魔道具集めが趣味の、骨董屋キユリオディーラーだと思っていいたら……中々に強かじゃないか」

「まったく、やつぱこれらも魔術かよ！ んで？ そりゃ一体、どういう代物なんだよ？」

ステイルは俺の質問に一つ鼻を鳴らして、

「あれは、ローマ正教が誇る最強の切り札まじゆじさ。まあ、ローマ正教に所属していたイザードがそれを知ってるのはおかしくないが、問題はその発動方法だ。

『グレゴリオの聖歌隊』はね、本来は三三三三三三の修道士を聖堂に集め、聖呪せいじゆを捧げることで完成する大魔術なんだ。イザードは、それをこの三沢塾と二千人程の生徒で代替している」

「じゃあ……じゃあ、その解決方法はねえのか？ 二千人もいるんじゃない、一人や二人倒したところで変わんねえだろ」

「もちろん、ある。生徒達かれらが操られているのは、一目瞭然だろう？ なら、そのためには二千人の精神を同調させる『核』があるはずだ。簡単に言ってしまうえば、それを破壊すればいい」

そこまで言ったところで、前からも光球の波が襲ってくるのが見えた。俺達は、慌てて階段を上り始める。

と、そこで当麻が叫んだ。

「おい、ステイル！ 『核』があるつつつても、こんな状況じゃどうしようもねーだろ！？ なんか、策はねーのか？！」

「策、ね……。じゃあ、こんなのはどうかな？」

ドン、と。

ステイルの言葉が終わったその刹那、俺の身体は浮遊感に包まれた。一秒のタイムラグがあったから、ステイルに突き落とされたのだと気付いた。

「えっ、なっ、ちょ　ぶっ！？」

俺の後ろを追走する形の当麻にぶつかり、二人ともごろごろと下の階へと転がり落ちた。

続いて、ステイルの声。

「困役、ご苦労様」

にやるっ……！」

「ざけんじゃねえぞ、テメエ！」

叫ぶが、既にステイルの姿は消えていた。早々に階段を上りきつたらしい。

むかつくことこの上ないが、今はそんな状況じゃねえな。

「クッソ……立て、当麻！ 逃げんぞ！」

「ッ！ わかつてるよ！」

全身に走る鈍痛を無視しながら、慌てて駆け出す。例の光の球は、依然俺達を追いかけてくる。捕まるのも、時間の問題かもしれない。ちっ！ そんなら

「当麻！ 漏らしたやつはよろしくっ！」

「はあ?!」

当麻の疑問を無視しつつ、振り返り、思い切り掌を合わせて、それを床に押し当てる。

バシィ！

瞬間、リノリウムの床は盛り上がり、通路を塞ぐ壁となった。それが完成すると同時、ジュワアアアアと、焼けた鉄板に水をぶっかけたような音が響く。それに合わせて、壁がどんどん溶けていった。

中には、数個壁を通り抜けた球体もある。そして、それが俺を襲おうとして

パキーン！

背後から伸びた右手に掴まれた瞬間、澄んだ音を立てて消え去った。

「　　っし、ナイスアシスト！　逃げるぞ！」

「　　っってお前、俺がとつさに『イマジンプレイカー幻想殺し』使ってなかったら、どうするつもりだったんだよ！」

「だから、よろしくって言ったじゃねえか！」

「あんなんでわかるかよっ！」

口も足も激しく動かしながら、再び階段までたどり着き、それを勢いよく下っていく。とつさの判断で下りを選んだのは、さっきのトラウマがあるからだろうか。

と、そんな益体もないことを考えていると、階下から足音が響いてきた。

そちらに目を向けると、黒いおさげに丸めがねの女子が立っている。一見すれば一般人だが、呪文を唱えているのを見ると、あいつも立派な『魔術師』らしい。

「一人……か。なら」

「ああ！　俺が右手で消してやる！」

さっきの件で当麻の能力は確認済み。あれなら、問題ないだろう。ならば後は、彼女の戦闘力。見た目は、ただの女生徒だ。大したこととはねえはず

パンツ

……………な？

突如、思考を遮るように、何か爆ぜた音が聞こえた。それは、『階下から』聞こえた気がする。

「……………ッ!？」

視線を向けてみて、息を呑む。なぜなら

呪文を唱えていた少女の頬が、破裂したように裂けていた。

音は、あれが原因だと気付いたのは、すぐだ。だけど、その間にまた連続して破裂音は響く。

顔といわず、腕といわず、足といわず、胴といわず。どんどんと裂けて、血飛沫をあげている。

俺は、混乱する頭で、それでも叫んだ。

「なん、だよ……………なんだよ、あれ!」

それは単に疑問を口にしただけのものだったが、答えは意外にも返って来た。

隣を走る、当麻だ。

「ああ……………そうだ、クソ! 『超能力者に魔術は使えない!』! 反動が来てるんだ!」

「な……ッ!？」

じゃあ……じゃあ、なにか？　今この塾にいる生徒、全員があんな状態だったのか!？」

その事実には愕然となった時、彼女の身体がふらりと傾いた。当麻の言った通りなら、反動とやらの限界が来たのだろうか。

「「なるっ!」「」

倒れ付しそうになる彼女に向かって、手を伸ばす。それが今の状況では足かせにしかならないことには気付いていたが、かといって見捨てていけるわけがない。

でも。

ザアアアアアア　　ッ!

俺達の事情なんてお構い無しに、俺達を死に至らしめる光球の群れは容赦なく迫ってくる。神様つてのがいるのなら　いや、いるのか。あのバカ神は、よっぽどKYらしい。

そんなくだらないことを考える暇があるほど、時間がゆっくり流れる。死の瀬戸際にいるからかな？

さっきやった回避術は、少女を抱えているせいでできない。それに、彼女を運んでいくのなら、どの道いずれはゲームオーバーだろう。

ああ、クソ。ネガティブにばっか考えちまうな。どうしても、生き残る方法が思い浮かばない。

俺……死ぬのかな？

「……………」

『そっか……。どうせ、止めたって行くんでしょ？』

「……………だろ」

『んー…………じゃあさ、一つだけ約束して』

「……………ねえだろ」

『絶対、無事に帰ってきて』

「死ねるわけが、ねえだろう…………ッ！」

いつか決闘してやると約束した奴がいる。
相棒として守ってやると約束した奴がいる。
危なっかしいからいつでも手伝ってやると約束した奴がいる。
必ず帰ると約束した奴がいる。

他にも、たくさん、たくさん、いろんな奴と約束した。友達、師匠、家族。数多くの約束をした。

なのに…………それなのに！ そのどれもを果たせないまま死ぬなんて、あっていいはずがない！

「俺は……………」

もう一メートルほどしか間隔がない光球の群れを見据え、俺は呟く。

「俺、は…………ッ！」

強く、強く、決意を込めて。
真っ直ぐに青白い怒涛を睨み付け、呟く。
けれど。

ザアアアアア　　ッ！

その決意ごと飲み込むように、奔流は俺達を……。

「……………」

俺達を飲み込んで

「……………？」

『いない』。

その現象の不可解さは、目を開けてたから、よくわかる。群れは、俺達の眼前でぴたりと静止し、やがて力を失ったように落下していった。

えーっと……………え？

「たす、かった…………？」

「……………は？」

ぼつりとこぼれたその言葉に、隣で目を固く閉じていた当麻が反応する。

それから、お互いに顔を見合わせ、首を捻る。一体、どういうことだった？

安堵よりも、疑問が先立つ。あれだけ俺達を脅かした攻撃が、あ

っさりと消えてしまった。そのことに対する疑念がどうしても拭えずにいた。

しかし、そんなことも、すぐに思考の隅に飛んだ。

カッン、と。

靴音が、辺りに響き渡った。

……ここは、戦場だ。味方は、当麻とステイル(?)しかいない。つまりは、その足音の主は、俺達にとって敵となるはず『だった』。

「え、な……?」

振り返って見て、『彼女』の全体像が目に入る。

膝元まで伸びた、艶やかな黒髪。

同じく黒い、この異常の中にあっても尚、冷静な瞳。

俗に巫女服と呼ばれる、白衣に緋袴。

俺は、『彼女』の名前を知っている。実際にも、写真でも。だから、俺は

「姫、神……?」

そう、『彼女』の名を呼んだ。

第二十六話 二度目のエンカウンター（後書き）

これを書くのも久しぶりになりますが、ご意見・ご感想、お待ちしています。

第二十七話 錬金術師V S 錬金術師と幻想殺し(前書き)

覚えていてくださっている方は、お久しぶりです。長い間が開きましたが、最新話を投稿しました。

受験のためかなりのスローペースになると思いますが、どうかまたよろしく願います。

第二十七話 錬金術師 vs 錬金術師と幻想殺し

「姫、神……？」

自分でも意識してなかったその声は、思ったよりも大きく響いた。
なんだ。なんでこいつが、ここに……？

突然の登場に困惑していると、当の姫神が首を捻りながら、

「あれ……？ 私。もしかして今夢を見ている？」

「いや、なんでそんな結論に？」

あいかわらず、こいつはよくわからない。

「だって。『赤い糸』の君と。『ハンバーガー』の君がいるから」

前半は俺に。そして後半は当麻に言いつつ、さらに首を左右にゆ
らす。どうやら、彼女なりの疑問の表し方らしい。

まあ、それはそれとして。『赤い糸』ってのは『赤い糸メール』
のことだろうが、『ハンバーガー』ってのはなんだろう？

「なんだ、錬夜。お前、姫神と知り合いだったのか？」

「あー、まあな。つうか、お前も？」

「いや、なんつうか、今朝ハンバーガー屋で会ったんだ」

へー、今朝ねえ……。

「……つて、たったそんだけの関わりで命張ってここまで来たのか？！」

「な、なんだよ。そういうお前こそ、姫神とどういう関係だよ？」

「ふふん。聞いて驚け。俺は、一日一緒に遊んだ関係だ！」

「薄っ！？ お前もあんまりかわんねーじゃねーか！」

ぎゃーぎゃーと、にわかに騒がしくなる廊下。

そんな俺たちに姫神は一言、

「君たちのテンションが上がるのは別にどうでもいいのだけれど。それより。その子の手当てしなくていいの？」

「ああ、そうだった!？」

気のせいか、お下げの少女の瞳に、キラリと光る物を見た気がした。

* * *

「ふう。これで。一応大丈夫だと思う」

曰く、血の流れについてなら詳しい姫神の手によって、お下げの少女は一命を取りとめた。まだまだ危険な状態とはいえ、これが一助けることができた訳だ。

……だけど、なあ。

「ん？ どうした、錬夜？」

「……いや。なんでもねえよ」

当麻に軽く返して、首を振る。

本当は、わかってる。目に見えないところじゃ、きっと多くの人間が魔術の反動で傷ついているのだろっし、現にロビーで死人を見ている。

だからと言って、立ち止まるわけにはいかねえな。俺たちがそいつらにしてやれることは、一刻も早くこの事件を終わらせることなんだから。

と、いうわけで。

「さつてと。そんじゃあ、まずは救急車呼ぶか。そんで、姫神、お前は先に帰ってるよ」

「かえる……？ 私が……？」

俺の言ってる意味がわからないのか、キョトンとした顔で姫神は呟いた。

「つたく、世話がやけるなあ。」

「当たり前だろ。俺も、当麻も、それから胡散臭い神父も、みんなお前を助けるためにここに来たんだ。なら、そのお前が帰らねえで、誰が帰るってんだ」

「……………」

「つて、あれ？ ノーリアクション？ 俺、なんか変な事言ったか？」

そんな風に内心ちよつと焦っていると、

「その言葉は嬉しいけれど。それでも私は帰らない」

「「は？」」

「だって。私には」

ズル、ズル……

と、不意に、何かを引きずるような音が、姫神の台詞を遮った。これは……何だ？

その疑問に答えたのは、続けて聞こえてきた声だった。

「くそ、くそっ！ 断然、なんだこの重さは。たかが材料のくせに足を引つ張るとは……。くく、足、か。足を引つ張ると来たかアウレオルス！！イザード！ 今のお前に引つ張る足もないだろうに！ あは、あはは、どいつもこいつもあいつもそいつも馬鹿にしおつてからに、必然すべて溶かし尽くしてくれろ……っ！」

憤怒、快樂、狂気。

あらゆる感情がない交ぜになったようなその声に、俺の体が震えた。

だけど、それは恐怖から来る震えじゃない。もっととどす黒くて、もっと抑え切れなくて、もっとどうしようもない感情。

すなわち、憎悪。

「アウレオルス！！イザード……ッ！」

絞りだすような声で、俺はそいつの名を告げる。

あの日、公園で出会ったときと同じ顔^{ツラ}。しかし、その様相は大きく変わっていた。

何が起こったのかは知らないが、やつの左腕と左脚は無くなっていて、かわりに金色に光る棒のような義肢が突き刺さっていた。

……いや。そんなことはどうでもいい。問題なのは

「て、めえ……！ テメエは一体、『何を引きずってやがる』！」

思わず、叫ぶ。

やつの右手と義手の左手、その両方は三人ずつ、計六人の生徒をつかんでいた。

アウレオルスがこちらに気づく。

「ん……？ 貴様、あの時公園にいた……。懽然、なぜここにいる少年？ しかも、見知らぬ少年さえ伴って。まさか、幻覚というわけでもあるまい？」

「幻覚でも幻想でも夢でも、なんでもねえよ、アウレオルス。イヤード。お前が知ってるように、俺はテメエと出会ってる。いや……んなこと、どうでもいい。とにかく、質問に答えやがれ。その両手に持ってるのは、なんのつもりだ？」

「くっ……！ 貴様『も』奴同様に材料に目を向けるのか！ 私ではなく！ 『瞬間錬金^{リメン・マグナ}』でもなく！ こんな、材料ごときに……ッ！」

何だ……？ あいつは、何を言ってる……？

奴らしからぬ態度に、俺は違和感を覚える。と、当麻が俺に小声で、

「なあ。やっぱ、あいつが、アウレオルスなのか？」

「あ、ああ。少なくとも、外見は俺が知っているとおりだよ」

「そうだ。何があつたかしらんが、あいつはアウレオルスのはずだが、それを否定する者がいた。」

「 違う」

「 え……？」

「彼は。アウレオルスじゃない。そう思い込んでいるだけ。彼はただの偽者にすぎない」

「ッ！ キサマ……必然、溶かしてくれろ！」

姫神の言葉はアウレオルスの琴線に触れたらしく、奴は吼えた。さらにそれに同調するように、右腕の袖口から、『何か』が飛び出した。

そして、その何かは俺たち『ではなく』、アウレオルスが引きずっていた生徒たちに突き刺さり、

ドロリ、と。金色の液体へと彼らを溶かした。

「……ッ！？」

何だ、これ。何が起こってる？

こいつ今、こんなにもあっさりと……人を殺したのか？
そう、俺の脳が認識した瞬間

そう、

「……ったく。一人でつつこんでんじゃねーぞ。何の為に三人で三沢塾^{ミサキ}に来たんだよ」

上条当麻の幻想殺し^{イマジンブレイカー}によって。

「……悪い。頭に血が昇ってた……」

「あいつがやったことに怒ってんのがお前だけだと思ってんじゃねーぞ。俺だってお前がいなかったら、絶対に飛び出してたよ。やりたいことは一緒なんだ。二人で倒すぞ、あのクソ野郎！」

「おうー！」

落ち着け。ここで俺一人ががむしゃらに突貫しても何にもならない。

当麻の言ったことを心に刻め。俺は一人じゃない。隣には、頼もしい仲間がついている。

掌を一度開いて、閉じる。こっから仕切り直した。

「……悄然。なんだ、その右手は？ 触れるものすべてを黄金に変換するはずの『瞬間錬金』が、なぜ破壊される。ボヘミア、ウィーン両学派でさへ成し遂げられなかった偉業を……なぜ防げる？ 全然、理解が及ばぬ」

対するアウレオルスは、ぶつぶつと呟き始め、当麻の右手を凝視している。ステイルが「フザケタ代物」と評した通り、当麻の幻想殺しは魔術師から見ても相当な異能力^{イレギュラー}らしい。

「おい、当麻。あいつ、どうやらお前の右手に興味津々らしいぜ？
人気者だな」

「ふざけてる場合かよ」

軽く冗談を飛ばしながら、それでも視線はアウレオルスから外さない。
と、

「は、はは、はははははっ！ 面白いぞ少年！ そうだ！ 私はそういう人体の神秘を待っていた！ 調べてやる、この私とその右手を解析してやる！」

高笑いと共に、再三鎌を放ってくる。当麻はそれに舌打ちを返し、右手で迎撃する。

「俺を忘れてんじゃねえぞ！」

その隙に今度は俺が再びつつこむ。ただし今度はやけくそではなく、両手を合わせながら。

バシィ！

リノリウムの地面から生まれた柱は、当麻を攻撃し続けるアウレオルスへと向かう。
しかし、

「チィッ！」

アウレオルスは当麻への攻撃を中断。距離があつたために届くま

で時間のかかった石柱は、いとも簡単にかわされてしまった。
さらに反撃とばかりに、アウレオルスは鏃に黄金を吸い寄せ、それを津波のように俺を襲わせた。

「うおっ!？」

あわててバックステップで距離を取る。あんなジュウジュウ言ってる液体をぶっかけられたら、骨まで溶けちまいそうだ。

後退する最中に、俺は次の手を考える。

さつて、どうするか……二対一とはいってもこの細い廊下じゃ挟み撃ちにもできやしねえ。

仕方ない、ここは

「(当麻には囷として尊い犠牲になつてもらおう方向で行くか)」

「おい!? 今ボソツととんでもないこと呟かなかったか?!」

「気のせいだ! 集中しろ、負けちまうぞ!」

「冗談はおいといて、実際問題あの鏃だけでも大変なのに超高熱の黄金ときたか。しかもどっちも一撃必殺つて。なんのチートだそれは。」

……っというか。

「何やってんだ、俺は……」

俺は僅かに息を吐き出し、そう漏らす。

確か姫神の話じゃ、こいつは本物のアウレオルスじゃないらしい。監禁されていたあいつが言うんならそうなんだろう。

だったら

「こんな偽者サコに構ってる暇はねえってのに……！」

あいつがホンモノじゃないんなら、この戦いに意味は無い。さっさとぶっ倒して先に進まねえと。

ちらりと隣を見ると、当麻も攻略法を掴みかねているようで、無言で腰を落としている。しかし、それでもあれだけの脅威を見てまだ逃げ出そうとしないのは、すげえと思う。

と。

そんなことを考えた瞬間、
アウレオルスはふと思いついたかのように、
こう言った。

「突然、そういえば小娘。私を侮辱した罪、忘れたとは言わせんぞ
まずは、貴様から死んでおけ」

「は？」

疑問はすでに遅く。

アウレオルスは右腕をゆらりと持ち上げている。

その射線は俺と当麻の間を貫き、俺たちの背後にいる『姫神へと』
吸い込まれていた。

意味がわからない。姫神はアウレオルスあいつの目的じゃなかったのか？
まさか、それすらもわからないほどに、あいつは錯乱してんのか？

いや、そんなことはどうでもいい。一番大事なのは、姫神が狙われてるってことだ……！！

「「ひ」

ボツ！

俺と当麻が彼女の名前を叫ぶよりも早く、鍔が右袖から飛び出す。それは黄金色の軌跡を描きながら、真っ直ぐに、冗談みたいに真っ直ぐに飛んでゆく。

ダメだ。

俺たちにそれを止める術はない。出来るのはせいぜい目で追いつとぐらいだ。

このままじゃあいつは死ぬ。

この世は、都合のいい奇跡がそうそう簡単に起きてくれるほど優しくできていない。

……だったら。

奇跡を起こすのは

自分たちしかいねえじゃねえか！

止まらない黄金の槍はさらに姫神との距離を縮める。そこまで来てようやく姫神は反応できたようにわずかに目を見開き、

「あ、」

その小さな呟きを耳が捉えた瞬間

ゴガンッ！

『俺は鍔とつながった鎖を咄嗟に殴りつけていた』。

「おおああああああッ！」

殴られたことで曲がった鎖に引きずられるように、鏃もわずかに進路を逸らす。それでもまだ足りないというように俺は踏み込み、

直後。

姫神の顔のすぐ横を、鏃が貫いた。

「クツ……！」

アウレオルスはわずかに呻いて鎖を放棄する。ガシャンと音を立てながら、鎖は地面に落下した。

俺は荒くなつた息を整えつつ、アウレオルスに眼光を飛ばす。

「おい、テメエ！ これは俺たちとお前の戦いだろうが！ 勝手に手え出してんじゃねえよ！」

「……戦い？ 無然、そう思っているのは貴様らだけだ。私はただ、侵入者の排除をしているにすぎないのだから。その少年の右手を除いて、私は貴様らに興味などない！」

「ふざけんな！ テメエ、姫神の能力が目当てでここに監禁したんだろうが！ 今までこいつにそんな真似しておいて、今更あっさり殺そうとしゃがって……。一体、何がしてえんだテメエは！」

「クツハハツ、ハハハ、知ったことか！ 我が名誉を貶されてまで守るべき目的など、あるものか！」

そう言って、口元を歪めるアウレオルス。その態度に俺はまたブ

手切れそうになって 気づいた。

こいつは……。

「……もういい。『分かった』」

「？ 分かった？ 一体何が分かったと」

「お前は偽者だ」

「ッ!？」

姫神が突きつけた事実を、俺はもう一度突きつける。

ずっと、こいつが偽者だという確信が持てなかった。だけど、今ならよくわかる。あの日俺が出会ったアウレオルス・イザードという男は、少なくとも姫神を傷つけるような人間には見えなかった。なにより

「あの野郎は、そんな濁った目はしてなかった。何を企んでるのはしらねえが、強い意志みたいなのを感じた。お前とは違うんだ」

「キ、サマア……ッ!」

憤懣ふんまんやるかたないという形相で、アウレオルスは身を震わせる。対して俺はゆっくりと両手を合わせ、相棒に話しかけた。

「当麻。俺が突っ込む。合わせてくんねえか？」

「やっと出番かよ。こっちもそろそろ限界だ。あの野郎、姫神を狙いやがって……! 絶対にブン殴ってやる!」

津波は防いだ。

もう俺たちを邪魔するもんは何もねえし、お前を守るもんも何もねえ。

……分かるか、アウレオルス？ この勝負

「お前の負けで」

俺の言葉に、

「俺たちの勝ちだ！」

当麻が続き、そして

ゴツツン！

勝利を告げる、鈍い音が響いた。

第二十七話 錬金術師V S 錬金術師と幻想殺し(後書き)

ご意見・ご感想、お待ちしております

第二十八話 吸血殺し(前書き)

今回、戦闘成分ほとんどないです。次回はもっと激しくなるといいな、と思っています

第二十八話 吸血殺し

パンツ バシィ！

決着^{ケリ}が着いたことを確信した俺は、壁を元に戻した。そして見たものは……ある意味では、納得できる光景だった。

「……いいのか？」

「……ああ。あいつは、もうダメだ。心が折れちまつてる」

「そっか……」

軽く頷いてから、俺に背を向けて立つ当麻の、その先を見る。そこには……俺たちに敗北し、自身の存在を否定され、無様に逃げ出すアウレオルスの姿があった

* * *

「少し、休憩しよう……」

最後の攻防で俺と当麻の間には、黄金の水溜りが出来上がっていた。そこに壁をつくる要領で橋をつくり、当麻が渡ってきたところで俺はそう言った。

「あの合唱攻撃……『グレゴリオの聖歌隊』つつったか。あれのせいで走りまくった上に、さっきの戦闘だ。それに当麻は、^{やじり}鍬を壊し

まくったせいで右手がボロボロだろ。姫神に応急処置してもらえよ」

正直、一時的にでも危険がなくなった今、一気に疲れが出た。実際の運動量はともかく、『死の可能性』にさらされ続けたことは、結果的にかんりの体力を奪っていた。今『グレゴリオの聖歌隊』や『本物』に出てこられたら、相当きびしい。

幸い、姫神がこちらにいる以上、突入前よりも切羽詰った状況にはないしな。

俺の提案に当麻も乗っかり、俺たちは一時休みを取ることにした。

そして十分後。

「姫神。そいつ、まだ大丈夫なのか？」

「うん。とりあえず危険な状態は抜けてるから。大丈夫だと思う」

当麻の問いかけに、さつき治療した女の子を抱えながら姫神は答えた。悪いな……もう少しだけ待っててくれ。後で他の連中も一緒に病院に連れてくから。

心の中でお下げの女の子に謝って、それから自分の右手に視線を向けた。

……さつき俺は、咄嗟に鎖を殴って姫神を助けた。普段の俺なら、あんなに反応力は高くないはずだ。なのに、実際には体はしっかりと反応した。

あの感覚……俺はどこかで

ズキッ

「ッ……!!」

いきなり、額に痛みが走った……ような気がした。
なんだろう……なんか、覚えがあるんだけど、思い出さないほうが
いいような気がする。それも、すんげーくだらねえ理由で。

「つと。今はそんなこと考えてる場合じゃねえな。おい、当麻
！」

「ん？ どうした、鍊夜？」

「もう大分休めただろ。お前の処置も終わって、俺も体力が戻った。
偽者は倒したから、今度は本物を倒すぞ。まだこの事件は終わって
ねえんだ」

「そうだ。まだこの一件には決着がついてない。そうである以上、
俺たちは帰れない。
だけど、

「あ、ああ……そうだな……」

返ってきた当麻の答えは少し苦しさのようなものが混じっていた。
……それもそうか。こんな戦場、誰だって嫌だし帰りたいに決ま
ってる。

俺はどうやら……『死』に対する経験値が上がっているらしい。
ここにきてからの経験もそうだが、俺はこの世界に来て何度か死に
掛けた。それに過去のこともあるし、何より俺はすでに一度死んで
いる。だから、人よりも耐性があるのかもしれない。こっちに来た
ばつかりの時は、死ぬのが怖くて風紀委員加入を断つたりしたのに
な。自分でも驚く変化だ。
ジャッジメント

……でももしかしたら、当麻はここで帰した方がいいのかもしれ
ない。もう『引き返せなく』なる前に。

そう俺が促そうと声をかけようとした時、

「　　そう言えば、姫神。お前さっき錬夜が帰ろうって言った時、何を言いかけたんだ？」

当麻の質問で、それは遮られた。

どうするか。強引にでも切り出してみるか？

もしも次の姫神の返答が『あんなもの』でなかったら、俺は多分何の問題も無く切り出せてただろう。

なぜならその言葉は、俺たちの前提を……「姫神秋沙は『監禁』されている」という前提を

「それなら簡単。『私には　　目的があるからここから帰らない』」

粉々に砕いてしまったからだ。

* * *

SIDE インデックス

八月八日（アウレオルスⅡダミー撃破より十数分前）。

「……………スフィックス。私はあなたに言いたいことがあるんだよ」

「……………」

私はスフィックスの体を洗いながら、今日の出来事を思い返してみよう。

えっと、まず朝はとうまと一緒に参考書を買いにでかけて、その途中ですごく失礼なことを言った青い髪をしたとうまのお友達に会って、三人で『ふぁーすとふーど』のお店に行ったら卜部うらべの巫女に会って、その後スフィックスを見つけたら変な魔術の気配を感じても結局勘違いっぱかったからこの部屋まで帰って、そしたらとうまが急に出かけて

……うん、やっぱり最後のが一番怪しい気がするんだよ。出かけるって言った後に私がスフィックスを飼うのを許してくれたのもなんか怪しいし、さっきかかってきた電話もちよっと変だったもん。

「……………」

決めた。とうまを探しに行こう。

私はお風呂場から出て修道服に着替えてから、ドアを開けた。

って、そういえばとうまはどこにいるんだろう？ どうしよう、それがわからなきゃ探しに行けないよ……………。

自分の間の抜けた行動に自分で落ち込んでから私は

壁に、ルーンの刻印が刻まれたタロットカードが張られていることに気づいた。

「……………」

これ……………あの、炎を使う魔術師のルーンだ……………。

『また』だ。

きつと、とうまはまた私の知らないところで何かに巻き込まれているんだ。

そのことに気づいた瞬間、私は病室で再会したとうまの姿を思い

出していた。あのときのとうまはなんだか透明で、消えちゃいそう
で……とても怖かった。私の知ってるとうまがいなくなっちゃった
んじゃないかって、怖かった。

だからもう、私はそんな思いはしたくない。

幸い、このルーンには絶えず魔力が注ぎ込まれているみたいだから、その供給する『ライン』を辿れば、追いかけるはず。

そこまで思い至った私は、駆け出そうとして、

「……………あ」

無意識に、隣の部屋に視線を向けた。その部屋に住んでる人は、
今はいないのに……。

「そらね、どこに行っちゃったんだろう……………」

もし、彼がいたら……………ううん。どっちみち二度も巻き込めないも
ん。

私は一つ頷いてから、魔力のラインを辿り始めた

* * *

S I D E 錬夜

「……………そりゃあ、お前。つまり、お前は自分で望んでここにいて
ていうことか？」

姫神の告白を受けてしばし立ち尽くした俺は、それでも姫神にそ
う尋ねた。

「そう。ここでなければ果たせない目的。より正確に言うならば。アウレオルスにしか叶えられない目的。だから。私は私の意志でここにいる」

「だけど、お前はあいつに監禁されてたんだろ？ それならやつぱりここにいるべきじゃねーよ」

当麻の進言に姫神は首を振って、

「それは。この『三沢塾』が乗っ取られる前の話。アウレオルスが私に目をつける前。私がここで何をされていたか聞きたい？ 私はあれが来てから。ここを出る必要がなくなった」

出る必要がなくなった？

「どういうことだよ？ お前がここまでする目的ってのは……じゃあ、一体なんなんだ？」

「……………」

姫神は一度無言で俺の方を見て、それから窓の外に目を向けた。そしてぼつりと、

「吸血鬼が。どんな生き物か。君たちは知ってる？」

「……………」

「『変わらない』。私達と何も変わらない。誰かのために泣けるし。嫌なことに怒れるし。何気ない時間を楽しめるし。素敵なことを喜

べる。そんな。当たり前で。私達と同じ存在」

そこまで聞いて、俺はなんとなく姫神の『目的』に予想がついていた。

彼女の能力。『ディーフブラッド吸血殺し』。その名が意味するのは

「私の体に流れる血は。吸血鬼というだけで。『そんな小さなことだけで』。あんなに優しい人たちを。一人残らず。一片残らず。全て殺し尽くしてしまう」

「……ここなら、殺さなくてもすむのか？」

「うん。アウレオルスが張ったこの結界は。私が吸血鬼を招くのを防いでいる。だから。私は彼らを殺したくないから。ここから出られないし。ここから出ない」

「待てよ。だったら、今日俺たちと初めてあったとき、お前はなんでも外に出てたんだ？ お前が吸血鬼を呼びたくないってんなら、矛盾してるだろ？」

「そういえばそうだ。当麻がこいつとあったのは今日だ。確かに矛盾してる。」

「ううん。矛盾はしていない。私に目的があるように。アウレオルスにも目的がある。それは。吸血鬼がいなければ叶わない願い。だから私は。偶に外に出て吸血鬼を呼ぶ必要がある」

「？ それでもやっぱり、吸血鬼が呼び寄せられることに変わりはないんだろ？ だったら」

「大丈夫。アウレオルスは、彼らを傷つけないと言った。協力して欲しいだけだと。そう言ってくれたから。私は彼に協力している」
なるほどな……。

姫神の話聞いて、七月十五日の謎が解けた。

あいつがあの日「今日しかないから」と言ったのは、あれが一日中好きに出歩ける最後の日って意味だったのか。

いくら囿といっても、三沢塾から、ひいてはアウレオルスから離れてたんじゃ意味がない。呼び寄せることが出来ても、すぐに殺す結果になるだろうからな。

だからあの一日は、アウレオルスなりの優しさだったのかも知れない。

それからもう一つ。俺は、姫神がアウレオルスに抵抗しなかったのは、何か事情があるからかもしれないと踏んでいたが、どうやら当たっていたらしい。ただし、思っていたよりもよっぽど重い理由だった。

……でも

「つつてもお前、ずっとここにいてるつもりかよ。一生この結界せかいの中で暮らす気か？ そんなの……籠の鳥と変わらねえじゃねえか」

確かにここにいれば、吸血鬼を呼び寄せることはないだろう。アウレオルスにしたって、真偽はともかく吸血鬼に危害は加えないと言っている。こいつの望みを叶えるには、もしかしたらこれが最適な方法なのかもしれない。

だけどこれじゃあ……『お前』の幸せはどこにあるんだよ？

言外にそんな意味を込めた俺の言葉は、けれども、たった一言で断じられた。

「構わない」

「……………」

「たとえば。籠の鳥だとしても。私が幸せになれなくても。それで吸血鬼が助かるのなら。私はそれで構わない。誰かを殺すぐらいなら。私は自分を殺してみせると決めたから」

そう言つて、姫神は俺をまっすぐに見据える。

彼女の瞳には、台詞にふさわしい覚悟が宿っていて……、これが俺とあんまり年が変わらないような女の子かと思うと、俺は言いたいことが言えなくなった。

そんな俺に何を思ったか、姫神は少し笑つて、

「大丈夫。今はこの結界にいるしかないけど。アウレオルスはもつと簡単な結界を作ってくれと言つた。衣服の形をした結界で。『歩く教会』というらしい。それを着ていれば。ここに拘束されることもなくなる」

「そつ、か……………」

釈然としないものを感じつつ、俺は顔を伏せつつそう返して

ソクッ

「ッ！？」

「…の感覚…………！」

「お前……………」

当麻の声は驚愕に染まっでいて。

そして俺は確信した。

さっきまではそこにいなかったはずなのに……『あいつ』は絶対そこにいる。

だから俺は顔を上げて

「……よお、今度こそ『久しぶり』だな、アウレオルス「イザード」

- 『本物』のアウレオルスを睨みつけた。

* * *

姫神の背後、三十メートルばかり先に、アウレオルスは立っていた。

今の今までそんなところには誰もいなかったはずだ。それは間違いない。

でもあいつは確かにそこにいて、そして、

「ふむ。この間合いでは少々遠いか。寛然、仔細ない。すぐにそちらに向かおう」

ゾンツ、と。

無音ゆえにそんな音を聞いた気がした。

アウレオルスがあまりにもあっさりと、『俺たちと目の前に瞬間移動してきた』からだ。

「「ツ……!?!」」

当麻と二人、声が出ない。
こいつ、今、どうやって……?!

「当然、疑問は沸いて出るだろうが、答える必要もなし。姫神の血は私にとっても重要なモノだ。むざむざ貴様らに渡すつもりも無いので回収にきた次第」

「くそっ！ テメエ！」

「野郎！」

皮肉にもアウレオルスの言葉で拘束が解けた俺たちは、奴に向かつて駆け出す。

その数メートルもない距離を

「『これ以上 貴様らは、こちらに来るな』」

けれど俺たちは、詰めることができない。

俺たちは走っているつもりなのに、少しも『近づけない』……ッ！

これが こいつの魔術^{チカラ}。

「ふむ……つまらんな」

アウレオルスは俺たちを退屈そうな瞳で見下し、懐から何かを取り出した。

あれは……^{はり}鍼か？

疑問は一瞬、アウレオルスはそれをなんとはなしに首に刺し、

「『吹き飛ばす』」

刹那。

ドツツツツツン！

「が、あ……ッ！？」

「ぐツ……！？」

突然、何かの衝撃とともに、俺たちは『吹き飛び』、背中から地面に落下する。

意識が飛びそうだ……！

隣を見れば、当麻も呻いている。このままじゃ、俺たち二人とも

「。待つて。これ以上は私が許さない」

その時、姫神がアウレオルスの前に立ちはだかった。

アウレオルスはそれを数秒眺め、

「お前がそう言うのなら、当然、奴らは見逃そう。こんなつまらんことで協力者の機嫌をそこねても仕様がなしな」

アウレオルスは振り返り、

「ついてこい、姫神。準備は整いつつある。お前の『吸血殺し』が役立つときが来た」

「……………」

姫神は無言で、アウレオルスに付いて行く。

なんだこれは……？ あいつを助けに来たはずが、あいつに守られた？

ふざけんな。そんなのって無えだろう。俺たちは

こんな結末のためにここまで来たんじゃない！

「ちょっと待てコラあああああああああああああああ！」

震える足に力を込め、立ち上がる。ここであいつを連れて行かれ
たら、ここまで来た意味が無くなっちまう。

「……ほう。まだ元気があったか」

「当たり前だ！ お前は絶対にぶん殴るって決めてんだよ！」

「ぶん殴る、か。懽然、ずいぶん勝手なことを決意したものだな……
…ん？ 貴様どこかで見た顔だと思ったら、判然、あの時の少年か」

こいつ……今まで気づいてなかったのか？

「やっと気づいたかよ。お前の『コピー』はすぐに気づいたぜ？」

「ふん、やはり会っていたか。だが、やはり失敗作だな、あの『ガラクタ』は。侵入者の一人二人もつぶせんとは」

「『ガラクタ』だと……？ 自分で生み出しておいて、随分な言い
様じゃねえか」

「全然。間違っただけとは言っておらんよ。あの『炎』はともかく、
素人二人にまで負けるとは」

『炎』……ステイルのことか？

じゃあ、あいつの左腕と左足が無くなったのは……。

「……ところで少年。貴様は私をぶん殴りたいらしいが、間然、私にいかなる非がある？ 姫神と私の目的は合致している。何も問題は見当たらんか？」

「……そっちについてちゃあ、俺もまだ『答えを出しかねてる』。だけど、お前はそれ以外にやっちゃいけないことをやってんだろ？」

「聞こうか」

「簡単だ。お前が生み出したアウレオルスⅡダミー。あいつは一体いくつの命を食いつぶした？ 魔術を行使させられた生徒は死んでる可能性があるし、なにより俺はこの目で生徒が黄金に変えられるのを見たんだぞ！」

そうだ。姫神の件はともかく、こいつは既に間接的に人を殺してる。それに、ロビーで見かけた死体もこいつがやったんだろ。もしもダミーがやったなら、黄金になっているはずだ。

「くつくつ。そう来たか。なるほど、それならば断然反論の糸口としては最適だ。だがな、少年。貴様は一つ思い違いをしている。自然、あれは『ただの一人も殺していない』」

「……？ どういうことだ？」

「わからんだろう？ だが、理解する必要はないし、理解させる暇も無し。貴様の質問に答えるよりも、重要なことがある。禁書目録

の扱いについても考えねばならんしな」

禁書目録……？ それってまさか ツ！

「おい、テメエ！ インデックスに何するつもりだツ！」

気づけば、傍らに上条当麻が立ち上がっていた。やはりこいつとインデックスは知り合いだったのか……。
アウレオルスは興味深そうに目を細めて、

「ほう、既知の仲だったか。もっとも今現在この街に滞在していることを考えれば、自然おかしなことでもない、か。しかしこれは面倒だな。貴様らに噛み付く理由を与えてしまった」

喋りながら、アウレオルスは再び首元に鍼を突き刺す。
ヤバイ……この感じはさっきと一緒だ！ よくわかんねえけど、何かされる！

「『貴様ら、ここで起きたことは』」

姫神が止めに入る。当麻が駆け出す。俺が両手を合わせる。

そして各々が次のアクションに移る前に アウレオルス「イザードは告げた。」

「『全て忘れる』」

そして俺は

第二十八話 吸血殺し（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしております

第二十九話 意外な援軍（前書き）

あんまり激しくありませんでした

第二十九話 意外な援軍

気づけば、知らない建物の中にいた。

「……？ あ、れ。なんだ、ここ？ 俺、なんでこんなところにいるんだ？」

あたりを見渡して、今俺がいるのがどこかのビルの通路だとわかった。窓の外を見れば、夜なので見難いが同じ外装をしたビルが三つならんでいて、それらとこのビルをつなぐ様に空中通路ができている。どうやら、この四棟のビルは一連の施設らしい。

今度は内側に目を向ける。通路というからには、部屋に面しているということになる。確認できるだけで扉の数は四つ。それぞれには、学校がそうであるように、扉の上端からルームプレートが出っ張っていた。

「D-1、D-2、D-3……名前と中の様子を見るに、本当に教室っぽいな。となると、こりゃ塾か？」

ビル四棟使った塾って。気合入ってんなー。
しかし……、

「つかしいなあ、俺こんなとこ来た覚えねえんだけどな。ていうか、そもそもこの数時間の記憶がねえんだけど」

あー、なんかこんな不思議事態になってるのに、あんまり取り乱してねえな、俺。まあこれまでの事件に比べたら、記憶喪失くらいなんてこともない

「わけがねえだろおおおおおおお！？ 何これ？！
めちゃくちゃ怖えよ、オイ！」

自分が何してたかまったく覚えてないって、怖すぎる。一体俺の身に何が起きた？

とりあえず一通り慌ててみて、そろそろ誰か来てこの状況をなんとかしてくんねえかなーなんて思い始めたころ。

俺は、唐突に背後から声をかけられた。

「うん？ 君は確か……桜咲錬夜、だったかな？」

「ッ！？ もしかしてこの職員の方ですか？！ 実は俺なんか記憶喪失に って、あれ？」

今俺……名前呼ばれた？

少し冷静になって、俺に話しかけた人物を観察してみる。

えー、何々？ 身長は……高えな、二メートルぐらいある。着てるのは黒の修道服、両手には指輪をはめてて顔にバーコード、おまけに髪は赤の長髪

「ッ！？ お前……ステイルⅡマグヌス！？」

い、意味がわかんねえ。なんでこんなところでこいつに会うんだ？ まさか、俺が記憶喪失になったのはこいつのせいか？！

「ああ、待て、そう殺気を出すな。こっちは今君に取り合っている暇はないんだ。……しかし、君がいるということは、ここはやはり日本か。まったく、ワケがわからないね。記憶がないばかりか、場所さえ変わってるとは。いや、場所は知らないがこの魔力にょいは知っている気もするが……さて」

「記憶がない……？ お前も？」

「その口ぶりは、君もというわけかい？ ……やれやれ、何だってこんな奴と何かしらの事件に巻き込まれなきゃならないのか」

「んだとお……！」

そりゃこつちの台詞だ！

そう言おうとした瞬間、

突如、窓の外が赤く染まった。

ズガアアアアアアアアアア！

そして訪れる轟音。

慌てて視線を窓に移すと、『紅蓮の光の柱』がここと対角線上にあるビルを貫いていた。

「な、んだよコリヤ！？」

被害はまだ収まらない。渡り廊下のせいで残りの二棟がひきずられるように崩れ落ちていく。不幸中の幸いでここは崩れなかったが、それでも爆風で窓が次々に割れていった。

そんな中、ステイルが驚愕したような声を上げた。

「馬鹿な…… 『グレゴリオの聖歌隊』だと！？ ローマ正教の切り札がなぜこんなところで……」

こいつが何を言ってるのかはわからないが、魔術がらみなのはわ

かる。

一体、ここで何が起こってんだ？

そんな疑問を持ったところで、俺は

* * *

気づけば、知らない建物の中にいた。

「……？ どこだ、ここ？」

「というか、なぜ君と並んでいるかの方が気になるね」

「ん？ うおっ！？ お前は？！」

隣には、見覚えのある男が立っていた。確か、ステイル「マグヌス」だったか。

「つか、なんだこの状況？ 気づいたらわけのわからんビルの中にいるし、隣にはこいつがいるし、ここ数時間の記憶がねえし！」

「……いろいろわかんねえことはあるけど、とりあえずここ出るぞ。話はそれからだ」

「君の提案に乗るのは気に入らないが、まあいいだろう。僕もさっぱりわけのわからない状況だしね」

そんなわけで、二人で出口を目指すこと、数分後

「ステイル！ 鍊夜！」

「あん？」

名前を呼ばれたから振り返ってみたら、そこにはツンツン頭の高校生・上条当麻がそこにいた。しかもなんかやたら焦った顔で。

「なんだい、上条当麻。君までいるのか。今日は厄日か何かかい？」

「おー当麻。久しぶりだな、おい。直接会ったのはセブンスミストの事件以来か？」

「いやー知り合いに会えてよかった。ステイルと二人つきりよりよっぽどいいぜ。」

「そんなことよりお前ら……今までどこのビルにいた？」

「あ？ えーっと……途中の案内板にや、確か北棟って書いてたな」

ちらつとしか見てないが、多分あつてると思う。

「そっか……っ」

あからさまにほつとする当麻。なんだ、こいつ？

当麻はそんな俺の疑問も知らずステイルの方を向き、

「そっだ、ステイル。お前今、状況がよくわかってないだろ？」

「ん？ まあ、ね。僕はこんなところに来た覚えはまったくないんだけどね、いつのまに来たのやら」

「ならその疑問をサクリ解消させるおまじないを教えてやる」

「……東洋の呪いの専門は神裂だと思っけどね」

誰だよ、神裂って。

「いいから聞け。話は簡単、目をつむって下を出せ。ベーって」

「？」

当麻の指示に不審そうな顔をしつつ、ステイルは目をつむって舌を出す。

？ 何をさせたいんだこいつは？

「あ、錬夜は少し待ってるよ。こいつの後にお前もやってやるから」

????

本格的に意味がわからん。

と、当麻はなぜか拳を握り、

「祝 よくも人様を囷に使って逃げ延びやがったな記念ッ！」

「……は？」

ドゴッ！

ステイルが眉を潜めた瞬間、当麻がアップercutをステイルにお見舞いした。

……え？

「それじゃあ、頭を軽く出して」

「か、かかってこいやあああああああああ！」

「はあ！？」

結局。

俺の勘違いはステイルが回復するまで続いた。

* * *

「あーまだ痛え……おいコラ当麻！ てめえ、ステイルみたいにはしねえつつつたじゃねえかよ！」

「やかましい！ お前が変な誤解したせいで余計に時間くつちまっ
たじゃねーか！」

現在、俺、当麻、ステイルの三名は校長室目指して爆走している。

俺たちは、全部『思い出した』。

姫神やアウレオルス、この三沢塾での戦いのことも全て。

どうやら、あの時アウレオルスに言われた「全て忘れる」って言

葉だけで、本当に全部忘れてたらしい。反則だろ、それ。

だけど今、当麻の幻想殺し^{イマジネーションキラー}によって記憶は戻っていた。当麻がキ
レだしたわけじゃなかったんだな。

ま、それはそれとしてよくない情報がもう一つ。

「アウレオルスがローマ正教の『^{グレゴリオ・クアイア}真・聖歌隊』を弾いた……そんな
馬鹿な」

「いやホントだって。ビデオの巻き戻しみてーに壊れたビルが直ったんだよ」

どうも覚えてねえんだが、三沢塾は俺たちがいた北棟は除く一度ぶつ潰れたらしい。それも、アウレオルスを開始しに来たローマ正教の刺客によって。

しかし確かにビルが破壊された直後、当麻がいうにはビデオを巻き戻したように元通りになってしまったらしい。ついでにその時、俺とステイルの記憶も消えたり、生徒たちも元に戻っていたそうだし。もしかして、アウレオルス「ダミー」が「誰も殺していない」ってのはこのことだったのか？自分が自在に生き返らせられるから殺してねえ、と？

にしても……. たく、これじゃあ本当に意のままみたいじゃないか。

でも、ステイルの言い分じゃいくら魔術でもそんなのはあり得ないって話なんだけどな。

おっと。もう一つ疑問点があった。

「そついや、当麻。あいつ、禁書目録がどこのこつって言ったよな？」

「何？ それは本当かい？」

「野郎が言ってただけだけどな。そもそも、なんでこの事件にインデックスが絡んでくるのかもわかんねーし」

「……なるほど、そついうことか。禁書目録インデックスが目的とは……. やつてくれる」

「ッ!? それどういう意味だよ、ステイル!」

当麻の問い詰めにステイルは前を向いたまま、

「インデックスが一年おきに記憶を消さなきゃならないのは君も知っているだろう。一年おきに記憶を消すというのは、一年おきに彼女の隣にいる人間が変わるということだ。今年は君、二年前は僕、そして三年前はアウレオルスだった」

「ッ!?」

へえ。こいつら、そういう繋がりだったのか。いや、詳しい内情はよくわからないが。

「ここまで言えば、君にはもうわかるだろう。僕らのようにパートナーになった人間はインデックスを救おうとした。だが結果失敗し、誰もが挫折していった。ただアウレオルスはどうか、諦めきれなかったってだけの話だよ。その末路がこれだっていうんだから、あいつの執着も凄まじいね」

「……………」

「……………ただまあ、どのみち全ては無駄な努力だ。あいつに『インデックスは絶対に救えない』」

「何だって?」

「とぼけるなよ、上条当麻。彼女は、『君がその右手で救ったんだろ?』。だったら、一度救われた彼女を二度も救える道理はない」

当麻はステイルの言葉に神妙そうな顔を作る。

しかし……蚊帳の外なんだが、俺。

若干空気になりつつあることに焦りを感じ始めたころ、前方に『校長室』のルームプレートが見えてきた。扉が開いてるのは、「いらっしやい」って意味か？

「おい、着いたぞ。あいつの事情はともかく、今は勝つのが先だ」

その言葉を合図に。

俺たちは揃って戦場に踏み入った。

* * *

校長室の中では、三人の人間が存在していた。

一人は、驚いたようにこちらを見つめる姫神秋沙。

一人は、机の上に横たわり目をつむったインデックス。

そしてもう一人は 窓際に立つアウレオルス＝イザード。

「来たか」

アウレオルスは一言だけ呟き、窓の外に向けていた体を俺たちに向けなおす。

対峙するのは、これで三度目か……。それぞれ決着^{ケリ}をつけてえな。

「ふむ。貴様の目を見るに、私の目的には気づいているようだが、ならばなぜ邪魔をする？ 貴様がルーンを刻むのは、私と同じ理由だろっ」

「生憎と君の方法では彼女が救えないことはわかっているからね。そんな奴に彼女は渡せないな」

「馬鹿な。私が見つけた方法は完璧だ」

「へえ。なら、言ってみなよ、その方法とやらをさ」

「……禁書目録が一年ごとに記憶を消去しなければならないのは、彼女の膨大な知識量に脳が耐え切れなくなるからだ。だが、永遠に生きる吸血鬼として蓄える情報量は膨大。にもかかわらず、彼らの脳はそれに耐えている。これは、彼らがそれらの情報を留めておく『術』を知っているからだ」

「……それで？」

「ならば、禁書目録にもその方法を当てはめればいい。仮に人の身では為しえなくとも、人の身から外してしまえばいい。これならば、禁書目録は救われる」

「チツ。そこまで堕ちていたのか、お前は。そんな方法にすぎるとはね……、もういい。そろそろ現実を見て目を覚ましなよ」

ステイルは忌々しそうに舌打ちして、当麻を促す。

……てか、俺また空気。

「そら、言ってみなよ今代のパートナー。奴の致命的な欠陥を」

「……何？」

アウレオルスが当麻を見ると同時、視線を向けられた本人は、

「はははは！ 簡単には殺さん！ 禁書目録に手をかける気はないが、貴様らに晴らさなければ、自我すら保てん！」

げえ！？ 本当にやつあたりじゃねえかよ！

このままじゃ、マジで殺される。何か手は

「待って」

そう言っつて、俺たちを庇うように立つのは、姫神だった。こいつ、また俺たちを守るうと……！

だけど、今はあの時とは違う。インデックスが救えなくなった以上、これ以上『手段』である姫神に興味はないはずだ。だったら、あいつが手加減する理由がねえ！

そこまで考えた瞬間。

俺は、見た。

アウレオルスが自分の首元に鍼はりを刺すのを。

俺は、聞いた。

アウレオルスが決定的な『命令』を下すのを。

「邪魔だ、女 『死ね』」

「待」

制止は既に遅すぎた。

姫神は、ゆっくりと後ろへと倒れていく。まるで、突然その場で

『死んでしまったかのように』。
……いや、違う。本当に死んだんだ。アウレオルスが、そう命じ
たから。

死んだ？

本当に？

誰が殺した？

決まってる。

あいつだ。

アウレオルス「イザードだ……ッ！」

「あ、の、野郎　！」

地面に拳をつき立て、強引に立ち上がろうとする。だけど、体は
言うことを聞かずに、ただただ姫神が倒れていくのを見ているしか
できない。

それでも、俺はさらに力を込めて

『ズ……』

不意に。

体を押さえつけている重みが消えたような気がして……刹那、当
麻が自分の拘束を右手で打ち消し、

「　っけんじゃねえぞ、テメエ！」

一気に姫神の元まで駆け寄り、彼女を抱きとめた。

パキーン！

同時、何か割れるような音がして、アウレオルスがうろたえ始めた。

「な……我が金色の練成を、右手で打ち消しただと？ ありえん、確かに姫神秋沙の死は確定した。その右手、聖域の秘術でも内包するか！」

「……………」

当麻は何も言わないが、なんとなく何が起こったかは理解できた。今、拘束を砕いたこともそうだが、あいつは『すべて忘れる』という命令も打ち消していた。だから今度は、姫神に対する『死ね』という命令を打ち消したんだろう。

当麻は姫神を抱えたまま、アウレオルスを睨みつける。

「いいぜ、アウレオルス＝イザード。テメエが何でも自分の思い通りにできるってんなら」

それは、俺が初めてみる上条当麻の姿だ。だけど、俺は何の違和感も無くそれを受け入れていた。

これが上条^{ヒューゴ}当麻なのだと……一瞬で理解した。

「まずは、そのふざけた幻想をぶち殺す……ッ！」

* * *

超能力者と錬金術師が互いに潰し合う　　よりも早く。

ズバァンツ！

突如、室内に何か切り裂かれたような音が響いた。

俺は、なんとか顔だけを動かしてそちらを見る。すると、いつのまにやら閉まっていた校長室の扉が、真つ二つになって吹き飛んでいた。

そして、姿を現したのは

「　　ねえ。アンタが、アウレオルスIIイザード？」

身長は、170前後。腰まで伸びた黒髪は一房に括られていて、一見優男のようにも見える。

そいつは刀を肩にかつぎ、悠然と室内に侵入してきた。俺は……こいつを知っている。こいつは……、

「……懽然。人に名を尋ねる時は、まず自分から名乗れ」

「案外マナーに厳しいんだね。僕は　　御厨空音」

そう。

セブンスミストの事件で、当麻と同じく俺が出会った高校生。御厨空音だった。

って、なんでこいつがここに？！

「で、名乗ったんだからあんたも答えてくれる？」

「いかにも、私がアウレオルスだが。……何用だ、少年？」

「ん？ まあ、ちょっとね。……ところでさあ、アウレオルス。あ
んた」

空音は肩に担いだ刀を下ろし、そのまま切っ先をアウレオルスに
突きつけ、

「僕の友達に、なんかした？」

薄く笑ってそう言った。

な、なんだこいつ。いきなり出てきてキメやがった。

と、空音は俺に視線を向け、

「……………なんで、錬夜がいるの？」

「……………いろいろあつたんだよ」

空音は俺の言葉に軽く苦笑して、今度は当麻に向き直る。

「やあ、当麻。久しぶり」

「え……………あ？」

あまりにも突然すぎた登場のためか、当麻は上手く答えられない
でいる。

それに空音が少し悲しそうな顔になって、

「ステイルも久しぶり。随分愉快的な状況になってるじゃないか？」

「……御厨空音。君、七月二十七日のこと、根に持ってるだろ。僕と神裂が君と上条当麻をボコボコにしたこと、怒ってるのかい？」

ああ？ こいつ、俺の友達にそんなことしやがったのか？ よし。今度、神裂とかいっつと一緒に行こう。

「えっと、お前……じゃねえ、そ、空音はなんでここにいるんだよ？」

「ん〜、ま、いろいろあってね。簡単に言えば、援軍到着みたいな感じかな？」

「……援軍ってお前。分かってんのか？ こいつは こいつは……化け物みたいに強いんだぞ」

「……………」

そうだ。確かに、援軍はありがたい。だけど、相手は言葉一つで現実を思い通りに変える魔術師だ。空音がどれだけの力を持っているのかは知らねえけど、勝算があんのか？

だけど、そんな心配をよそに、自信に満ちた表情で

「それはなんとなくわかってるよ。だけどさ 僕だって強くなっただんだ」

「空音……………」

「ここは僕に任せてよ、当麻。あの時君を救えなかったかわりに今回は守ってみせるぞ」

御厨空音はそう言った。

第二十九話 意外な援軍（後書き）

次回で、吸血殺し編は終了予定です。ただし、先に断っておきますが、次回はかなり微妙な感じになると思います

ご意見・ご感想、お待ちしております

第三十話 お前はお前の（前書き）

完成しました、第三十話！そしてこれが吸血殺し編最終話になっております。軽く一万文字超えてるんだから途中で切れよ、と思われそうですが、いい切りどころがなかったんです（汗）。それに以前十話きざみで番外を入れると言ったのですが、クライマックスの間に挟むのはどうかと思ひまして

そんなこんなでお送りします、第三十話「お前はお前の」、楽しんでいただけると幸いです

第三十話 お前はお前の

「言つとくけど、当麻。絶対手、出さないでね」

「は！？ なんでだよ！？」

「なんでも、だよ。君に任せたら、また大怪我しちやいそうじゃないか。それに 僕だってそろそろ勝ちたいんだよ」

いきなり校長室せんじょうに乗り込んできた空音は、そんな余裕ともとれる言葉を放ち、悠然と立っていた。
が

「歓談中失礼だが、私がそれを見守る義理もなし。 『倒れ伏せ、侵入者』」

ダァン！

突如アウレオールの命令が飛び、空音が急激に床に押さえつけられた。

「「空音ッ！」「」

「黙って見てろ、上条当麻！」

当麻と二人空音の名を呼び、当麻が駆け寄るも空音はその行動を制止した。

あの馬鹿、何考えてやがる……！！

助けを拒否する空音の行動に驚いていると、空音は持っていた刀の切っ先を天井に向けた。

そして、何かを呟いたように見えた瞬間

あっさりと立ち上がった。

「な……ッ!？」

な、なんであいつ立てるんだ?! 当麻みてえにイマジンプレイカー幻想殺しなんてもんを持つてるわけじゃねえだろ!?

「あれは……」

隣でステイルが呟く。なんだ、こいつ心当たりでもあんのか?

「お前、あいつが何したのかわかったんか?」

「……いや。わかるのは、彼の刀になにかしらの魔術がかかっているということだけだ。さすがに見ただけでどんな魔術かはわからないし、そもそもそれが原因かもわからないしね」

「……………」

てことは……残るは、空音の超能力ちからつて線か。
俺がそのことについて考えをめぐらせていると、

バチィッ!

突如、何も無い空間から青白い稲妻が走り、空音を襲う。アウレオールの野郎、何でもありじゃねえか!

が、心配は杞憂だったようで、空音は慌てずに刀を稲妻に向かつて走らせる。そしてその軌道をなぞる形で稲妻は『ぶった切れた』。

「す、スゲエ……」

なんだよあの強さ？ 俺たちが手も足も出なかったアウレオルスと互角に戦ってやがる……。

と、アウレオルスはなにやら思案顔になり、

「……ふむ。その日本刀ジャパニースWORDなにやら魔術の匂いがあるな。どこの魔術師……いや魔具師がこさえたのかは知らんが、それが原因か。如何なる仕組みで我が秘儀を破っているのかは判然としないが、それならそれでやりようはある」

あいつの言葉、ステイルのと一緒にだ。ただ違うのは、アウレオルスは空音の力をあの刀のおかげだと確信している点か。

「へえ？ よかったら、そいつを教えてくれるかな？」

空音は余裕を崩さない。それはアウレオルスの見解が外れているからか、それともよっぽど自分に自信があるのか。

しかし、それも次の台詞で驚愕に変わった。

「簡単だ、少年。貴様は今、稲妻を『斬った』。それはつまり、反応できていたということになる。ならば、『反応できない攻撃ならば』貴様に通るということだ」

「ッ！」

「銃をこの手に。弾丸は魔弾。数は一つで十二分」

瞬間、アウレオルスの右手には一丁の銃が手に握られていた。
マズイ!? あんなもん撃たれたら、死ぬぞあいつ!

「う……ご、け……!」

腕に力を込めるも、体はまったく起き上がってくれない。
クソツ! ふざけんよ! 友達が危ねえってのに、ぶっ倒れて
る場合じゃねえだろうが!

だけど、アウレオルスの命令があるかぎり、俺はずっとこのまま
だ。当麻が空音に避けると叫ぶが、そんなことは関係なしにアウレ
オルスは言った。

「『人間の動体視力を超える速度にて、射出を開始せよ』」

ドオンツ!

轟音が室内を満たす。アウレオルスの銃が射出した弾は、俺の目
に留まることはない。瞬きよりも短い時間で空音に飛来し

直後、ギインという甲高い音と共に弾かれた。

「マジかよ……!」

思わず呆れ半分、感心半分といった咳きが漏れる。どうやったの
かは知らねえが、どうやら空音は今の一撃を防いだらしい。

だがそれに対する驚きは、俺よりもかわされた張本人の方が大き
かったようで、

「き、貴様! 何故かわせる?! 今のは人の眼に留まるような速

度ではなかったはずだ！」

「別にかわしちやいなさ。ただ僕は、『見てた』んだよ。アンタが構えた銃口の向きと引き金を引く瞬間を。だったら後は、その射線上に刀を置いてやればいい」

「馬鹿な……。唾然、それは言うほど簡単なことではないはずだ。あの一瞬で射線を判断することなど不可能だし、そもそもやすやすと弾けるほどの威力ではなかったはず……」

「ごちゃごちゃとうるさいな。一つ確認するけどさ、アンタ僕のことをただの一般人でカウントしてない？ 悪いけど、今の僕はちょっと強いんだよね」

「く……ッ！」

強い。確かに強い。

だけど……なんであそこまで頑なに一人で戦おうとする？

それがわからなくて、同時に『あの時の事』を思い出して、だんだんとイライラとしてくる。もしも……もしもこれがあいつの単なるわがままだとしたら、俺はそれが許せない。

だから俺はその気持ち时空を空音にぶつけようとして それよりも早くアウレオルスが動いた。

「ならば、こうだ！ 『先の手順を量産せよ、一〇の暗器銃にて連続射出の用意』！」

「え？」

間の抜けた空音の声と同時に、アウレオルスが両手に計十丁の銃を

構えていた。

いくらなんでも、さすがにあれがかわせるはずが無い。だというのに、空音はこの期に及んで誰にも助けを求めなかった。

一瞬で頭が沸騰する。

いい加減にしるよ、あの馬鹿野郎！

「準備は万端。『一〇の暗器銃』」

パンツ

気づいた時には両手を合わせていた。そして、アウレオルスが次の言葉を紡ぐ前に、地面に両手を押し付ける。その刹那、アウレオルスが告げた。

「『同時射出を開始せよ』！」

一拍の間さえ無かった。

命令が言い終わるタイミングと完全に一致した速度で十の魔弾が空音を射抜こうとする。

それらは一瞬という表現さえ及ばない速度で空を裂き

ドガガガガガガガガ ツ！

直後、『俺が空音の前に造った壁に全弾命中した』。

ガラガラと崩れ落ちるそれを見つめながら、俺は安堵して顔を下げた。なんとか間に合ったか……。

だけどその行為に返ってきたのは、礼じゃなかった。

「鍊夜！ これ、君の仕業だろう？！ 僕は手を出さなって言った
だろ！」

目を鋭くさせ、空音は俺に怒鳴る。まるで、神聖な勝負を邪魔されたとしても言いたげな調子で。

……………完つ全にプツンきた。

俺は自分かなり怒った表情をしていると自覚しながら顔を上げ、

「それがどうした！俺は言われてねえし、例え言われたとしても、そんなこと聞く気はねえぞ！」

「な……………」

「そもそも何が手を出すな、だ！俺たちはここに姫神を助けに来たんだ！お前の『わがまま』につきあう気はねえんだよ！」

そつだ。こいつはそこを履き違えてる。

これは何も、空音とアウレオールの決闘じゃない。俺たちの目的は、あくまで姫神秋沙の奪還だ。それに加え、今はインデックスも対象に入ってる。俺たちはあの二人をさつさとこんな所から連れ出さなきゃならない。

それに……………」

「俺たちは友達だろうが！お前がなんでここに来たのかは知らねえよ。けどな、友達なら、仲間なら、一緒に戦いてえじゃねえか！お前さつき、当麻を守るって言ったよな？別にそれならそれでもいいさ。けどなあ、お前一人が戦って、お前一人が傷ついて、それで誰が喜ぶってんだよ?!」

誰も喜ぶはずがない。友達が傷つくのが嫌だからって自分一人が何もかも背負ってちゃ、結果的にみんなを悲しませることになる。

…………俺が言えた義理じゃないのはわかってる。アウレオルス「ダ

ミーと鬨りあった時、初め一人で突っ込んだように、俺だって結局は空音と変わらない。

だけど、反面わかっている。一人でできることはそう多くないし、仲間を頼ることがどれだけ大切なのかってことも。

だからこそ俺は空音に言う。矛盾は自分の中に抱えたままで、
ややあつて、空音は苦笑して、

「ごめん、鍊夜。僕が間違ってた。それから、助けてくれてありがとう」

う……。

「……な、なんか素直に礼言われると照れるな」

微妙に頬が熱くなってくる。うう、今思えば俺、結構恥ずかしい事言ってたんじゃないのか？

俺のその態度がおかしかったのか、空音は「ははっ」と軽く笑った。

それが油断だった。

「『圧死』」

アウレオールの命令（こぼ）を耳が捉え、俺は背中を駆け抜けた悪寒に従い、視線を上空にやった。

そこには、何か　タイヤが四つ見えたから自動車だろうか
が浮いていた。

しかしそれはすぐに落下を始める。実際ははるかに早いんだろうが、俺にはそれがスローモーションで見えて、あることを予感させ

た。

俺はこれに潰されて死ぬ。

……ああ、クソ。やっぱり死亡フラグ立ってたんじゃねえか、涙子の馬鹿野郎。

瞬間、何かのトリガーが引かれたように、一気に今までの記憶があふれ出てくる。どういうわけか、この世界の記憶のほぐが多い。まあ、一生で一番濃い時間だったからなあ……。

「……かこれ、走馬灯ってやつじゃねえのか？ やべえな、どうやら本当に死ぬらしい。」

そうとわかったらいろんな奴に謝りたくなってきた。勝手に死ぬことになって悪い、みんな。涙子になって、『無事に帰る』って約束までしたんだけど……。当麻たちも悪い。後、任せた。

「……………」

未練はある。後悔も、また。一つだけ死への抵抗を抑える要因もあるけど……。まあ、いいかこれは。

死ぬ間際とはいえ、そろそろ時間切れだ。もうすぐそこまで死は近づいてる。

……っだよ、畜生。転生つつつても、結局一ヶ月しか生きられなかつたじゃねえか、バカ神。

そんな文句を頭の中で呟いて

俺の命の灯は、再び消えた。

* * *

「　　ったく……あつさりと死にやがって、この間抜け。しかも文句つきときたもんだ」

なんだ……誰の声だ……？

「あん？　お前、俺の声をもう忘れちゃったのか？　この鳥頭め」

おかしい。とんでもなく頭の悪そうな声がする。

俺は……俺は、どうかしちまったのか……？

「っておい！　シリアス気取りながら人のこと……いや人じゃねえけど、けなしてんじゃねえよ。つーかお前、二度も死んだくせに割りと余裕だな」

……二度も死んだ？　ああ、そうか、俺アウレオールの攻撃で……。

「そうだ。お前は無様にも、また死にやがって。こんなにやすやすと死ぬ主人公なんて……いやまてよ、確かシャーオンキングでは結構死んでたような気も……」

待てこら、そんな話を一人で広げてんじゃねえよ。てか、お前誰だよ？

「……本当にわかんねえのか？　チツ、まあ姿が見えねえんなら、わからなくてもしかたねえか」

いや、そっぴや聞き覚えがあるような気がするぞ。えーっと……
田中君？

そんなツッコミを最後に、俺の意識は浮上していった。

* * *

S I D E ????

「……の野郎、最後まで俺をコケにしゃがって。しかも、死ぬのが早すぎるぞ、馬鹿。まだまだ先は長いってのに、こんなところで死にやがって。お前のためにも……『俺のためにも』、お前にはもっと強くなってもらわねえと、な」

* * *

S I D E 鍊夜

次に気がついたとき、俺はアウレオールの背後に突っ立っていた。隣にはなぜかステイルもいる。

アウレオールの向こう側には、空音の姿が見える。腹から多量に出血していて、重傷だということが窺えた。

まあ、いまいち状況がよくわかんねえけど……どうやら、生き返ったってことでもいいのか？

「 ったく。ひでえ目にあつたじゃねえか」

「ふん。僕としてはそのままくたばってても良かったんだけどね」

隣から、ステイルの憎まれ口が飛んでくる。
俺たちの言葉にアウレオルスは慌てて振り返ってきた。

「ほら、当麻も。そんな重いものいつまでも背負ってないで、さっさと立ち上がってよ」

「ッ!？」

それもつかの間、空音に反応して再度振り返る。つられて俺が目をやると、そこには上条当麻が立っていた。

アウレオルスはその光景を見て、激しくうろたえながらも、命令を下す。

「だ、『断頭の刃を無数に配置、速やかにその体を切断せよ』!」
空音の頭上に巨大なギロチンが現れる。俺がそれを止めようと両手を合わせると、ステイルがそれを制した。
その行動の意味はすぐにわかった。

「邪魔だね」

ズバツ

一声と共に、あっさりとギロチンは刀で真つ二つに斬られた。

「ひ、い……!」

アウレオルスはしりもちをつく。拍子にズボンのポケットから多数の鍼が零れ落ちる。慌ててそれを拾い集めようとしたところで、

空音が投擲した刀がそれを弾き散らした。

よ、容赦ねえな……。

「もう止まれよ、アウレオルス＝イザード。アンタの負けだ」

「ひあ、ああ……ッ！」

後退するアウレオルス、追いつがる空音。いつのまにか立場は逆転していた。

「一つだけ教えてあげるよ。僕の刀は別に、魔術だけを斬るわけじゃない。その気になれば人間だって真つ二つにできる」

「く、来るな」

「って言っても、口だけじゃ伝わらないかな？ だったら」

「来るなああああああああああああああああああ！」

空音は先ほど投擲した刀を拾い上げ、スツと頭上に持っていき

「アンタの体でわからせてやるよ」

あっさりと振り下ろした。
ただし。

ゴスツ！

『峰打ち』で。

「あ、が……」

ドサツ、とその場に倒れるアウレオルス。空音はそれを確認してから、

「……悪いんだけどさ、部屋の外に鞆が転がってるから、誰か回収してて。ああ、あと」

言ってる間にふらふらし始め、

「救急車呼んでください」

ボタンと、いきなりその場にぶっ倒れた。

「空音?! おい、空音!」

当麻が叫びながら駆け寄る。俺も心配だが……とりあえずあいつに任せよう。

俺ははずると腰を落とし、

「っだあ……。めっちゃくちゃ疲れた……」

「やれやれ。呆れるね、君は。一度殺されておいて、感想がそれかい?」

「俺もそう思うけどな、なんかすんげー疲れる夢を見てた気がするんだよ」

「夢? ……ふむ、これは興味深いね。もしかしたらそれは、死後の世界ってやつかもしれないよ?」

馬鹿にするように薄く笑って、ステイルはそう言った。
「夢、ねえ……。」

『愛と正義のスーパー戦士・桜咲錬夜、復活!』

「(ゾクッ)！?!?!?!」

「……君、どうしたんだい？　すごく不可思議な表情してるけど」

「……なんでもねえ」

なんだったんだ、今は……。

* * *

「錬夜。俺とインデックスはこれから空音について、病院行くけどお前はどうする?」

今俺たちは、三沢塾のエントランス前にいる。空音を救急車に運ぶためだ。

電話して呼んだ救急車に空音が収容されると、当麻がそんなことを訊いてきた。どうやらこいつらも救急車に同乗するらしい。

俺は……どうすっかな?

「……いや、俺はいいや。あんまり乗ってもしかたねえだろ。それに……まだやることがあるしな」

「そっか……。わかった。じゃあ、またな！」

「おう。じゃあな」

さて……と。

俺は再び三沢塾の中に入る。俺は聞く機会がなかったんだが、ここにはアウレオルス謹製の結界が張ってあって、それが健在なため塾内部の人間は誰も俺を気に止めない。

そして、エントランス奥……数脚設置されたソファの一つに、三人の人間が集まっていた。

その内の一人が俺に声をかける。

「おや……戻ってきたのかい。御厨空音はどうした？」

「当麻と病院に行ったよ。ついでにテメエの大好きなインデックスもな」

「なっ、ばっ、何の話だ！」

「救急車待ってる間に、当麻に聞いたんだよ。なんかスタイルをいじるネタねえか、って。そしたら、『スタイルはインデックスが好きらしい』という情報を手に入れた」

「……………あのクソ野郎……………！」

結構本気で殺意を漲らせるスタイルに呆れつつ、俺は残りの二人の内の一人を睨みつける。

「……………よお、アウレオルス。さっきはよくも俺を殺してくれたじゃねえか」

「……殺したければ好きにしろ。黄金練成は未だ健在だが、もう貴様らをどうこうする気も起きん。私はもう生きる目的も気力も失った。加えて、素人に敗北までした。もはや、これ以上現世に留まる意味はない」

初めて会ったときの姿が嘘のように、アウレオルスは憔悴しきった様子でソファに座っている。

俺はそこから目を逸らし、未だに呪いの言葉を呟くステイルに質問する。

「こいつ、これからどうなるんだ？」

「そもそも僕はあの子をあいつの元に置き続けるのは反対なんだい。つあいつがあの子に襲い掛かるかと思うと今すぐ殺したく　なん　だって？」

「だからよ、こいつはこれからどうなるんだって訊いてんだよ」

「……ま、どんな道を通っても死かそれ以上の末路が待つだろうね。そいつはローマ正教を裏切り、さらには学園都市まで敵に回した。僕たち以前に三沢塾（三）に挑んで返り討ちにあつた十字教の諸勢力から見れば、賞金首ものだろうね。なにより、僕達にも討伐の命令（ネセサリウス）が出ている」

「……………」

「それだけじゃない。そいつが完成させた黄金練成の秘密を欲しが
る連中も出てくる。仮にも錬金術の到達点だ。いくらでもそんな輩
はいるだろうね。　はつきり言えば、世界を敵に回したのとなん

ら変わらないよ」

「……そっか」

ステイルが言う理屈はわかる。魔術の世界だろうと、科学の世界だろうと、罪を犯した以上は罰を受けなきゃならない。そんなことはわかってる。

でも

「ステイル……お前に頼みがある」

「？ なんだい、藪から棒に」

「こいつを、殺されないようにしてくれ」

「……」

ステイルは一瞬呆けたような顔をして、何かを言おうとしたけど、その前にアウレオルスが反応した。

「何だそれは！」

「ああ？ なんか、文句あんのかよ？」

「ふざけるな……ふざけるなよ、少年！ 憤然、これほどの屈辱はない！ 殺すのではなく生かすだと！？ 私に情けをかける気か？」

「！」

……。

「……ふー。お前、ちょっと歯あ食いしばれ」

「な」

ゴッ！

鈍い音が響いて、アウレオルスが吹き飛ぶ。

今のはもちろん、俺が殴った音だ。

三人の内最後の一人　姫神が駆け寄ろうとするのを、俺は手で制す。

それから、よろよろとアウレオルスが立ち上がるのを待って、

「……ホントは一発で済ます気は無かったんだけどな。戦い終わってもまだうだうだやるうとは思わねえよ。それよりテメエ」

そこで俺はアウレオルスの胸元を掴む。大分身長差があるが、そんなの知ったことかよ。

「『殺せ』だあ！？　ふざけてんのはどっちだよ、テメエ！　テメエが殺した人間がいんのに、そんな台詞吐くんじゃねえよ！　俺に怒れるぐらいの元気があんなら、しっかり生きやがれ！」

「ッ！？」

「生きる目的を失った？　当麻がすっかりと果たしてんじゃねえか！　自分の手で救えなかったからって、ひがんでんじゃねえ！　生きる気力を失った？　ざけんじゃねえ！　根性で生きてみやがれ！」

「な……」

「テメエが死のうとしてる理由が、インデックスが振り返ってくれないからだってんなら、大間違いだ！ あいつが、たった一度忘れたくらいでもう二度と親しくしてくれない人間か、お前ならよく知ってんじゃねえのか?!」

俺だつて、あいつとはそんなに親しいわけじゃない。だけど、あいつを守るうとする奴らを見れば、そんなはずがねえってわかる。アウレオルスは俯き、何かを考えているようだった。そこにどんな葛藤があつたのかは俺にはわからなかったが、やがてポツリと、

「……………私は。もう一度やり直せるのか？」

「それを決めるのは俺じゃねえ。お前自身でしか決められねえよ」

「……………そうか」

言っただけ、アウレオルスは黙り込む。
つと。

「で、どうなんだスタイル？ できるのか？」

「……………まあ、できなくはないだろうね。僕の魔術で顔を焼けば、人はわからなくなる。さらにこいつ自身が身を隠し出張らなければ、誰もアウレオルスを追えない」

「そうか。じゃあ、よろしく頼む」

「当たり前のように言ってくれるね。君は僕に命令違反をしろと言っているんだよ？ 僕にそこまでする義理があるとでも？」

「この事件に協力したことじゃ、義理にはならねえか？」

「……チツ。わかったよ。君の要求を呑もう」

忌々しそうにしながらも、ステイルは俺の頼みを受け入れた。もしかしたらこいつ、本当はいい奴なのかもな。

今朝はあんだけムカついてたのに……この戦いを通して、俺はこいつに対する評価が変わったらしいな。自分で自分に呆れるぜ、畜生。

ステイルは俺と姫神に、手で行けと示しながら、

「ここから先はもう君達にできることはない。もう帰ることを勧めるよ」

「おう。そんじゃあ、後は任せた」

俺は姫神を伴い、外へ出ようとする。が、それに姫神は「少し待って」と言っ、アウレオルスに向かい、

「あなたがたとえ私を利用するつもりだったとしても。私を救ってくれらという言葉は。私にとっては嬉しかった。だから。そこだけはあるがとう」

「……まったく。どいつもこいつも自分を殺した相手に、なぜそんなことを言えるのか。姫神、貴様が私に感謝する謂れはないぞ」

「うん。ただありがとう」

「……………ふん」

チャラッ

アウレオルスがポケットから何かを取り出す。こりゃ、十字架の
ネックレスか？

「……………。これは？」

「約束の『歩く教会』だ。衣服タイプでは常に身にまとう必要があるからな。必要最低限の機能を抽出しているが、吸血殺しディーブブラッドを抑えるのに支障は無い」

「どうして……………」

「言っただろう。黄金練成は健在だと。吸血鬼を生み出すのとはわけが違う、既に存在を知るものの劣化品を作ることなど造作もない」

姫神は数秒それを眺め、ゆっくりと首にかけた。巫女服の上で十字架がちらりと揺れる。

それから姫神は、

「やっぱり。もう一度ありがとう」

「……………」

無言のアウレオルスに一度頭を下げて、姫神は一足先に三沢塾を出た。

俺もそれに続こうとしたところで

ヒュン

パシッ

アウレオルスが投げってきた何かを咄嗟に掴んだ。
それは紅い色をした宝石がくつついた、ブレスレットだった。よく見れば、宝石の中には何かの紋様が見える。

「? 何だこれ?」

「『アスキカタスキ』を内部に組み込んだアミュレット護符だ」

「???? アス……?」

わけがわからん。

すると、ステイルが解説してくれた。

「つたく、これだから科学の人間は。アミュレットというのは、お守りって意味だよ。アスキカタスキは、『アスキカタスキ』ハイクスIIテトラクスIIダムナメネウスIIアイシオン』を略したもので、女神ディアナの帯に刻まれていたといわれる魔よけだ。しかし、さすがは骨董屋キュリオティラー。ずいぶんと高ランクの霊装を持つてるじゃないか。……でもいいのかい? そんなにあっさりと与えてしまつて」

「構わん。これでも安いくらいだ……(礼としてはな)」

最後がよく聞き取れなかったけど……まあ、いいや。くれるつてんならもらつとしよう。

あ、でも、

「俺、魔術師じゃねえけど、これ使えんのか?」

「問題ない。あの魔剣の少年と同じだ。魔力で発動する代物ではない」

「そっか」

うん、そういうことならやっぱもらってごう。

俺は受け取ったアミュレットをポケットに入れながら、三沢塾を後にした。

* * *

エントランス前では、律儀に姫神が待っていた。

俺は姫神に駆け寄りつつ、

「何だ。もう全部終わったんだから、帰っててもよかったんだぜ？」

「うん。だけど。お礼がまだだったから」

礼、ねえ……。

「つつてもなあ、俺は俺のやりたいようにやっただけだし、ピンとこねえな。　　っと、そうだ。俺、お前に訊きたいことがあったんだ」

「訊きたいこと？」

少し強引な話題転換だったが、姫神は乗ってくれた。礼なんてガラじゃないんだ、雑談の方が気が楽でいいしな。

立ち話もなんなんで、ここから近いところにあるくじら公園

俺と姫神が初めて会った場所だ　　に場所を移した。あの時こいつ

がここを指定したのは、三沢塾から近かったからなのか。

俺たちはあの日別れ際にそうしたように、二人でベンチに座る。当時と違うのは、夜だから電灯に照らされてるって点か。

頃合を見計らい、俺は切り出す。

「お前さ、『赤い糸メール』のこと覚えてるか？」

「うん。だけど。それがどうしたの？」

「どうしたっつーか……気になってたんだ。姫神って、ああいう出会い系みたいなのに興味なさそう……って言うか、あんまりそういうのしなさそうって感じだからさ。なんか理由でもあんのかなって」

「なるほど。そういうこと」

姫神は何かを思い出すように一度目をつぶり、

「私が『赤い糸メール』の話聞いたのは。少し前に。言祝初音という友達から聞いたのが最初」

「言祝さんから!？」

「? 初音を知ってるの？」

「あ、ああ……」

まさか、こんな場面であの人の名前を聞くとは思わなかった。じゃあ、あの日俺が精神的に大分疲れたのは、言祝さんが発端だったのか……。しかし、どこで知り合ったんだか？

姫神が続ける。

「それで。その当時は全然やってみようとかいう気持ちはなかったのだけれど。君と会ったあの日。アウレオルスから一日だけ自由をもらって。登録してみる気になった」

「あん？　じゃあ、お前もあの日に登録してたのか？」

「うん」

「へえ……ん？　なんで一日だけもらった自由を、それに使ったんだ？」

俺が尋ねると、姫神はなぜか気恥ずかしいとでも言いたげに顔を伏せ、

「……………。笑わない？」

「？　よくわかんねえけど…………。わかった、笑わない」

「…………私だって。一端の女子高生だということ」

「どづいうこった？」

「…………一回くらい。男の子と遊んでみたかった。私の通う学校は女子高だからそういう経験はなかった。ただ中には他校の男の子と付き合ったりしている子もいて。その子が教室で話しているのを聞いていると。私も少しだけ…………ほんの少しだけ興味が沸いたの」

ああ…………それか。

「なるほどな……。だったら、なんか悪かったな。せつかくそんな思いがあったのに、相手が俺みたいな中学生で」

自慢じゃねえけど、俺は女子をエスコートするなんて、無理だ。経験がないってこと以上にガラじゃない。

けれど、姫神は首を振ってそれを否定した。

「ううん。そんなことない。今でも覚えてる。大人のデートというには幼かったかもしれないけど。楽しかったことにかわりはない。それは。この公園で言ったはず」

『私は今日とても楽しかった』

……そういや、言ってたっけな。そんなこと。

俺は少し思い出に浸り、それから立ち上がった。

「さつとと。聞きたいことも聞いたし、そろそろ帰るか。もう大分日が暮れてるしな」

最終下校時刻もとつくに過ぎてる。こりゃ、警備員アンチスキルあたりにあつたら大目玉だな。

俺たちは公園を出て、別れの挨拶を交わし、お互いに別方向に歩き始めた。

「……………」

だけど、俺は数歩を歩いたところで立ち止まる。それから、くりりと後ろを向く。姫神の姿が少しずつ遠くなっていくのが見えた。

……あ~~~~~クソ！ もういい！ 空音やアウレオルスにも恥ずかしいこと言っちゃまったんだ！ 今更一人増えたところで変わるかよ！

だから俺は、去り行く姫神に向かって、

「姫神い

ッ！」

思いつきり、叫ぶ。

姫神が驚いたように、こちらを振り返った。俺は構わず、大声で話す。

「お前！ 言つたよなあ！ 吸血鬼たちが俺たちと変わらねえって！ だから、自分はそのいつらを守りたいんだって！ そんで！ そのいつらを殺すぐらいなら！ 自分を殺してみせるって！ お前、言つたよなあ！」

姫神はその場を動かない。どんな顔をして聞いているのかも、俺にはわからない。

だけど、俺は続ける。

「俺！ あのととき！ 本当は、言つてやりたかったことがあつたんだ！ でもそれは、お前の思いを自分勝手に否定することになるから！ 言えなかった！ 言うべきかわからなかった！」

アウレオルスに、「自分と姫神の目的は合致しているのに何の問題がある？」と言われて、俺はたしかにそうだと思った。だから、その答えは出せなかった。

でも今なら、出せる。見やがれ、アウレオルス。これが俺の答えだ。

「お前はお前の！ 幸せを望んでいいんだよ！ 吸血鬼を守りたいからって！ 自分ひとりを犠牲にする必要ねえんだ！ お前はお前

の
「

しっかりと届くように、俺は一度言葉を切って、

「 人生を！ 歩んでいいんだよ！」

そこまで言い切って、俺は大きく息を吐く。思いっきり叫んだせいで、喉がいやに乾いていた。

息を整えながら、姫神に視線を向けなおす。

姫神は動かない。駆け寄ってくるなんてことはないし、大声で何かを返してくれることもない。

だけど。

遠い上に暗いから、本当かどうかわからないけど。

それでも、なんとなく

姫神秋沙は、笑ってくれている気がした。

第三十話 お前はお前の（後書き）

ご意見・ご感想（特に感想）お待ちしております！

番外三 鍋と暗闇の関係性（前編）（前書き）

宣言どおり、三十話行ったので番外編です。日付を見てもらえればわかってもらえると思いますが、美琴がハイになっていた次の日のお話です

ホントは一話にまとめたかったのですが、予想外に文字数が多くなったので分割しました。後編が出来上がって一時したら一話にまとめるかもしれません

番外三 鍋と暗闇の関係性（前編）

八月十二日。

「いいぜ、桜咲錬夜。お前がこの戦いに勝利するって言うのなら、まずはその幻想をぶち殺す！」

「上等だ、上条当麻。他の誰も俺に勝てない、未来を俺が創り出す！」（今作った決め台詞）

「ごくり、と俺、桜咲錬夜と上条当麻はのどを鳴らす。

畜生……こんなところで、負けてたまるか。散っていった戦士の為にも、俺はここでくたばるわけにはいかない。

……いや、それは当麻も一緒、か。上条陣営も残すは後こいつ一人なんだから。

お互い 後には引けない。

「……………」

無言でにらみ合う。相手の一挙手一投足を見逃さないように、神経を集中させる。

そして 勝負の時が訪れる。

ピチヨン

どちらの、かはわからない。汗が一滴卓上に滴り落ちた。

その、刹那

「おおりゃあああああああああああああッ！」「」

叫びと共に、互いの『箸』^{はし}が交差した。

* * *

二時間前。

「どーすつかなあ、これ……」

あの三沢塾の事件から数日がたったある日のこと。俺は『とある物』の扱いに困っていた。

「ひとりでやってもつまんねえしなあ……ってかなんで二つもあるだよ！？ 一つで十分じゃねえか！」

そう叫び、俺が指差すのは、二つの鍋である。それもアルミ製のやつとかじゃなくて、土鍋……ええつと、行平鍋つつたかな？
で、なんでこんなものがあるのかといえば、話は今朝まで遡る。急に俺の家を訪ねてきた正人が「お前料理好きだったよな？」の一言と共に俺に土鍋を渡してきたんだ。

『……なんだこれ？』

『土鍋』

『見りゃわかるわ！ そうじゃなくて、なんでそんなもんを俺にくれるんだよ？』

『いや、実は今朝実家からこれが届いてよ。それで、お前にやろうと思った』

『何その横流し。つか、お前の実家は何だってこんなもん寄越したんだ？』

『そりやお前、俺が鍋料理好きだから……かな』

『知らねえしうぜえええええええ！ 好きならお前が受け取れよ』！

『いや俺、料理苦手だからよ』

『ああ……なるほど。すごく納得した自分がある』

以上のやりとりの末に、俺はこの鍋を手に入れた……まではよかったんだが、一旦こいつを台所に仕舞おうとしたら、もう一つ土鍋が出てきた。多分、奥のほうだったから気づかなかったんだ。……にしても、

「はあ。マジどうすっかな、これ？」

一人で、それも二つも鍋が食えるかよ。こつというのは、普通みんな

「ん？ みんな……？」

そつだ、その手があった。こつなったら、みんな巻き込みませえ。

「ま、夏休みだしな。みんな暇だろ」

携帯電話に手を伸ばし、俺は友人たちへの誘いをかけることにした。

今思えば。

このときの判断は、間違っていたんだろう。

* * *

「さつとど。面子を集めるんなら、あいつに頼もう」

一人ひとりに電話かけるのめんどいからなあ。まあ、あいつならノリもいいし、集めてくれるはずだ。

P r r r r P r r r r

ガチャ

『もしもし。鍊夜？』

「あ、涙子か？ 実はさ、お前に頼みがあんだよ」

『頼み？』

「おう。今日、鍋しようかと思うんだけどよ、一人でやんのもつまんねえから、みんなも呼ぼうと思ってな。それで、お前に面子集めてもらいてえんだ」

『おー！ 鍋！ いいねえ、真夏だからこそそのあえての鍋パーティー！ 鍊夜わかってるね』

「そりゃどーも」

『そういうことなら、あたしに任せて。すぐに電話してみるから！』

「おう。よろしくな」

『うんっ。それじゃあ、みんなで「闇鍋」楽しみにしてるかんね！』

「は？」

ガチャ ツーツー

闇、鍋……？ 一言も言っていないんだが。もしかして、あいつの中では「みんなで鍋」闇鍋」という公式でもできあがってるのか？ ……まあ、いいか。たまにはそういうのも悪くねえだろ。それに闇鍋つつつても、集まるのはどうせいつもの面子だろ？ なら変なことにはならねえだろ。むしろ、常盤台コンビなんか予想外のアタリを持つてくる可能性もあるしな。

とまあ、俺はこの先に待つ未来も知らず、軽い気持ちで涙子のアイデアを受け入れた。

「あ、そうだ食材買ってこねえと。今うちロクなもんがねえんだよな」

* * *

「おーい、鍊夜！」

「んあ？」

食材探し（少し遊び心を入れた）を終えて家に帰る途中、誰かに呼ばれ振り返ってみると、そこには上条当麻とインデックスがいた。このまえの事件以来だな。

「なんだ、お前らか。どうしたんだ？」

「いや、お前の後姿が見えたからさ、声かけてみたんだ」

「ふーん。で、二人揃ってどうしたんだ？ 買い物か？」

「いやー……それがさ……」

と、当麻はなぜか肩を落とし、インデックスが騒ぎ始めた。

「それがね、れんやにも聞いて欲しいんだよ！ とうまっつてば、今日のよるごはんの事、すっかり忘れちゃってたんだよ！ しかも、お買い物もできなくなっちゃっし！」

「はあ？」

どういっつことかわからず詳細をたずねてみると、事情がわかった。どうやら普段はこいつら空音に料理を作ってもらってたらしいんだが、今日は当麻がたまにはということと空音（とインデックス）に夕飯を作ろうと思ったんだとか。が、自宅に食材がほぼないことに気づき、こっつして買出しに出かけたらしいんだが……。

「うっつ。まさか、財布を落とすちまっつとは……。いつものことだけど、不幸だー」

「あー……まあ、その気を落とすなよ。財布をスられるどっかの誰かよりましたよ」

余談だが、このとき世界のどこかで赤毛の女魔術師がくしゃみしたらしい。

「うーん、どうするかなー。空音になんて言えばいいんだ……」

「ねえ、とうま。もう素直に言っちゃおうよ。そらねだったら、笑って許してとうまよりおいしい料理作ってくれるよっ」

「……インデックス、お前それフォローになってないと上条さんは切に訴えたい」

うんうん悩む当麻に、なんとか励まそう(？)とするインデックス。

……しょうがねえなあ。

「じゃ、お前ら今日家来るか？俺んち、今日鍋やろつかと思ってんだ」

「え……いいのか？」

「ああ」

当麻に空音にインデックス、それにいつもの面子と俺で八人、か……。まあ、部屋は学生寮にしちや広いから、八人ならぎりぎり入るだろ。鍋もせっかく二つあるんだからな。

そんなこんなで、こいつらも参加することになった。

「おっと。いちおう闇鍋にしようかと思ってっからさ。少しでもいいから、お前らもなんか持ってきてくれ」

「わかった。空音にも言っておく」

「当麻に家の住所を教え、俺たちは別れる。」

さて……これで準備は整った。後は涙子に時間を伝えてもらっただけだな。あいつは俺んち知ってるし。

* * *

「……なんでこうなった？」

「おかしい。確実におかしい。」

俺がそろそろ約束の五時になるうとした頃、大人数になるなら飲み物が必要だろうとジュースを買いに行っ戻ってきたら、学生寮のエントランス前でなにやら集団が騒いでいた。

「ちょっとアンタ！　なんでアンタまでここにいんのよ！」

「いや……俺たちは鍊夜に呼ばれただけで　ってアブナッ！？　いきなりビリビリ撃ってくるんじゃないやねえよ！」

「とうま！　この短髪は誰？！　説明してほしいかも！」

「あ、あ、あ、お姉さまとあんなに仲むつまじく……何者ですのこの類人猿はア……！」

「ちよ、当麻にインデックスに御坂さん！？　なんでいきなりバトルに発展するの　ってなんか僕にまで電撃飛んできたああああああー!?」

「う、うわー……これ全部錬夜の知り合い？　錬夜って確かまだこの街に来て一ヶ月くらいだよねえ……?」

「う、うう。私、なんだかキャラ的にうもれちゃいそうな予感がひしひしします……」

……ここまではいい。当麻たち三人に加え、いつもの四人。確かに俺はこいつらが来ることはわかっていた。

だが……、

「にゃはははっ！　ミコちゃんおもしろい！　あんなにわかりやすく照れちゃって、さすがはアタシの親友！　ホントいい娘だなー！」

「これは。なんとという女の子率の高さ。桜咲君も。上条君も。ついでに御厨君も。もしかしてフラグゲッター？」

「~~~~ッ！　なんだこのお遊戯連中は。やっぱり僕は帰らせてもらう。こんなことのためにわざわざ学園都市の壁を超えた自分をひどく呪つよ」

「ま、まあまあステイル。せっかくお誘いいただいたのですから。インデックスもいることですし……さすがに私も、こんなことになるとは思いませんでした……」

……。

「　　ってちょっとまってコラ！　なんであんたら普通に参加してんの？！」

そう言っつて俺が指差したのは、予想外のメンバー。

言祝ことほぎさん、姫神、ステイル……と知らない女の人。前三人はともかく、最後は誰だよ。なんとなく、どっかで会った気もするが。

その人は、黒髪ポニーテールで上は白いＴシャツを腰のあたりで結び下は左足が根元で切られたジーパン、腰には二メートルくらいそつの日本刀というとても奇抜な格好をなさっていた。ああ、また変人ち畑の住人なんだろうなあ……。

「……で、誰だよ？」

「あ、申し遅れました。私は、神裂火織かんさき かおりと申します。（いちおうあなたは魔術まじゆの事情を知っているという話ですので、『必要悪ネセサリウスの教会』の魔術師と言えはわかるかと）」

「（ああ、あんたが……）」

後半が小声になったのにあわせて、俺も小声にする。

一応、三沢塾の事件が終わってインデックスの事情や七月二十七日の話は聞いている。ついでに言えば、空音から彼女が空音の師匠だという話も。

でもな……、

「で、なんでその神裂さんがここに？」

「その、実は学園都市の近くであった仕事が少し前に終わったのですが、そのことを空音に話したら誘われてしまいました……。せつ

かくの誘いを無下に断るのはどうかと思ってしまいました。あ、遅ればせながら、今日はお招きいただきありがとうございます」

「招いてないですけど。　　んで？　　ステイルもそれについてきたのか？」

「ふん。悪いか？　　僕は御厨空音にインデックスも来るからと強引によばれただけだ。なぜか神裂も断らないしね」

オーケー、この二人の事情はわかった。じゃあ、次だ。

「言祝さんと、姫神は？」

「んー？　　アタシは君んちに向かっているミコちゃんたちを発見してね、話を聞いたからついてきたんだよんっ」

「欲望の赴くままか！　　まず家主に了解とろうよ？！」

「だって、ミコちゃんもクロちゃんも『錬夜ならまあいつか』って言うから」

「理不尽すぎる　　っ！」

なんてやつらだ。

「私は。上条君の家へ遊びに行ったら。みんなで出かけようとしていて」

「ああ、はいはい言祝さんと同じパターンだよなチクショウ！」

どうして俺の友達はどういつもこいつも俺に対する遠慮を持ち合わせていないんだ。

「　　っていうか、これどうすんだよ！　総勢十二人って、絶対部屋入らねーよ！」

八人でさえギリギリだったのに、十二人って　いや、待てよ？

「そうかそうか。それは仕方ないね。じゃあ、僕は帰らせてもらおう
「いや待て、ステイル。一つ手があった。みんなここで待っていてくれ」

一人帰ろうとするステイルを引きとめ、俺は自室……ではなく、その左隣の部屋のインターホンを押した。
そして出てきたのは

「　　誰や。くだらんセールスやったらしばくぞ、コラ」

「なんでお前は初っ端から喧嘩腰なんだよ、一虎」

正人と似たり寄つたりの身長を派手な服装でつつみ、いたるところにアクセサリをぶら下げ、髪を金に染めた強面の男。こんなナリでも、同じ柵川中学一年なんだぜ？

名前は、一姫一虎。俺のお隣さんだ。

「おう？　なんやなんや錬夜やないか！　それならそうと言えやワレ」

呼び出したのが俺とわかると、すぐに態度は軟化した。

「で、何の用や？」

「ああ。前話してた『計画』を試してみようかと思っただけ。あと、カセットコンロも貸してくれ」

「ホンマか。あれは、半ば冗談やったんやけどなあ。まあ、ええわ。好きにしいや」

「お、サンキユ。今度お前が頼んだら俺も協力するよ」

「おおきに。ほんなら、俺は今晚はダチの家に泊まってくるわ。戸締りだけよろしゅうな」

言っで一虎は一度部屋に引っ込んで、それから準備が済んだのか出かけていった。

さて、と。

俺は今度は自分の部屋に入り、リビングで、一虎の部屋と俺の部屋を隔てている壁の前に立つ。

そして、

パンツ - バシィ！

その壁を錬金術で消した。とはいっても、その分の質量は他の壁へと移ってるだけなんだが。

さて、これで二部屋ぶちぬきのリビングルームが出来た。

おっと。『計画』について話すのを忘れてた。実は以前、一虎と話していたことがあった。それは、壁を取っ払えばめちゃくちゃ大人数で遊べるんじゃないか？ というものだった。まあぶっちゃけただの冗談だったんだが、まさか実現するとは。

ま、なにはともあれこれで部屋は確保できたし、一姫のと俺のとでカセットコンロも用意できた。

「ほんじゃま、どうなるかはわかんねえけど、やってみるかね」

この先の展開は読めないままで、俺はみんなを呼びに行った。

* * *

「おおー！　すごいね、これ！　お隣さんの壁をぶち抜いてリビングをつなげるなんて、さすがあたしの親友、反社会的だね！」

「どうでもいいけど、そっちの部屋は汚すなよ、お前ら。柵中組は知ってるだろうけど、一姫一虎つてめちやくちや怖え奴の部屋だから」

「え、ええ！？　あの一姫君の部屋ですか？！　よ、よく錬夜君殺されませんでしたね……」

「ちょ、錬夜それマジ！？　一姫つてあの、他校の不良に『人喰虎』とか呼ばれてる人！？」

「恐れすぎだ、お前ら」

飾利と涙子が恐れるのを見て、当麻が小さく「どんな奴だよ……」と呟いている。

と今度は、常盤台チームが発言した。

「て、テメエ、インデックス！ お前それ俺が久々に本気で作ったプリンじゃねえか！ 相良さんから教わった技術を全てつき込んだ特別製の！」

「……あ、そっかこれんやのお家だったっけ。いつもと同じ感じで食べちゃった……。ご、ごめんね！ でも、すごくおいしかったんだよっ！」

「ぐ、うう、怒りづらい謝罪をしゃがって……！」

怒るに怒れねえじゃねーか！

と、そんなもどかしい感覚を感じていると、背後から殺気が飛んできた。このメンバーでこんな純粋に殺気を飛ばすのは一人しかない。

「す、ステイルさん……この俺の首筋にあててるルーンのカードは何のつもりでしょうか？ なんか微妙に熱いんですけど……」

「黙れ、あの子に怒鳴り散らしてでもしてみる。その瞬間、君の首からは燃え尽きると思え」

「ステイル！ 一般人もいる前であなたは何をしようとしているのですか！」

神裂さんが押さえてくれたこともあって、俺はなんとか命からがらステイルのもとを離脱する。

しかし、その先でも騒ぎは起こっていた。

「あれ？ 姫神、お前その腰に刺さってる黒い警棒、なんだよ？ 三沢塾のとき、そんなの持ってたか？」

「あの時は部屋に置いてた。でも今は自衛のために持ち歩してる」

「自衛？ あれ、姫神ってもしかして武闘派だったりするの？」

「うっん うっ使う」

言いながら、姫神は警棒を当麻の腕に押し付ける。

その瞬間

「ぎゃあああああああああああああああ！？」

当麻が叫んで、ふらりと倒れる。しかしどういった偶然か、その先には美琴が立っていた。黒子と話していたため当麻に背を向けていた彼女は、悲鳴に驚き、振り返る。そこに当麻が倒れこみ、美琴ともども床に転んだ。結果的に、当麻が押し倒すような形で。

「なっ、ちよっ、ばっ、なななにやってんのよアンタ！？ こ、こんな人が大勢いるところぞ！」

「お、お姉さまを、おし、押し倒しししししこの類人猿がアあああああああああ！」

「……………もう勝手にしてくれ」

どったんばったん暴れる連中に見切りをつけ、俺は姫神に向き直り、

「……………お前、当麻になにやったんだ？ つーか、その警棒何？」

「これは。魔法のステッキ」

「……………うん、ごめん俺今つつこむ気力ねえんだ」

「……………本当は。スタンガンを埋め込んだ特殊警棒」

へー、と気の無い返事をして、俺は室内（一虎ズリビングも含む）を見回す。

「あーもう、来て早々不幸すぎます、やっぱり言わせてもらっぞ不幸だー！」　上条当麻。

「やめてインデックス！　鍋が待ちきれないのはわかるけど、出汁用の昆布を食べようとししないで！」　御厨空音。

「大丈夫だよ、そらね。だってこの前テレビで昆布は『みねらるー』が豊富だって言ってたもん　じゅるり」　インデックス。

「それは。御厨君のお願いに対する答えには。一切なっていないと思う」　姫神秋沙。

「神裂。君は、本気でこのままジャパニーズ鍋パーティーに参加する気かい？」　ステイル「マグヌス。」

「私達は招かれた身ですよ、ステイル。一度来た以上、退去は失礼です　空音もいることですし」　神裂火織。

「食べるよー！　初春がちよつと引いちゃうくらい、今日のあたしは食べるよー！」　佐天涙子。

「なんで私限定なのかわかりませんが、そこはかたなくやる気は伝わってきますよ、佐天さん！」　　初春飾利。

「私、闇鍋って始めてなのよね……。……ママが酔った時に作る鍋は、闇ってより暗黒って感じだし」　　御坂美琴。

「酔った……。？　　そ、そうか、お姉さまを酔わせてしまえば、後は黒子の思い通り……。うえっへっへっへ」　　白井黒子。

「にやはははははは！　　なんか知らないけどテンション上がってきたー！」　　言祝初音。

「……………はあ」　　桜咲鍊夜。

総勢、十二名。

俺はこの瞬間、平和な鍋パーティーなんぞ百パーセント訪れないと確信した。

断言する。

この面子で何も起きないわけがない。

番外三 鍋と暗闇の関係性（前編）（後書き）

七千文字も使ったのに、まだ鍋が始まらない……（汗）。ていうか、キャラが多すぎるし濃ゆすぎる……！

ご意見・ご感想（特に感想）、お待ちしております！

番外三・五 鍋と暗闇の関係性（後編）（前書き）

前回到引き続き、番外第三弾の続きをお送りします！

……の前に、まず文字数がめちゃくちゃ長くなったことをお詫びします。あのメンバーを全員（といってもメインは半分ですが）動かそうと思ったら、かなりかかってしまいました（汗）

さらに言わせて貰えば、かなりカオスな感じになっていますが……それでもいいと言う方は、お読みください

番外三・五 鍋と暗闇の関係性（後編）

……デイリー占いなんて、もう二度と見るか。

俺は、一姫宅のリビングで眼前に広がる光景を前に、そんな決意を固めた。

現在、俺たちは俺の部屋と一姫の部屋を利用して、二チームに分かれて食卓についている。このチーム分けは、さきほど作ったアミダで決定した。故に、そこになにかしらの意図が介在する余地なんて、かけらも無いはずだった。

……なのに。

「みんなで鍋……ですか。必要悪の教会の女子寮では日本の文化がありませんから、随分久しぶりな気がします」

「別に僕は何料理でもいいけどね。とにかく、一刻も早くこんな茶番は終わらせたいよ」

「むむむっ。錬金術師の件では少しは感謝してるけど、れんやの料理を茶番扱いするのは許せないかも！ さっきのプリンはとてもおいしかったもん！」

「うわー、見事に初対面の人ばっかだ。まあでも、錬夜もいるしなんとかなるよね」

「そーそー、人類皆一期一会、せっかくの出会いを楽しまなきゃだねん！ とところで、ルイちゃんって呼んでいいかじゃん？」

……。

今発言したのは上から、神裂さん、ステイル、インデックス、涙子、言祝さん。ちなみに全員俺と同じ食卓を囲む通称『鍊夜チーム（命名：佐天涙子）』だ。

……なんの罰ゲームだ、これは。

おかしい、俺の今朝の占いは、確かに運勢最高と出ていた。なのになんだこの色物をかき集めたようなチームは？ ……まあ、今回集まった全員が色物つちゃ色物なんだが。

ちらりと後ろ　俺の部屋　を見てみる。

『へえ〜、いつも追いかけてっこしてるって上条さんと御坂さん、仲がいいんですね〜』

『ちっ違っわよ初春さん！ 私はただ、この馬鹿を一度ぎゃふんと言わせたいだけで……ごによごによ』

『おい待てビリビリ中学生！ それはあれか？ 上条さんはお前に負けるまで追い掛け回されるって意味ですか?!』

『お待ちなさい、あなた！ お姉さま自ら追いかけてくださる価値を、少しも理解していませんわね!?!』

『うーん……昆布ってこのくらいでいいのかな？ 姫神さん、わかる?』

『うん。あとは。火を入れて出汁をとればいいと思う』

なんて平和な光景だ、ちくしょう……！

厄介なことをしそうな人間がない上に、俺が目星をつけていた常盤台チームの食材まで向こうにまわってしまった。こちらにも常盤台の人間がいるけど、彼女は十中八九変化球を投げってくるだろう。

涙子だつて何かを仕掛けてくるだろうし、魔術師連中にいたつてはまったく予想がつかない。こうなつては、俺が用意した『遊び心』ももはや、火に油でしかねえ……！

……とはいえ、今更チーム替えもできない。覚悟を決めるしかない。

「……そんじゃあ、そろそろ始めっか」

カセットコンロの火をつけた状態で、二つの部屋のカーテンを閉め切る。日の光を遮断した結果、室内の光源はカセットコンロのみになった。

俺は、むこうのチームはむこうで始めるだろとあたりをつけ、自チームに言葉を投げかけた。

「まず、ルールを説明しとくぞ。……一つ、自分が投入する食材は一種類。これには調味料も含む。二つ、一度箸をつけた場合、完食しなければならぬ。三つ、あらかじめ食材をばらすことはしない。誰かが自分のやつを食べたら、ばらしてもいい。そして、最後に四つ目。これが一番重要だが、『食べられる』食材であること。もし今そのルールに抵触すると思つたら、速やかに食材を出してくれ」

『……………』

……誰も提出しない。少なくとも、全員個人の価値観では食えるものを持つてきたらしい。ちなみに、上のルールは既に向こうのチームリーダーである当麻に伝えてある。

みんなが何も言い出さないことを確認した俺は、ゆっくりとカセットコンロの火を消す。あちらさんも同じタイミングで消したようで、室内にはほぼ暗闇が満ちた。

「各自 食材をぶち込め」

アーメン、と心の中で呟きつつ、俺はみんなに指示を出す。
一瞬の間を置いて、いくつかの擬音を耳が捉える。

ポチャンポチャン トポトポトポ ベチャツ

……ダメだ、擬音だけじゃ判断できん。しかも音が重なりあつて全部聞き取れなかった。

とはいえ、全員が入れ終わったようで、音は消える。

匂いは……なんだこれ、よくわかんねえぞ……。

嫌な予感を感じつつ、俺はコンロの火を再び手元が見える程度に戻す。

徐々にぐつぐつと煮立ってきたところで、言祝さんがなぜかチャッカマン（学園都市製）を取り出し、

「ええっと、確か火をつけるんだっけ」

とか言いつつ、点火した 瞬間、

ポオウツ！

『!?!?!?!?!?!?!?!?!?!』

どういう原理か、一瞬だけ鍋内部に炎が湧き上がった。俺たちのチームだけでなく当麻チームからも驚きが伝わってくる。

ば、馬鹿な……箸をつける前からいきなりこれかよ!?!?

何をしたんだこの人?!?

「にやははは! まあ、何はともあれ始めよう!」

疑問はつきないが、ルールでネタばらしは禁止になっている。正体不明のまま進めることになった。そして。

胸中を不安が渦巻く中

一筋縄ではいかない鍋大会が始まった。

* * *

「……誰から行く？」

俺の質問に、返事を返すものはない。大食いと噂のインデックスさえ。よっぽどさっきのインパクトが強かったのか。

だが、そんな静寂も僅かの間で、

「……あ、あたし、やっぱりここは錬夜が行くべきだと思うなー。だってリーダーじゃん！」

「て、てめ……なんてことを……！」

まさかの涙子の裏切りにより、一瞬にして「早くお前行けよ」みたいな空気が流れる。そもそもリーダーって勝手に決められたんだが……。

「……ただ、どのみち食わなきゃいけないことにはわりはない。なにより……、」

「……わかった。俺が一番でいい。だけど　忘れんなよ！　お前

「らも食うことになるんだからな！」

『う……っ』

嫌そうな合唱をBGMに、俺は箸を鍋に入れる。

ゆっくりと箸を動かし、何かに当たった。俺はそれをそろそろと持ち上げ……ブツを確認する。

それは

焼けたトカゲだった。

「トカ……ッ!? ってちよつとまで! こりゃいきなりアウトだろ!?」

「い、いえ。アジア各国には食用としている国もありますし、南米ではイグアナも食べているようです」

「いやいや神裂さん、そりゃ食用の話じゃね?! これ、絶対そこからへんうついてたやつだろ!」

「いいから黙って食べなよ、桜咲錬夜」

「ステイルう! お前人事だと思いやがって!」

「何を言っている。君が言ったんだろ、『一度箸をつけたら完食しなければならぬ』って」

た、確かにそうだけど……!

「だあ、クソ！ わかったよ畜生！」

俺は覚悟を決め、一思いに一口で食いにかかる。

死なば諸共……！

後続の連中に呪いをかけ、トカゲを口に放り込む……

……

「……医者を呼んでくれ……」

「ありゃあ……。桜咲君、白目向いてるよ」

遠くなる意識をつなぎとめながら、俺は呟いた。

* * *

ひどい目にあつた……。

ジュースで口直した俺は、なんとか持ち直した。

だけど……、一つ懸念がある。あれは多分、トカゲ単体の味じゃない。食材かはたまた調味料か、あるいはその両方かが、おそらく影響を与えている。

これは……他の食材も一切油断できない。

「ところで……完食したんだから、ネタばれしてくれよ。あれ、誰の仕業だ」

どこのどいつが、あんなふざけたもんをぶち込んだのかを尋ねると、意外にも神裂さんの手が上がった。まさか、この人が……？

「その……私が捕らえて」

「僕が焼いた」

「何その奇跡のコラボレーション!?」

まさかの合作だった!

と思いきや、神裂さんはステイルに協力しただけらしい。自分の食材はまだ鍋の中だとか。……それはそれで恐ろしいな。

っーか、

「テメエ、ステイル! なんてもん入れてくれやがったんだ! 俺だったからよかったものの、女子が当たってたらどうする気だったんだよ!」

「その時は当然処分するさ。淑女レディにそんなものを食べさせる気はないね。元より標的は君たち三人。それ以外は興味ないよ」

「標的って言っちゃった!」

この野郎、俺と当麻と空音狙いだな……!

思わず掴みかかりそうになる中、涙子が手を上げる。

「えーっと、次は誰にしますか……?」

控えめな発言は、さっきのを見たからだろうか。

しかし、次か……。よし。

「じゃあ、こっからは食った奴が指名して行くか。ただし、最終的

にちゃんと一巡するように。　　つーことで、ステイル。次はテーマが行け」

「なっ！？　何を勝手なことを！」

ステイルが突然の指名に慌てだし抗議するが、

「むっ。わがまま言ったらダメなんだよ！　ルールなんだから、ちゃんと従わないと！」

「そうですよ、ステイルさん！　みんな平等です！」

「ステイル。和を乱す行為はみつともありませんよ」

「おっ、この流れは乗るべきだね。ステイル君、大人しく食べちゃえ！」

すごい勢いで援護射撃来た！

こいつらさては、少しでも長く生きながらえようとしてんじゃねえのか？

なにはともあれ、次はステイルのターンだ。

「クソッ。なんだって僕がこんな目に……食べればいいんだろっ食べれば」

強気な発言をしつつ鍋に手を伸ばすが、一瞬ためらうかのように箸が止まる。が、すぐさま鍋につっこみ、何かを取り出した。

「？　何だ、これは……？　ボール？　団子の類かい？　くっ、どうやら僕はアタリのようなだね、桜咲錬夜」

「……けっ、つまんねえの」

とは口でいいつつ、俺はまだあれを当たりとは思ってない。
この面子で当たりなんぞ、存在するはずがない！

そんな俺の考えも知らず、ステイルは軽い感じで口に入れ

「ぐあああああああああああああああああああ！？」

突如、悲鳴を上げて椅子ごと倒れた。

な、何がおきた……。

「あ、あちゃー。さすがは『赤玉』、予想外の威力だね」

「『赤玉』？ 涙子、あれお前の仕業か？」

「うん。学園都市特製調味料、『赤玉』って言ってさ。一般的な赤唐辛子はもちろん、鷹の爪とかタバスコとかハバネロとかを濃縮させた特殊な団子なんだって。一説によるとサドンスソースも入ってるのか」

「……それはもう、一種の兵器じゃねえのか？」

言いながら、さっきのトカゲを思い出す。あれを食ったとき舌がピリピリする感じがしたが、あれは溶け出した赤玉が原因だったのか……。

「本当は、好きな辛さになるまで溶かして使うんだけどね。ステイ

ルさんそのまま食べちゃったみたい」

そりゃあ、そうだろうよ。お前がそのまんま入れたんだから。大慌てで神裂さんにジューズを飲ませられているステイルに、俺は静かに合掌した。

* * *

「……………まつひやく。これひゃから科学というのは信用ならひゃいんひゃ」

おそらくは唇を真っ赤に腫らしているであろうステイルは、すました調子でそう言った。が……………口調がかなり残念だった。かつて、これほどステイルのキャラが崩れたことがあっただろうか？

「……………で、ステイル。次は誰を指名する？」

「君……………と言いたるところだが、それは無理なんだろう？ さて、どうしたものか……………」

ステイルが思案する。こいつどうやら、本当に女子にはあまり被害を出そうとしないらしい。あんな目にあっただのに、立派なこつてすると、見かねた様子で涙子が発言する。

「えっと、じゃあ次あたしいきます！ ステイルさんがあんなことになったのはあたしのせいです……………」

「うわあ、すごいねルイちゃん。がんばるね！」

まあ、確かにあれはお前のせいだけだ。

他の連中も特に何も言わないし、ここは任せよう。

というわけで、涙子の番になった。　　んだが、その前に、

「初めに言っておきますけど、あたしみなさんみたいに体丈夫じゃないから、もしかしたら気絶しちゃうかもしれません」

どんな鍋だどつつこみたくなつたが、今までをみるとあながち間違いとも言えない。

「だから、最初にもう次の人を指名しておきます。……えっと、神裂さん。次、お願いしてもいいですか？」

「（ビクッ）……………わかりました。佐天さん、でしたか。あなたの指名、受けましょう」

一度震えて、数秒の葛藤の末、神裂さんは了承した。きつともうわかってるんだろう。どのみち逃げられないということに。

それに涙子は礼を言って、鍋の中から何かを発掘する。それを一度皿の上に乗せ、涙子はまじまじと観察する。

「何、これ……？　揚げ豆腐？」

揚げ豆腐だあ？　　ずいぶんと手の込んだもんが入ってんな。

だがまあ、今までの中で一番マシそうではあるな。

これならなんとか生き残れるかと俺が考えていると、なぜか神裂さんの方から安堵のため息が聞こえた。まるで、「よかったですね」とでもいうように。

そんな中、涙子は揚げ豆腐を眼前までもって行き

「……………いただきますっ！」

今までの例にならって一口で食べた。
そして

カクンツと、静かに下を向いた。

……………いや、違う！ 気絶してんだこれ！

「涙子！？ おい、大丈夫か?!」

肩をつかんで揺さぶるも、反応なし。どういふことだ？ どうして揚げ豆腐ごときにこんな真似ができる……………！
謎の揚げ豆腐に戦慄していると、答えは意外なところから出た。

「……………？ おかしいですね、私が作った揚げ豆腐ですから、何の問題もないはずなのですが……………？」

「ッ！？ あの揚げ豆腐、あんたが作ったのか?!」

「ええ。空音が作っていたので、私も真似してみたのです。もっとも、少しオリジナリティは出しましたが……………なるほど、この鍋に浸っていたことでこんなことになってしまったのですね」

「……………」

一人納得したようにうなずく神裂さんは、丁寧に涙子の介抱を始める。

そんな中、インデックスが俺に小声で話しかけてきた。

「(ねえ、れんや。あれってほんとにこのお鍋のせいなのかな……?)」

「(俺もそれを考えてた。ありや、どっちかつつーと……)」

あの揚げ豆腐単体の殺傷力の気がしてならない。むしろ、俺のトカゲはあれの影響も受けていたんじゃないやねえだろうな……?

聖人のように甲斐甲斐しく涙子を世話してるあの神裂は、実は一番危険なんじゃないだろうか?

そんな疑問を切に感じながら、涙子のターンが終わった。

佐天涙子、脱落。残り十一人。

* * *

そろそろ本気でお開きにしたくなってきた頃、

「さて……それでは、指名どおり、私も挑戦しましょうか」

コンロの光源があるとはいえ、暗闇の中だつてのに的確に涙子を横たわらせ、神裂さんは告げた。

そう、つぎはこの人の番だ。どうやら涙子の『あらかじめ指定』は功をそうしたらしい。

彼女は何事もなかったかのように席につき、顔を俺のほうに向け

た。

「時に、あなたに一つ訊きたいのですが……」
「汁は食す対象に含まれますか？」

「ッ!？」

それを聞いた者達に、電撃がはしる。

汁……確かに、それも鍋の一部だと言ってもいい。だけど……、

「……本気か？ だってそれ、全ての食材の味を吸い込んでるんだぜ？ 下手したら、一番のハズレかもしれないねえ」

どんな味になってるのか、想像さえつかない。昆布だし？ そんなもん、とつくにお亡くなりになってるだろう。

だけど、神裂さんは首を振って、

「あなたは言いましたね？ 持ってくる食材は一人一種類。そして、一巡するように食していく、と」

「あ、ああ」

「私の耳は捉えました。この鍋に液体状のものが入ったのは一回だけ。他は全て固体でした。つまり、その時点でこの汁も『一種類』に含まれたのです。となれば、残りの固形物をみんな食べた場合、必然的に最後の一人はこの汁を飲むことになります」

す、すげえな。よく聞き取れたもんだ。

って、問題はそこじゃなくて。

俺の疑問は言祝さんが代弁してくれた。

「んー？　じゃあ、カオちゃんは、自ら犠牲になるってことかにゃん？」

「か、カオちゃん……？　い、いえ、別に犠牲などと恩着せがましいことを言うつもりはありません。ただ、私は私の魔法名に従っているだけです」

「？　マホー？　まあ、なんでもいいや。それじゃあ、行ってみようか！」

何が楽しいのか、言祝さんが笑いながら促す。

それにうなずいた気配があつて、神裂さんはおたまで皿に汁をすくっていく。

「さすがに全てというわけにはいきませんので、この一杯で構いませんか？」

「別にそれは構わねえけど」

本当に大丈夫か、と尋ねるまえに。

神裂さんは一息でそれを飲み干した。

『……………』

固唾を飲んで見守る俺たち。

そして訪れる変化は

「……………あれ？」

何も起こらない。まさか、涙子と同じように気絶したのか？
ステイルが、神裂さんを見ながらため息をつく。

「おいおい、勘弁してほしいね。世界で二十人もいない聖人が、たかが鍋ごときにノックダウンかい？」

それは微妙に呆れをふくんだもので、俺も若干苦笑していると、

「……………うつせえんだよ」

……………は？

突如聞こえた罵倒に困惑した瞬間、驚くべきことが起こった。

ガタァンツ！

神裂さんが席を立ち、ステイルに掴みかかった。

「勘弁してほしいですってえ……………？ ふざけないでくださいよ！？」

「か、神裂……………？ 君、一体どうし」

「勘弁して欲しいのはこっちですよ！ 昔からあなたはあの子のことが好きなくせに、いつまでたっても告白の一つもしない！ それを長年見せ付けられる私の気持ちわかりますか？！ 何度あなたの代わりに言おうと思ったことが！」

「神裂！？ 君は一体本当にどうしたんだ！？」

「そんなステイルには……ステイルには……」

神裂さんはドンツとステイルを突き飛ばすと、腰に挿した刀に手をかけ、

「お仕置きですツツツ！」

刹那、

ギヤイイイインツ！

すさまじい音がして、ステイルが吹き飛ばされた。かと思えば、神裂さんはその場にぽてんと倒れた。

『……………』

欠片も現状が理解できない俺たちは、互いに顔を見合わせる。そして、ぽつりと言祝さんが言った。

「にゃ、にゃはは……あれ、多分アタシのせいだと思っ」

「え？ じゃあ、まさか液体状のものを入れたのって……」

「うん、アタシ。酒鍋にしようと思って、お酒入れたの。……でもおかしいなあ、ちゃんと火をつけてアルコールを飛ばしたんだけど……」

そういうことか……。最初に鍋から火が上がったのは酒が燃えたからか。
けど、

「酒鍋つて、初めに酒だけを煮て火をつけてアルコールを飛ばすんだ。あのとき既に昆布だしのスープが混ざってたからな、完全には飛ばなかったんだろ」

「????? えつと、れんや。結局どういうこと?」

「あーまあ、簡単に言えば……酔っ払ったってこつた」

すやすやと寝息を立てる神裂さんを見ながら、俺はため息をついた。

ステイルⅡマグヌス、神裂火織、脱落。残り九人。

* * *

『……………』

残された俺たち三人は今、黙りこんでいた。

たかが鍋ごときが結果的に三人の人間を脱落させた、という事実
に俺たちは完全に臆していた。噂に聞く大喰らいのインデックスや、
楽天的な性格の言祝さんが手を出そうとしないことから、その恐怖は推して知るべし。

……背後からは、とても楽しげな声が聞こえてくる。誰かの入れ知恵かあるいは全員の共通認識なのかは知らんが、奴らはこちらの喧騒を完全に気にしない方向で行くらしい。

軽くぶっ飛ばしたくなってきたが、なんとかこらえ、俺は発言する。

「……次はお前らの番だぞ」

「「（ビクッ）」」

二人が反射的に顔を逸らす。正直見た目子供のインデックスと、かなりちみっこい言祝さんに強要するのは若干罪悪感があったが

そんな倫理観なんざ、この場にはもつねえんだよ！

「インデックス。言祝さん。俺の言いてえことはわかるよな？」

「「……………」」

「ルールはこうだったはずだ。『最終的に一巡するよつにする』」

「「……………」（ダラダラダラダラ）」

見えないけど、わかる。こいつら今、絶対冷や汗流してる。このままだんまりかと思いきや、言祝さんが声を上げた。

「……………はあ。仕方ないね。アタシたちだけルール無視ってのも気まずいし。アタシも食べるよ」

それに反応したのは、俺ではなくインデックスだった。

「うっ、でもいいのはつね？ この鍋はもう三人も倒しちゃったんだよ？」

「倒したって」

間違っちゃいねえけど。

インデックスの言葉に言祝さんは「それは確かにそうだけど」と同意し、

「だけどね、インデックスちゃん。アタシたちは生きてるんだよ。当然、生きている限り嫌な事なんていくらでも起こる。だけど、その度にそれから逃げてたら、アタシたちは何も成長できないのよ」

「はつね……」

「いい？ これは試練なの。アタシたちはこれ乗り越えることで、また一つ成長できるのよ！」

「……………うん。わかった。私、食べるよはつね！」

「よく言ったインデックスちゃん！ それでこそ修道女シスターさんだよ！」

……………。

どこかのドラマのようなやり取りをする二人を見ながら、俺は無言を貫く。

あんたら、いいこと言ってるようにみえるけど……………所詮これ、鍋を食べるっただけの話だからな？

一人だけテンション低く見守る中、二人はさらにヒートアップしていく。もしかしたらこれは、人間の一種の防衛機能なのだろうか？

「それじゃあ、インデックスちゃん！ カオちゃんが寝ちゃったせいで指名がなかったから、二人で一緒に食べよう！」

「うん！」

「大丈夫、心配することは何もないよん！ 赤信号みんなで渡れば怖くない！ はい復唱！」

「赤信号みんなで渡れば怖くない！」

「よくできました！ それじゃ、行くよ。せーのっ」

言祝さんの合図で、二人が一斉に鍋に箸を入れる。それから僅かにタイムラグがあつて、両者共に残る食材を引き当てた。

二人はそれがなんであるかも確認しないまま、口に入れ

「じゃ

ッ!？」

言祝さんが一声大きく鳴いて、机に突っ伏し（というよりはぶっ倒れて）ピクリとも動かなくなる。

……うん、まあ半ば予想はしてたよ、こうなるって。

ってあれ？ インデックスはなんも悲鳴を上げないな？

そう思つてインデックスに尋ねる。

「お前……平気なのか？」

「う、うん……これってキムチかな？ 他の食材のせいで少し変な味するけど、普通に食べれるかも」

「あー……それ、俺が入れたやつだわ」

当初はこっさり入れて驚かしてやろうと思つてたんだが、どうやらこの鍋においては逆に一番の当たり食材になつていたらしい。……待てよ？ ということは、言祝さんが食べたのはインデックスの食材つてことになる。

「……………」

俺はあらためて言祝さんに目を向ける。よおく目を凝らして見れば、時折ビクンと体が跳ねていた。

「……………お前何入れた？」

「んつとね、よくわかんない。私お金がないから、当麻のお家から適当に持つてきたもん」

何があつたんだ上条家。

そんな危険なものがなぜ家に放置されていたのか若干気になりつつも、俺は安堵する。何はともあれ、これで一巡したんだ。もう鍋はお開き

バリイッ！

「ふぎゃあああああああああああああああああ！？」

「ッ！？ 何だ今の？！」

この暗黒鍋とやっとおさらばできると思つたのもつかの間、いきなり俺の横を青白い何かが走り、それがインデックスを直撃しインデックスが倒れ、さらには当麻チームからもいくつかの悲鳴が聞こえた。

慌てて電気をつけにかかる。外はもう大分暗いから、こっちのほう
が早い!

パチッ

パッ

部屋のつくりが一緒なため即座に場所を探り当てたスイッチをオ
ンにし、室内を明るく照らす。久しぶりの光に目を細めながら、俺
は自分の部屋へ視線をやった。

そこで見たのは横たわる、飾利、黒子、姫神、空音の姿。
そしてそこには

「な、に……?」

幽鬼のように立ち尽くす御坂美琴と、右手を突き出す上条当
麻の二人が立っていた。

言祝初音、インデックス、初春飾利、白井黒子、姫神秋沙、御厨
空音、脱落。残り三人。

* * *

SIDE 上条当麻

十分前。

「ん、このお肉すごくおいしいね。御坂さん、これ君が持って
きたの?」

「ん？ そうだけど……そんなに高いお肉持ってきた覚えないんだけど」

「いやいやいや。常盤台の連中からしたらだろ、それ。ていうか、俺まだ一口も肉食えてねー!？」

「小萌が出してくれるお肉より。数段おいしいというこの悔しさ」

「んー、そんなもんですの？ あんまり実感ありませんの」

「白井さんからそういう発言聞くと、やっぱりこんな人でもお嬢様なんだって思いますね〜」

俺たちの鍋大会は、かなり平和に進行していた。

当初はルールがルールだけに全員戦々恐々としてたけど、みんな真面目というか奇をてらった食材がなく、普通に（あるいはそれ以上）美味しい鍋が出来上がったため、引く食材にハズレがなくなり、今では全員思い思いに箸を伸ばしていた。

もつとも、平和といっても静かってわけじゃない。

と言つてもなんつーか、騒がしくはあるんだけど、それは友達同士の騒がしさというか、とても気楽な感じだった。

……ちらりと隣の部屋に目を向ける。

『お仕置きですツツツ!』

神裂とかいうやつ（どうも俺の知り合いだったらしい）の声とさまざまな音が聞こえた瞬間、暗がり慣れた目が吹き飛ばすスタイルを捉える。

「……すげーな」

小声で呟いてみる。

向こうの連中はさっきからあんな感じだ。悲鳴と怒声のオンパレード。ステイルの悲鳴まで聞こえてきたときは本気でビビった。

だけど、俺たちは気にしない。誰からともなく、共通認識ができあがっていた。

あつちに関わつたら引きずりこまれる。

それは確信めいた予感みたいなもので、だから俺たちは心の中では気にしつつも平和に鍋を食い続けていた。

そして、俺たちは同時に思っていた。大丈夫、この平和は崩れないと。

だけど、そんな期待は

『内部から』崩れることになる。

* * *

SIDE 白井黒子

……はあ、『これ』どうしましょう？

わたくしは薄暗闇の中、スカートのポケットに収められたものを手の中に収めました。

完つ全に予想外ですの。まさか、これほどの人数が集まってしまうとは。鍊夜の交友関係を少々侮ってしまいましたわ。てっきり、いつもの五人になると思っていましたのに……。

さすがに、これだけの初対面の方々がいる前で、『これ』は使えませんわよねえ……。

「？ 黒子、どうかした？ ため息なんかついちゃって」

「（ビクッ）い、いえお姉さま、なんでもありませんわよ？」

おほほと笑って誤魔化す。い、いけませんわ、お姉さまにバレたらまたお仕置きが ってあら？

掌からいつの間にか『あれ』の感触が消えています。おかしいですわね、さっきまで確かに

「ん？ なんか足に当たった？ よっと。……何これ、ビン？

ちよろつとー、誰よ調味料落としたの」

……………ビン？

ま、まさか……………！

「ま、いつか。そろそろ味にも変化が欲しくなってきたのよねー。

誰のか知らないけど、この面子ならハズレもないでしょ。どれどれ

……………」

お姉さまが座っている方向から、かすかにトポトポという音が聞こえてきます。

あ、あわわわわ……………！

「んぐっ、もぐもぐ……………んう？ なーんか、変な味ね？」

「さっきから何一人でぶつぶつ言ってんだよ、ビリビリ」

「ビリビリ言うな！ 今かけた調味料が……………あ、あれ？ なんか、頭がぼつと……………」

「? どうした?」

上条さんとかいう方の声音に、心配そうな色がつく。わたくしはお姉さまの身に何が起こっているかを知っている分、むしろ『やつちまった感』の方が強かった。
そして

「……………アンタ。何で毎回私から逃げてんのよ」

「はあ? なんだってそんな唐突なこと聞くんだよ?」

上条さんの問いかけに、お姉さまはいきなりガタアン! と立ち上がり、

「アンタが! いつもいつもいつも私から逃げるから! 私は! 私ほねえ?!」

「うわっ、なんだこいつ!? いきなり掴みかかってくるんじゃないよ!?!」

言葉通り、お姉さまは身を乗り出して、上条さんに掴みかかる。それを見て、みなさんが慌て始めました。

「ええ!?! どうしちゃったんですか、御坂さん!?!」

「うーん……………御坂さんが当麻に絡むのはいつものことだけど、今回はちょっと唐突すぎる気がするね」

「私はこの人のことよく知らないけど。脈絡がないような気がする。……………もしかして。さっき言った調味料が原因?」

ギクッ。

姫神さんの的を得た推測に、わたくしの体が震えます。

さらに、雰囲気ですれを悟られたのか、

「……白井さん。まさかとは思いますが、白井さんが原因じゃないですよ？」

「な、なななななーにおっしやっていますの初春さん。わわ、わたくしは何もししし知りませんわよ？」

「拳動不審すぎですよ。普段さんづけなんてしないじゃないですか……」

ぬ、抜かりましたわ！

こうなつてはもう自白したも同然、わたくしは素直に話し始めました……。

「その、実は……てつきりいつものメンバーが集まると思って、わたくし『あるもの』を持ってきてましたの」

「『あるもの』？ それって、一体何？」

御厨さんの疑問に、わずかに逡巡し、

「まあ、何といたしますか、媚薬と自白剤……というより感情に素直になる薬が混ざったような代物でして……」

「な、なんだってまたそんなものを君は持ってきたの？」

「え、えーと、せつかくなのでお姉さまに襲ってもらって既成事実を作りつつ、黒子に対する素直な気持ちで聞けたらなー、みたいな思惑があったりなかったり……」

「……へ、へえ」

う、うう。暗闇とはいえ、自分がどんな目で見られているかわかってちよっぴり恥ずかしい気がしますわ。

と、わたくしたちがそんなことをしている間にも、お姉さまたちのほうではさらに大変なことになっていました。

「ねえ、なんでよお……。なんでアンタは私をあんなふうにあしらうのよお……。ちよっとはちゃんと構いなさいよお……」

「ちよ、ちよっと待て御坂落ち着け！ そんな風にしなだれかかってこられても、上条さんには上手く対応するスキルが無いのですが！？」

あ、あの男……！ なんてうらやま っつて、元を正せばわたくしが悪かったんですわね……。さすがにここで怒るのは筋違いですよ。もちろん悔しいですが！

「あの娘。そろそろどうにかしないと。下手したら脱ぎだしそんな勢い」

「白井さんの話によれば、媚薬も入ってるらしいですからね……」

ぬ、脱ぐ？ お姉さまがこんな公衆の面前で？

「冗談じゃないですわ！ 脱ぐのは、黒子の前だけで十分ですよ！」

「お姉さま！ 少し落ち着いてください！」

わたくしは、お姉さまに声をかけようと思いました。

今にして思えば。

それは遅すぎたと言わざるを得ませんでした。

「……………そう。もうわかったわ。アンタ、私のことが、き、嫌いなね…………？」

「み、御坂さん？ もしかして、泣いてるのか？」

「な、泣いてなんか無いわよ！ 泣いてなんか」

お姉さまは一度言葉を切り、

「ないって言うてんでしょおおおおおおおおおおお！」

バリバリバリバリイ！

叫びと共に、そこら中に向かって、電撃を放ちました。

雷光で一瞬だけ明るくなったと思った瞬間、全身を襲う雷撃。わたくしたちは悲鳴を上げ、その場にバタバタと倒れていく。

薄れ行く意識の中……………わたくしは誓いました。

もしまたこういう機会があっても

あの薬は絶対持ってこない、と。

* * *

SIDE 鍊夜

俺は立ち尽くす二人（特に美琴）を目に留めた瞬間、嫌な予感がした。

やばい、何が起きたかしらねえけど、美琴が暴れだした。このままじゃ、俺の部屋がひどいことになる……！

既に一撃目の雷撃でいろんな場所に被害が出てたんだが、とりあえずこれ以上被害を拡大させないために、俺は自室に飛び込み、当麻に尋ねた。

「おい、こら！ これはどういうこつた！」

「俺もよくわかんねーよ！ とにかく、御坂が暴れだした！」

言われて見てみれば、美琴は微妙に上気した顔でふらふらと揺れている。

……こりゃ、なんかあつたな。

俺は事態の沈静化を図るため、急いで玄関に向かう。そして、靴箱の上に置かれたスプレー缶を掴み、

「当麻！ これ使え！」

ぶんと、当麻に向かって投げる。

当麻はそれを掴み、缶の上部についたボタンを押す。途端、噴射口から催眠ガスが噴出し、それをモロに浴びた美琴は倒れた。

さすがは学園都市製、強力だな。

俺はリビングに戻り、

「つたく、とんだ鍋パーティーになっちまったなあ」

あたりを見渡す。そこには、俺と当麻以外の全員が意識が無いというとんでもない光景が広がっていた。まさに、死屍累々って感じだ。

けどま、これで完全にお開きだな。

俺が呆れたようにため息をついていると、当麻が缶を卓上に置き、自分たちの鍋を見ながら言った。

「……………お！ まだ、御坂が持ってきた高級牛肉が微妙に残ってる！」

「どきやがれッ！」

俺は当麻を蹴っ飛ばし、その場から排除する。俺たちがトカゲやら赤玉やら食ってる間、こいつらはなんてもんを食ってやがったんだ……………！

一口でもいい！ 俺がいただく！

「牛！ 牛！」

一気にテンションが上がってきた俺は、菜ばしを手にとり、それを肉へと伸ばし

ギーン！

「なっ！？」

かけた瞬間、横合いから伸びてきた箸によって阻止された。

相手はもちろん

「上条当麻あ！ テメエ、何の真似だ！」

「それはこつちの台詞だ！ お前は向こつちのチームなんだから、向こつちの鍋食えばいいだろ！」

「ふざけんな！ テメエ、俺たちがどんだけの苦しみをあの鍋から受けたと思っでやがる？！ 大人しくすっこでろっでんだよ！」

「馬鹿言え！ 俺だっでなぜか一口も食えてねえんだぞ！」

ギン！ ギギンギンッ！

鍋の上で互いの箸をぶつけあわせる。こつなりや、意地だ。あの災害クラスの鍋を経験した俺は、もう報われてもいいはずだ……！ 何度かの攻防の末、俺たちはにらみ合う。

当麻は目を細め、

「いいぜ、桜咲錬夜。お前がこの戦いに勝利するっで言っのなら、まずはその幻想をぶち殺す！」

おいおい、三沢塾のときに見せた決め台詞を、なんて場面で使っでんだ。

だが……乗っでやる！

「上等だ、上条当麻。他の誰も俺に勝てない、未来を俺が創り出す！」

即興で決め台詞を作り、俺は張り合う。

ごくりと互いに喉を鳴らす。

この勝負、もはや俺たちだけの問題じゃねえ。ここで負けちゃあ、悲惨にも散っていった俺のチームの連中に申し訳がたたねえ。こいつらに最後までいい食材を取られっぱなしでたまるか！

「……………」

無言でにらみ合い、機をうかがう。当たり前だ、肉はもうほんの少ししかない。タイミングを逃せば、一瞬で奪われる。

しかし、そんな膠着状態も唐突に終わりを告げた。

ピチヨン

どちらかの汗が卓上に落ちる。

それを合図に、

「おおりゃあああああああああああッ！」

雄たけびを上げ、同時に箸を鍋に突っ込　むよりも先に。

カァンッ

当麻の肘が机に置いてあるスプレー缶に当たり、それが地面に落ちていく。

本来なら。床に落ちた程度で、暴発する代物じゃない。

しかし、どういふことか、スプレー缶が床に触れた瞬間、

プシューウウウウウウウウ！

盛大に催眠ガスを噴出し始めた！

「げほっ、げほっ！ と、当麻テメエ！ なんてことしやがる！」

「お、俺だつてわざと……じゃ……」

言ってる間に、当麻は意識を失いガクンと膝をつく。

ま、まずい。俺もだんだん眠くなってきた……。

「な、舐めんじゃねえぞ……！」

俺は必死で意識をつなぎとめ、菜ばしを鍋に突き刺す。

それは見事に肉を貫いており、俺は一も二もなくそれを口に放り込んだ。

「へ、へへ……やつ、た……」

眠気でさっぱり味がわからねえけど。

それでも充足感を胸に抱えながら。

俺の意識は闇に沈んでいった。

御坂美琴、上条当麻、桜咲鍊夜、脱落。 全滅。

* * *

かくして。

ひよんなことから始まった鍋パーティーは、全員が意識不明に陥ったことで幕を閉じた。

最後に、あの後のことを少し話そうと思う。

一番最初に気絶したため一番回復が早かった涙子によって、残りの奴らは起こされた。そこから先は簡単で、夜も遅いということととんでもない疲労感のせいで、挨拶もそこにみんな三々五々に散っていった。

俺はといえば、鍋の片付けはもちろん、神裂さんや美琴の攻撃で傷ついた部分を錬金術で修復していった。何人か手伝いを申し出てくれたけど、俺は帰らせて一人でやった。

で、ようやく全部が片付いたときには十時を回っており、同時に俺は今日のことを振り返り、深く深くため息をつくのだった。

今日の教訓。どうやら、鍋と暗闇は仲が悪いらしい。……はあ。

番外三・五 鍋と暗闇の関係性（後編）（後書き）

ご意見・ご感想（特に感想）、お待ちしています！

なお、そろそろ受験が近いので、更新を一時停止します。もしかしたら、一ヶ月に一話くらいは書くかもしれませんが。まことに勝手に、申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9551k/>

とある異世界の錬金術師（アルケミスト）

2011年11月28日00時00分発行